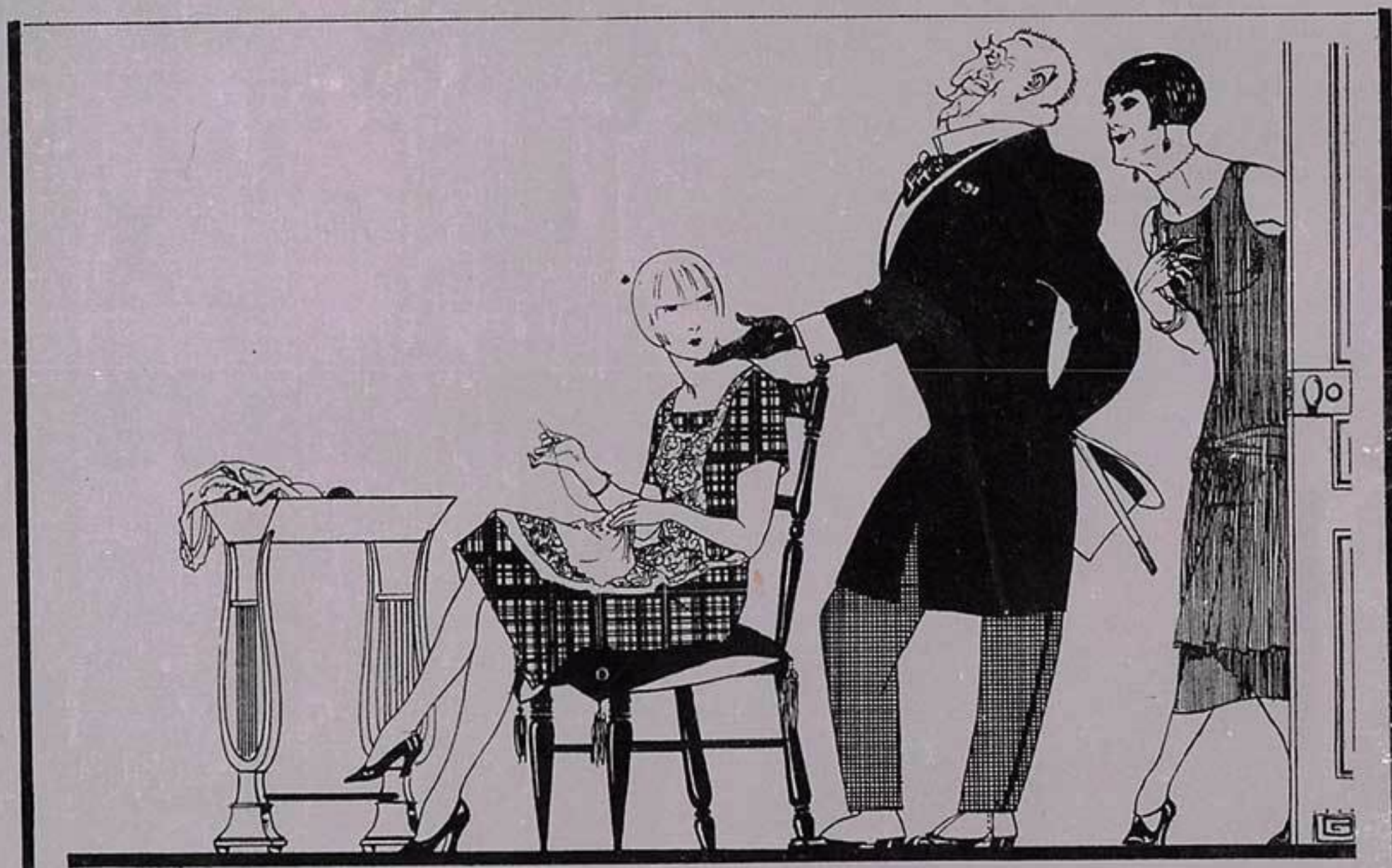


奇譚クラス

新しい風俗文献誌

7月号



7-JULY '66

昭和四十一年六月二十日印刷 昭和四十一年七月一日発行 七月号(第二十卷第七号) 毎月一回一日発行

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和三十一年六月十七日国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号

◎新趣向△責と悦虐▽フオト分譲品◎

強烈あぐら縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(えめ)

柱を背負って両膝を左右に思いきって開いてアグラをかけた両足首を揃えて縛り、背後の柱と連結して締めあげると、二の腕豊胸を括られた女体は二つ折りになる。

自刃血まみれ屍体

大手札十枚一組 一二〇〇円
山原清子 略号(えし)

白練一本の刺青女性が脇差短刀を用いて下腹から鳩尾にかけて、したたかに切り更に止めの刃を咽喉へ。豊富な血紅を使って切腹と屍体有様を微細に描写した。

驚づかみの乳房

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えう)

後手に縛りあげられて身動きの出ないひかるは、その膨大な乳房を縄のため更に大きくして仰臥する。啓子はその乳房を驚づかみにして弄ぶ。悶えるひかる。

縛りあげられる女

大手札十二枚一組 一二〇〇円
大塚、東浦 略号(えの)

大塚啓子の手によって高手小手

に縛りあげられてゆく東浦ひかるの姿態を、十二枚のフオトに連続的に一枚一枚順序を追って刻明に演じてもらいました。

縛り虐める悦楽境

大手札五枚一組 六〇〇円
大塚、東浦 略号(えわ)

二の腕から双胸、胴、後手と厳しく縛りあげられた東浦ひかるは、大塚啓子から息もつけぬ猿ぐつわを噛まされ呻めき悶えながら、弄ばれいじめられる数々の場面。

血まみれ女斗場面

大手札十二枚一組 一五〇〇円
山原、東浦 略号(えみ)

六尺練一本の入墨姐御が赤い腰巻一枚の娘を相手にアイクチを振りまわしての大立ち回り。豊富な血紅を利用しての断末魔にあえぐ娘の凄惨な場面を刻明に描写。

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦、大塚 略号(えな)

股間縛で両手吊りにあっている東浦ひかるの伸びきった腋の下を大塚啓子が両手の指先をつかかってくすぐる。身をくねらして懸命に耐えている東浦ひかるの裸身。

強烈くすぐり責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚、東浦 略号(えぬ)

両手を鴨居から吊られて一本の棒のようには伸びきった大塚啓子の脇腹から下腹、腋の下をくすぐる東浦ひかる。くすぐったさに蛇のようにくねる啓子の裸身の美。

手吊り股間縛責め

大手札五枚一組 六〇〇円
東浦、大塚 略号(えお)

両手を高々と鴨居に吊り上げられた東浦ひかるは呻めき声を出してはいけないというので猿ぐつわを噛まされ大塚啓子から毛髪を撫まれ股間縛の縄を弄ばれる。

ボリウムをくびる

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひか)

最近になって、ひとしおボリウムを増してムクムクと肉のついてきた張りきった裸身を縄目が、まるで依のようにくびって、縄目の間に肉がむくれあがっている。

両手吊りにあえぐ

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひお)

両手首を揃えて縛られ格天井の梁に高々に吊り上げられて、脇腹を空間に寒々とむきだしにして擦り責めの試練におびえ、全身をさらして悶える豊満な裸身の美。

後手垂直しばり

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ひけ)

背後で後手を垂直に揃えた両の腕を、そのツケ根から手首に至るまで、グルグルと縄でひきしより更に胴体と密着させて一本の棒のように縛りあげられた女体。

一糸まとわぬ緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひく)

最近になって一層の美しさと色気の増してきた啓子の全裸の女体に思ふさまに縄を掛け、身動きできぬまま翻弄される柔肌に光と影の屈折が麗美な画面となす。

豊胸をくびる縄目

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚啓子 略号(ひき)

ぶっくりとふくらんだ恰好のよい乳房を暴虐の縄が切りきざんで斜光線が、その陰翳をくつきりと描き、可愛い臍窩の窪みが強調される女体神秘の苦悶表情。

浣腸とオシメ装着

大手札四枚一組 五〇〇円
大塚啓子 略号(ひそ)

男性の手によって浣腸を施された上、更にその排泄をオシメのなかにさせられるために、オシメをつけられ、オシメカバーを装着されるシーンを写真化しました。

☆最新撮影△総天然色▽写真分譲品☆

両手吊りに悶える

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てき▽

両手首を揃えて鴨居に吊られ、豊かな裸身をくねらせて爪先立つ若々しい見事な肢体が、美しい暗膚絵模様をカラープリントにて原色そのまま追真的に写されている。

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てか▽

後手高手小手の厳しい縄目が柔肌の二の腕、胸、腹、太股、膝とくびるように柱に縛りつけられている。裸身を正面向けて羞かしげに身もだえしている可憐な表情が華麗な色彩によって美しい。

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てく▽

ピンク色に染まった柔肌に紺と白のまだらの縄が、くびるように全身を締めつけ背中が高々と背負ったように後手首が固定され、僅かに自由な脚をばたつかせる。

豊麗裸身の縄目

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△てこ▽

均整のとれた豊かな裸身に情容赦のない縄目が高手小手にきびしくまつわりついている柔肌のくびれ具合が天然色によって、まるで錦絵のように見事である。

後手高手小手縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
大塚啓子 略号△てま▽

典型的な後手高手小手縛りの裸身をマニアの眼に触れることの羞らいで顔をのけぞらし、全身をくねらし悶えるさまを実物を眺めるのと変らぬ着色フोटでどうぞ。

長襦袢緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てみ▽

華やかな色彩の長襦袢をまとうて腕も折れよとばかり、ぎゅうぎゅう縛りしめ上げられた女体が白い脚から赤いお腰を蹴出してものがく様をカラーにてお目にかけます。

緋腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てむ▽

白い肌に真紅の腰巻。この白と

赤のコントラストはカラーでなければ見られません。女体は勿論緊縛されて苦しさにもがき悶える姿態を十分にごらんに入れます。

猿ぐつわに呻く

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てめ▽

ムムムム、と鼻も口も蔽われて呻めきもならぬ猿ぐつわで、縄目の痛さは只、眼の表情のみが訴えている息づまるような真迫場面が美しい色彩でごらんになれます。

柱宙吊り縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△ても▽

肥り肉の女体が正面向いて両手を浮かして柱に宙吊り縛りになっている。全身に喰い込む縄、支えのない両足先は空を掴んで真直ぐにピンと伸びてものがいている。

ボリウムを縛る

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てん▽

肉づきの見事な裸身の一つ一つ刻み込むように縄目がボリウムを縛ってゆく。縄目と縄目の間にふくれあがる肉。肌と縄の抑揚が光と影の色彩で華やかにいろどる。

縄の苦悶を狙う

大手札三枚一組 一〇〇〇円
東浦ひかる 略号△てる▽

マゾヒストンと自称する流石の東浦ひかるもぐるぐると裸身を力いっぱい締めあげられて長時間放置されたので苦痛の悲鳴を挙げたところをすかさずキヤッチした。

真紅の腰巻着用

大手札二枚組 八〇〇円
大塚啓子 略号△うお▽

真紅な腰巻を全裸の腰にまとうところ、従来の黒白写真ではあらわせない色彩を腰巻フアンの方々で分譲品に加えました。

悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 八〇〇円
東浦ひかる、大塚啓子 略号△うて▽

真紅の腰巻をまとった大塚啓子を高手小手に縛り上げ、珍らしくも東浦ひかるが責め手に回って啓子の縄尻をとるという今までに嘗てなかった横図が、カラーにてお目みえいたします。

真紅の腰巻緊縛

大手札四枚一組 一二〇〇円
大塚啓子 略号△うこ▽

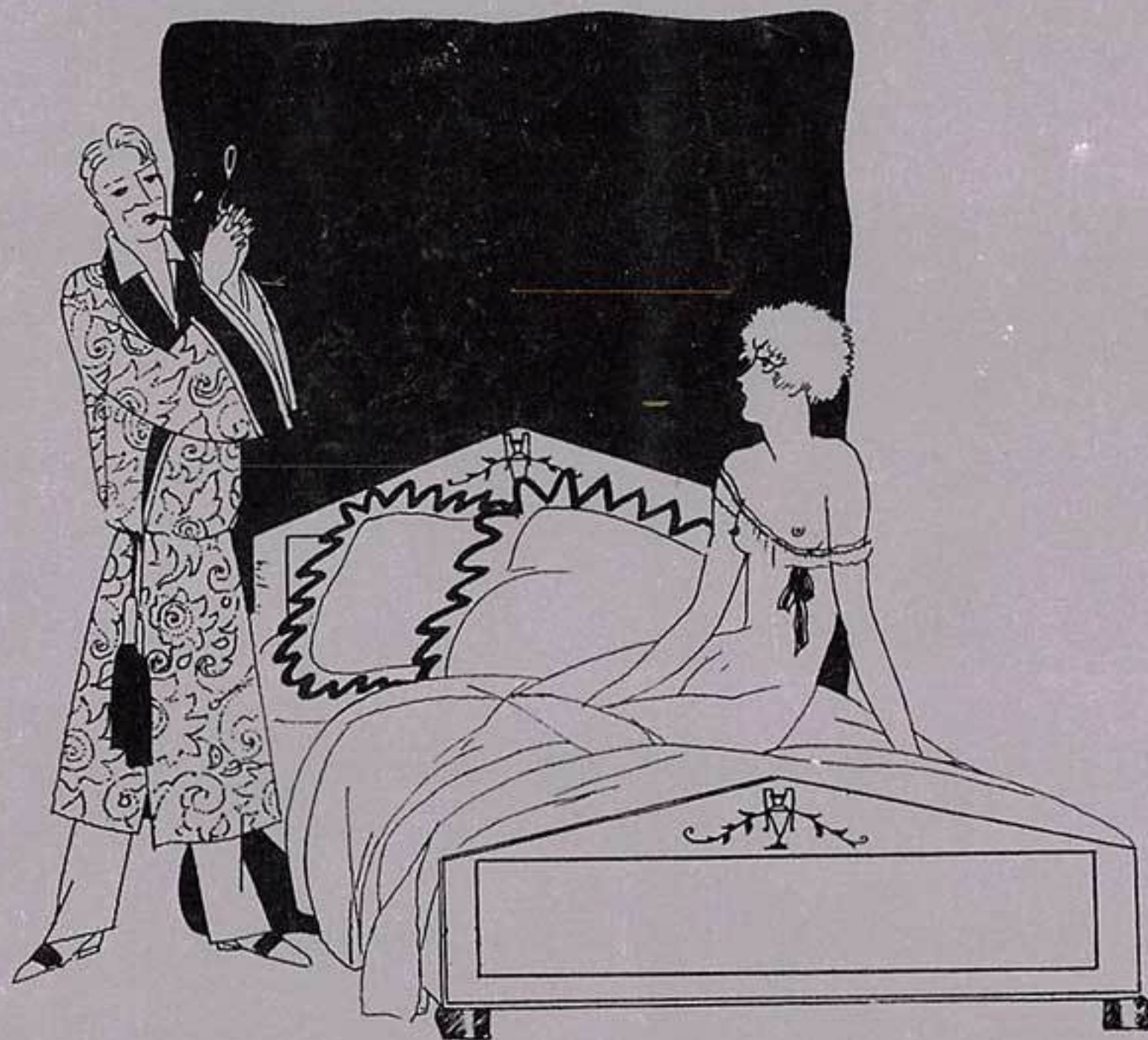
真紅な腰巻の乱れた裾から、真紅な太股が、脛が、素足がこぼれるエロチックな緊縛シーンが、力強い美しい責めフोटです。

奇譚クラブ 昭和四十二年四月二十日印刷 昭和四十二年七月一日発行 七月号(第三十卷第七号)毎月一回発行
昭和二十二年四月二十日第三種郵便物認可 昭和二十五年六月十七日国鉄大坂特別貨物運送規則第二二二号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



定価 三〇〇円

7月号 ¥ 300

★最新版△S・F・M▽特写分譲品★

一本棒宙縛り晒し

大手札五枚一組 略号(らま)五〇〇円
東浦ひかる

胸元より足首に至るまで、まるで一本の棒のようにぐるぐると縛り上げ、背後の棧に宙に括ると足の爪先は下に一直線に伸び、強烈な緊縛感に流石の彼女もうめく。

猿轡豊満をくびる

大手札三枚一組 略号(らむ)三〇〇円
東浦ひかる

一たび衣服を脱ぐと驚くほどの肉づきで裸身があらわれるのを、力まかせに縄がけをして、ぶくりと乳房が飛びだすくらいに締めあげ喚く口には非情の猿ぐつわ。

全裸の立柱しばり

大手札三枚一組 略号(らめ)三〇〇円
東浦ひかる

まるい円柱を背負って後手に柱しばりにされたひかるは、縄目の痛さにもだえながらも、被虐のムードにうっとりとなつて、正面向いて只ひたすら晒されている。

縄股くぐり綱渡り

大手札五枚一組 略号(らち)五〇〇円
木村洋子

両手首が肩口近くまで釣り上るような後手縛りで部屋の隅に渡された麻縄を跨がせられて、歩け

歩けと綱渡りをさせられる洋子、額に汗して必死に歩んでゆく。

首縄つなぎ引回し

大手札五枚一組 略号(らぬ)五〇〇円
木村洋子

後手縛りで中膝になった洋子の首に掛けられた縄を引いて部屋の隅を引回す。もたもたとすると首が締まるので、よたよたとところげそうになりながら、いざり歩く。

股間縛り引回し

大手札五枚一組 略号(らる)五〇〇円
木村洋子

股間にまわされた縄尻を男の手にとられた洋子は、猿まわしの猿よろしく、握られたひとすじの縄を揺すって這いずり回るのだ。

雁字搦目吊り上げ

大手札二枚一組 略号(らお)三〇〇円
木村洋子

全身ぐるぐる巻きにされた前手縛りの裸身が、まるで荷物のように男の手によって吊り上げられて宙に浮いたまま、全身を被虐の快感に硬直させているのであった。

全裸強烈前手縛り

大手札五枚一組 略号(らわ)五〇〇円
木村洋子

痩せ気味の洋子であるから、掛

けた縄は、まるで肉体を喰いちぎるように、よく締めまり、ごろりと床にころがされた女体は、次第に痛さに耐えきれず呻めくのだ。

顔面騎乗の女王様

大手札五枚一組 略号(らも)一〇〇〇円
大塚啓子

新しく応募してきた若いM青年に対してベテラン啓子が顔面騎乗の放れ業を演じて、いやというほど、その腎蓋を嗅がせているところ、マニヤ垂涎のポーズの数々。

奴隷の誓いを誓う

大手札五枚一組 略号(らき)一〇〇〇円
大塚啓子

女王様の足下にひれ伏して奴隷としての誓いを必死に申し上げているM青年を傲然と見下して、冷笑を浮かべている肉体美の女性。汚辱と凌辱のムード派に捧げる。

ハイヒールの足下

大手札五枚一組 略号(らろ)一〇〇〇円
大塚啓子

ピカピカと光る黒皮のハイヒールの足下に、鋭いヒールの痛さにおののきながらM青年は女御主人様にいたぶられ足蹴にされる喜びに身をふるわせているのである。

縛られるM青年

大手札五枚一組 一〇〇〇円

大塚啓子 略号(らに)

縄で縛られて身の自由を奪われることによって、無力化した自分が女御主人のあくなき暴虐の手の中に翻弄され、その意のままになる縛られたM青年のマゾの願望。

神酒を飲ませる女

大手札五枚一組 略号(らほ)一〇〇〇円
大塚啓子

畏くも得難い女王様のネクタールを、そのおん自らの手によって賜わることに対して、今やM青年はよよと、感涙にむせびつつ、うやうやしく頂戴するのであった。

M青年をいたぶる

大手札五枚一組 略号(らへ)一〇〇〇円
大塚啓子

経験はありませんが、どんなことでも意のままになすって下さいと志願してきたM青年は、ベテラン女性の柔肌にいたぶられて、今やその芳香に圧倒されるのだ。

肩車の下の蠢めく

大手札五枚一組 略号(らと)一〇〇〇円
大塚啓子

遅ましく肉の乗った両の太股を首にまわして、裸の尻をでんと首筋にすえて、気弱くもがく男の頭髪をぐいとわしづかみにして、全体重を瘦身の青年にかける。

昭和四十一年七月号

<第20巻第7号・通刊第216号>

奇譚クラブ 7月号 目次

◇奇クサロン…編集部選

○人権尊重とSM…黒井珍平(9)○短信往来へ福田久文さんへ、保藤久人よ
り▽八橋行司さんへ、中野義雄より▽久人▽間宮清満彦さまへ、伊メー集「小羊」…ろう室井
小原真澄君へ、魅せられる足…志摩しげる○僕のものたんろう室井
亜砂路(10)○東山映史(12)○編集部だより(11)○映画通信「エロダクシヨン
の縛り映画」…○花と蛇(14)○T・サロン・楽町老梅(13)○編田女様「提案」の
「募集」…小説…○花と蛇(14)○T・サロン・楽町老梅(13)○編田女様「提案」の
○臨月妻の緊縛…○花と蛇(14)○T・サロン・楽町老梅(13)○編田女様「提案」の
○子(17)○一代巨臀(18)○アブス赤煙修造(17)○六月八号を二十五回「花田王様」へ
筋「三原寛(19)崎進(18)フオト…男(17)○六月八号を二十五回「花田王様」へ
様「三原寛(19)崎進(18)フオト…男(17)○六月八号を二十五回「花田王様」へ
牝犬「奴隷(19)加茂南(21)た手紙「ギャグ」東京敬愛(20)葉青鬼(19)の「マニヤ」の「ハント」
田代俊夫(22)○北(21)部「ギャグ」東京敬愛(20)葉青鬼(19)の「マニヤ」の「ハント」
アイデア」…原由貴子(23)○ボクの代理責め方(22)○宝塚二三夫(24)○創作広告の

△本文▽

(扉)…「本紙の信条」…編集部…(25)

鬼六談義SとMとは花ざかり…団 鬼六…(26)

新宮明夫・洋子夫妻対談

「夫婦プレイの夜は更けて」…辻村 隆…(30)

「バチルスなる世界にありて」…久我 庄一…(40)

△雑談的な小説?▽

シテユエーション・ウォンテッド…三原 寛…(47)

△耕土散筆▽

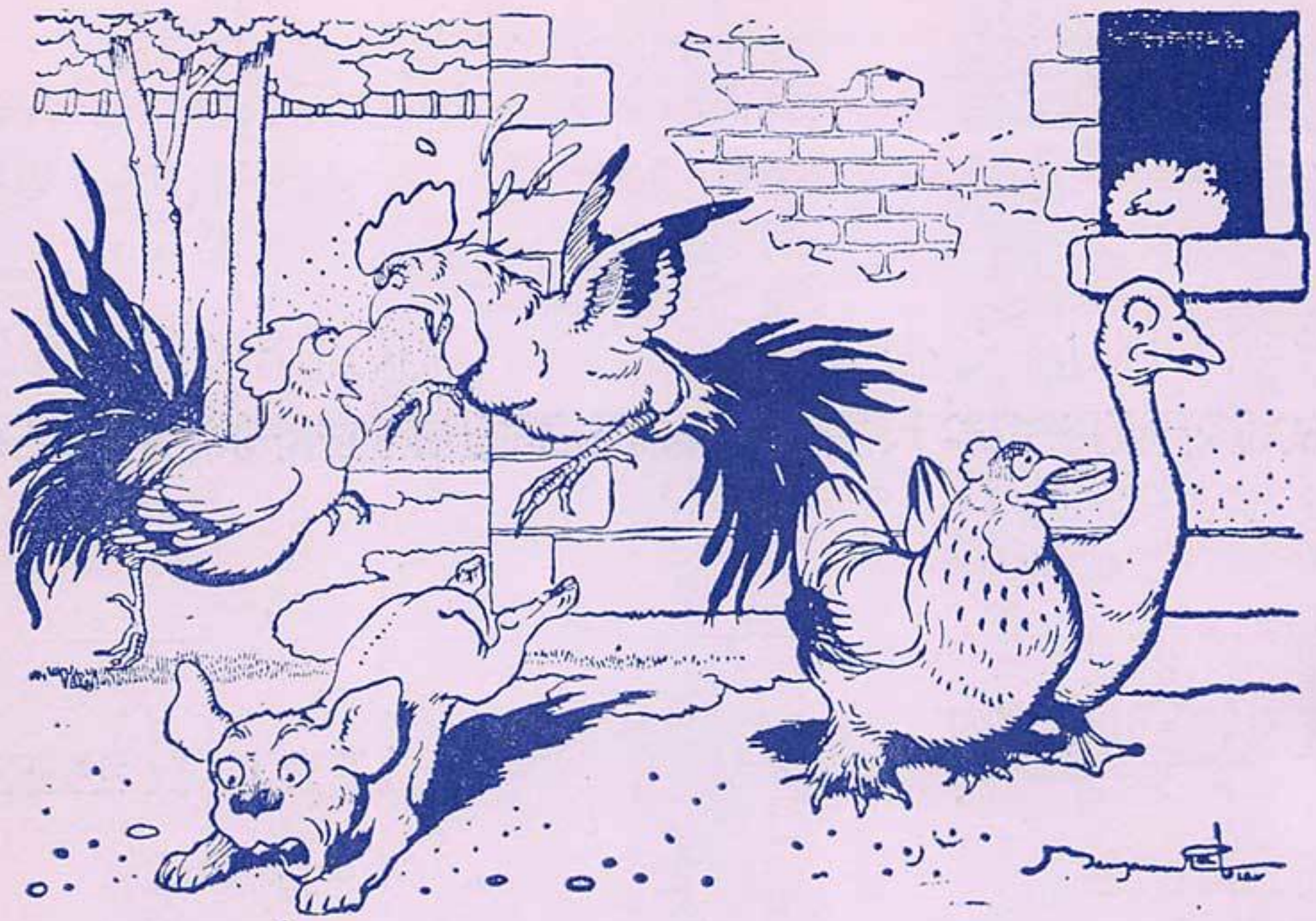
『落穂拾い』(其の八)…保藤 久人…(50)

牝犬の館 奇妙な世界の物語…夜乃 探郎…(55)

アリアドネ (希臘神話の再編成)…黒淵 嬰一…(60)

奇クモデル嬢ファンタジー

『百合子屠腹』…麒麟児 久…(70)



戯説「妹背契二世機関」……………河津 安春…(86)

SMカメラ・ハント △新宮明夫・洋子夫妻の巻▽

「妻こそわが命」……………辻村 隆…(94)

濡れにぞ濡れし △春夜半▽……………芳野 眉美…(110)

△女奴隷の告白▽ 冬子の日記(2)……………山中 冬子…(117)

「痴人の糧」△拷問3▽……………山本 一章…(120)

フェチ小説 カード・プレイ……………富樫 丸三…(127)

奇ク誌の整理と活用……………高野 原美…(132)

(分譲写真の説明利用法)

△散文▽ 日常の周辺から……………保藤 久人…(136)

麻生保氏の生活と意見……………麻生 保…(138)

△女相撲物語▽

「花の女斗美たち」……………奮斗士好太…(140)

「浣腸夜話」 夢のない救急箱……………栗瀬 長…(150)

連載小説 花と蛇 (続篇第19回)……………団 鬼六…(152)

創作 濃緑の谷……………福田 久文…(166)

△告白▽ 浣腸の体験記……………浅野 克美…(174)

心傷たむ遍歴……………織りなす糸(三)……………西条 操…(178)

SMとエロチシズム……………黒井 珍平…(200)

のおと・あと・らんだむ(5)……………千草 忠夫…(202)

読者通信……………編集部選…(210)

☆最新版△S・M・F▽特写分譲品☆

全裸椅子開股責め

大手札五枚一組 略号(けな) 五〇〇円
山原清子

鮮やかな肉づきのよい背中一面に
豊かな刺青を印した肌をむきだし
にして椅子の上で開股し、はりにあ
っている山原清子の妖艶さ、ま
ない姿態はムンムンと匂う。

全裸後手強烈縛り

大手札五枚一組 略号(けの) 五〇〇円
山原清子

背中一面の刺青が雪のような肌
に強烈なアクセントをつくって、
全裸の姿態に厳しく掛った後手縛
りの縄が他の女性では見られない
妖しいムードをふりまいていく。

イルリの浣腸姿態

大手札五枚一組 略号(けか) 六〇〇円
大塚啓子

一〇〇〇Cのイルリガイトル
によって自らの手によって浣腸を
施そうと、うら若き女の身で大胆に
も黒いゴム管の先にある嘴管をア
ィヌスへ近づけるのであった。

いちじく浣腸実施

大手札五枚一組 略号(けき) 六〇〇円
大塚啓子

ピンク色をした可愛いらしい無
花果浣腸を小箱より取り出して、
その先を針で穴を開けて、自らの

菊の花へ注入しようという浣腸の
場面の美しい雰囲気の写真。

百CCの浣腸姿態

大手札五枚一組 略号(けく) 六〇〇円
大塚啓子

百CCのガラス製の遅まじいポ
ンプを両の手に膝元の薬櫃からグ
リセリン溶液を吸い上げ、烈しい浣
腸液の注入感を楽しむ啓子の様子
を新しい狙いで構成したフォト。

オマルに排便姿態

大手札五枚一組 略号(けし) 六〇〇円
大塚啓子

浣腸のあとに迫りくる急激な便
意は嵐のように襲ってきて、もう
辛抱することもできない。わなな
く手に便器をとりあげ排便の準備
をととのえる間もあらばこそ。

浣腸後オシメ着用

大手札五枚一組 略号(けこ) 六〇〇円
大塚啓子

浣腸を施したあと、好きなオシ
メを当てがって、その花模様のオ
シメの感触をうっとり味わって
いる啓子に、次第につのってくる
下腹をしぼるような激しい便意。

浣腸後カバー装着

大手札五枚一組 略号(けさ) 六〇〇円
大塚啓子

浣腸を遂げたあと、オシメを当
て、その上へアメ色ゴムのオシメ
カバーを穿き、プツプツとポック
をしている啓子に、も早や耐えら
れない便意が急激に迫ってくる。

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号(けま) 六〇〇円
大塚啓子

浣腸—オシメ—オシメカバーと
装着し終えたところへ、すでに猶
予のない便意が最終的段階に達し
て、プツプツと音を立ててオシメ
の中へ思いきり排便する。

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号(けひ) 六〇〇円
大塚啓子

オシメをつけるために、自らの
下着を次々と脱ぎすて、やがて最
後のパンティを足から抜きとり、
豊かに張ったヒップにオシメを着
けてゆくお色気たっぷりの姿態。

オシメとカバー

大手札五枚一組 略号(けふ) 六〇〇円
大塚啓子

ひろげられたオシメカバーの上
にオシメを揃えている啓子は、す
でに浣腸をすませたあとなので、
早くそのむっちりした臀部をオシ
メの上に載せたくて仕方がない。

白晒六尺フンドシ

大手札五枚一組 略号(けす) 五〇〇円
刑部典子

真白い六尺褌をプチプチと弾力
性のある股間に締めあげて、均整
のとれたすらりとした肢体を、伸
びやかに展開して、さまざまポ
ーズをお目にかける刑部典子。

黒六尺フンドシ

大手札五枚一組 略号(けせ) 五〇〇円
刑部典子

白褌では物足りないとおっしゃ
る方には、白い肌に強烈なコント
ラストをなす黒フンドシを、きり
りと股間に締めあげた凛々しい刑
部典子のポーズをご覧に入れる。

強烈縛り悶悦姿態

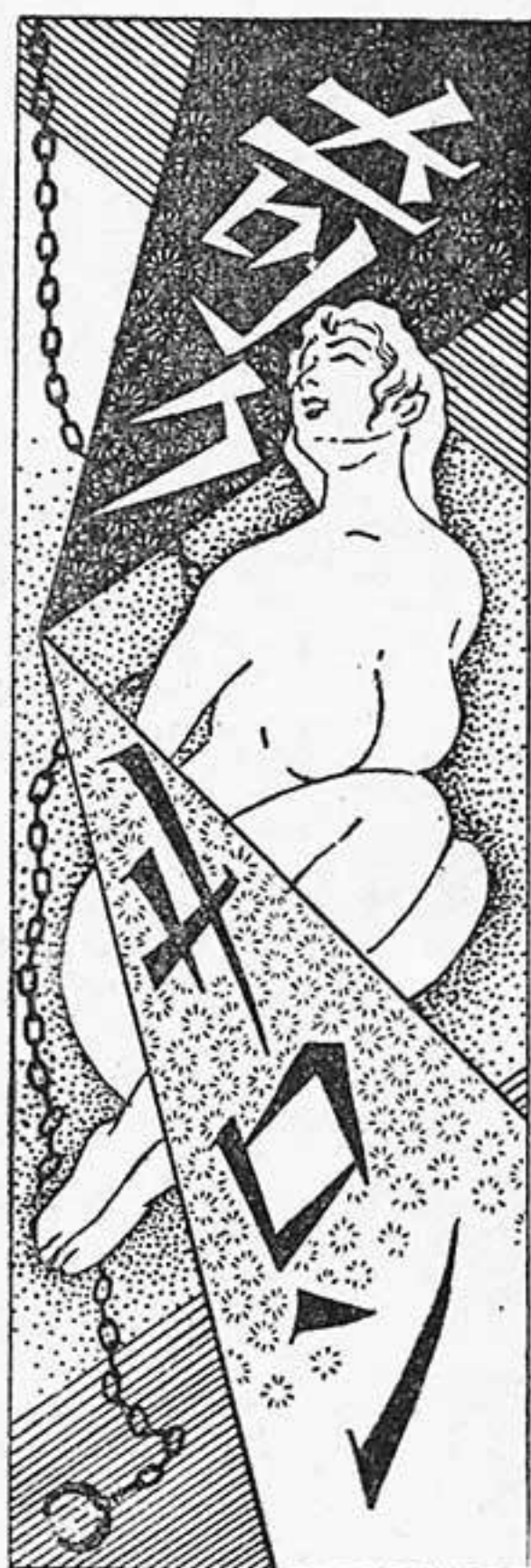
大手札三枚一組 略号(けそ) 三〇〇円
刑部典子

縄に対して打てば響くような反
応を示す典子を、肌を埋もれるよ
うな厳しい縄目で束縛すると、投
げだした足を地団駄ふんで悶悦の
表情を見せる真に迫った場面。

黒褌猿ぐつわ縛り

大手札五枚一組 略号(けた) 五〇〇円
刑部典子

黒フンドシ一本の裸身をぎゅう
ぎゅう縛りあげられ、息もつかせ
ぬ猿ぐつわが大きく口を掩うと、
パチリと澄んだ瞳が、一層哀婉味
溢れる表情で流し目を送るのだ。



四月二日朝刊、「あぶない、あそぶなと幼児しぼる」おじいさんが、各紙をにぎわし、不法監禁で書類送検となりました。七十三年のこのおじいさん、わしらの子供の頃、お仕置で子供をくくる事など、あたり前であった時代の感覚で（家永三郎教授「歴史家のみた日本文化」八文芸春秋新社／参照）不法監禁で一一〇番とは何事と大むくれであったでしょう。

しかし、よくここまで人権尊重が徹底したものと、実に嬉しいのです。SMのたのしみは、本物のSMの存在がない世界であって初めて生き生きとしてくるのであり今のベトナムやかつての日本軍やキリシタンバテレンの頃の役人のような時代では本物のSMが一つのプレイ、たのしみになる事はありえないのではないか。私は今の日本で、死刑は恐ろしい現実のも

のだから死刑をたのしむ事が少いと信じています。この世の中から死刑がなくなった時、人々の中には様々な死刑へのあこがれ、死刑ごっこをたのしむ覚ができるだろう。つまり、それは死刑というヤバンな行為がこの世からなくなつた事の証明でしょう。SMがたのしみとしてあることは、たのしみでなく、SMを現実の世界として恐ろしくする世の中では、SM雑誌などさかえません。

この道理をPTAのおばさま達や道学者達が混同しているからSMイコール悪書といった混乱がおきる。おそらく今のベトナムでSMはたのしみという以上に恐怖そのものであり、加虐者は完全な一方的悪人のたのしみです。そう

人権尊重とSM

黒井珍平

でなく、SMが一つのプレイとして許される社会では、SMは現実のものではない。SM雑誌があるから人の心に、SM心理がめばえるなんて人がいたら、よほどお目出たいナンセンスに外ならない。逆にいえば、SMプレイとしてたのしむ人々から雑誌を追放し、あえて悪の汚名をきせて、ぶつぶそそうと、ここ二、三年急にさわぎだしている連中のいる事は（期待される人間像、建国の日推進、再軍備、憲法改悪、国論の統一、三矢研究、言論統制、不敬罪の復活等すべてこれ一連の事）SMのふたたび、あそびでなく、恐ろしい現実のもの、再軍備とか、戦争とか、ナチスの正統に昇格させようと計っていると疑われても仕方ありますまい。

正当化、大義名分のためには、SMはたのしみであってはならないのです。少くとも日本にSMをプレイとしてのたのしむ雑誌が存続している事は、日本が平和で、良識がある事の証明であって、現実な本物のSMは、一一〇番に連絡されて、どんどん処刑されて好い

事であり文化国の名誉なのです。それを恥と思う連中は、食物は食べても大小便は不潔だから決して出した事はないなどと、ぬけぬけという偽善者であり、大小便をひそかに認める事こそ、文明国の人間だと知るべきです。

残念ながら、わが女房殿も、その区別がわからず、SMをいじめるものととり、決して許してくれません。彼女の潔癖性なのでしょう。したがって、何一つSM的にふれる事ができないのです。その事が二人の愛を放していく事に気がつかないのです。たしかに、平穏な、波一つたらず、妻に紐一つかける事もしないノーマルな夫ですが、心の中はアメリカとベトナム。彼女がSMを敵視すればするほど、深く深く潜ってゆくでしょう。その彼女の敵視政策は凡て悪書運動や育成条例をきっかけとして起った事実をみると、私は、目を外に向けざるを得ないのです。なぜといって、初期の妻は、人間には文明人ほどH的な所があるものだといひ、私の手記も見せコレクシヨンの写真を見せても、一寸こわいわといひ黙認していたにすぎないのでから、これは何と解釈して好いのでしょうか。

短 信 往 来

福田久文さんへ

保 藤 久 人

△五月号の文章から△を、素直な
 気持で読み、自分でも気にしてい
 た点なので、ご指摘に謝意を表し
 ます。しかし「これと——」と、
 他のかたのものと対比なさったの
 は、福田さんらしくないと思いま
 した。△変身△は以前の初期のも
 のでした。文章として問題もあり、
 その上、長いので、編集部でも、
 発表をためらっておられたのだと
 思います。投稿が重なるにつれ文
 章作りでのむつかしさも痛感して
 いますし、すでに、福田さんと同様
 なことを「書くからには、作法は
 無理としても、せめて、読みやす
 く」と、知人某氏より注意され、
 今年正月前後にずい分教えられま
 した。このことは、当用漢字にた
 くし六月号サロンでも触れました
 し、編集部へも、前のものはもう
 一度書き直したいと、お願いした
 ぐらいです。福田さんは、五月号
 サロンの私の散文をご覧になって
 なおのこと、あの一文を書かれた
 のだと思いますが、私も教えられ

てから、自己への自覚の意味も含
 めてあの散文を書きました。幸い
 にも、割合に新しく書いた△東山
 の慕情△が採用されていますので
 読み難いでしょうが、お目通しの
 上、お競らべになって下さい。少
 しはマシになっていませんか？
 天与の才分のない限り初めから
 完全なものは無理だと思います。
 編集部のご厚意で数々のものを掲
 載していただいています。が、職業
 作家ではないので、人並に、親し
 まれる文章が綴れるようになるま
 では、努力の積み重ねより他、方
 法はないようです。△変身△と△
 東山△とは半年の開きがありま
 す。△耕土散筆△なども、前と比
 較していただければ、多少は読み
 やすくなっているのではないかと
 ーと。これは自分勝手な言葉です
 がー。

現在は、一作ごとの向上を目指
 して修業中ですので、どのような
 ご忠言も、私自身の△実△になり
 有難いのです。今後も習練するこ
 とをお約束して、ご教示を感謝し
 乱文でお悩ませした皆さまにお詫
 びします。

橘 行司子さんへ

麒麟児 久さんへ

保 藤 久 人

僕のイメージ画集「小羊」

宝井亜砂路画



過分のお言葉をいただき、身に
 余る光栄です。△変身△は心理に
 意識しすぎて暗くなりましたし、
 福田さんへの便りで申し上げたよう
 に、昨年のもので文章もまずく、
 面恥ゆさばかりが先立ちます。も
 う少し読みやすい文章になってい
 ればと悔やまれてやなりません。
 今度採用された△東山の慕情△は
 明るさに留意しました。小説につ

いては、今年から（教えられてか
 ら）意欲的になり、現実的な明る
 いものと、小説的な興味のあるも

のと——この二つの形態を目標に
 して、これからも勉強しつつ書き
 続けます。感謝しています。今後
 とまご教導下さい。なお論的なも
 のは——と、西条さんの△想△こ
 と△に△対△しての投稿も遠慮してい
 ました。が、千草忠夫さんへのお言
 葉も、私の代弁をして下さった、
 と喜んでおります。

間宮清満彦さまへ

よるの・たんろう

間宮さん、六月号の短信往来拝
 見しました。とくに、いまの所孤

立無援に近いほくにとって、なみだが出るほどうれしい。むねが一杯で言葉をつづけることができせん。アリガトウ、アリガトウ、アリガトウ。あなたこそ、ほくの文章を判ってくれる数少ないマニアの一人です。感謝します。感謝します。ああ、ぼくはうれしい。「言いたい事」も楽しくよみました。

小原真澄君へ

中野義雄より

可愛い小悪魔、小原真澄君。

私は貴女のフォトを四月号にて拝見、とっても楽しく読ませて頂きました。私は今迄に多数のM女性のフォトを観ましたが、貴女のように若くてピチピチした肢体の持主は始めてです。それだけに念入りにSMカメラハントを拝読しました。

私は過去に一度だけ女性を縛った経験がございます。奇クとの付合いは十数年。丁度今の貴女位の年頃からだと思います。

私は本年三十一才になる建築デザイナーです。貴女とは可成り年齢の差がありますが、私にも貴女位の妹があり、充分お付き合い出来ると思います。私は女の町そして、日本中の少女の憧れの歌劇の

町、宝塚に住んでおります。

桜も散り青葉の季節となりましたが、ここ宝塚は依然として大層な人出で賑っております。どうでしょう、一度宝塚へ遊びに来られませんか。貴女の住んでおられる河内からだ二時間位かかりますが、朝少し早い目に出られたらよいと思います。費用は全部私が持ちますし、当日、阪急梅田駅まで迎えに行ってもかまいません。

SMを語りながら童心にかえって遊ぶのも楽しいと思います。貴女が承知して下さればプレイをしても結構ですし、気にいらなければ又の機会に延ばしても構いません。貴女一人で不安なら仲良しの一宮百合子さんと御一緒でも結構です。私は妻子もあり、事の分別はわきまえていゝつもりです。私は日曜が休みですので出来れば七月三日頃がよいんですが、次号この欄にて日時、場所、その他詳細をお知らせ下さい。尚、私は別に宝塚にこだわりません。大阪のミナミでもキタでも結構、一度貴女にお逢いしたいのです。

私は文章が下手で美辞麗句を並べたお便りを書けません。しかし誠意は持っております。どうか吉報をお寄せ下さい。

魅せられる足

志摩しげる

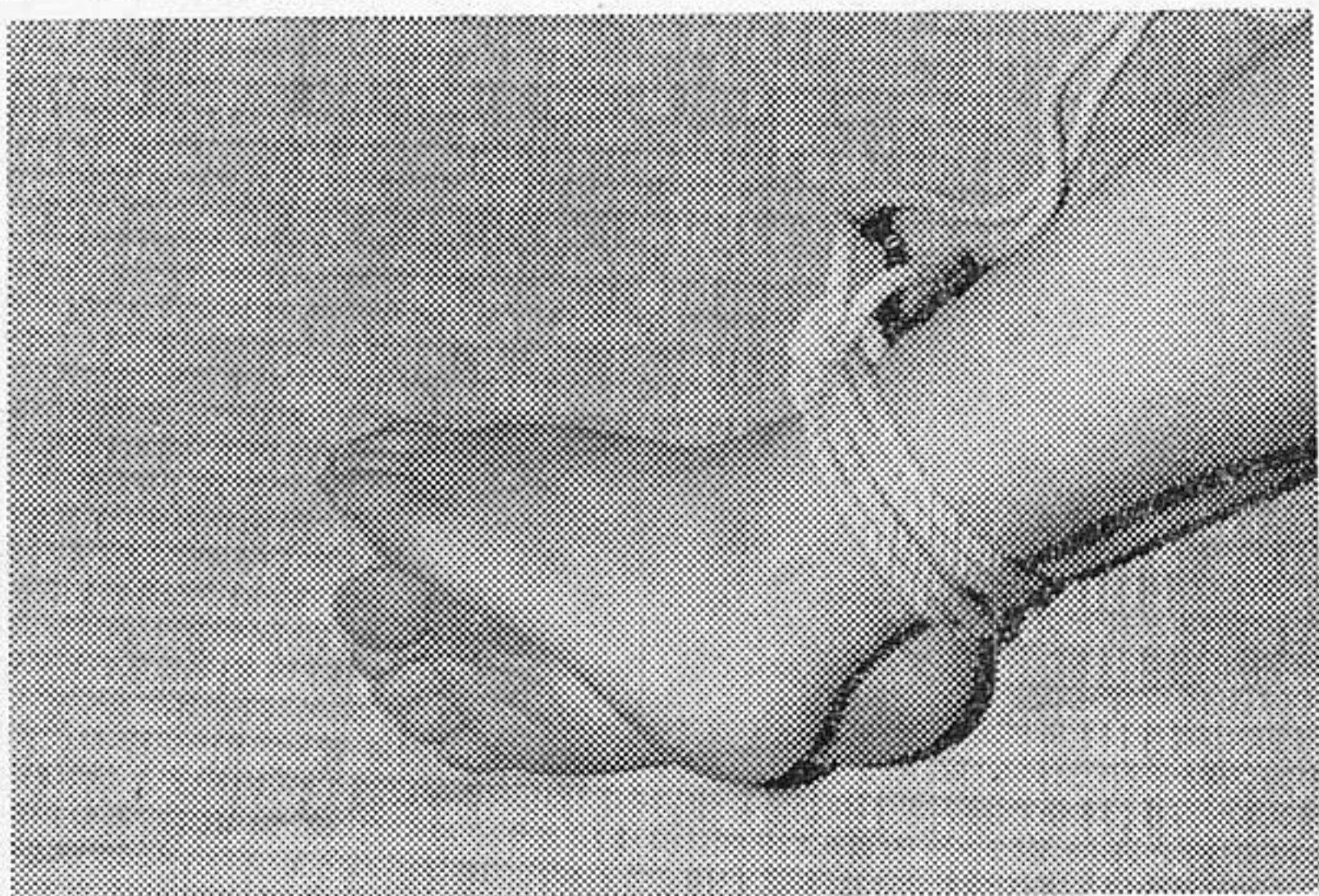
手記「魅せられる足」を掲載して頂き有難うございました。活字になった自分の文をみて今更乍ら拙いのに顔のほてりをどうするとも、出来ませんでした。でも二葉の写真のお蔭で拙い文もカバーされたことを喜び、その実に美しく理想的な足に時を忘れ見入っております。他にも写真があるとのこと、是非送って頂きたいと思えます。若し私の希望を聞き入れて頂けるなら

一、責められる足のバックに苦悶の表情の顔。

二、いろいろと違った責めに応じて示す足の表情。

三、美しい足に対照的に穢くよれた荒縄がギリギリと巻きつき緊縛されている図。

四、モデル嬢の顔とその足。
ずいぶん欲張った注



映画通信

最近の群小エロダクションの乱立から作品数が多くなり、それだけに、より強烈なベッドシーンや迫力ある緊縛シーンを入れるなど異色作品が多くなった。

最近の緊縛映画では、すさまじい吊り責めを見せた「裸女山脈」が白眉といってよいだろう。女優は新人の珠るみ。一種の山窩ものといえよう。女ターザンがいるというので、カメラマンが、深山へ彼女の写真をとりに行く。そして、その珠るみ扮する女ターザンにめぐりあい、彼女の全裸の写真などとらしてもらう。そのうちに兩人の間に恋がめばえてゆく。だが、彼女には、きめられた山男のいいはずけがいる。

彼女は何とか山から脱出して都会へ出ていこうとする。そこに、山の掟の仕置きがある。脱出を発見された彼女は「木吊り」にかけ、という山の首長の命令で、半裸の身体を太縄で、ぐるぐる巻きに縛りあげられ大木に吊される。足をピンピンはねて、身もだえる。それは、彼女の恋人をおびき寄せる人質である。そのために、

エロダクションの縛り映画

東山映史

口には、布をかまされ、猿ぐつわをきっちりされている。この吊しのシーンがまた長い。恋人と彼女の妹がやってくる。その吊された下には、落とし穴が掘られている。その危機を知らそうにも、彼女は猿ぐつわされているため、知らずことができない。このところ、なかなかスリルがある。

その他、彼女はその妹と一緒に巫女のまじないで、木に立ち縛り

にされ、火あぶりのような目にあう。また、男のあとを追ってきた婦人記者が、山男に見つかり、自分の女をとられた腹いせで縛られて犯されるというシーンもある。新人女優残酷物語といえよう。

緊縛女優として活躍しているのが、香取環と橘桂子だろう。香取環は、「赤いしどき」で、晒し場から、はりつけ、吊し責めなど拷問シーンなどふんだんに見せてく

編集部だより

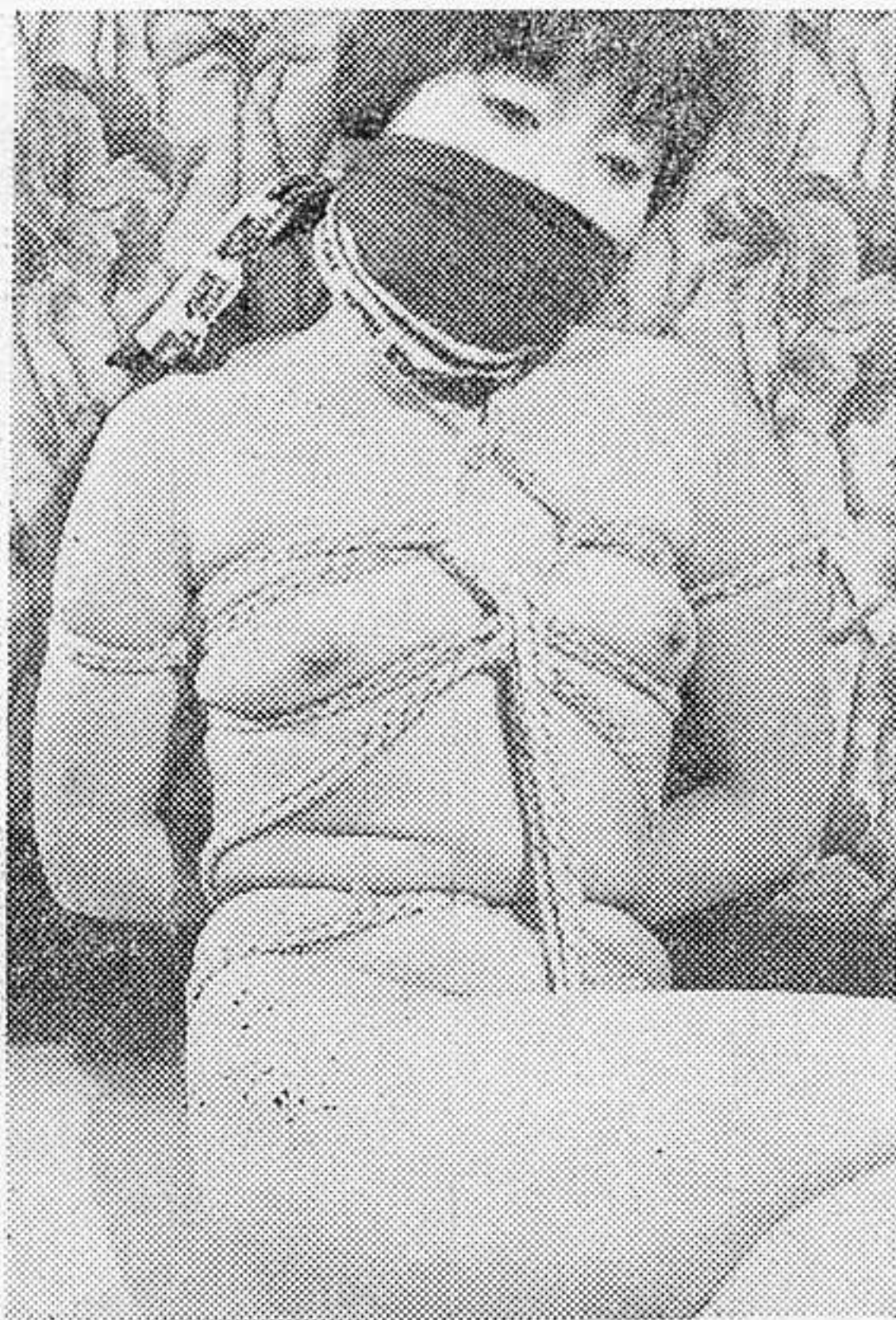
○先月号のこの欄にて言及した映画「花と蛇」の主演女優、静子役の紫千鶴が四月下旬来阪。但し時間の都合で、カメラ・ハントの素材とはなり得なかった。いずれ次の機会を期待したい。

○カメラ・ハントでは次号で「続可愛い小悪魔の群れ」と題して一宮百合子が登場してくるが、彼女、俄然「縛り」に強い興味を示しはじめ、いずれ、その麗姿を代理部分譲品の写真として提供するようになるかもしれない。

○その手始めとして、五月下旬に奈良、京都の古寺巡礼の小旅行を敢行し、ふんだんに可憐な素顔を見せることになる予定である。鬼六談義で団氏が語っている、新しい映画のスターとして、彼女が活躍してくれたら面白いのだが。

○それに関連して、もし読者の諸姉の中で、我こそ映画に出演してスターになってみようと思われる方は、一応編集部宛御連絡ありたい。団鬼六氏へ御紹介の労をとりたいと思う。

○六月号で「魅せられる足」の記



れた。その豊満な乳房はまた立派で三原葉子以来のグラマーで第一線女優といえよう。

これと対象的なのが、橘桂子で細い身体だが、やはり乳房は大きい。そして、イレズミ姿で男を相手に大乱斗をしたり、半裸で縛りあげられて身もだえしたり、いいところを見せている。

最高の傑作は「絶倫」だろう。水中もぐりをする海女に扮し、最後は、恋人と一緒に、地下のボイラ室で、縛りあげられ、熱気責めにあう。このシーンがカラーで長

襦袢一枚で、黄色のしごき、赤い腰巻をちらちらして、身もだえる

シーンに迫力があつた。また「強烈な情事」でも、半裸で後手に縛りあげられ、ムチ打ちの責めにあう。彼女の映画も必ずといっていいほど、緊縛シーンがあり、可愛いがられている。

変ったところでは、東宝作品の「大菩薩峠」。これには、お浜が縛りあげられて、机童之助に犯される有名なシーンがある。新珠三千代のお浜が、どのような緊縛シーンをみせるかと楽しみにしてい

たが、岡本喜八監督は、縛りシーンをみせない。そして、「自分で帯をとけ」と、着物をつぎつぎとぬがせていく。これも残酷なシーンである。後でお絹が、西村晃にはだかにされ、晒しものにあうシーンがある。晒しの場面はなかったが……。

大映の雷蔵の「鞍馬天狗」で、万里昌代の縛られシーンがあつたり、五社の作品の中にも、負けず劣らず縛りシーンが入っているのも楽しい。

を参考にする。

二、そこで、小生まず景気づけに、「花と蛇」の美女達へ「花」のイメージを進呈する。すなわち静子は牡丹、京子はばら、美津子は水仙、小夜子はカトレア、桂子はタンポポである。読者諸氏よ、小生の選定はいかがなものであるうか？

普段沈黙を守っておられる「花と蛇」ファンの方々、これを機会に我々がもう一つ、大同団結しようではありませんか。そうして、S小説の一大傑作「花と蛇」の後援をいたしましょう。

「提案」と「募集」

小説「花と蛇」について

立石老梅

一、「花と蛇」の配役を左記要項のとおり募集します。ふるって御参加下さるようお願いします。

(1) 応募資格——本誌連載小説「花と蛇」ファンの諸兄姉。

(2) 配役適格——現存の映画、テレビ女優、歌手、その他。

(3) 応募方式——文書（ハガキでも可）で「花と蛇」の登場人物（但し悪役を除く）のイメージに最適と思われる候補を各一名宛選

んで編集部宛送付のこと。（例えば静子〇〇。京子△△というように。尚六月号一五八ページの表参照のこと）

(4) 締切——七月五日

(5) 結果発表——本誌九月号奇クサロン（編集子による解説と講評をつける）

(6) その他——「花と蛇」完結後も一冊にして発行されるときには、その中の挿絵等で上記結果

事中に掲載した素足緊縛の写真は、意外に好評で割合多くの照会に接したが、もう少し、この美しい素足をあらゆる角度からキャッチして、いずれ仮面をぬいてもらうことにしたい。

○嘗て本誌上にて活躍した伊吹真砂子のことは、オールドファンなら、とくと御存知のことと思う。再びカムバック、その爛熟した肢体を駆ってSMの妙味を発揮することになる筈、といっても、グラビアページの無い現在の本誌にとって、活躍の余地はまことに淋しいのではあるが——。

○雪崎京人氏の指導にて、大塚啓子、東浦ひかるの八女相撲のフットを四月下旬に撮影の予定であったが、女力士の生理的支障のため五月上旬に延期になった。女相撲ファンから待望されている壮挙であるが、今回は室内を主とし、天候を睨み合せて、チャンスがあれば野外もやりたいと思う。

○芳野眉美に神酒奉戴式を遂げたサジスチン花田沙登子。その後相変らずの自由奔放な生活が続けてM男達を手玉にとっている。糸の切れた風のように、手の届かぬところへ行ってしまうと、ちょっと手のつけようがない。

『花田女王様』へのプレゼント

春川ナミオ

花田女王様へ春川ナミオが画をプレゼント致します。貴女の美しい写真を見ながら貴女のお便りを拝見しますと本当にサディストであるのかと疑いたくなる程です。それほどすばらしく美しい貴女なのです。M男性たるもの、誰しも貴女の足もとに跪まづきたくなるのも無理はない様に思います。もちろん春川ナミオも同じ事です。貴女の奴隷になる。思うだけでも、しびれる程夢中になるので

す。本当に女王様馬になれたら目の前がくらむ事でしょう。

貴女のそのすばらしいサディスト振りを想像しながら、青年ナミオが筆を走らせています。

僕のプレゼントを誌上にてお受



取り下さい。女王様のプレゼントを楽しみにしながら、益々の御健ろしく願っています。どうぞ、よ

ザロソ楽我記

辻村 隆

(第二十五回)

カメラ・ハントと対談で紹介したが、先月の二十四日から二泊三日で新宮明夫、洋子夫妻が来訪、SM夫婦プレイの醍醐味を十二分に満喫した。続いて四月九日の土曜日、増田喜代司、みゆき夫妻がこれ又来訪、翌日が日曜で勤務先が休みでもあるし、その夜は一泊

してもらった。いいチャンスでもあるし、夫婦プレイのフォトを撮らしてもらった。新宮夫妻のためのチョンマゲとかつらを借りた尽においてあったので、これ幸いと増田夫妻が同じ扮装をして、時代もののプレイフォトを撮ったが、果してどちらが上出来か。

いづれ機会を見て新宮夫妻と増田夫妻のチョンマゲ物を見くらべていただく予定をしています。

× × ×

日活の今村昌平監督の『人類学入門』封切り中で、エロダクショソそののけの面白さというので見に行くつもりが、待てしばし、以前も『悦楽』でガッカリしたから先に原作を読んでやれと、野坂昭如作の『エロ事師たち』を買って読む。

全篇しゃべくり口調の大阪弁でそれが気にいったが、エロ事師の生活はここには触れず、彼のエロ事師達がくすねてくる六甲の病院長作成のブルーフィルム二百巻のくだりである。盗んできた二百三十巻のフィルムを調べるだけで十日間かかったが、その映画がSMもの許り『通常の男女の営みはなく、縛ったり、そうかと思えば踏台に股をひらいて腰をかけさせ、或いは運転手扮する浪人が刀のこ



じりで女を傷めつけ、また先生自身が月光仮面や憲兵になって支那服の女を拷問する。いやはや二、三本うつすと全員あたまかかえてへこたれてしまう』（『内原文』）

このフィルムはカラーばかりとある。小説とは思いつく、読んでいてこんな個所が出てくると、その二百三十巻の映画を見てみたいなあと思う。野坂昭如さんもツミナ事を書いてくれはる。二〇三頁

の小説中その個所だけが俄然記憶に残る。ああ、カナシキは縛り事師よ。

春の暇なうちにと物置一杯の古本、古雑誌を整理したら、終戦直後からの仙花紙の大将の奇クを始め、
 × × ×
 “リベラル” “千一夜” “耽奇” “人間探究” “あまとりあ” etc ぞくぞく出て来た。当時の私としては、この種の本に餓えていたから、それこそ宝物のように

大切にしまっておいたが、どれもこれも今見ればヒドイ紙の粗末なもの許り。そして奇クを除いて、全部姿を消して、あと型もない。終戦直後から今に続いているのは奇クのみである。

この二十年、浪も嵐も嵐も相当強く当たったのにこうして着々と発行をつづけているのは、正に偉大である。戦後発行のもので続刊されている雑誌が一体何冊あるだろう。私は奇クの貴重さをひそかに

感じとった。昭和二十二年辻村隆第一作『肉体の山脈』なつかしく読み返したが緊縛全然なしの肉体ものに過ぎず。同年緑猛比古第一作『こんな男に誰がした』軍人のホモを描いたものでこれにはアブの気風がうかがいとれる。こんな女に誰がしたという歌謡曲全盛時にとった題がありあり。すでに奇クと歩んで二十年。いつか折あらばその歩んだ二十年の回顧談を書いてみたい。

臨月妻の緊縛フォト

A・T生

今年になってから発売部数が漸増しているとのこと、愛読者の一人として大変うれしく思います。どうか自重して編集され、いつまでも存続することを願っております。同封の写真三枚は、臨月時の妻との緊縛プレイの一枚です。無難なものを選びましたから、もしよろしかったら、カットの代りにでも用いて下さい。

他にもかなり撮影いたしました。が、最初の妊娠でもあり、四月下旬出産予定のため、三月下旬ごろからしか写せませんでしたので、あまりよい作品は出来ませんでした。妻は四月上旬に三九〇〇グラムの女の子を出産いたしました、母子とも健康です。万一、貴社から分譲写真にでもと希望されましても我々のプライバシーを守るため、御希望にそえません。が、よろしく御願いたします。

妻はまだ若いので、今度妊娠した時は、色々な作品を作りたいと思っております。写真はいずれもマミヤフレックスC3、ネオパンSSをピラゾン系現像液にて二乃至六倍に増感しました。



六月号を読んで

福田 久文

前略。六月号の所感を啓上致します。夜乃氏の「ぼくは△美△の極致は、『死』であると思つてゐる。そこまでゆきつかなければ、夜のはてに透明な美は顔をのぞかせない」というご発言に敬意を表しました。詩人原口統三に死を決意させた原因の一つはこれだったと思ひます。死はサジステインよりも恐ろしいかわりに一層美しい。質の悪いサジステインなどは田代氏が短い敬意を表すべきエロス論で述べられた徒花の類です。ですから原口のマゾヒズムは、純度が高いといいたいのです。原口は自分のことを変態的なまでに性的に過敏だ、マゾヒストだといひていましたばかりでなく、美しい世界、よりよい世界への憧れを強めてくれるものとして災厄や嘲笑を

あたかもサジステインを迎えたわたしたちのように歓迎していたようですから「SMの個性を更に深く極め」(のおと・あと・らんだむ八節)で遂にエロチシズムから死に立ち向つた人の姿を、わたしは見ようとしたのです。そしてこの死とエロチシズム(マゾヒストにとってエロチシズムとサジステインとは同義語です)の奇妙な近親性は古代インドの尊敬すべき宗教以来、形而上の思弁のできる人たちに、注目されて来たところですから。麒麟児氏がカッとされた事情はよく分るのですが、ほんの一例にすぎぬ如上の観察をご理解願えたらと存じます。「視野のせまさを、自己の嗜好に執するあまり理由なく(西条氏には芳野氏や久我氏に反駁するという理由があった

禪人生一代記 (その3)

間和志締男

三カ月の新兵教育を受けた私は兵種が主計兵(飯焚き)でありますので、食事には不自由なく、目方は日増しにふえて、入団から退団までの増量が三貫目、約十八貫位になりました。自分乍らよく太ったものだと思ひました。現在は十六貫強です。

いよいよ海兵团を後に転属となり沼津の学校に廻され、陸上勤務につきました。此処では我々より下の者はなく、万年以上等兵が目を見光らせて迎えてくれました。

そして古参上等兵の我々に対する第一声が「全員裸になれ」でした。そう怒鳴られたときは、本当にもうびっくりしました。我々五人は、越中禪も取り去り生れたままの姿にされ、一人一人穴のあく程全身を見つめられました。そして性器を力いっぱい握り、痛いというまで引っぱるのです。

中には直立不動もいた身体検査が終り、それぞれの更衣箱が与えられ、その日は休みました。次の日より早番は四時、遅番六時起床

の日課が始まりました。非番と三交替の勤務を繰り返す毎日が続くわけです。

人間意地を通すと出来るもので食糧倉庫から作業場まで、約五十米位の間を米俵一俵を担いで走りの支度を繰り返して、次の日に横須賀からトラックで、米、麦、缶詰等が送られてきて食糧倉庫に入れます。

こんな重労働の繰り返しで、身体は勿論のこと、腰の力も自然に鍛えられて目方は増える一方で、一度力を入れすぎて越中禪の紐が切れた事もありました。いつしか仕事にも馴れ上官とも仲良くなり、気心が知れるようになりました。非番の日には自由時間が多かったので、いろんな運動が行なわれ、勿論、海軍といえは△相撲△というくらい激しくやっています。

ここで、いよいよ私の出番がやってきました。私はいつとはなく越中禪をやめて六尺禪を締めるようになっていました。六尺禪を締める

のではないでしようか。他を責める狹量は、結局自己にとって何の成長ももたらさない」と黒淵教授はただ優雅に微笑されるだけでし
ようから、柄の悪い福田助手が勝
手に口を挟みますが、編集部公認
の優秀作を発表しておられる黒淵
氏や性格スター「西条操」を容れ
てなお余りあるほどSMの世界は
深くかつ広く、この広さと深さが
奇クの存続と栄光につらなってい
るのではないでしようか。六月号
の表紙のデザインはわたしの知っ
ているかぎり最高のものでした。
栄光と存続を象徴しているかのよ

うにほればれと眺めました。昔の
名作に劣らぬ作品が、昔の名作を
書かれた作家各位よりも奇クを愛
しているいまの寄稿者によって、
続々発表されることを希い願って
います。部数の増加していること
は自分のことのように嬉しゅうご
ざいます。ごたごたとした所感を
述べましたが、死の美しさをつつ
みこんで生きることができたとし
たら、死の姉妹であるエロスは、
どんな様相を呈して現れるでしよ
うか——こんなことを考えてみる
機会を、六月号が与えてくれまし
た。草々。

妊婦フォトについて

編集子

今年は丙午の年とて、街を歩い
ていても、お腹の大きい女性にお
目にかかることが少い。これは妊
婦フォトの撮影を願っている者に
とっては心淋しい。しかし、最近
は読者の方の中から、自分の妻の
臨月腹を撮影したから、といって
送ってこられる方が少くないのは
まことに心強い。

今月号の奇クサロンに掲載した
A・T氏のフォト、先月号の読者
通信を寄せられたY氏のフォト、
それに、奈良の吉野から送ってこ
られた某氏の臨月の妊婦フォトな
ど、印画紙に焼付けられた写真を
見ていると、その膨らんだ臨月腹
の素晴らしさには、思わず感嘆の
声を挙げる程である。A・T氏やY
氏は誌上発表を承知されているが
吉野の某氏は、編集部の人達の手
元に置く範囲でとどめてほしいと
いうのは残念である。

ようになったきっかけは、相撲
を締めるようになってからです。
相撲を締める時は霧を噴いて力
いっぱい締めあげるので、前袋が
ぎゅっと締め上ります。最初は痛
くて、どうしようもなく困りまし
たが、でも、そのうちだんだん慣
れてくるに従って、強く締めつけ
ないと気持がスーとしなくなりま

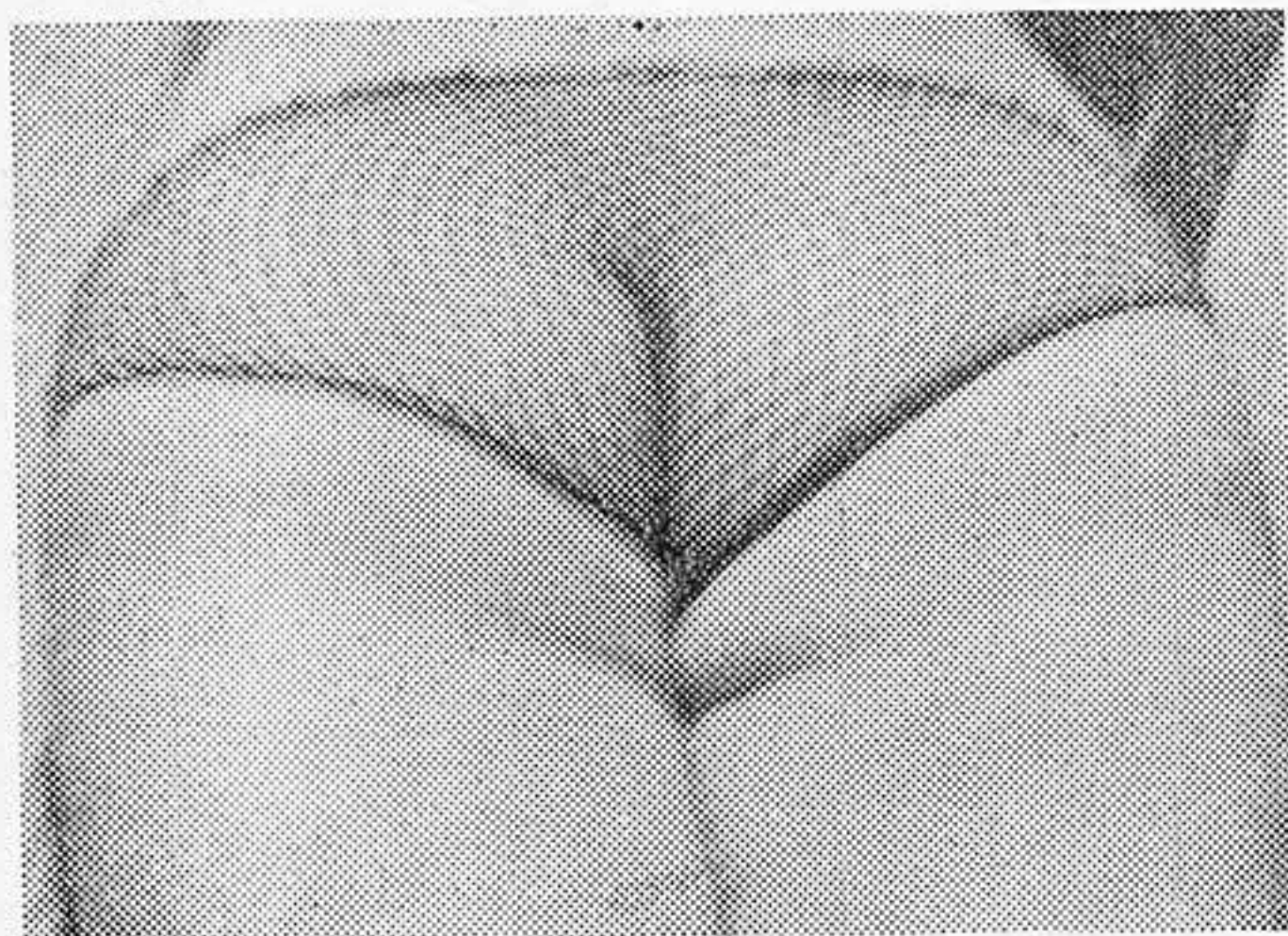
した。

相撲をとると全身の力が一遍に抜
けてしまい、はっきり身体の変化
がわかるようになり、そういう関
係で相撲を取った後に六尺を
締めますと、全身が引き締って何
んともいえない充実感を味わえる
のです。今考えると、その時より
相撲の虜になったんだと思います。

「巨臀」フォト

赤畑修造

静岡の須渾朔氏、並に岐
阜の水野弘氏のお二人に捧
げるために、小生の作成し
た二葉の巨臀フォトをお送
りいたしますから、何卒誌
上に掲載下さるようお願い
いたします。若し不掲載の
節は、お手数ながら両氏へ
一枚宛御回送下されれば幸い
です。決してよい出来ばえ
ではありませんが、女性の
逞ましい臀部に狙いをつけ
て、いささか誇張を試みま
した。





「美女」と 「肛門括約筋」

川崎進一

「セックス記事を書いているドクターに相談。ま、何をお書きになってもけっこうだが、『肛門のキャク筋を開閉する訓練により、××をも自由に』云々、『自主トレーニングなさってください』式

の方法論。これ、無残に男の夢をこわすものだ。自主トレーニングをしている女性の有様を想像すると、どんな美人とも一生、結婚しまいと思わせられちゃう。

○ 某新聞社発行の一流週刊紙の社会戯評の一文である。

逆説ととれば面白い。しかしどうやら真意は頗る真面目に、世に跋扈する通俗医学ブームに対する警告のつもりらしいのに、いささかがっかりした。まあこれが通俗の概念なのだろう。

肛門といえはすぐ排泄を連想し不潔感のみをいだく。セックスといえは或一定の個所しか連想しない、あわれむべきかなとしか言いようがない。

セックス、それは素晴らしいものだ。女性の全身これ性感帯であろうが、頭髮、まぶた、うなじ、耳、唇、喉、乳房、腋下、臍、腰尻、内腿、腹、足裏、そして陰部と、及び肛門、夫々素晴らしきハーモニーを奏ねること、奇巧の読者なら、各々思い当る節も多かるう。

セックスは或る特定の所にのみ限定してはならない。勿論それは最終の目的地ではあっても。

神酒も結構、敢えてコプロ趣味でなくとも、きれいに洗われたアーヌスには言いしれぬ羞恥を含んだ味わいがあるではないか。風呂上りの清潔な、アーヌスにはクンニリングスする人もあるとか。

蕾の如く、ピンクのしまったアーヌスの可愛らしさ、浣腸器でも挿入すれば、キュッとあわててしまる肛門括約筋、どうしてそれが男の夢を、ぶちこわすものだろうか。

妙齡の美女が一生懸命、肛門括約筋をしめたりゆるめたり、息をつめつめ努力している姿を想像するだに楽しいではないか。

表記の記事を読んで以来、私は電車の中やオフィスの女性をみるのが又一層楽しくなった。

つつましやかに電車バスの中で腰かけている女性、オフィスで伝票を記帖している女性、その頃、人知れず一二、一二とばかり肛門キャク筋の運動を、それこそ自主トレーニングしているのかも知れないと想像したら、何だかわくわくしてくるのであった。

アーヌス・マニアだけの夢であろうか。

アブストラクト

○「女」が「いや」というときは「よい」ということであり、「よい」というときも「よい」ということである。

○「女」は自分から「した」とは思ったがらない。他人から無理じい「された」と思ったがる。

○「女」は一度ムードというクモのアミにかかったなら、いかに否定していても、いずれそのアミの中で楽しく游泳するようになる。

○「女」が聞いていないふりをしているても、耳から入った言葉に対しては、必ず従うものである。

○「女」の身体は、どこを押しても絶妙の音楽を奏でるものだが、往々にしてボタンの順序を間違えると楽器としての役に立たぬどころか、凶器になることさえある。

○「女」が泣くときは悲しいときより嬉しいときの方が多い。そして、多くは本当に悲しいときでさえ、泣くことを楽しんでいる。

○「女」のお尻は、冷たければ冷たいほど、心は熱く燃えているものである。それは元来男性よりもエッチであるからである。

△遊治郎▽

御批判に対して

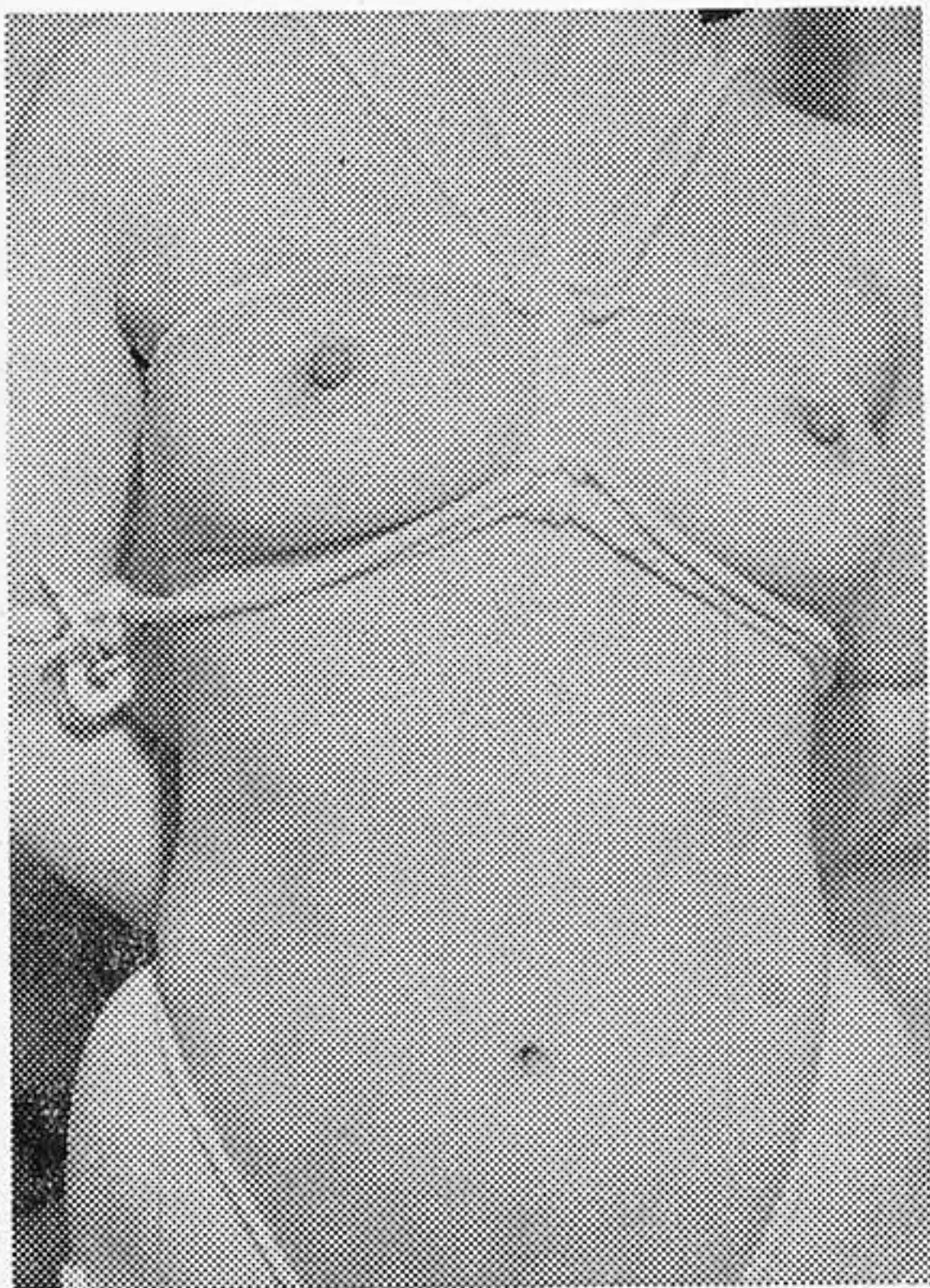
三原 寛

拙作「ソバイの記録」に就いて
六月号の奇クサロン「わたしの好
きな三人の奇ク作家」で須礼部英
郎様御指摘の箇所は、まさに、バ
ロウズの引用で、弁解の余地もあ

りません。史実に基くものの如き
印象を与えて置き乍ら、読者の方
の感興を殺ぐような結果を齎らし
ましたこと、誠に申訳なく存じま
す。

夫婦プレイのフォト

新田 英雄



但し、ストーリーの本筋は飽く
迄、伝書の翻訳であります。種を
明かせば、「ソバイの記録」も、
或る程度、史実に則り乍らも、適
当に色付けをした仏人の創作であ
るかも知れませんが、アンコール
・ワットの壁画にみる捕虜虐待の
様々の拷問刑罰、そして遺跡の至
る所にみられる素晴らしい曲線、
彫り上げた女人像、そして、アン
コール・ワットの建設に費やされ
た想像を絶する労働力と、その時
代の統治者の絶大な権力に思いを
馳せる時、史実に疎い私ではあり
ますが、「ソバイの記録」が全く
の仏人の空想の産物とも思えなく
なるのです。

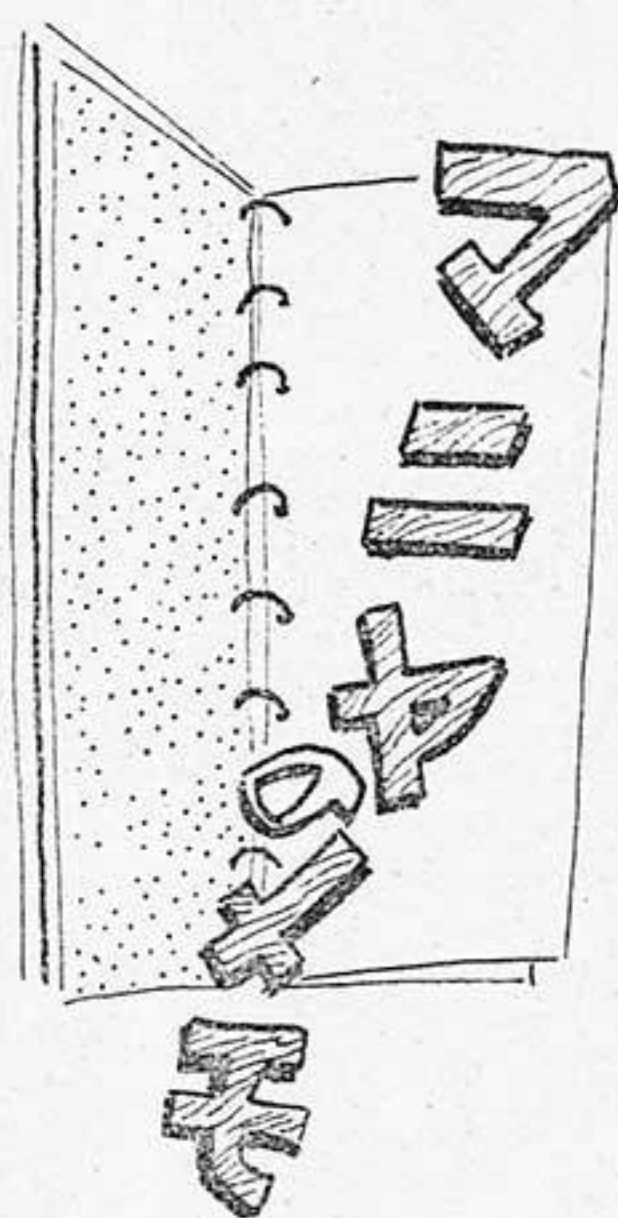
因みに、現在の首都プノム・ペ
ンは、ペン女王のプノム（丘）と
の意であり、現在一人称として使
われているクニョムというのは、
語源は下僕の意、バ・ロックとは
夫々、目上の夫人、御主人に対す
る敬称で、シアク・ヴィンは王族
に対する尊称との由であります。
どうしても、時間的に制限される
のと、根気のない私が、仏書の翻
訳に長時間を割き得ず、かといっ
て、原文を訳した分のみそのまま
では、余りにこま切れとなって恰
好つかぬ為、一応、筋を追いつら

も、ジャズのアドリブで、同じコ
ードのブレイクから、他の有名曲
のフレーズに移って、又元に戻す
様、混同をおかしてしまい、此の
点、御寛容の程、御願ひします。
三月号の、高岡様、筆慣れぬ私
など、とても、御期待に副えませ
ん。それよりも「鼠は猫の、犬は
人間のを好んで食する」などとい
う表現、素晴らしい、私にとって
は刺激的でした。そして男は女の
を、と続けずして暗示され、自か
ら、両者の関係を設定されたこと
等、私には及ばぬところです。

福田久文様、拙文、度々、おと
り上げ戴き、誠にお恥しい次第で
す。正直に申しますと、昼間勤務
して居ります私は、自宅へ帰って
も、家人の手前、時間を見出す事
容易でなく、留守中の僅かの際に
慌しく書きなぐって、読み直す暇
もなく投稿するもので、文章の構
成、用語の推敲どころか、時間切
れで、変な尻切れとんぼになっ
りで、読んで戴く方に、本当に済
まない気持ですが、そんなにして
でも、皆様のお仲間入りさせて戴
きたいのが本意ですので、何卒お
恕し願えたら幸いです。

× × ×

女王様から奴隷志願者に賜った手紙



<東京敬愛>

(前略) お前は今どなたか、よい女王様につかえているのかい？

お前はマゾであるといっているが正面きって言えるのかい？

私の経験から言うと「私は哀れなマゾ男」と言っているが、本当はその言葉に酔っている——即ち自分をマゾに空想化している男が往々にして多いから。でも、あれがあながち空想的ばかりでない証拠に、現に私は一匹の男を使っているんだよ。

お前がそうであるように、私も平常は平凡な良妻賢母型の人妻なんだよ。でも、生れつき(らしい?)この血がさわぐ時は、一人の

最も残念な美しい女王として、奴隷の男を私の足下にひざまづかせなければ、おさまらないんだよ。

「モシモシ、私だよ。用があるから×日の○時に東京駅へくるんだよ」ってね。至極簡単なのよ。でもそれは、奴隷にとっては待ち焦れていた玉音なのさ、命令一下、奴隷は快い恐怖感に胸をときめかせて、自分の身体をさいなむ責具を揃えて、女王様御命令の場所に現れてくるのさ。

ことわっておくけど、今言っていることは私の空想なんかじゃないんだよ。実際に行っていることなんだよ。

私も最も残酷な方法で責めるのが好きなんだよ。手ぬるいことはいや。私がどんなにして奴隷を訓練しているか、フッフ、それは、その男のワイシャツをぬがせてみれば判ることさ。でも気が向けばマゾヒスト渴望のごほうびをやる時もあるよ。フッフ、何でもございますかってかい？女王様のお身体からはとぼしり出る不用の液体、フッフ、判ったかい？

私は自分の意志のみで男奴隷を自由に使うんだよ。決して奴隷の意志のままにはさせないんだよ。(たとえ生理的な現象にしても)

私は一見「朗らかな奥様」だよ。そんな私から誰がブレイの時の私を想像できるだろう。

「気さくな奥さん」で通っている私の身内に流れる血汐が強烈なサジスチンとしての血液であることは誰も知るものはない筈だ。

人は、見かけによらないものだよ。お前は自分の事を「牡犬」とか何とか考えているかも知れぬがフフ、うぬぼれているよ。牡犬とはたくましい犬のことだよ。私から見れば一匹の虫ケラに過ぎない奴なのにな……。

全くなんという言い草だ。まだ逢ったこともないお前だが、そんな

なお前がしやくにさわるよ。私の愛用の細い、しなやかな、そして強い革鞭がお前の血を吸いとりたいと言っているよ。フッフ、その時になって泣き面するんじゃないよ。空想と現実とでは、想像以上の辛さだっことを、お前は知らないんだよ。

マゾだ、鞭だ、仕置だ、そんな言葉にうっとりしていると、とてもないことになるんだよ。お前は奴隷の身として、私の足の下で身もだえして「おゆるし下さい、女王様」と泣いて嘆願することだろう。

仕置の辛らさに我を忘れて、私の足の下から一寸でも逃れたいとバカな奴、ズルズルとクサリを引きずって、はいずり回ることだろう。ハハハ。お前の背中中、糸のような細い血によっているどころはお前の口は女王様の足の指で一杯になり、つばをのみ下すことすら自由には出来ないんだよ。

お前は女王様の股の下で馬になり、鞭うたれ乗り回され、ハイドウハイドウと息あらくあえぐに達しない。又、犬ともなりクサリにつながれて女王様のおみ足をなめて、お気に召すまできれいに掃除するんだよ。虫ケラとなって、私

私の――

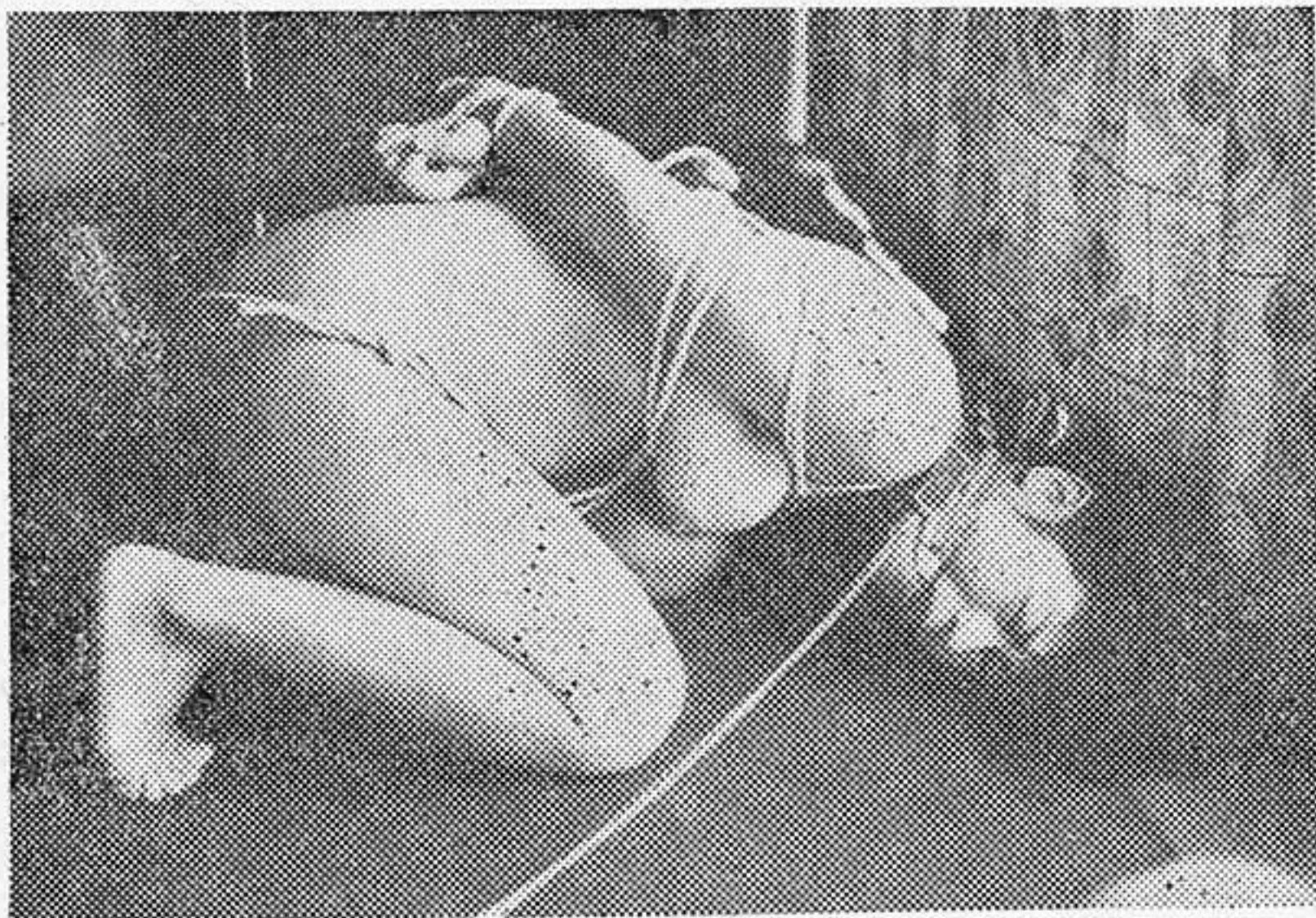
カメラ・

ハント

「牝犬」

加茂南北

犬の首輪をつけてくさりでつながれると大抵の女は、人間であることを忘れてそれを機会に、ハ牝犬Vという身分に転落する。人間という虚飾をかなぐりすてたとき、始めて彼女はハ牝犬Vとしての生活の楽しさを知るのだ。



の足の下にふみつぶされなければ許さないよ、いいかい。
この手紙を頂くことは、とりも直さず、お前は私の奴隷であるということなんだよ。決して自分の意志で動いたりして犬としてのつ

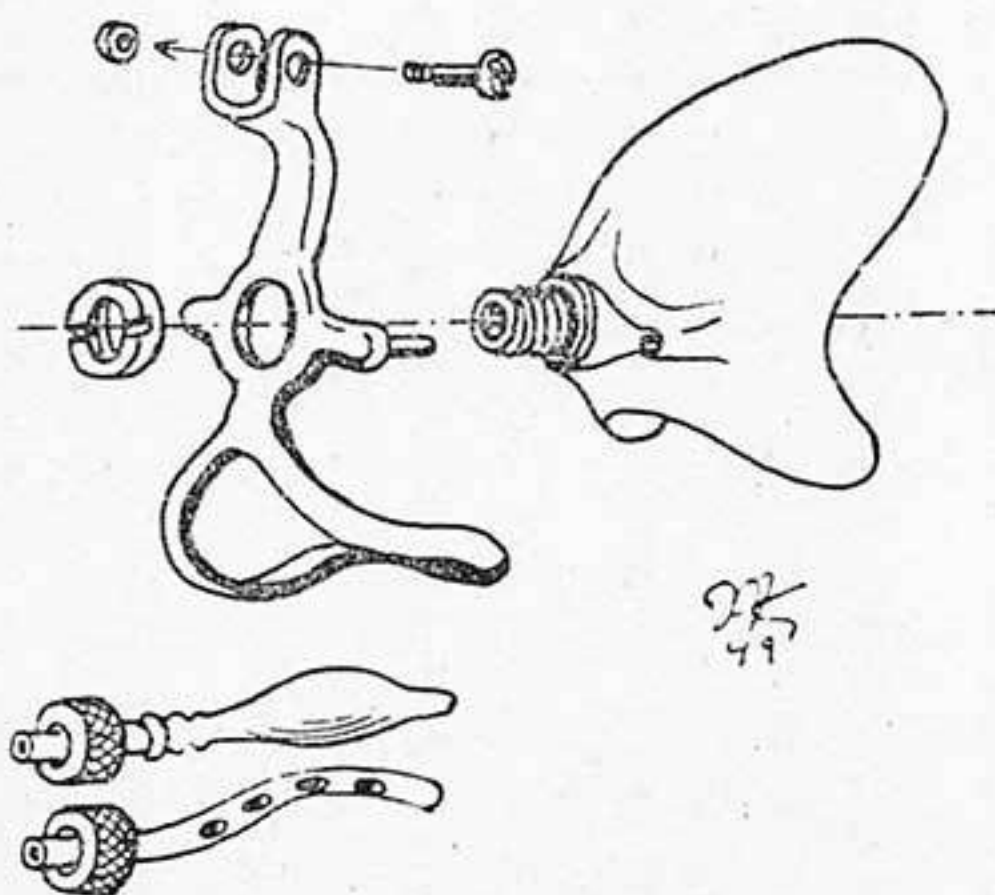
とめを怠ってはならないんだよ。いいかい、お前のマゾとしての立場をふみ違えることのない様にこの返事は××日午前中に東京中央郵便局につく様に必ず命令を守って出すんだよ。

「ギヤグ」

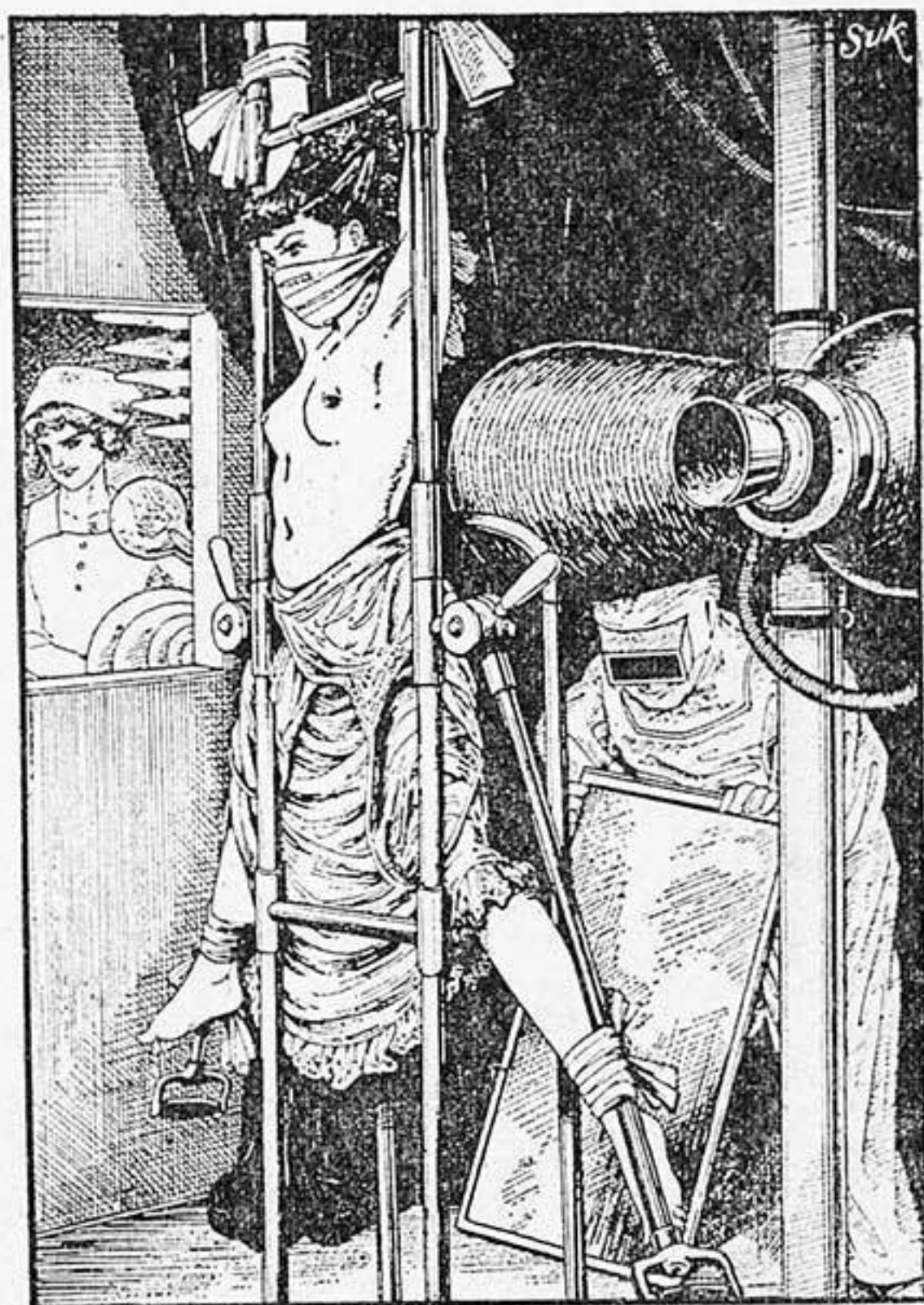
(その一)

千葉青鬼

洋式の嵌口具は「ギヤグ」と呼ばれて、いろいろな複雑な機構のものが多い。女性の発声を防ぐものとして、私の考案したもの三種を図解によって、お目にかけようと思う。外観に入るものよりも、口中に入るとの方が多いので分解図によって、若い女性の口中で如何に発声を妨げているか、ということをお想像いただければ幸いです。



イの秘密は、お互い神かけて絶対他へ洩らさぬこと。でなければ、もうこれっきりの縁だよ。いいかい？ (後略)



S 画 と M 画

田代俊夫

絵は欲望の形象化です。文字が志向を時間の流れのうちに把えるのに対し、絵画はそれを一の静止空間において直接的・瞬間的に切りぬきます。画はSMの本質について一つの解明の手がかりを提供してくれそうです。S画(写真)を見る。と、そこには「縛られた女」があります。「責める男」は姿をあらわさない。特にその男の「顔」は絶対に禁物です。このこ

とは一体何を意味するのか。もし「責める男」が登場すると、S男性はすべて興ざめし、何ともイヤな気持ちになるでしょう。なぜか。画には「鑑賞の対象」のみが存在すればよく、鑑賞者自身が画かれていては全然話にならないからであります。その論法でいくと、M女性が鑑賞の立場にあるときには「責める男」の画でなければならぬはず、だがむしろそんなことに

はなりません。M女性も又「縛られた女」の画を望むのです。S画とは彼女にとって「肖像画」であるのか。そのとうりだともいえましょう。だがその理由をナルシズムにのみ求めることはできません。男優のブロマイド写真を買うのは多くは女性だからです。しかるにS画とは「縛られた女」に限定される。それが本質的に何を意味するかを千草氏は明快且精緻に論証しておられます。

ここで指摘したいことは、以上の考察がM画においても等しく妥当するという事実です。S画では男性は「支配者」であり且つ「鑑賞者」でもありました。M画になるとその地位が分担されます。S女性も男を支配し服従させますが鑑賞者ではないのです。M画の現実が何よりの証拠です。「縛られた男」だけのM画など全く無意味というはかありませんし実際にも存在しません。M画とは「鞭を持つ女」であり「馬に乗る女」でなければならぬし、「男を組敷く女」なら、ほぼS画と同じく、その男の顔はカットされるか、きわめてアイマイであることが望ましい。どうしてか。S女性及M男性

代理部だより

○五月号のこの欄で「写真と絵画文献特集号」の残部が少いということを書きましたところ、雑誌が出るか出ないのに、残っていた僅かな「文献」は忽ちのうちに売れてしまいました。そのため、五月号を見られてから、慌ててお申込み下さった多数の方々には、大変御迷惑をおかけいたしました。

○残部僅少と予告してから、殺到する御注文を予期して、早い目に予告したらよかったのですが、正直に残部十数冊になってから掲載したものですから、予想外に多くの方々に入売切Vのお返事をしなければならぬ結果になったことを深くお詫びいたします。

○臨時増刊号「花と蛇」特集号や臨時増刊号「写真と絵画文献特集号」のように、写真や絵画を満載した定価五〇〇円の大冊雑誌です。で、尚一層既刊号が貴重となるわけです。

○本誌既刊号の中、昭和三十八年度の分以前は全部売切れました。只今在庫中の昭和三十九年二月号以降の分も、殊にグラビヤ口絵や

がそれを望むから、というのでは説明になりません。その理由は、「縛られた男」のM画を求めるS

女性(M男性)は、「女性」(男性)たる資格を喪失してしまうからであります。M男性が「責められる男」を欲するなら、彼は性転換手術を受ける必要があり、その反面、相手のS女性も自動的に「男」になってしまう。この皮肉な論理的帰結に耐えられる人は、ほとんどいないでしょう。M男性と受身の同性愛の男とは、この意味で峻別されるべしというのが私の

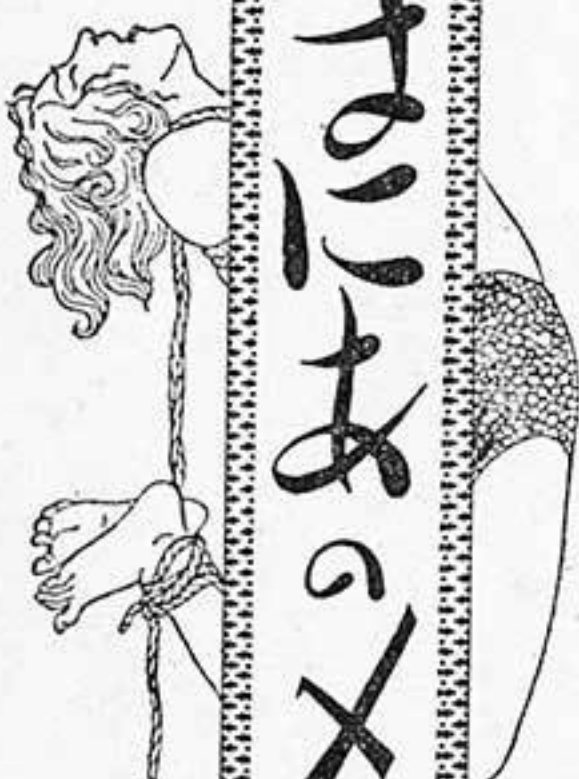
基本的立場です。

◇

要するにS画もM画も本質的には同じことです。「鞭を持つ女」が支配者であり「縛られた女」が被支配者だという区分はさほどの意義を持ちません。いずれも被鑑賞者なのです。それらは同一の「客体」として存在し機能する。どちらが「責め手」(それを一般に支配者というのですが)にまわるかというようなことは単なる現象面での差異にすぎないと思われ

ほうが「主語」(一主体)として使われています。この結論はMの私を不愉快にはさせますが、事実やはり事実として直視せねばなりません。もしS女性が、男を意識せず、若さと美しさに関心を持たず、口紅をつけず、羞恥心が皆無であり、媚態と絶縁されたならMなるものは、その存在の基盤を失うにちがいないのです。SMがいかにエロスやセックスと密接に結びついているか、その意味ではSもMも同じものではなからうかこれが私の結論です。

まにまのメモ



創作広告 のアイデア

夜尿症に悩む

お嬢さま方に

(健康な方も御使用になれます)

当社特製大人用おシメ・カバー

を御愛用下さい。

純良薄ゴム使用、三菱パーマロン地製で柔かなソフト肌ざわり。

(色はピンクと青の花模様)

▽〇才から二才用

ドリームベビー1号 四〇〇円

▽四才から六才用

ドリームベビー2号 五〇〇円

▽八才から十四才用

ドリームガール号 五五〇円

▽十六才から十八才用

ドリームジュニア号 八〇〇円

▽十六才から十八才用

フラワージュニア号 一千円

◎十六才より十八才用特製フラワージュニア号は、某航空会社特殊勤務スチュワーデス用支給品として御採用いただいております。

◎お申込みは、ドリーム・ベビー本舗内、原由貴子まで。八以上の創作広告のアイデアは、原由貴子さんの提供になるものでした。原さん、連絡先御通知下さい。出来れば局留でなしに。▽

責絵図のついてる雑誌に対しては、家とめて御注文が参っておりますから、御入用の方は売切れにならないうち、お早い目にお申し込み下さるようお願いいたします。

○尚、既刊号の御注文は必ず何年何月号と御指定下さい。どういった記事が載っている号といった御指定には応じかねますから、御諒承おき願います。

○限定版写真集や代理部分譲品或は臨時増刊号についての発刊時期など、御照会があります。すべて最近号誌上にて広告いたします。故、誌上にて御承知下さるようお願いいたします。最近号誌上に広告してありますものは、全部在庫しております。

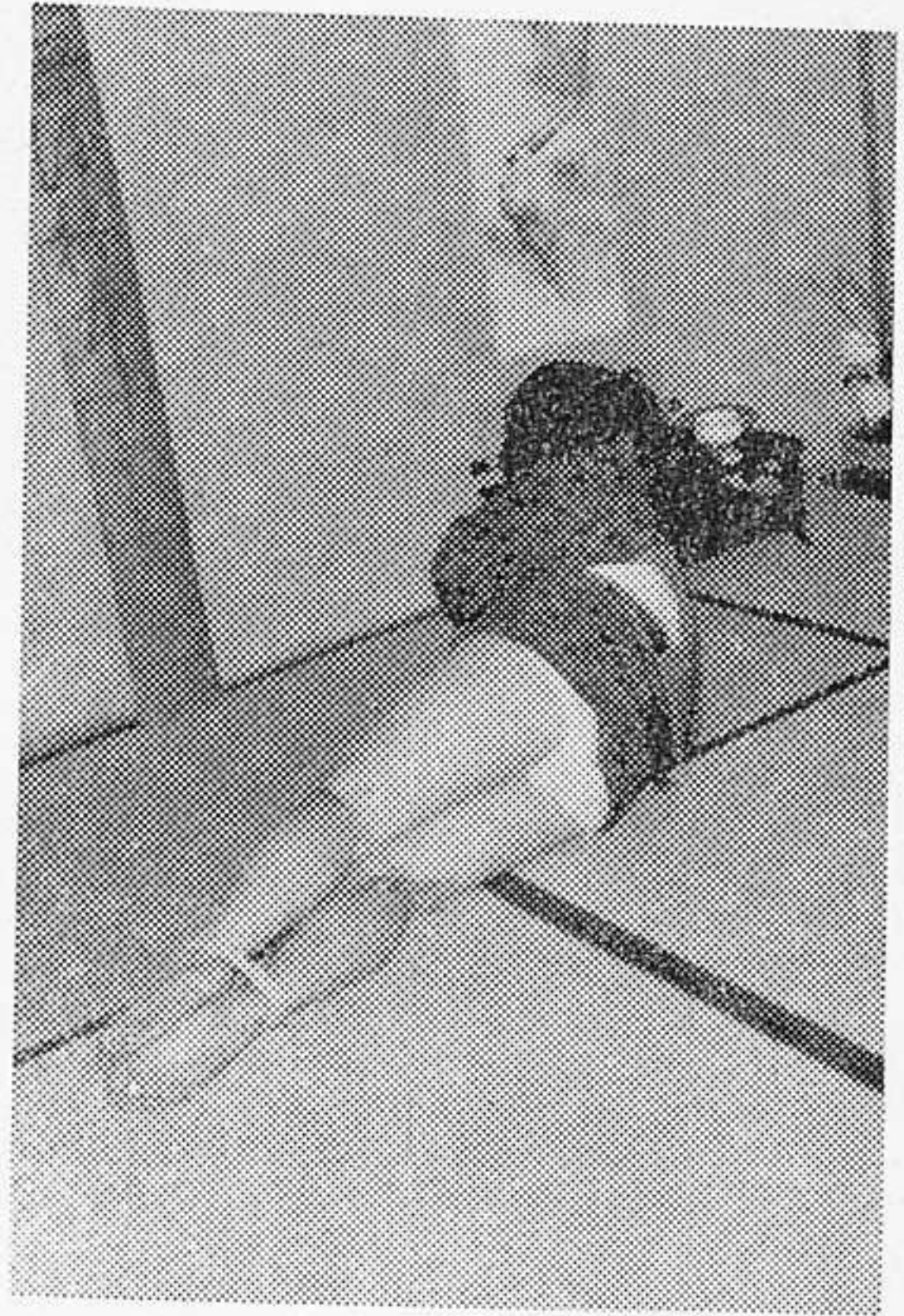
○新しい分譲品は毎月の新刊に登場させております。いずれ古くなった分譲品は漸次分譲を打切つてゆく予定です。何卒その都度お申込み下さるようお願いいたします。打ち切りになりました分譲品のお申し込みはお断りいたします。

○八代理部分譲品総目録は、只今作成いたしております。何卒誌上に広告してあります目録によって御注文下さるよう、お願いいたします。

ボクの責め方

宝塚二三夫

ボクの好む女性の足は、十六才から十八才の乙女に止めをさす。十五才以下は、まだまだ色気に乏しくてボクの好みに合わない。ボクの見るところでは、十六才というのが、そろそろ足も脂づいてきて食味をそそられる。そして、十八才がこの時期の最高である。せいぜい二十才までが限界であると



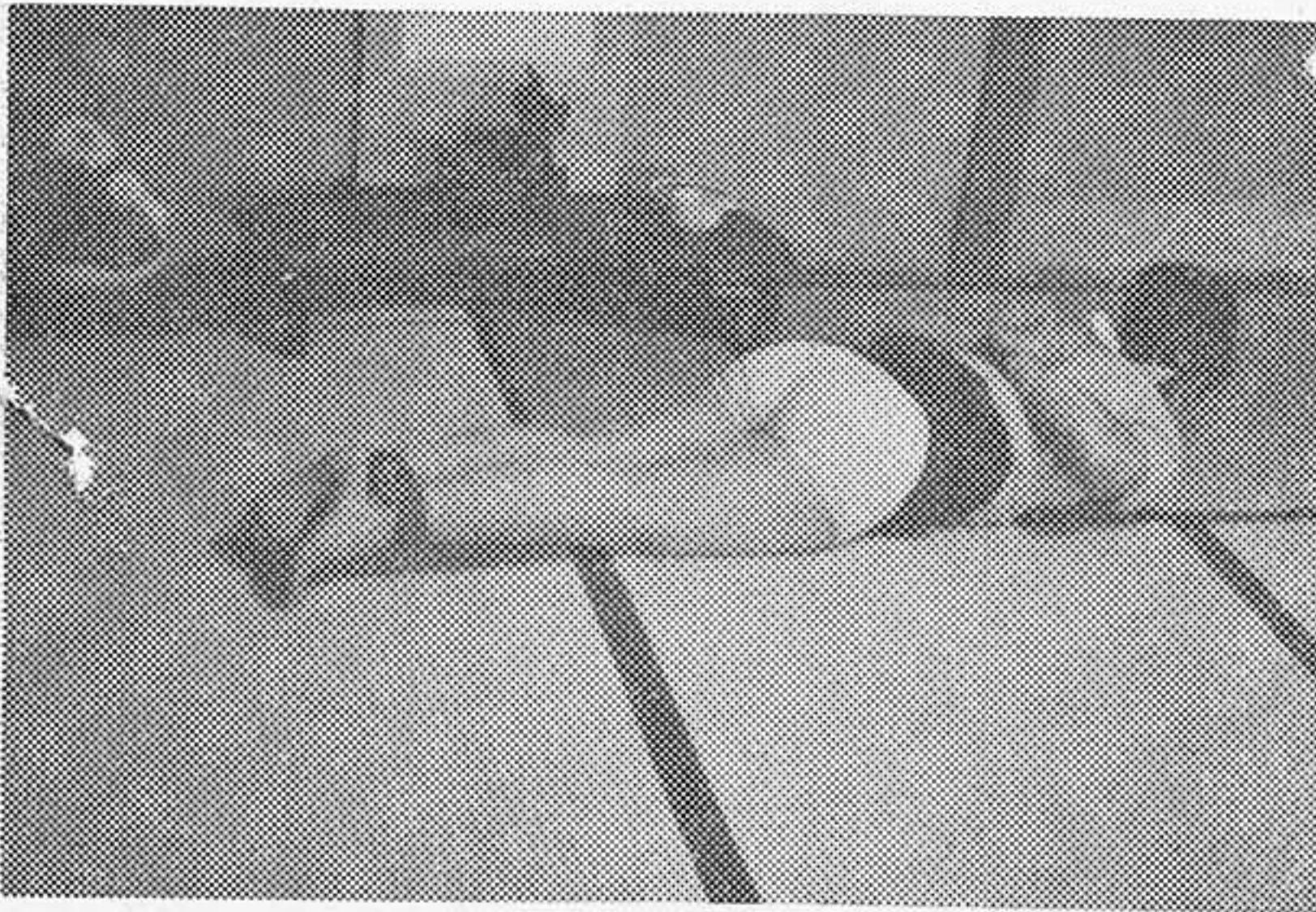
ボクは思っている。足首に紐を掛けようとして、足の裏を握かもうとすると、掌がべっとり吸いつくような柔かさ、そして陽の光を遮ぎられた素足がくると一皮めくったような白さでボクの目の中に飛び込んでくるのには、さすがのボクも思わずドキリとして手に力が入る。

蚕のように、白くてふっくらとした足の指が、ボクのさまざまに責めによって、くの字になったり反りかえったりする。足の裏を擦ったときに示す足の指の表情に對

してボクは多大の関心を示す。このときの表情の示し方に、多彩な変化を見せる女ほど、責めに対してもアノ方でも、感受性が強いということとはボクの経験済みだ。

盛装して、足だけ素足にして、腐れかかったお寺の廊下を歩かせてみるのは、縛りのないボクの責め方として、興味のあるものの一つである。ビルの廊下やレストランで、ストッキングを脱がさせて立たせておく晒し者の責めは、ちょっとスリルがあつて面白い。もっともいずれの場合でも、年齢二十才までの美しい足の持主でなければならぬが。

責め方という点から考えると、ほっそりとして、まだ少女のあどけなさが残つていそうな脛は、なかなか味わいのあるものである。それがもう、肉がつきすぎ



てだぶだぶしてきだしたら駄目である。責めに対する感受性になつて同じことがいえる。新鮮な感受性を失った女性に対して、ボクは関心と興味を示さなくなる。ボクの責め方の遍歴が始まる。

本誌の信条

- 一、本誌は特殊な風俗文献を研究する成人を対象にして編集しておりますので、十八才未満の方には絶対販売いたしません。
- 一、本誌は平和で穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象としておりますが、青少年の保護育成に関する条例には抵触しないよう十分注意して編集いたします。
- 一、新聞紙やその他に本誌の広告は一切いたしません。従って発行部数は最低限定にとどめ、部数の増大を企むための努力はいたしません。
- 一、徒らに煽情的な写真や刺戟的な絵画によって読者を獲得しようとはしません。その為グラビヤ写真と口絵は廃止いたします。
- 一、本文中の挿絵も極力数を減らし、読む雑誌としての体裁を漸次徹底してゆきます。

奇譚クラブ

昭和四一年七月号

(一九六六年・七月号／第二〇巻第七号・通刊第二一六号)





鬼六談義

S と M は花ざかり

団 鬼 六

拙作『続・花と蛇』も、もう二十回近くになる。前後合わせて三十五回、早いものだ。愛読者の方々の支持があったからとはいえ、我ながら、よくもここまで持ちこたえられたものだと思う。

私が、読者の共鳴に自信を得て、本当の意味で読者に対するサービスに、これつとめ出したのは、KK誌にグラビヤが、廃止されてからである。グラビヤ廃止、しかも値段は三百円のまま、堰をきったようになだれこみ出すアマチュア作家陣、KK誌危急存亡の時である。KK誌の黄金時代を知る一人でもありその昔、KK誌によって、無聊をなくさめられたこともある私は、いささか大げさな

方だが 主流派の生き残りとして、この種のKK的読物に才筆を振るう新人が登場するまで執筆をつづける気になったのである。私の好み―一応、羞恥責めということにしておこう―それが、かつてのKK誌の主流というのは間違っているかも知れないけれど、しかしそうした読物が全く貧弱になってしまった現在のKK誌に寂寥を感じるのは私だけではなさそうだ。

大体、KK誌に掲載されるような特殊な読物を愛読される人々は、単なる性生活にあきたらぬ、風変りな性情の、つまり、ぜいたくな好みをもつ人々であるだけに、こういう種の小説読物類も、余裕、豊かさ、無制約の花

園の中で匂いを發揮するものでなければならぬ。制約とか取締りとかいうやせ衰えた土の中で、ひよろひよろ芽を出すのは、いたずらに、読者をいらいらさせるだけのものである。貧困な土地に咲く花はやっぱり貧困だ。それなら、むしろ、咲かずに散った方がましだと私は表現方法や文字にまで制約を受けた時、正直、筆を折ってしまおうかと思った。マニヤの読者に対して、マニヤの作家が、肉声でものをいわなくなり、石ころみたいに力チカチになって、どもりながら語りかけても面白くも何ともない。私は、天邪鬼だから、KK誌編集部よりのそうした要求があってもあまり、こだわらなかったが、かといって、

公開雑誌であるだけに、ずかずか土足であがりこんでばかりはいられない。

とりあえず、形容はひかえ目にし、言葉にも気を使ったが、それだけに色々としりやりの暗示めいた言葉を案出したりして、かなり苦心したものである。

だが、どうせ、書くなら、マニヤの読者に対して、非良心的？なものにしたくはない。

物語の舞台、田代の屋敷の外部の事情、つまり最初に設定した遠山家のその後の経過や山崎探偵などの活躍をあれやこれやと物語り出せば、いくらでも語れるし、その方が作者としても楽なのだが、しかし、読者は、そんなことは望んでおられないと思うのだ。誰かがいい出したピント外れの意見、小説とか読物とかの形に、作者としても協力する気で、下手くそながらにでも整えようと思うのなら、義理にでも、もう少し、田代城の外の話を、物語るべきであろうが、私が、KK誌の小説とことわったように、そうしたことに拘泥される読者がおられるとするならば、作者の意図をくんでおられない方である。早い話だが、狼本を読むのに、クライマックスに至るまでの設定を熱心に読まれる方はいないであろうと——まさか、私は、自分の書いているものを狼本だとはいいたくはないが——とにかく私は私なりに読者の性情をつかんでいるつもりなのである。

りなのである。

となると、『花と蛇』のテーマは一体何かということになるが、これは、私が自作について、くどくど語るより、愛読して下さる方々の評に、うれしくも、私より以上に適確に表明して頂いているようだ。作者の幸慶けだしこれに過ぐるものはない。時折、小説とか読物とか突拍子もない話が出て、眼を白黒させることもあるが、これとて、何も不平がましく嘆こうというのではない。それどころか御厚情有難く思っているのだ。

一言、『花と蛇』について、てっとり早くいわせて頂くなれば、悪い奴に責め抜かれ、羞恥と官能に悶え始める悲運の女性達、徹頭徹尾その描写だけであるといえる。小説でも読物でもなく、一番適確ないい方は描写なのであるが、それも、すでに三十数回、話もこう長くなると、前戯として設定はあっても、内容が内容だけに表現や形容にしても出つくしてしまった感、しかも、描写に色々制約があるだけに、マンネリ化してしまうのではないかと内心びくびくせぬでもない。しかし、その場、その場、ムードを変え、微妙なところでパンチを入れるいささかの自信はある故さほど気にしないようにしている。

ただ、私は、一月のうち、悪魔的になった日を選び『花と蛇』を書くことにしている。

というと、狼男みたいな話だが、つまり、私は、普通、規律正しく生活の軌道にのった行動をしているのであるが、発作的に自分の性情を満足させたい激しい欲求にかられる日がある。その日に限って、『花と蛇』を書きあげ、あとは田代や川田のような気分になって気持のおもむくまま、いわば、自分で書いたものに酔おうとして、プレイの場所へ出かけるのだ。したがって、原稿にあまり時間をかけるということはなく、使い古された言葉や類型的な描写がふと出て来ることもあるだろうけど、こと細かな穿さくはぬきにして読んで頂ければ幸いである。

さて、今回の『鬼六談義』で私がいいかけたのは、自作の解説ではない。私は、むづかしい理屈は嫌いで、方針としては、ただ、わかりやすく、マニヤに面白く読ませるよう執筆していけばいいと思っている。

『花と蛇』が、KK誌上で好評であるということは、作者としても嬉しい限りであるが、これが思いも寄らぬ方向で好評になり、いささかとまよってしまった。一つは、私のアルバイト、一つは、私の本業。本業の方をくわしくいうと、身元がバレ、いささか弱ることもあると思う故、また機会を見て、話すことにするが、つまり、まともな小説本ばかり出版していた出版社が、SMものを書くよ

うしきりとすすめてきたのである。東京のやはりマニヤ誌を発行してる所よりアルバイトとして、一二冊単行本を出したことはあるが今まで私のまともなものばかり出版してくれていた会社より、SMものをすすめられるなど、私は腹立たしいものを覚えた。SとかMとかを売りものにしようとする君子豹変の根生より、世の中は少し狂ってきたんじゃないかなとかわしくなってきたのである。映画五社も、ますます不況、低俗なるピンク映画がはびこることを日本芸能文化のためになげかわしいと口ではブツブツいいながら、しかし、社の利益をあげるためにはピンクものを作らねばならず、小心翼翼として制作につとめつつ、文化の殉教者を気取っている。出版社とて同じなのだ。ついこの間まで、斉戒沐浴小説ばかりかかかって、当社は、文学の伝統を守っていると鼻をピクピク動かしていた社長が、やはり赤字がつづき始めると、背に腹はかえられずと、ピンクものをこそそこそ狙い始めるのだ。それなら、何も最初から、ピンクものを人間冒瀆、軽佻浮薄などつけなさないければいいのだが。しかし、それも、普通のものではあきたらず、SMものときた。S的なものM的なものは当るというのだが、その社長は、SM小説という言葉を使った。私はSF小説といったのではないかと思っただくら

いで、そんな言葉は我々マニヤしか通用しないものだと考えていたからだ。それにしてもその商魂のたくましさは、どうであろう。社長は、私がSとかMとかに興味を持つ者というのを誰かに聞いて興味をもち、それならそうと最初からいえば、SMものを頼みたかったというのである。私は、マニヤだけが読んでもくれるものなれば、如何に稿料が安くとも、調子づいて書くが、そうでないものなれば、調子が出ないだけではなく、むしろ、書くことが苦痛だという意味のことをいって、一まず退散した。

SMものは、ひょっとすると、ブームになるかも知れぬ、そんな気がするようになったのは、そのことがあってから、二日後、これはアルバイトの方の話、ピンク映画の配給会社の社長の招きを受けて、御馳走になったのであるが、その時、出た話で、とにかくSMを扱った映画は客入りがすごくいいということである。私は、四つのペンネームを使って月一本平均アルバイトさせてもらっているが自分でもわけのあまりわからないメロドラマと、プロダクションに所望され、SMがちよっぴり混った代物を書いて来た。SMをおりこんだものには、団とか花巻とかいう名を使っているの、で、ごらんになった読者もおられることと思うが、映画、『花と蛇』の如く、

ああいった程度のもので、たとえば最近では魔性の女(花巻) (松井康子のつるし責め) 猥奇の果て(団) (山吹ゆかり、裸のまま監禁) 裸の仁義(花巻) (美矢かおる、あわや剃毛) などとチャリホリ、その場面を見せたが、マニヤの方々が見れば失望すること疑いなしである。作者がいうのだから間違いない。撮影に立合った私だけが、楽しんでいるようなもので、むしろ、私としては、そんな匂いの全くないメロドラマ、つまり、エロメロの方に少しは、力を入れたつもりなのである。ところが、エロメロの方は、配給会社としてもあまり喜ばず、ということはお客入りはよくないそうで、とにかく、SMが入っている映画なら客も入るのだと不思議なことをいい出したのである。も一つ、楽屋裏を話すと、エロメロなら、製作費を十万円ねざられる。

SやMが入っているといっても、他愛のない縛りやムチ打ちが入っているだけのものなのだが、そんな場面があると配給会社は、上機嫌なのだ。『映画、花と蛇』の時の映倫問題で閉口し、その後、そうした場面を出す時も、ほんの添えものといった感じで、一かけらのマニヤらしい熱意も示さなかったのであるが、そういう映画が客入りもよく、従って配給会社の方からもやかましく注文してくる

というのは、こういう種類の映画を見る層はその大半は、大なり小なり、この道の理解者であるのかいなと不思議な気分になる。とにかく、おどろいたことには、配給会社からも製作者からも、教えられたのであるが、あの愚作『映画、花と蛇』が去年一番ヒットした作品だというのである。

私を料理屋へ招いて御馳走してくれた社長もしきりにそれをいいデータまで示してくれるのであるが、私は、卒直に喜ぶ気になれない。『小説、花と蛇』のファンをごまかしたみたいで、後味の悪い気分、もうああいう衝気は起すまいとあれに關しては頭からバケツをかぶりたい気持であつたのに、その社長、ニヤリとしていわく。『続・花と蛇』を次の企画にのせた——。社長は、KK誌に『続花と蛇』が出ていることは知らないのであるが以前、国映が「妾」という映画を作つてヒットしたことに味をしめ、「続・妾」を製作した如く、それにならつて、ヒット作の続篇を作ろうという商売根生を發揮し出したわけなのだ。この社長はそれだけでなくとも異質な題材を狙うことが好きで以前、伊藤晴雨をモデルにして、などといい出し、私も不承不承伊藤晴雨の出来損いみたいな貴絵画家が出てくる陳腐な映画（獵奇の果て——）ごらんになつてはいけません）の脚本を書いたが、わけ

もわからず満足している人なのである。

縁なき衆生相手にSMものを作るほど苦痛なことではない。真の理解者に対して、ごまかしのもののSMを見せるのも、また苦痛だ。そこで、私は、『小説、花と蛇』のファンの皆様に、お断りしておく。私のプレイの相手になつてくれる女性に月々小遣いをやらねばならぬ關係で、私は、この社長の要求を呑んで『続・花と蛇』の脚本を書くかも知れないがこれは小説とは無關係、いわば、小説の題名を盗んだものと見て頂きたい。期待して、ごらんになれば必ず失望されるであらうことを申し添えておく。第一、前の映画の、『花と蛇』に、どうやって続篇がくつつかのか、脚本を書く私だって、皆目、見当がつかないのだ。全く、何かが狂つとるよの感がする。

それにしても、不思議でならないのは、あの『映画、花と蛇』が去年一番のヒットを打つたというのはKK誌のファンの皆様のおかげであるのには違いないが、となると、部数がのびないとこぼしていたKK誌も、かなり上昇の氣運にあるのではないかと思つたりもする。

『映画、花と蛇』はどういうストーリーにするかまだきめていないが、この前、コレクターという映画を見て、妙にぞくぞくしたものを覚えた故、ああいったものを、と考えている

が、さて、どうなるやら。とにかく、私としては会社より宣伝費をもらっているわけではないのだから、KK誌の読者に、一見されよとはいわない。（前でこりているから）少しは私好みのものを出すかも知れないが、それも映倫で、ズタズタにされるであらうことを思えば、むしろ、マニヤが高い観劇料を支払われることをおとめする。客が入る入らないは、こちらには關係はない。規定の脚本料さえ受取れば、それでいいわけだ。といつてしまえば、会社側は、酸っぱい顔をするだろうが、私としては、『小説、花と蛇』のファンの方々の神経をわずらわしたくないわけだ。映画館に三百円払うなら、KK誌に三百円はらつて、小説の方を読んで頂きたいと思うのである。

それとは、關係なしで、私は、まだ一度も逢つたことはないが、青木順子とかいう評判の踊り子、それに、これも評判の山原清子などを一度映画に使つてみたかと思つている。私は何時も俳優をきめてから、脚本を書くので本人が諒解すれば、すぐにでも出演して頂きたいのだが。一度、こうした件で、私も、芳野氏のように一度辻村氏をたずね、色々智慧をかりたく思っている。KK誌が監修の形をとつて、映画の上で、遊んでみるのも、また一興だと思ふのだが。

新宮明夫・洋子夫妻 対談

「夫婦プレイの夜は更けて」

辻 村 隆

とき 三月二十五日 春宵

ところ 辻村隆宅 応接間

——××××××××—— 辻村 隆

「××××××××××」 新宮明夫

(××××××××××) 新宮洋子

洋子夫人奇クのおのがフオトに驚くの事。

——永年の念願が叶いましたね。新宮さん
このことについて、三日にあげず手紙をやり
とりして、あれやこれやとスケジュールを組
んでいましたが、いざとなると矢ッ張り誰に
でもそうであった様に、考えていた半分も出

来なかったですね——

「家内が生憎の風邪気味で残念でしたよ。で
も洋子にすれば生れて始めての経験でしたが
よく協力してくれましたよ」

——奥さんは、本に出ているフオトを御覧に
なっているの？——

(本と申しますと?)

——奇クですよ——

(いいえ全然……。一向に存じませんわ)

——へえー、これは驚いたですな。とすると
新宮さんは本にフオトをのせていることを奥
さんに話したことないの？——

「ええ、いずれ話はするつもりだったんです
けど、奇クに発表するといって、若し反対で
もされたら、反ってやりにくいと思って、黙
っていたんです」

——じゃあ、奥さんは私の書いたものも読ん
だことないでしょう？——

(ええ、一度も——)

——へえー、じゃあ新宮さんは、辻村隆をど
ういう工合に奥さんに説明なさっていたんで
す——

「友人で、私達と同様、夫婦でプレイしてい
る人がいるから、訪問しようといっていたの

です。いずれ分ってもいい頃だし……。辻村さんから説明してもらってもいいと思っていたのです」

——よく、それで奥さんが承諾なさったもんですネ——

「そりゃあ口説くのは一苦労でしたよ。私達不自由な土地におるもんだから、余り一緒に出たことないでしょう。いや、全然といってもいいくらい出たことがないんです。だから私が二人きりで旅行しようといった時、有頂天になって喜びましたよ」

新宮明夫・洋子夫妻辻村隆宅を訪問す



——旅行の目的がプレイとあって驚いた——

「その通りなんです。それをいうと急にふさぎましたネ。しかし、プレイをしないとなると、わざわざ金を使って出てくる意味がないから中止するといったんです。私と旅行はしたいしプレイは叶わぬしと、大分迷ったんですが、なだめたり、すかしたり、頼み込んだりで、やっとその気になったという処です」

——奥さんは、こちら始めて？——

「高校時代、修学旅行で来ていますが、いわば素通りなので、事実上今回が始めてといっているでしょう」

——奇クを送ってきてても奥さん全然気がつかなかったのかなあ——

「仕事の方の同人雑誌かパンフレットぐらいに思っていたんでしょ」

（私のシャシンが本にのっているなんて、今きき初めですわ。随分ひどいわ、今迄かくしているなんて……）

「別に隠していたわけじゃないよ。ボクの机の上

にいつも本を置いていたじゃないか。君が勝手に見なかったただけだよ。わざわざしらすこともないと思ってさ。辻村さん、バックナンバーありますか？」

——全部揃っていますよ。貴方たちののっているホン探してきますよ——

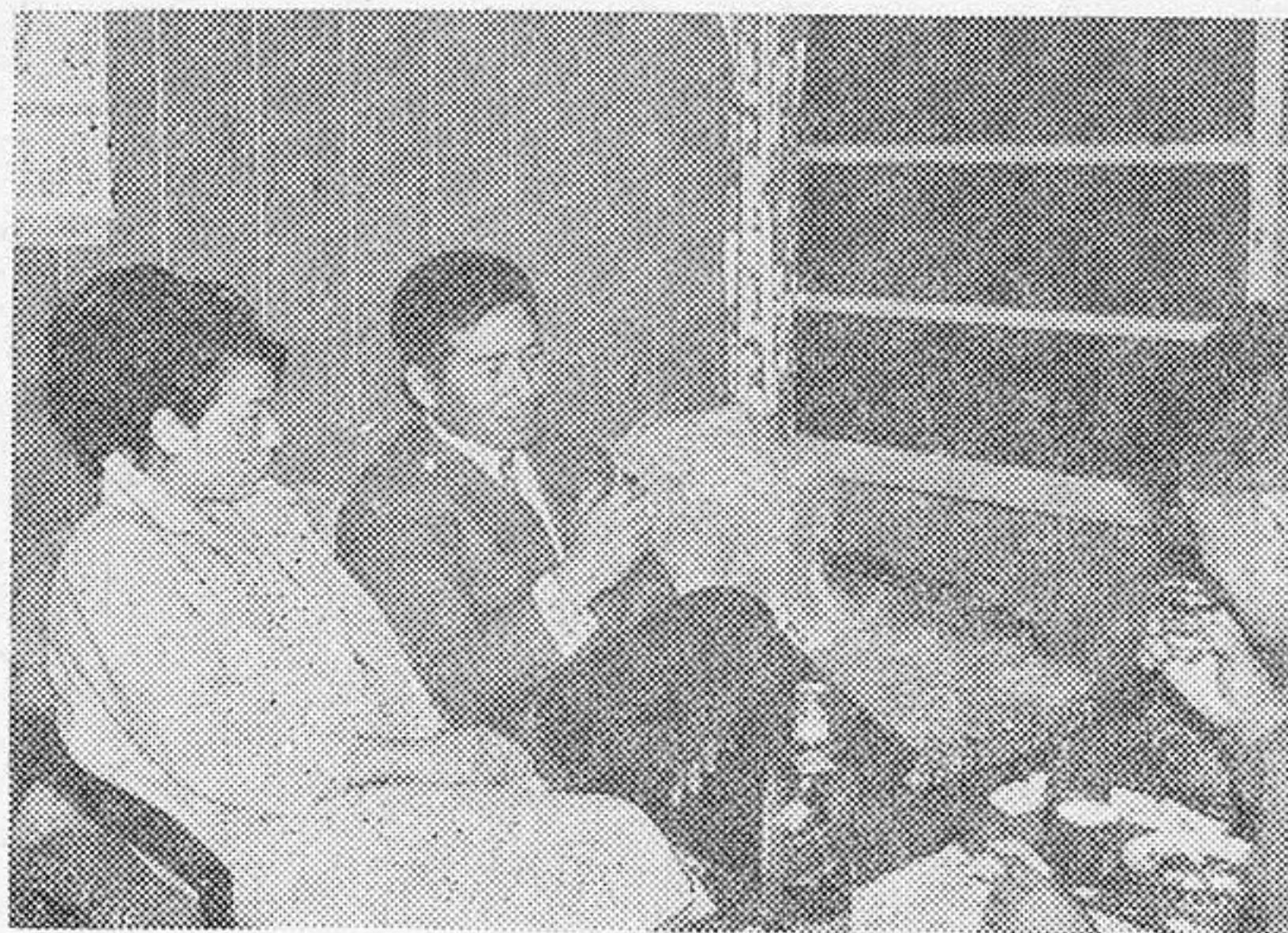
私は立上り書庫を開いて、彼等のフォトの掲載され始めた一九六三年八月号から順次、数冊を引抜いて持参する。洋子夫人は貪ほるようにそれを見る。驚愕と苦笑。羞恥と危惧の交錯した複雑な表情がよぎる。

（まあ、これものせてあるのネ。いやだ、これもあるじゃない？ あなた話してくれたらもっといいの私選ぶのに）

「話すと、反対されると思ってネ。いや、辻村さん、家内はホンのフォトを見るのが、今ここで初めてなんですよ。何しろノンビリしていますのでネ。でもこうして三年前のフォトから順次見ていくと、面白いですね。最初のフォトは洋子の顔の伏せたものを送って、やはり判つきり見せておりませんものネ。それが生首のあたりから、そろそろ大胆になって、正面きって判つきり洋子の顔を發表しています」

——生首のうちでも、この血まみれのものな

初対面の挨拶を交す新宮夫妻



ときよ)

「その代り、あの時から君に、シャシン一枚について百円ずつやったじゃないか。ボクにとっては大出費だったよ。何しろ三十六枚どり一本で三千六百円だったからね。まあ、女房の君に渡す金だから、別段惜しくもないけどさ」

新宮洋子さんは、飽きもせず、尚シゲシゲと、自分のフォトに見入っていた。奇クにのっていた自分の緊縛や生首、処刑の姿に改めて感慨を催おしていたのかも知れない。

夫婦プレイ発端のいきさつの事

——新宮さんは、いつ頃から夫婦のS Mプレイ始めたの?——

「そうですね、生れた子供が三才ぐらいになった頃からなので、もう七年ぐらいになりますか。しかし奇クは結婚前から読んでいたので、私が興味を持ったのは、もう随分以前からですよ」

——夫婦プレイへの、そもそものきっかけは?——

「それが、どうやってこうなったか、どうも判っきりと思ひ出せないんですが……、君、覚えてる?」

洋子夫人は彼に問われて暫らく困ったように考えていたが、ややあってためらうように（私を縛ったのは、確かホラあの時が始めじゃなかったかしら。いつかあなたが起きて待っていたのに、私子供が泣くものだから添寝にいつて、ついウトウトと睡ってしまったあの時——。何か体がキュウクツでハッと眼をさましたら、私の寝巻の紐で後手に両手をゆわえてあったわ）

「プレイというほどのものではないが、そうそうあの時はいたずらしたネ。ボクが眠いのを我慢して起きて待っているのに、君はなかなかやって来ないもんだから、シビレをきらせて、隣りの子供の居間を覗いたら、いい気持でスヤスヤねている。少し腹が立ってイタズラしてやった」

（でもあの時、あなたは長い間ほどいてくれなかったでしょ）

「簡単な縛りにしても、君を縛ったのはあの時初めてだもの。アッサリと解くのが惜しかったし、ひとつはそんな行為にたいする君の反応が見たかったためだよ」

——最初から緊縛のS Mプレイだぞとことわって改まってやるより、そうしたセックスでの戯れとして縛っていた方が、夫婦の場合よ

どスゴイじゃない?——

「竹槍の串刺しも私なりに凝ったものです。あの時は随分時間かかったネ?」

（五時間もかかって、私カラダが変になった

り自然に導入して行きますね——

「段々想い出して来ましたよ。その夜は、ボクを待たしたバツとして、大義名分もあって別にその行為に妻も抵抗を感じなかった様でしたが、次からが大変です。何か理窟をつくるのに一苦労でネ」

（分ったわ、それでなのネ。あなたあの頃妙にイライラしていらっしって、私ズイブン気をつけていたつもりなのに、すぐ怒りっぽくになって、一寸のことにでも言いがかりつけたりして縛ったりなさったわ。それならそうとあの時言って下されば、私氣を使わなくて済んだのに。私どうしたらいいのか分らなかったわ）

「でもネ、今だからいえるけど、まさか君にわけもないのに縛らせてくれなんて、あの頃いえないじゃないか。若しボクがそのことをいえば、未だ君もあの頃若かったから、きつとヘンに思ったかも知れないよ」

（そうかなあ、私はあなたのことですもの、どんなことをいわれても、きつとあなたはいなりになったと思うわ）

「それは今だからいえるのさ」

——そうでもないかも知れませんか、新宮さん。例えば増田夫妻の場合ですが、あの夫婦

は、見合いなんですよ。それが増田氏は結婚初夜に、既に自分の鼻に穴のあけてある事を告白し、自分の性向を寝物語に語った。流石に初夜にプレイはしなかったらしいが。結婚後一カ月足らずで夫婦相和するようになってる。これなどまあ珍しい一例ですが、新宮さんの場合、結婚三年目なら、奥さんはきつと許したと思いますかね——

「男は案外、判っきりそれを女房にいうのが怖いのですネ。余計な取越し苦労をするんでしょうかね」

——私の知っている限り、夫婦プレイの夫婦仲は、すべてスゴク仲がいいんですネ。まあ考えて見ても、冷めたい夫婦、不仲の夫婦の場合、そんなプレイをする気は起りませんからね。妻を愛すればこそプレイは始まるという断言して差支えないですネ。単なる夫婦のセックス以上の、もう一つ心の秘奥でお互いが結ばれるんですからね。あなた方もお見かけした処、結婚後十年経ってスゴク仲がいいじゃありませんか。傍で見えても、あてられる感じですよ——

「それはいえますね。妻がこのプレイに協力する様になり、フオトをとらすようになってから、事実女房は可愛いと思います。私は

辻村さんを前において、ノロけているようにきこえますが、妻をこよなく愛しています。今更甘い言葉でもいえませんが、私にとって無二の恋女房だと思っています」

（あなた、こんな処で、そんなこと……）

洋子夫人は真赤になってはにかむ。真実嬉しそうだ。しきりに新宮さんの膝を押している。

「いや、本当のことだもの。辻村さんの前で判っきりいっておきますが、あなたは随分数多くのモデルさんやカメラ・ハントの人々をとってこられ、又これからもとられると思いますが、私は過去にとった女は洋子一人、そして将来も洋子一人を飽きもせず撮りつづけることでしよう。勿論洋子以外の、例えば小原真澄のような若い娘をとってみたいという欲望は、人並みに私にだってあります。でも私は妻の体しか死ぬまで知らなかった。それでいいと思うのです。これは約束できます」——夫婦が、すべてを許し合ったプレイによって、愛情はより以上かたくなる。それが夫婦プレイの真随であり、これによってもたらす最大の収穫であるかも知れませんか。だから奥さんは『骨まで愛して』と唄っていらっしやる——

奥さまはダンスがお好きの事

——新宮さんは恋愛結婚なの？——

「まあそうでしょうかね。何しろ私達のなれそめはダンスホールでお互いを知ったのですから……。私は近頃ダンスはもう殆んどやりませんが、洋子は今もダンスパーティーときけば遥々と出掛けて行きます。ダンスの愛好者は又別らしいですな。私達の住むこんな山中へ、ダンス友達がわざわざパーティー券を送ってくるんです。そうになると、もうそわそわしちゃって、仕事の手につかない」

——ダンス年令は今じゃハイティーン連中であまり若いでしょう、奥さん——

（顔なじみが多いんですわ。大学生や、IBルックの青年が結構パートナーをつとめてくれます）

——だから、いつ迄も若々しいんですナ——

「その代り、亭主はいつも子供のお守り」

（私はうちの人にも、ゆこうって誘うんですけど……）

「もう今更私なんかの出る幕じゃないもの。

家で転がってテレビ見ている方がラクですものネ」

——しかし、ダンスのせいか、奥さんの脚はしなやかで、体に比較してスゴく細くてスマ

ートですよ。そのくせ、肉がしまって何ともいえない。谷崎潤一郎の『富美子の足』ではないが、魅力のある脚線だなあ——

「若い高校生に交って、一緒にモンキーダンスだってやるんですよ。兎も角家にいても、テレビなんかでダンスミュージックが流れ出すと、もう坐っておられないんですからネ。立ち上って独りで座敷中グルグル廻って踊ったり、はねたりしています」

——それを亭主であるあんたは、眼を細めて見ているってわけ——

「子供が、お母さんのモンキー又始まったって、尻について一緒に変な恰好して飛びはねます。他愛ないですが、家中は親子三人水入らずで朗らかに明るいですね」

——今の時代のエレキギターなんかで、ジャカスカジャンジャンやられると、到底私なんか耳を掩うだけで、とてもついていけない。私達の時代はソシアルダンスでしたよ。曲といえば「ラ・クンパルシータ」を始め「黄昏」「ジェラシー」「碧空」「夜のタンゴ」などのタンゴものに、「奥さまお手をどうぞ」とか「カプリ島」「りんごの樹の下で」「マヅカル」「ラモナ」など、なつかしい名曲で踊ったものです——

話に興じて時の経つのも忘れる



（私も最初はそんな曲で覚えました。あの頃のような落ちついた雰囲気は、もう近頃じゃ望めませんわ）

——大体ひところ流行った「芸者ワルツ」の



ような俗っぽいもので、チークダンスがはやりかけてから、オーソドックスの踊りは影をひそめたですね。私もダンスは好きだが、腹が出ッぱってからはカッコウ悪くてやらなくフोटを見ながら語りあうひととき

なりましたよ——

「妻は大体がノンキなんですネ。未だにハタチぐらいの気分です。夜が早くて、朝がおそい。寝かせておけばいつ迄もグウグウねている。それにたべる事にかけちゃ、私や子供より上です。暇さえあればレコードをかけて愉しんでいた、大きな声で「ホネマデアイシテエ……」ってうたってます。これで結婚十年目の女房なんですよ」

——羨ましいですよ。女は妻の座にあぐらをかいて泥臭くなって、古びてしまっちゃいけない。ロクロク化粧もせず、亭主放ったらかしで、子供にかこつけて、なりふりも構わなくなっちゃおしまいですよ。だから世の亭主族は、女房がハナについて、つい浮気のヒトツもしたくなってくる。その点洋子さんは満点。良妻賢母より、いつまでも恋人でいてもらいたい。世間からは悪妻めいて蔭口いわれても、いつまでも美しく若々しい妻であることの方が、亭主にとってどれだけ幸せであるかshれない——「余り辻村さんが褒められると、尚更つけ上ります。もうそのくらいで……」

フोटの手始めは生首の事。

——フोटはいつ頃からとり始めたの？——

「そうですね。もうかれこれ四年ぐらいなるでしょうか」

——じゃあ、奇クに発表する大分以前からですね？——

「ええ、一年許り前からです。でも私は自分で、現像も引伸しも出来ないでしょう。撮っても見る事が出来ない。狭いところですからカメラ屋へ出して、パツと知れ渡っちゃ大変ですからネ。それで二三本とって、その俤おいてあったのです。それが奇クを見て、DPEしてやるからって編集部便りに書いてあったので思い切って依頼したのが最初です」

——じゃあ、最初は何を撮ったの？——

DPEを依頼しただけってわけ？——
「そうなんです。すると箕田編集長からお便りいただいて、今迄に前例のない変ったフोटだから、掲載してもらえないかといってこられた。まさかそうなるとは思ひもかけませんでした。私達のこんな山の中では、めったに私達だと気付く人もいまいだろうと、タカをくくって、思い切って構わないと返事したんです。それが奇クのフोटに結びつく最初のきっかけでした」

——最初は何をとられたの？——

「生首でした」

——何か生首に特別の理由があったの？——
 「生首や処刑に対しては、早くから特別に興味をもっていました。一番の原因は洋子の意志を尊重したからです。私は緊縛や処刑をとりたかったが仲々妻が承知しないんです。何しろカメラに妻の体をとるのが始めての時ですからネ。羞かしがって縛られたハダカの姿などイヤだというんです。そこで考えて、じゃ顔だけならとってもいいだろうってことになって、やっと妥協したんですよ」

——それで生首？——

「生首をとるなんて言葉は使いません。最初に黒幕から顔だけ出して眼をツブってごらんってわけです。黒幕の前でこちらが勝手に生首台をつくったり、絞首縄をぶら下げたり、私が刀をさして構えたりして妻は普段着の儘、唯黒幕からニユッと顔だけ突き出している。それが生首となった。タネを明すとガッカリしたでしょう」

——新宮さんのアイデアに、感心しましたよ。ナルホドそんな手段もあるんだなあ——
 「だから洋子はちっとも体がこたえない。至ってラクなものです。私がバタバタ黒幕の前で支度していると 眼を開いてニヤニヤして

辻村隆の質問に答える洋子夫人



いる、撮るぞといったら眼をつぶって神妙な顔になる。ただそれだけの事です。私自身本当は生首より、もっともっといろいろなものをとりたかった。いわば生首はそのフォト

プレイへの先ず最初の足掛りに過ぎないってところです」

——ところが、その生首で、俄然読者は驚倒した。こんな世界もあったんだと、それッ新宮につづくと、水野弘や、剣持逸人、果ては私までが『楽我記』で発表したりした——

「皮肉ですネ。その反響に反って今度は当の火つけ役の私が驚いていたんです」

——あの分野は、しかし過去の奇クにはなかったからね——

「でも、私達のフォトの最初は生首じゃなくて斬首刑のプレイのものからでしたよ。あれは六本目か七本目のもので、かなり自分なりに凝っただけに、あれは見たかった。だからそれ迄にとった生首のフィルムはさておいて、編集部へまずあれを一番に送ったのが、あんな結果になった。本当は生首が先で、斬首刑はあとなんです。だから奇クへの発表は順序が逆で、後に生首が続々現われたというわけです」

——箕田氏もあなたのフォトには、大抵のことには驚かない人だが、かなりショックだったらしい。DPEをやるということを書いたので、大分あちこちより依頼あったそうですが、所詮、ピンボケや、愚にもつかないもの

が多かったそうです。その中で新宮さんのだけは一入群をぬいて異彩を放っていたといっていましたよ——

「そんなに褒めていただく程のものでもないんですが……」

——いや、カメラの腕も確かで、構図もよくグラビヤ群に交って遜色がありませんでしたからね。それで処刑ものになってからは、奥さんも、かなり協力的になって来たってわけですね？——

「まあネ」

（この人、私が気持よく応じると、スゴく気嫌いいんです。『亭主の好きな赤エボシ』なんだなと思って。これだけ喜んでくれるんだから、少しはサービスしなければいけないと思って……）

——そりゃ、彼のことだから、その代りフォトとったあとは、奥さんへのサービスも満点以上なんですよ——

「以心伝心っていうのかな。そんな夜はやはり私だってハッスルしますしネ。朝だって好きだけ寝かしておいてやる」

洋子夫人、赤くなつてうつむく。

「お母ちゃん、もうお昼だよって子供が起します。ヒル御飯もたべさせず、いつ迄もねて

いるんです」

——あんたは——

「私もねている」（大笑）

——それじゃトントンだ。子供一人腹を減らしてポツンとしている。こりゃ大した夫婦だよ——

「しかし、あの頃から一枚百円になりましたネ。余計とるとそれだけ私の懐ろが淋しくなるので、そうそうもいかない」

（でも、そのお金で殆んど主人や子供のものを買っているんですよ）

——一つの家で、やったり貰ったり。奥さん家計やってるんですよ——

洋子夫人うなづく。

「プレイ賃は家計以外の金ですよ。いわば私のヘソクリなんです」

——亭主のヘソクリが、女房のヘソクリになる。それでいいじゃありませんか——

（主人がヘソクリしなければ、私もいただきませんわ。ヘソクリしてるもんだから、とりあげなくなっちゃう）

——こら、アカンわ——

これからのプレイのこと

「人間の考えるプレイなんてタカがしれていますね。ここ一年許り行詰って、あまりとら

なかったですよ」

——だから奇クへの発表も余りなかったんですね——

「それもありますよ、奇クがグラビヤを廃しフォトを余りのせなくなつたでしょ。だから私共のフォトでも矢張り差支えあるのかと思つて、余り送らなかつたのです。辻村さんのカメラ・ハントは別だけど」

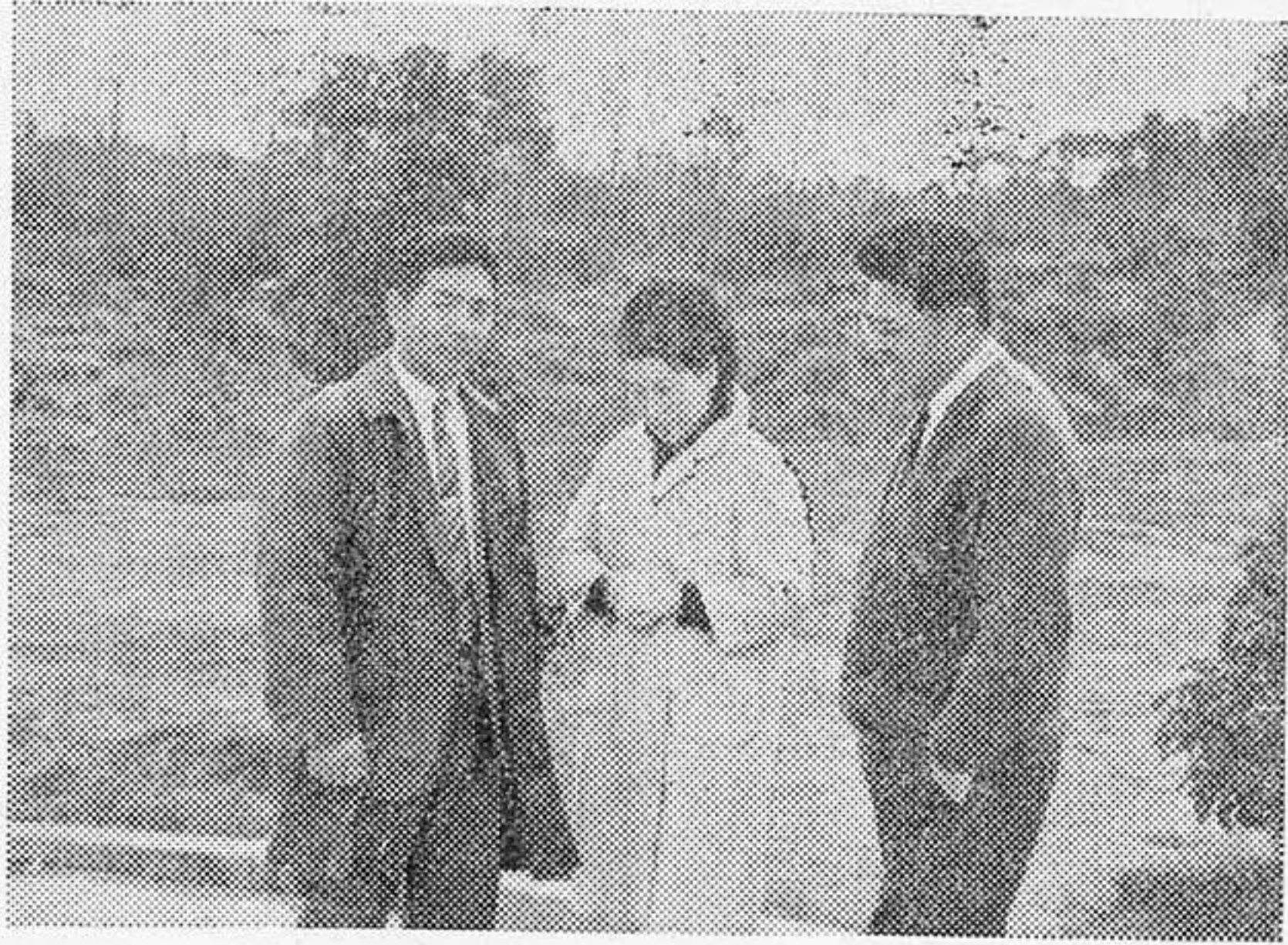
——私だってヒヤヒヤものです。私のカメラ・ハントの本当のテーマは、フォトでもって大体のハントのストーリーを説明し、文は從にしたかったのです。いわば、写真物語式にネ。ところがフォトの制約があるので、それが逆になつちやつた。何十枚もとつて、そのうち僅か二、三枚程度じゃ、カメラ・ハントの意義がありませんが、今の時代じゃ仕方ないでしょう。しかし近頃又幾分か、徐々にですがフォトはふえつつありますよ——

「そうですね。少しふえている傾向ですネ。それで私も先日久し振りに送つて、のせてもらいました。でももう同巧異曲ですよ」

——いやいや——

「私が辻村さんを訪問した第一の目的は、現在マンネリズムに陥りつつある、私達の夫婦プレイに、何か清新の気を吹き込んでもらい

郊外を散策して楽しく語り合う



たかったからです。それで昨夜のプレイは大いに勉強になりましたよ。洋子の顔をああいう風に少し変えてつくって見るのも一つの方

法ですし、コスチュームプレイも変っていますし、増田夫妻や長田実氏のように、いろいろの革の責道具を作るのも変っています。フォトでは私の場合、幸か不幸か、処刑や生首から出発したので、私という人間が、いかにもその様なもの許りが好きだというイメージを与えてしまいましたが、先にもいいましたように、生首も処刑も、充実した夫婦プレイへの一過程に過ぎないのです。私自身そうしたもののへも興味ありませんが、それオンリーではありません。近頃じゃ、私がMの立場になって、妻に縛らせたりします。連縛もとります。SといいMといい、所詮紙一重で、自分が妻を責めていると、今度は自分も一度責められたくなる。いや、責めるという言葉は少し大層でそんなプレイをしたくなってくるのです。音信のある水野弘夫妻もSM交互にやっておられますし、秋田の人も、そうなんですネ」

——京都のT氏も近頃ではSよりどちらかというとM傾向になっています。私は自分では純然たるSのつもりでいまして、一度立場の変ったM的存在になってやって見たい気もする時もあります。それらを引くくるめ

て、すべては夫婦プレイの総称でよんで差支えないのじゃないでしょうか——

「でも、随分思い切ってでしたが、本当に出てきてよかったとつくづくと思います。今夜は辻村さん御夫妻に無理をいいましたが、今からすごく愉しみです」

——いやいや、どんなことになるやら。家内はそれが気になって、どうやら食事もノドを通らないようですよ——

「悪いすなあ」

——夫婦プレイの場合、第三者が介在すれば奥さん連は誰だってそうでしょう——

「辻村さんの奥さんはM？」

——そうじゃないでしょう。私が大体がSなもんだから妻を縛りますが、別段M的なというほどのもんじゃない。これも『亭主の好きな赤エボシ』のたぐいで、妻として夫がそれを好むから協力しているに過ぎない、といった程度です。奥さんはどう？——

（私もそんなところです）

——奥さんは縛られる方がいい？ それとも縛る方が好き？——

（別段、どちらも好きってわけでもないけれど、余りきつくはない程度でしたら、縛られている方が反ってラクですわ。縛るなんて、ど

ういう工合にしたらいのか、オロオロしてしまいます」

「妻に縛らせても、全然何も感じないのでしょ。少し体を動かせば、パリリと解けてしまふ。もっと強く縛れといってもようしない」
（それは無理なんですよ。でも若し強くて、痛かったりしたら怒るかもしれないし）
「プレイの時になんか怒らないよ」

（でも、いっそ縛って貰った方が気がラクですワ）

「だから最近君は、時折ボクに縛ってと囁くのかい。妻がね縛ってくれというんですよ」
（そんなこと云わないわ）

「あったじゃないか、一月のあの時だって、ホラ」

洋子夫人は羞恥にまみれて否定し、新宮さんはむきになって肯定している。どうやら閨のはしばしには、そんなこともあるらしい模様だ。生理前後のセックスの昂揚した時、シンプルなセックスに飽きたりず、妻はSMプレイのあとに起る、夫の激しい愛撫を期待して、そんな囁きを口走るのではなからうか。私の妻にもそうした経験を知っている。

——まあ、それはどちらでもいいが。ところで新宮さんはSMプレイはフオートなしの時

も行ないますか？——

「プレイとフオートは大抵つきものですネ。フオートをとらない時は余りプレイしない」

——というと、SMプレイも気の乗った時、偶に行なうという程度？——

「そうですネ。近頃、子供がめざといのでやはり、隣室で子供がねているとなると、ライトをつけて派手にやれません。プレイしたいなあと思った時は、子供を近くにいたる両親に預けるんです」

——そりゃ、ライトなら大層でしょ。ストロボなら簡単ですよ。私は近頃ストロボとオリンパスペンの、もっぱら軽量小型派に転向です。結構いけるですよ。最初は二眼レフにライト。それから三十五ミリにフラッシュ。そして今はハーフ判でストロボ。出来上りのフオートは成程少し落ちるが、いつ何時でも手軽にやれるので楽です——

「拝見した限り、私の三十五ミリとちっとも変わりませんネ。しかし今迄は編集部や水野弘氏それに辻村さんにDPEずっとお願いしてたでしょう。だからやはり余りとれなかったですネ」

——だからいつも云ってるでしょ。夫婦プレイのDPEは是非自分でやるべきだって。二

万円もあれば一式揃いますよ——

「思い切って、次のボーナスで買うつもりです。昨夜プレイのあと 家内に話したら、洋子もO・Kでしたから」

——是非そうなさいよ。そうすればより思い切ったものがとれますよ。夫婦プレイを他人に頼まねばならぬという弱身がやはりプレイをセーブしてしまいます——

「妻もプレイに対して、やはりその事はいつも頭にあった様です。必ずやりますよ。そしてより以上いいものを、今度は自分の手で愉しみ乍らつくり上げて行きますよ」

——所詮夫婦プレイは夫婦だけのもの。これが定石でしょうネ。その中から差し障りないものだけ発表すればいいんです。何をとりも夫と二人きりとなると、奥さんの協力も又違って来ますよ。今後を大いに期待しています——

(了)

次号—SMカメラ・ハント

「続・可愛い」

小悪魔の群れ」

(一宮百合子の巻)



「バチルスなる世界にあつて」

■ 雑談的な小説？ ■

久 我 庄 一

『バチルス（ばいきん）』は、あらゆる種類の中で最も美しい。私は病氣中、刻々数億のバチルスを吐出しましたが、それは悪臭を有せず、顕微鏡に照せばいみじくも亦あでやかに、如何に靈妙端嚴な芸術も之には及ばないと思われて――。

――「地獄真宗」

岡田播陽著による――

青樹信二郎は、「K精神病院、附属神経科」病棟に入院することになった。――それは、朝から雪降る終戦後でもない十二月も初旬だった。彼は戦時中のドサクサで、ろくにABCも判らない学校生活というよりは「勤労奉

仕」のあけくれで、おなさけの卒業証書をもらった組なので、頭はノーで、身体デッカチという逆説的な奇型児？ でもあったが、けっこう職はあった。捨てる神あれば、ひろう神もある――で、ローカル新聞の編集ポストにカジリついた。

生家はどちらかと言えば、アーメンで明けて、アーメンで暮れるという、プロテストントのクリスチャンホームであったので、罪意識は人一倍ツメ込まれた。ところが、ニキビの数と共に『罪』ということに自虐的な喜びを感じるようになり、ライオンとウサギが仲良く住むような天国より、スリル万点、百鬼夜行図の『地獄』にひそかな刺激を感じるよ

うになったのだから、イケマセン。バイブルは机の上に、エロ雑誌は下にというような……。それが、親の元を離れ、東北はN市に就職となると、さあ、おほっぴらに――。

オセバデル。圧スレバハミダスで。赤いドレスがよく似あうカワイコちゃんまで見付かるていたらしくになった。『地獄』に直行だが、これが、普通の人間ならば、地獄もまた楽し？――いや、地獄なんて言葉も連想せず、ただ、これこそ青春ノと、マンボであけて、ペッティングで更けるという無我のピンクむしどをくりひろげるところだ――が。なにせそこは背徳者を自称しても、育ちがアーメンだから、いざエロ雑誌の内容を、実地に勉強

？ するとすると、やはり快樂きわまった地点で、へまてよ、空の空なるかな、すべて空也”とは、このことか——とか。いま、わたしはとんでもないことをやらかしているんじゃないか……などV下宿の、にぶい灯りの下で、故里恋しさも手伝って、一人ボッチで寝床の中で考え、あげくは、これだけは、まだ古本屋に売るのは気が引けるホコリかぶったバイブルを、のこのこと起上って手にし、罪をおぼえることもあるようになったわけだ。

どだい、青樹は、学生時代もマルクスだ、それレーニンとか、こっそり『赤』的な書物を耽読した方で、“ただ、信ぜよ”の世界にあっては、見せかけだけは、アーメン（ごむりごもつとも、然り）的であったが——どちらかと言えば、異端的な、唯物論もひそかに内部にたくわえていた。また、ドコカの哲人の言葉じゃないが“なんじ自身を知れ”など哲学書をあさり、自己分析に余念のない陰の部分もあったのだ。ある文庫本で、ドイツの強制収容所のオヤダマが、たしか牧師のタマゴであった時代も？——とか、よんだ記憶もあるが、キリストは、とんだ不肖の門下生を、こともあろうにクリスチャンホームに、温存させたことになったようだ。

——さて、青樹は、ナニヤカニヤで流行病ノイローゼに（これだけは、アリガタクナイ流行だが）なり、結果は親兄弟はもとより教会側からも、“悪魔に魂を売ってしまった”と、けしからぬ結末になってしまったのである。その間、自殺未遂やら“金送れ”とか、右の頬をうたれた相手をノシてしまつてブタ箱入りとか、武勇伝？ もあったが——。

白い砂漠を行く隊商のように、青樹は、ぼろーとした視線を前方にむけ、田舎からはるばるキリスト一家の大事とかけつけてきたおろおろする母親と、にがり切った父親にはさまれ、ただ無言。ただし、腹の中では何事も勉強だ。おれは、聖書も研究した。

文学も、哲学も。だが、精神分析学とか、病理学とかは、いまだ、チンプンカンプン。いい機会じゃないか、“はたして、人間の考えたるこれら学問が、神の奇蹟のように、病める人間を救うか、どうか？”研究、たしかめてこようV！。

（まだ、親子三人の乗っているタクシーは、目的の病棟に到着しそうもない。このへんで作者が顔を出す。）久我庄一いわく。へこの

“バチルスなる世界にあって”は、いくら副題で断り書を付けても、（トンダ代物だね）——と、『奇ク』の読者はあっけに取られるだろう。ところで、一般文学雑誌と称する中で、なになに作家とやらの、私小説をしてみることで。たかがゲロを吐くことだけだ。ゲロの吐きっぷりに趣向をこらしパーソナリティのストリップ化をおこなうだけで投げ銭をもらっている。V

——これは、知人のB兄の言葉を、チョッとここで利用させてもらったわけだが。『手紙を書くのでさえ、いずれ活字になることを予期して、粉飾する？』ような私小説家の作品は、読者とのキヨリは、はるかに遠いと思うのだ。その点本誌は、それこそゲロの吐きっぷりなどなんのその、ハラワタまでも原稿用紙に投げ出す、真実の告白ばかりで埋まっている——。そんな奇クの投稿者でもある私が、型破りの小説？ を書き、それを投稿、ケイサイ？ してくれ。まったくSMマニヤとは楽しきことよ。もう私など、作中のヒロインにばかりまかしてられないと、作者もおどり出せば、これをよむ読者も身体を乗り出す？ まあ、まんじともえと入り乱れて……

青樹は、「K精神病院」と大書された看板を、チラリと右窓越しに見て、そこを右に折れ、「人間が行う奇蹟？」の世界に到着した。「神経科」病棟は、病院というよりは、まだ新築したてのアパートのようなたたずまいであった。診察室で、デップリと太った院長に青樹はテストを受けた。一般の病院と違って、それは入学試験をされる学生を思わせる風景だった。

「五タス六は？」

「ハイ、十一です」

「では、十三タス十六は？」

「ハイ、二十九です」

——こんな、チイチイパッパ的なところからはじまった。青樹は、専門学校まで出て、いまさら——と、バカらしくなったが、珍しさも手伝って神妙に答えつづけた。だが、質問がぐたいたくなるにつれ、いつものくせが出はじめた。

「いま、貴方は何を一番、のぞんでいますか？」

「反対の立場になって、先生にむかって、ハイ、一タス一はなど、テストできたらどれ程、面白いかと思っています」

——この答えには、さすがの院長も苦笑し

たらしいが、何か、多分ドイツ語であろうか、サラサラとカルテに記した。△コノ患者ハ、世ヲスネテイルトコロガ有ル▽など書いたのであるう？。

「宗教は？」

「キリストを多分信じているでしょう」

「人ごとのようですね」

「……」

「まあ、信仰もよいが、貴方の場合は、ホドホドにすべきでしょうな。狂信されると、うまくない」

「いや、信仰が足りないから、こんなノイロ——ゼのようになってしまった」

——こんな調子のチョット禅問答？ のようだが、だらだらと五、六時間もかかり、青樹は、やっと「神経科」入院がパス？ したのである。

陽当りのよい解放病棟の十七号室は、まことに快適な住みごこちであり、——その個室で雪のやんだ入院第一日の朝を、青樹はむかえたのだ。何もかも、さっぱりしたような、そのくせへんにむなし……。

こまったことは持参の本を取り上げられ、替りに、講談本など預けられたことである。

時間をもてあまして、彼は寝床に腹ばいになり、それをひろげた。『猿飛佐助忍術漫遊記』という目次が眼に付いた。たしか伝統的な庶民の街、大阪が生んだ反逆作家、織田作之助に、このサルトビ君をヒロインとしたドラマがあった筈だ。

(ここで、またしても久我庄一いわく) へいまはどうなったか？ 現代社という「反逆文学の系譜」などタイトル広告して『織田作之助名作選集』全十五巻を出版したところがあつた、その社で「小説、織田作之助」を、青山光二著で出した。その中に「警報でときれがちな連続放送劇『猿飛佐助』を、よく聞こえないラジオにしがみつこうようにして聴きながら当時、私はあッと思ったものだった。織田作之助本来の戯作者的な才能、ウィットが今までにないと思う存分に、縦横無尽に発揮されていたからだ。同時に、見渡すかぎり便乗文化一色の荒野原にただ一人、昂然とこのように個性に徹した作を書きつづける友の気魄に頭がさがった。」

「講談」——インテリにとって、それは実存主義などよりも、はるかに面白い人生文学？ ではないだろうか。サルトル亜流族は、そ

△日本版▽

印刷紙焼付による分譲品として美木乃々子嬢出演の『日本拷問刑罰集』並に山原清子嬢出演の『入墨女賊拷問刑罰集』の二集をキヤビネ判にて企画分譲しましたところ熱心な女性拷問刑罰ファンの方々から、いち早く多数のお申込みを頂き迫力ある人刑罰写真集として好評を賜りました。その頃よりアート紙に対するグラビヤ印刷の「女性拷問刑罰写真集」の刊行を強く要望されました。ここにアルバム「美しき縛しめ」限定版写真集の一卷として、前記印刷紙焼付の写真集とは全く異なる観点から35ミリカメラにて撮影した写真（従って内容も全然違います）を「日本版」「西洋版」と二種に分け、今回は美木乃々子、山原清子嬢による「日本版」を八美しき縛しめ（第五集）として刊行いたしました。純白の特アート紙に対する極めて鮮明なグラビヤ印刷による迫力のある写真集を是非お残め下さい。七十四葉の八女性拷問写真がぎっしりと全紙面を埋めてファンの方々の御一見を得ております。売切れになりますと絶対に入手できません。どうか未見の方は今すぐお申込み願います。

△アルバム（写真集）の内容▽

（刺青の女王山原清子、演技派の美女美木乃々子の熱演による女性刑罰拷問写真集）

○木馬貴にあつて苦悶する女囚八一葉
 木乃々子○白州の上で非人の罵りものにな
 る女囚八連続四葉
 折檻を受ける女囚
 連続四葉
 美木乃々子
 連れる哀れな女囚八連続十二葉
 子○海老貴めに放置され全身蒼白となつた
 女囚八二葉
 美木乃々子
 女囚八二葉
 美木乃々子
 を掛けられいたぶられる女囚八二葉
 乃々子○荒蕪の上にて荒縄の緊縛に泣き悶
 える女囚八連続八葉
 美木乃々子
 責めにあい足の指をくの字に曲げて苦悶する
 女囚八四葉
 美木乃々子
 くびれるまで縛られた女囚八三葉
 女囚八四葉
 美木乃々子
 四葉
 美木乃々子
 拷問のささらで打たれる女囚八四葉
 乃々子○刺青を晒して木馬貴にあう女囚八
 三葉
 山原清子
 喘ぐ女囚八四葉
 山原清子
 悶する女囚八四葉
 山原清子
 裸にて白洲に股間縛りにあう刺青の女囚八
 葉
 山原清子
 吊りにされた女囚八一葉
 山原清子
 以上合計七十四葉

「イヤダヨウノ」とつじよ。静けさを破って若き女の悲鳴。（作者いわく――猿飛佐助の影響か、こんな時代がかった調子でペンはすべる）青樹は、びっくりして寢床をけって廊下に飛出した。ところが人影はない。どこかの個室からでも――、何事も勉強？ と好奇心もまざって、トナリのドアをノックした。

「なんですか、いまやっとなむれそうだとよろこんでいたところだ。チクシヨウ！ 夜なんてクソクラエだ」

——ドアのむこうで絶叫するような言葉がはね返ってきた。青樹は、その乱ぼうな口調に二度びっくりした。この文句からおして、この十六号室の住人は一晩ねむれなかったらしい。

「実は、あの悲鳴が？」

「ふん、珍しくない。色キチガイのコムスメが、電気ショックを、いやがっているんだ」

部屋にもどって、腕時計をみると、九時だ

った。おそい朝食をたべて、診察室に診察を受けに行くと、まったく女の悲鳴や、男の怒声は珍しくなかった。それでも、すぐ裏の「精神科」俗におりの中とくらべては、まだまだ静かな方だと、待合室にトナリあわせた中年男が、教えてくれた。

そのとき、K病院専用の大型自動車が、玄関前に止った。白い上っ張りをしたあらくれ男（附添人または、監護人という）が二、三人、十五、六の正気を失った少女を、肩にかついで入ってきた。大体、「精神科」病棟に入る患者は、みなこのようなケースで来るらしいのだ？ まくれた彼女のスカートから、細い青白いすねが、寒そうに見えた。

久我庄一いわく、私がこの原稿を書くにいたった動機は、あまりにもセンサーショナルなジャーナリズム側から見たレポや、精神科及神経科の病院側から見た一方的な（学術的な裏付があったとしても）なかば、患者をもてあそぶような書物は、公刊されても、赤裸々な、患者側（私もかつて、ノイローゼで「神経科」に入院したことがある）から見た手記は、私の知るハニイ内では、あまり数を見ないと思ったからだ。エッセイ的には、別稿『狂人学』に「SMマニヤから見た体当り

的狂人論」として書いたので、この小説？では、こむづかしいことは述べないが、泥棒にも三分の理、いわんや、精神病患者も人間だ。ただ好奇心な態度だけでは対したくないもの。ただし、このところがスレスレの限界だが、この稿の冒頭にもかかげたように、「バチルスにも、美学あり」バチルスの世界に耽美的なスリルを感じるのはよいのでは。V

幾日かたって、青樹は自分の個室で、病院仲間とも親しくなり、トナリの住人、山田雄二と、この男にコムスメよばわりされた短大在学中の空野春子などをまぜて、トランプをしていた。

そのとき、ろくにノックもしないで、インターンたちが数人ゾロゾロと副院長に連れられてやってきた。スマした顔の婦長も見られた。

「ほう、春子さんもいますね。今日は、若い連中をつれてきてるんですから、お手やわらかに頼みますよ」

副院長は、職業的なじゃれをとばしながら、たたみの上にむずとあぐらをかいた。サラリーマンだと名乗った山田のつげ口によると、彼女は「肉体で真理をつかむ」とか、世の

男性諸君のよろこびそうな思想の実験者で、あげくのはては、三角だか五角関係がもとで、入院したようなのだ。副院長はまた言った。「いくらなんでも、女性の方はここで診察もできませんね」

彼女はすましていい返した。

「女性の美は、肉体にあるのよ。かくすことは罪悪だわ」

言葉通りに、すぐにも、セーターをぬぐ様子をした。よく『肉体』があるいている——という表現があるが。さすが、深遠な肉に対する哲理？ も持つ、彼女だけに、身体のすべてが、ハチキレそうなむんむんとした動物的な女の『性』そのものが、生で投げ出されているようだった。

久我庄一「自己愛の女神」奇クの花形スター、長野良子嬢を連想されるとよいだろう。さて、久我庄一の、SMマニヤの立場から、この自己愛という言葉が説明させていただと、自分が可愛い、ソナ自分ヲ（勿論、素晴らしい肉体を指していることは、アタリ前だ）サラケ出スコトハ、マコトニ恥シイ、ダガ、ソレダカラコソ、サラケダシ、イタブラレルコトニ妖シイ被虐的ナ悦楽ガセリ上ツテクル。どんなもんでしょう。V

さすが、このような女患者を手がけつつけている千軍万馬？ の副院長も、若いお客さん？ が多いので、あわてて手で制した。副院長たちが帰っていった後で、この空野春子はケロリとしていったものだ。

「あの副院長、美男子でしょう。それに若いインターンさんたちも沢山いたでしょう」

ここで色ッポク、私たちにむかって笑いかけ

「貴方たちも」

つづけて

「その真中で、裸をさらすことを考えると、なんだか知らないけど、身体全体がしびれてくるんです」

青樹はぶえんりよな質問をした。

「そんな貴女が、どうして、治療となるとさわぐんです。ええと、電気ショックとかいったが……」

「ああ、あのこと、神経科ってあまり電気ショックって、やらないんだけど、本当は親からそつと頼んでもらったのよ。まさか、わたしからって、言えないでしょう。——その瞬間はものすごいショックなの、でも……」

山田が言葉をはさんだ。

「いいでしょう、吐いちゃいなさい」

なれなれしい口調でけしかけた。

「正直言って表現できかねる、本当よ。恐いこともたしか、……失禁しちゃったこともある、あら、御免なさい。山田さんって、Hだわ。わたしにこんなことまでシャベラスんですもの。もう、やめておこう」

その晩、青樹は夢を見た。柔道、空手の有段者でもあるあらくれ監護人たちに、スリッパ一枚のあられもない姿で空野春子が、ワッショイ、ワッショイと廊下をかつがれて行く。例のイヤダヨウノの悲鳴が、彼女の口からもれる。一人の監護人などは、かつぐ人数が多いのをトクとして、片手で、彼女の豊かな白いモモのあたりをなで、片手で、ボリウムあるオッパイのへんを、わしづかみにしているのが、見えた……。

——よく朝、白いシーツの上に、小さな地図が、久し振りに描かれているのを、青樹は、苦笑しながらながめたのである。「神経科」は、外科的症状でもなく、そうかと言って内科的でもなく、アタマの方なので、入院することによって、環境を変えることに重点が置かれてあるのか——。

毎日、朝、昼、晩と薬（のんびりするクス

りらしい）をのむ他に、別にこれといった治療はなかった。ただ、二週間もたつと、薬のせいとか？ 顔の皮膚が、黒ずんできたのにはまいった。

——そんなある日。「神経科」の患者対「精神科」の患者たちとのバレーボールが、病院の外部からは、見られないようになって入浴場と、便所と、監禁病棟（またの名は「精神科」病棟）にはさまった屋根付の中庭で、監視付で行なわれることになった。これは、なんなく「神経科」の方の勝となり、アツけないレクレイションだったが。このとき、チョットした機会に、精神病者と話すことができたのが、青樹にとって、いい勉強？ だった。アルコール中毒から、入院（投げ込まれた組らしいが？）したとの打あけ話からはじまった、もと機械のセールスマンだったとかの二十七、八の男だった。

「このようなところに入った人間はすべて、『キチガイ』の一言で、世間の連中はキメツケテしまうが……それはオカシナのもいるけど——。正気にはなっても、社会に出るのが恐くて、こうやっていつまでも、はいつているのだって。ここは、あくせくと、人をおしのけてまでなどという人間は少いからね。」

同病哀れみというか、他から眺めるよりは、
 気持のよいやつらばかりだ。いや、そうなっ
 てしまうのだ。悪く言えば病院ボケ。おれも、
 この通り、よくなっているが、働く自信がな
 くて、それに何もかも見透すような社会の眼
 がおそろしいのだ」

青樹は思った。△社会では、精神病院から
 出てきたときと、すぐオオカミか、何かの
 ようにおそれる。ところが、彼ら正気付いた
 ものからすれば、社会がおそろしいと言う。
 このチグハグな一点に、考えられるべき事実
 があるのではないだろうか▽

（ここで、またまた作者いわく——「別稿、
 『狂人学』でも書いたが、精神病者になって
 しまった以前と、退院した以後に、まだまだ
 公共的な施設が、または、あたたかい理解あ
 る社会の眼が必要では——。終りに、『狂人
 学』でも触れた、私の、若かりし「神経科」
 入院中。インターンたちとの珍問答を一つ、
 私の分身たる青樹にやらせて幕にしたい。な
 お、この小説？は、青樹を狂言廻しとして、
 パチルスの世界を構成したのであまりヒロ
 イン、青樹の内面描写まで、手がまわらな
 かったことを一言しておく）

二度目のインターン（見習生または博士の
 タマゴ）たちが、やってきたのは、病院で年
 を越した青樹にとって、正月明けの、冬には
 珍しいある晴れた昼下りのことだった。今度
 は、副院長も顔を見せず、婦長が付いてきた
 だけだ。そのせいか、この前来たときとは違
 って、いやに、声高にお互いでシャベリ合
 い、青樹にむかって、ぶえんりよな口のききか
 たをした。
 「ストレスは、気持のもちようだね。クスリ
 だけじゃ……」

そんなまるで、ヒョッコたちにオモチャに
 されているような気配が不快で、青樹は、ぶ
 っきらぼうに質問した。

「失礼ですが、聴診器は、どこにあてるん
 でしょうか」

「君、きまってるんじゃないか、身体にあて
 るんだよ」

「ああ、そうですか、もっとハッキリ言って」
 「腹とか、背とか、君は、そんなつまらんこ
 とが、判らないのかね」

「ぼくは、この病棟だけはアタマに当てるの
 かと思いましたよ」

青樹は、わざとケタケタと笑ってみせた。
 それからまた言った。

「ぼくの魂は、黒でしょうか、それとも赤で
 しょうか」

「そんなこと、答えられるかね、——だから、
 君は、ノイローゼだと言うんだ」

ヒョッコの一人が、ちょっとこうふんした
 口調で吐き出すようにいった。ここで、青樹は
 ニヤリとして、坐りなおして、言ったのだ。

「貴方たちは、将来、この方面の博士になら
 れる方たちでしょう。それならば、チョット、
 ぼくとシャベッても、すぐぼくがどんな人間
 だかということ、を、さっしなれば……そう、
 魂が黒か赤かなど、常識的にバカな事柄です
 よ。だが、ぼくは、文学的に、宗教的に質問
 してみたいです。それを早くもさっしてユー
 モラス的に言い返さなければ、うまくないの
 じゃありませんかね」

——こんな珍問答のやり取りから、青樹は
 がぜん、そのことがインターンたちの口から
 K病院はおろか、東は花の都、トウキョウ、
 西は北海道のこの種病院（インターンたちは、
 あちこちの土地からやってきたので）までも
 広まっていちやく英雄？ になってしまった
 のである。

“シチュエーション・ウオントッド”

三 原 寛

ミス・キャサリンは、白人女性としては小柄な方だった。所謂ヤンキー・ガールの派手さはなく、本国でも、真面目な模範学生で通っていた。

日本留学の試験を受けたのは、特に日本に興味があったからではなく、外国旅行ができるといふことに魅力を感じたからである。日本人に対して特にどうという感情を抱いてはいない。

ただ、男も女もひっくるめて、日本人という人種を何の異質感もさしはさまずに、自分達白人種の同じ仲間として融和してゆくことは、理屈を通り越して、考えてもみれない事

だった。

ミス・キャサリンは日本人の男に対しては、性の意識を感じなかった。彼女がそれを自覚してないとしても、我々が、犬や猫の雄雌に對して関心を寄せないのと同じ様な感覚をそこにみる事ができた。というより、全体に小柄でのっぺりした顔をして、自分達の前に出ると妙におどおどと卑屈な態度をとる日本人の男達に対しては、中性的な反応以上のものを感じられる筈がなかった。

今、ソファにふんぞり返って煙草をくゆらしている彼女のつき出した足の裏を床の上にひざまずいて、舐め続けている青野にしてか

らが、そうだった。本国で心理学を専攻してマゾヒズムについての知識はあったが、日本人の男にも、マゾヒストが存在するという事は、一寸した奇異であった。この男は自分の足の裏を舐めたいと書いて来た。鞭で打たれる事にも興味があるといっている。それに、十八才のアメリカの少女キャサリンにとって、最も興味を惹いたのは、此の青野という男が、彼女の排泄物を消化する人間便器になりたいと書いて来たことだった。神酒、神味、という表現を使ってあった。人間の口の中に排泄するといふ快感は、そう滅多に経験できる事ではない。

もっとも、青野が手紙を書いて来たその週末のレッスンでは、何となく青野の願望を、そのまま果してやるのがいまましい気がして、リチャードをよんではぐらかしてやった。こちらの真意が掴めないで赤くなったり青くなったり、一人で気を揉んでいた青野も面白い観物だった。

そして今日、三度目の土曜日の午後、戸惑ったような顔をして入って来た青野に、先ず、素足の裏を舐めさせてみることにした。ミス・キャサリンは脂足だった。彼女の足からはいつても、汗と革のむれた臭気が消えさること

がなかった。

ぬめぬめとした軟体動物のような青野の舌が、そのキャサリンの足の裏を這いずり廻る。踵から土踏まずの方になめくじのような舌がうごめいて、擦ったさにキャサリンは腰をよじって身体をソファに押しつける。やがて、舌が足指の股にぬめりこみ、そして、親指と人差指がすっぽりと口の中に含みこまれ、舌で指の間をしゃぶられ始めると、擦ったさが、ぞくぞくするような気持ちに駆られて、キャサリンは身体をくねらせソファからお臀を浮かして身悶えした。足をのばして、足裏で男の顔をまさぐってみる。目鼻、そして唇と足裏の触感を楽しむ。

自製の限界を破ったキャサリンはついにソファから身を乗り出し、足裏を青野の額にべったり押し当てて力一杯蹴った。青野が蛙のように、ぶざまな恰好で仰向になる。スカートを捲り上げたキャサリンは青野の顔の上にお臀を押しつけてスカートを下した。パンティの薄い布を通して青野の熱い吐息がキャサリンの火に油を注ぐ。青野の鼻が股の下に当る。

仰向けの両頬を太腿でしっかりとさみ込み、青野の鼻を中心にして、圧力を加えなが

ら、お臀をゆっくりと廻してやると苦しがつて顔を激しく動かし、空気を吸おうとして口をうごかしてもがき廻る。鼻を締めつけるような気持ちで、お臀を唇に押しつけ、口を開かないようにしてやると、息の出来ない青野の死物狂いのうごめきがキャサリンの快感を誘う。遂に、キャサリンはベトベトに濡れたパンティをかなぐり捨てた。生餌におどろかか

る牝豹のように、キャサリンは、青野を徹底的にいじめ抜いた。

嵐のようなひとときが過ぎ去ると、急にキャサリンは激しい尿意を催してきた。

生暖い、あとからあとから、しぶきをたててほとばしるキャサリンのネクタールを息つく暇もなく喉をならして青野は飲み続けた。人間の口中に排泄する優越感は味ったものでなければ実感できない。そして、一度、人の口の中に放尿して、それを飲ませる快感を覚えると、すっかりそのとりこになり、普通にトイレで排泄するのが味気なくなるのだ。

最初のうちは、祭壇を泥靴で踏みこむ快感である。そのうちに、この悪魔的な遊戯に魅入られて、しまいには飲む方だけでなく、食べる方迄始末させなければ気がすまなくなり、男はすべて、便器としてしか意味をなさ

なくなる。と、青野を、一時、専用便器として、使用していた、或るバーのマダムが言っていた。

「お金になると思うと、家で、トイレを使うの、勿体ない気がするわ。」と、これは、その飲み代として二千円を青野から捲き上げているトルコ嬢である。このトルコ嬢も、今では「暫く飲ませないと、家のトイレに行っても何だか、用を足した気がしないわ。こういうお客さんが何日も来てくれないと、街を歩いてても、この男の人をつかまえて、飲ませてみたいという気になるのよ。欲求不満ね」ということになる。

キャサリンの青い眼は、もっと残酷に輝やいていた。この次からは平気で、食べることを要求してくるに違いない。

よく、映画で、裸のたくましい男が鉄鎖で自由を拘束され、苦痛に顔をひきゆがめて、背中を鞭打たれる地下の拷問室の光景に遭遇してキャサリンは身体中を熱くしたものだ。だが、今、この男は自ら、その苦痛を望んで、足許にひざまづいてきている。意地の悪い衝動に駆られて、キャサリンは、青野の肌着をむしり取った。正坐して、両手を床について、飼主の命令を待つ犬のような恰好をしている

青野の後に廻って、足を上げて背中を思い切り蹴ってやると、つんのめるように、床に腹這いになる。

キャサリンは、生れてはじめて、親から、まとまったお小遣いを握らされ、これで何でも好きなものを買っていいんだよ、といわれた時の記憶を思い起そうとした。今、自分の鞭のえじきになろうとして、身を投げ出して、この哀れな男、ばかな奴——、マゾヒストの事は知っていたが、そんなのは精神病院にでも入っているのだと思っていた。まさか、自由に鞭打つことのできる男が自分の前に現れるなんて。キャサリンはぞくぞくするような気持で、革ベルトをびゅうっとしごいた。

思い切って打ち下すと、空を切った革ベルトがパシッと乾いた音を立てて男の背中にはじける。男が身をよじる。キャサリンは片足を上げて男の首筋を踏まえた。そして今度は男の臀肉を狙って第二撃。うっと呻いて苦痛に悶える男。その男の肉体をぐっと踏みしめる快感。耐えている。激痛に必死に耐えている男の苦悶が踏みつけた足の裏の感触を伝ってキャサリンは、全身がきゅんとけいれんするようだった。

革ベルトをふり下した時の何ともいえない

でこたえ。そして足の下に踏みつけた男の耐えかねる苦痛の悶えが、キャサリンの興奮を益々あふらせた。上気した愉悦の表情でキャサリンは革ベルトの手ごたえと足裏から伝ってくる男の苦痛のあがきを堪能し尽した。

キャサリンにとって素晴らしい経験だった。

男の苦痛をじっくりと噛みしめて味う嗜虐の愉悦が、こんなに興奮を誘うとは想像もつかなかったことだった。男の髪を掴んで引き起し、ソファに坐ったキャサリンは男の顔を両腿の間にはさみ込む。男はぐったりと眼を閉じている。頬をつねりあげてやると、男の表情がひきつれ、懸命に苦痛に耐えるのが、たまらなくキャサリンを刺激する。

乱暴に男の口をこじあけて、べっと唾を吐き込んでやると男は喉を鳴らして飲みこむ。男の両胸をどんと足でつきとばすと、又男は床の上に仰向きにひっくり返った。再びサディスティックな欲望に駆られた、キャサリンは、男の弾力のある腹の上に両足を乗せて踏みつけた。少しずつ圧力を加え遂にはソファから離れて全体重を両足にかけて男の腹を踏みしめる。今度は男の苦悶にゆがむ表情がよく見下ろせる。

キャサリンは残忍に眼を輝やかせながら、

男の全身を白い脚で、お構いなしに踏みつけた。

キャサリンは男の苦痛をじかに足の裏で感触しながら、その苦悶の表情を楽しむことができた。男の顔から眼を移して、足下の男の肉体をじっくり觀賞しているうちにキャサリンは名案を思いついた。男のズボンと、下着を手荒く引きずり下した。浴室から、使い古しのナイロンのストッキングを持って来て、男の肉体に固く縛りつける。

屈辱に身をよじる男を無視して、キャサリンは、もう一本のストッキングを今縛りつけたストッキングの上に重ねてお臀の割れ目から後に廻し、ふんどしのような形で、前の方で二本のストッキングを合せた。男の腹の上にとび乗ったキャサリンは、二本のストッキングを手綱のようにしごき、それから向きをかえて、スキーのスティックのような具合に握りかえた。

ぐいぐいと足裏に力を加える度に、二本のストッキングを引き絞ってやると、苦痛にゆがんだ男の顔に、泣きべそをかけたような奇妙な表現が入り混って、キャサリンは今や男のすべてを支配したという征服感に酔うことができるのだった。

△耕土散筆▽

『落穂拾い』

(其の八)

保藤 久人



32 新刊書△あぶ・らぶ▽

33 女性美の価値

34 神秘ということ

32 新刊書△あぶ・らぶ▽

このほど、高橋鉄氏の新著△あぶ・らぶ▽
(異常愛リポート)が「青友社」から刊行さ
れた。久しぶりのことである。

周知のように、高橋氏はみずから「フロデ
イアン」と称されているとおり△フロイド▽
研究の第一人者で、精神分析学・生活心理学
の泰斗。カウンセリングを含めて、その著作
はずい分と多い。

新著△あぶ・らぶ▽は、高橋氏が自身でお
っしゃっているように、十六年ぶりの、その
“集大成”とでもいうべきか。

全文を二十五章に分け、異常愛の解説と事
例、質疑応答が、ことこまやかに記述されて
いて、第20章の質疑2・第21章の質疑2・な
ど、文字通り『小説より奇なり』で、一種の
幻想小説を読んでいるような気がする。

が、この新著で、最も注目を要するのは
「或る程度、異常愛(あぶ・らぶ)の過度な
男女も、これを熟読してくだされば、他に傷

つけることなく、否、他をよるこばせながら、その熱望を叶える方法を会得していただけると思う。

そればかりでなく、異常愛を活用し、趣味に、仕事に、芸術に、学問に、研究に、高める「昇華」の秘法を見出していただけよう（以上序章文中）

と、いう点である。

右に関して『発散』と『昇華』が略述してある。

「あらゆる欲求は、ただ抑えつけてしまうだけではダメ。そういう抑制、禁圧などによって心の底へ潜入している欲求は、いつかしら大爆発をおこすから、個人にとっても社会にとっても危険——」

だから、「自己内省」にともない「発散」と「昇華」を工夫することが必要だという。

「発散とは——自分自身の「異常」に気づいている方達は、社会に害を及ぼさない程度に、特殊な方法で、心に秘めた熱望を叶えることも有効。

あらゆる悩みを訴えてこられる方達、そのかたがた、お互の承諾を得て語り合ってもらうと、それが非常にいい結果を得ている。これを「発散」という」

「昇華とは——例えば、露出趣味的な欲求は文章なり芸能に高めて、多くの人に公開することが出来るし、窃視欲は、徹底的な研究で満たすことができる。その他千差万別な性状によって、各々別な「昇華」法がある」（以上第21章から）

結論的に「異常」を活用する秘法とは——

「心のうちに充満した欲求は、ただ蓋をしていだけでは消えてなくなると精神分析学は教える。では、それをどうしたらいいか。その方法は——」

「その欲求を「ナマのまま」自他を傷つけない手段で叶える。たとえば、誰しも大なり小なり抱いているサド・マゾヒズムは、真実想い合った愛情生活の場で交しあえる」

「残った大部分の欲求は「昇華」するのが、人間のさだめである。昇華とは、化学用語から転じて「社会的に高度な形で発揮すること」である」

「サド・マゾヒズムは、性愛の場だけでなく仕事の上に、趣味の面に高められる。また、露出願望は、プライベートな快楽の生活の中で大いに満たしあうべきだが、より強いものは、質的に高めて、自己表現の満足とするのが人間の王道である」（以上第25章から）

◆ ◆ ◆ ◆

考えてみると私など（大方の熱烈なマニアのかたがたもそうだと思うが）、右の文中にある「発散と昇華」を、自己分析にともなって、適宜に利用しているので大過もなく、健全な社会の一員として過してこられたのかも知れない。

かつて私は「書く」という楽しさという小説を書いた（註・40年9月号・サロン）

その中で、「或る人に『書くことは感情のオナニズムだ』と指摘された」と、言ったことがあるが、今から思うと私にとって「書くこと」は、極く自然な「昇華」法になっていたといえそうだ。

また「内生活に於けるアブ・ラブ」として愛情生活（性愛）の中の異常味を拾い上げたことがある。忠実に内容を紹介することは出来なかったが——（註・耕土散筆(15)(22)）

この内容を活用し、いく分かの「発散」的役割を果たしていた、と言っても過言でないだろう。

新著「あぶ・らぶ」を読んで、私は、苦しむ……ことよりもまず、自己を知ることが大切だと思った。そして、悩む……ことよりもさきに、工夫をこらすことこそ肝要だと思っ

たものである。

自分で自分を「歪めて」しまつてはなにもならない。△正常▽の中から△異常▽を摘出する態度は捨て、△異常▽の中に△正常▽を見出すよう努力する。これが、アブニストの新しい道だと思ふし、そのあたりにこそ、私の描いている理想……明るいエス・エムも確在するように思えるのだが――。

33 女性美の価値

ご婦人がたの美しさ……美しい装いは、元来が、男の視覚を楽しませるためのもの……だと言つたら叱られるだろうか――。

しかし、装いの実質的な目的は、そのあたりにあるように思える。

極言的にいうなら、女性のうちにある本能的な「見栄」や「虚栄」が、自己の幸福感を衣類で表現し、そして、ある種の自己陶醉を混えて、男の目を惹きつけようとしている。

これは女性の「特権」のような気もする。

この特権(?)を最大限に活用していらつしやるご婦人がたこそ、美しく、チャーミングであり、セクシーなのだといえぬこともないと思ふ。

年々、目新しいファッションが登場してき

て、男たちの目をそばだたさせる。

その中には、トップレス水着のような、甚だショッキングなものも含まれている。また大分以前から、ヒザ上〇〇センチとかいうスカートが話題になっている。

拝見したところ、如何にも刺戟的すぎるようである。誠に挑発的でもある。

ご婦人がたの内面にある「露出趣味」を、いやという程、思い知らされた感がする。

女性がたの露出的傾向は、われわれ男性にとっては、この上もなく楽しい現象なのだ。が、しかし、実際は、白日のもとであまりに見えすぎると、かえって、目のやり場に困るものなのだが――。

女性の姿態美は、布に包まれていてこそ言い尽せぬ「味」がある。隠されている部分……そのなかには、一体、どのような美しい実態がひそんでいるのだろうか――と、夢も、刺戟的な意味もうまれてくるのだ。

私など、自称、ヌード憧憬讃美派だが、公的な生活では露出的美装に遭遇すると、思わず目を伏せてしまう。こちらのほうが羞かしくなってくるのだが、これは、あるいは私だけの気弱さなのかも知れない。

しかし、男の感情の中には、案外、このよう

な照れ性な部分もひそんでいるようである。

こうなると、まず凝視は不可能である。

従つて、男性の瞳を惹きつけてチャーミングに見せよう、という、衣装本来の目的もその意味をなさず、逆に、単なる好奇の目で眺められることになりかねない。

男性は、ご婦人がたの服装を、常に美しくセクシーであれ、と希うものだが、その願望とは別に、上品で、清潔で、つつましかで……と、心のなかで自分好みの理想像を描きつづけているものなのだ。

勝手といえば勝手きわまる。エゴ的な感情なのだが、まず、このあたりが、男性の一般的な思潮だといえるのではなからうか。

世間ではよく、恐妻型のご夫婦のほうが円満だといわれている。

このかたがたは、きっと奥さまのほうが利口で、リードも巧みなのだろうと私は思う。あらゆる面で、ご主人を十二分に理解し、その上に、自己の意志(好み)を生かしていらつしやるのに違いない。

衣服でいうなら、ご主人の好むカラーや、デザインを基本にして、そこに、ご自分の趣味嗜好を加味していらつしやるのだろう。

この奥さまは、夫操縦法を心得ていらつし

やるのに相違ないし、賢明にも、ご主人の審美眼を、ひとりの男の視感覚として大切にしていらっしゃるのだと思う。

男の眼——それは、普通の場合、世間一般の常識につながっているともいえる。女性がたの考えていращる以上に正確な場合も多い。

なかでもとくに、人間の心身に、幸福感を抱かせる要素の多い内生活、その秘的な部分に必要な衣類……下着類の選択は、男性に委ねてこそ理想的なような気がするが、こういうことを主張すれば、すぐにH（エッチ）と言われそう。

実際に、デパートなどで婦人がたの下着コーナーをウロウロしていると、たちまち、変な意味のありそうな瞳で見詰められ、辟易して逃げ出すのがオチである。

しかし、男性にとっては、ご婦人がたの下着というものは、特定のマニアでなくても、何か言い知れぬ「夢的部分」があるもので、もし、自由にコーナーで選べるとしたら、その「時」が、いかに楽しいものであるか。これは、男性のうちに秘められている共通的な心理だと思ふ。

母親が子供の晴れ着を選ぶように男（夫）

が、恋人（妻）のものを選び出す。

それが、肌近くなるほど、特殊な感覚も必要だし、ふたりきりの意義も生じてくる。

だが、現代人の感覚、常識範囲では、こういうことはまだまで実現されそうもない。しかし、このあたりの無意味な良識（？）が打破されたなら、そのときこそ、女性美の真の価値（意義）も生れてくるのではないだろうか——。

34 神秘ということ

神秘的——よく利用される言葉であり、私の好きなものの一つである。

「靈妙不可思議な秘密・理論、認識を超越したことがら」

神秘——を簡単に語訳すると、こういう意味になるらしい。神聖・神靈・神妙・神変・などの熟語も、おおむね、これに準ずるものようであるが、神秘という文字の奥深さには及ぶべくもない。

△神△という字句からして「靈妙」を意味するの、更に「秘」という文字がつく。

微妙な作用があり、人智では測り知ることの不可能な事象——なのだろう。

また△神秘主義△という哲学用語もある。

「人智を超越した事物の真相は、瞑想探求して、神秘にふれて始めて会得出来る」という説のことらしい。

何れにしても、われわれを取巻く四囲……森羅万象ことごとく、その中に△神秘的△と称されるものが多かった。

ところが、人智の異常な発達にともなって周囲の事物、現象から、次第に神秘のヴェールは剥がされていくとしている。

その、もっともいい例が△月△であろう。

古くから、月は自然界の摩訶不思議な諸現象とともに、神秘性の代表のように、言い伝えられてきたものであるが、暗い夜空にポツカリと浮かぶその姿は、仰ぎ見ても確かに美しく、言い尽せぬある種の感動や感銘が、微妙に、人の心に作用したものと推察できる。

『マンマンチャン・アン！』

『お月さん、いくつ。十三、ななつ——』

『月の砂漠を、はるばると——』

『雨降りお月さん、雲のなか——』

すすき野原の尾花の影で、大きな満月に照らされながら、狸の親子が居並んで楽しそうに腹鼓の囃を奏でている。キレイな黄色で描かれた、真ン丸な月の中には、白い兎がキネを手にして向かい合い、面白そうに餅搗きをする。

していた——。

いかにもロマンチックで、絵画的な幻想の一駒である。

私などの子供のころは、お月さんは一つの夢的な存在だったものだが、同じ歌を口ずさび、同じ絵を見ても、現代の子供は、全然異った感覚で接しているものと推測できる。

肉眼で見たような鮮明な月面写真が展示される昨今なので、これも無理のないこと。少なくとも、兎の餅搗きなど、その信憑性以前に、全く、絵にもならないのではないかと思うことさえある。

これと同じような事態が、人間に対しても及びつつあるようだ。

近代医学の発展はめざましく、脳の働きや、感情の移行まで探知することもでき、さらに、究極的に解明しようと日夜努力研究が重ねられている。

当然のように、人体……肉体の神秘性も剥奪されつつあり、謎的であった部分も次々と明るみに出てくる。

人類の発展向上という意味で、必要欠くべからざる事柄なのに、神秘性の失われていくという現実には、ふと、寂しさを覚えることもある。

だが一方、こと人間に関する限りは、いかに構成上の組織を知り得たとしても、それだけで、生きた人間を解明したとはいいい難い、とも思う。

人間の肉体には、学問で解きほぐすことのできない独特の心機……情操と感覚が、常に、附随していて、人の心……感情の綾は、それによって成り立っている、といえそうだから——。

そして、このあたりにこそ、尽きることのない八人間の神秘性Vも存在する、といえるのではないだろうか。

アブ的マニアは、概してロマンチストだといえる。

自由と空想と、自然感情を何よりも愛し、あるいは、愛そうと努力している。

ロマンはまた、人間の心でもある。

そういう人間にとって、人間（異性）が神秘的であれかしと希うのも極く自然な理（ことわり）だといえる。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

先頃私は、誠に得難い貴重な体験をした。今日まで、空想以外に知り得なかった“未知”の部分に遭遇したのである。

それは“神秘的”というより他、表現しよ

うのない“もの”部分”であった。

私は、かつて知らぬほどの深い感銘を受けたようである。

今更らしく、仰々しくも“神秘性”などを取上げて一文にしたのも、その影響だといえそう。そして、既に旬日を経たいまもなお、それが“なに”であったのか、いまだにわからないのである。とに角、“神秘”というより意外、何ともいいようがない。

このような思わせぶりの発言は、まどろっこしいと叱られそうだが、人間……人と人との関係に於ては、必然的に神秘は肉体につながる。そして、その肉体に感情が綾目と入り込んで、新しいものが醸酵してくる。

その果てに、真新しい別種の“神秘性”が産れてくるものようである。

そのためにかえって、神秘そのものについては、綴ることが出来なくなってしまうが人間性のなかには、尽きることのない“神秘性”が確在する、ということを知り、その事実だけで満足しているのである。

× × × × ×

× × × × ×

牝 犬 の 館^{やかた}

奇妙な世界の物語

夜 乃 探 郎

X銀行の支店長、川本剛三は広く愛犬家として知られていた。彼の邸^{かれやしき}の一隅には血統正しい内外の犬が多数飼育されており、居間には『畜犬品評会』に出場させた際の賞状が麗々しくかざられていた。犬マニアの専門雑誌には八犬と川本剛三氏Vとかいう「愛犬家訪問シリーズ」などグラビヤに登場する事は珍しくなかった。このように犬と人生を趣味として過^すした陰には若くして妻に死なれ、独身^{やもめ}暮しを続けてきた事も原因だったようだ。

停年で退職してからは財産を処分し、都心から離れた閑静な別荘地帯の林にかこまれた丘に赤レンガ造りの家を設け隠棲した。もと

もと川本剛三は一風変わった性格を持って居り人間より犬の方が興味あるという方だったが、金が相手という仕事にはかえってその変屈振りはプラスされた。知人は多少はあったが、職業を離れてからは没社会的なまったく佗^たしい日常生活にとけこんだ。

夕陽が西の空に静かに、その姿を没しはじめた。川本剛三の孤影は曲がりくねった坂道にいつそう淋しく点描された。秋風が剛三の空虚な魂をおびやかすように吹き過ぎ去って行く。小犬が後から尾を振りながらついてくる。とつぜん、犬が小さくうなると草むらの

中に走っていった。そこで剛三が目撃したのは、よく花を売りに別荘地帯に姿を現わす田舎娘が激しい水音をさせて排泄している状景だった。

初老に近い彼にとって、それは強い刺激を与えた。帰途、剛三の内部にはいま迄には感じられもしなかった異常な血が燃え上っているのを意識した。それは異性が欲しいという肉体的な意味でなく、女をどこまで動物化する事が出来るかという情熱だった。数十年來の畜犬研究は遂に八人間飼育Vという悪魔的な夢を剛三にもたらししたのである。

——ベッドに入ってから剛三は恐しい冒瀆的な考え方を幾度か消そうと苦悩した。だが、後から後から、裸にされた少女が片足を上げて放水している姿体やむきだされた二つの半球が空に向って突出され、その尻をムチ打つ度にキャン、キャンと悲鳴をあげる様相が原色絵のようにあざやかに浮出されてきて、剛三を妖しい世界にめり込ませた。

「ああ、何ということだ！」

彼はつぶやいた。そのくせ、身体中が熱く、胸の動悸が激しくなるのを、おさえようもなかった。

翌朝、寝汗と青くさい体臭がただよう床から起きた剛三は、小間使いの雪江を大声でよんだ。戦災孤児であった彼女を拾いあげ、犬の番と剛三の身の廻りをさせるため育て上げ、いまは十八になっていた。

「お眼ざめでございましたか」

匂うばかりの若さにあふれた美少女が、白いエプロン姿で部屋に入ってきた。

剛三はわざと、気むづかしい表情で言った。

「半年分の給金を上げるから、いますぐ出て行ってもらいたいのだ」

雪江はおどろきのため「あっ」と声をもら

すなり棒立ちになった。

剛三の計画通り、身よりのない雪江は精一杯の誠意を表にあらわして、とどまる事を嘆願した。

やがて剛三は、一つの条件を雪江に持出した。

「お前が私の話を承知したら、すぐ手続きをし、いずれはこの家も私が死んだら遺産も与えたい。どうだろう、お前はこれから牝犬として私に飼育されてみないか」

そう言うなり剛三は煙草に火を付け静かに少女の出方をまつた。

雪江は頬を真っ赤にさせてうつむいた。

——その彼女の気持の奥底には微妙な思いが点滅していた。ろくに雪江に話かけようともせず、ただ犬を愛玩し年月を過してきた旦那様の生活。そこにあつては少女の存在など、その趣味を助ける雑用の外、何物でもなかった。ひとりぼっちの雪江はだれかにすがりつきたい甘えたいそんな人間がほしかった。犬中心の邸にあっては、そのような望みも無に等しかった。旦那様に愛撫される犬を見る時、ハわたしは犬になりたいVと願ひ、その度に頬を赤らめた事もあった。……それが秘められた心象的な風景だからこそ甘くせつないも

のが流れたのだ。

——いま、そのような事柄が、思いがけずはつきり形になって旦那様から言葉に出されたとき、うれしいと言うよりは羞恥で雪江は一杯になった。

少女の、かくされた気持など判らない剛三は、

「駄目かね」とポツンといった。

長いまつげをふるわせ、雪江は「私に出来ることなら……」と、おずおずと答えた。

剛三は満面によろこびをたたえ、「そうかそうか」と幾度もうなづいた。

「少しでも、それが旦那様のお淋しい生活にお役に立つので御座居ましたら……わたし嬉しいんです」

いっそう羞かしそうに雪江は顔を伏せた。

「いま迄通り雑用もやってもらわなければならないから、調練は夜だけにしようね」

剛三は高ぶる気持をおさえて雪江を去らせた。洋間にかざられてある種々さまざまの犬の写真が、すべて剛三には雪江の姿体とかさなつてはてしのない空想に走らせた。

夜がやってきて、月の光がしたたと半開

きの窓からしのびより、たたみを青く濡らし
た。旦那様の入浴の準備をすました雪江は与
えられた自室で一息ついた。△今晚からわた
しは犬になるのだわ▽

胸の鼓動が激しくなり、ピンク色のセー
ーが忙しく波打った。あれほど望んだことだ
が、いざとなると言葉に出すだけで全身が熱
くなった。それはまた甘美な倒錯した陶醉が
秘められていたのだ。△旦那様のムチが鳴る
と愛犬が、「ウウッ」と吠えてチンチンした
けど、わたしもあのように訓練されるのだ▽
いつの頃からおぼえたのか、美しい少女はあ
れこれ夢想し、ひとりあそんだ。……顔に
血がのぼり、花片のような唇が、かすかに開
かれ……萌え出たくさむらの溝は、しっとり
と濡れた。

曲芸馬の調教師であった知人から贈られ
た、ムチの先に鉛の小さな玉を編み込んだ物
を、剛三は灯にかざし入念に保革油をこすり
つけていた。このムチだと振り上げる回数
は少くとも充分な効果がある事を知っていたの
だ。いまそれが役立つことに、剛三の気持は
いやが上にも興奮していた。

△馬などにはよいが、犬にはどうかね▽と言

いながらも差出したAの顔が懐しく思い出さ
れてきた。△ところで雪江の愛称をなんと付
けるかな。あいつは肌が白いから『シロ』と
よぶか。シロ、シロ——こいつはよい▽

剛三はひとり笑った。それは久方振りに見
せる笑顔だった。あの田舎娘が大きな尻を突
出して歩くさまから、剛三は一匹の巨大な牝
犬を連想した。どうして、そう意識されたか
夢中であつたが、とにかく奔流状態が、動物
的な姿体を感じさせ、生ぐさい臭いをはなつ
た事のすべてが、そう幻覚させたのかも知れ
なかった。

戸がノックされた。

ぼうーっと顔を上気させて雪江が入ってき
た。「あの旦那様、お風呂の用意が」

——いつもなら、「すぐ入るよ」と立上る剛
三だったが、腰掛けたまま少女のふくらんだ
胸やスカートより出ているすんなりした足の
あたりを眺め

「いまからお前の名はシロとよぶ。いいね」
と言った。

雪江はかすかにうなづきうつむいた。

剛三は急に恐い顔となり

「シロノ はだかになるのだ」と命令した。

「ああ、旦那様」

雪江は身をちぢめ、盛上るセーターのむね
のあたりを両手でかくそうとした。

「お前は承知した筈だ。犬は飼主には絶対服
従するのだ」

剛三はムチを取り上げむねに腿に打ち落し
た。めす犬は身をよじらせ、ふせごうとした
が、ムチは正確にそのほっする場所に鋭い音
を響かせた。香ばしいめすの体臭が剛三をい
っそう刺激させた。

「旦那様、あつ旦那様、取ります。やめて下
さい！」

雪江は息もたえだえにさげんだ。……エプ
ロンをはずしスカートに手をかけた。雪江は
手をこきざみにふるわせブラウスをぬぎ、下
穿を取り生れたままの姿となって、旦那様の
前に頭をさげ「もうムチだけはかんにんして
下さい」と願った。剛三は荒い息を吐きなが
ら「後をむき四つばいになれ」と言った。

めす犬の足下にぬぎすてられた薄地のナイ
ロンパンティを剛三は手に取った。剛三は、
それを雪江のはな先に突つけ「さあ、くわえ
るのだ」といった。雪江は先刻の事を思い出
し全身を真っ赤にさせ汗を流した。

「こん度はきれいにからだを洗って上げる」

剛三は言葉をやわらげ、うながした。

めす犬は、若い体臭をむんむんさせ秋の夜だというのに、この部屋だけは熱っぽい空気がみなぎり、剛三のにぎりしめた手も汗ばんで気持の悪いほどであった。

雪江はすなおにパンティを口にくわえ立上り、ブラウスをつかんだ。

「シロは、はだかで四つばいのまま、あるくのだ」

剛三は、めす犬にすばやく準備していた首輪を取り上げはめた。くさりをひっぱり

「早く動け！」と叱った。

「もう、旦那様」と雪江は熱い息をもらした。その声音にはいつのまにか被虐のよろこびが……それに気付くと少女はサッと髪の付根まで紅くした。

タイル張の浴槽には、こぼれるほどに湯があふれていた。

「ゆっくり風呂に入りなさい」

剛三はクサリをはなした。雪江は首輪をしたらまま、クサリを引きずり身体を湯にしずめた。

「めす犬は飼い主に、からだのすべてを洗ってもらうのだ」

剛三は言った。めす犬は「でも……」とはず

かし気に下をむいた。

「またムチがほしいのか」

剛三は少し言葉を強めた。

……新鮮な香りをはなつ顔、腕、乳房、尻などあらゆる部分を剛三は時間をかけたつぷり石けんをこすりつけてスポンジで洗った。かたくとがった乳首やワキの下などに剛三の油切った手がふれる度にめす犬は「くくッ」と声をもらし身をよじった。

「さあ、すっかりきれいになったよ」

剛三は満足そうに声をかけた。旦那様の命令通り、仰むけになったり、うつぶせになり、大きくまたを開いたりしていた雪江は、しずくをたらしながらのろろと立上った。「もう一度、風呂に入る前に、今度は私を洗ってもらうかね」

剛三は長々と洗い場にねそべった。初老といっても剛三の身体は、毎朝、何年もかかず犬を連れての散歩をしたおかげで、そうおとろえてはいなかった。むね毛などはまだ黒く密集していた。雪江はなるべくからだを見ないようにして細い指先をふるわせ、やさしく洗いはじめた。

「その所は犬らしく舌でやってもらうかね」

剛三は息をあらくし言い付けた。めす犬

は「それだけは……ああ、旦那様」といっそう顔を染めた。

「ムチだぞ」

剛三は声を高くした。

……花のような口唇を、雪江はおそろおそろ近づけた。

「よい月だな」

剛三は庭に出て、はてった肌を風にまかせながらつぶやいた。はだかのまま雪江は剛三の足下にうずくまっていた。それは飼い主に首輪をひっぱりられている牝犬そっくりだった。いや、もう少女はめす犬として飼育されているドレイに過ぎないのだ。めす犬は身体をこきざみにふるわせ、迫りくる生理をおさえようと歯をくいしばった。クサリがかすかに音を立てた。

「どうした」

剛三は声をかけた。

「あの……」

めす犬は、それだけやっと言葉に出すと後は続けることができなかった。

「早く言いなさい。もうしばらくここに居たいのだから」

と剛三はいった。

「あの、おトイレに」

めす犬はどうしようもない下腹の痛みにたまりかねて、やっと言葉に出した。

「はだか表に出たから冷えたのだろう。かまわないから、ここでやりなさい。犬はどこでやってもよいのだ」

剛三は、あの曲りくねった道で白昼、目撃

した田舎娘の放水状景を生々しく思い出していた。

「さあ、早くやるのだ」

クサリを強くひっぱった。その刺激でめす犬は「あッ」と言葉を発するなり、ヒュウツとはげしい音をさせ、生あったかい液体をとばした。

「しゃがみこんでは駄目だ。四つばいになって、右足を上げるのだ。お前は犬だということを忘れたか」

剛三はすべすべしためす犬の肌に手をかけ無理にも、その姿勢にさせようとした。

……終ったとき、雪江は尻を恥しさのため紅くして、その場にくずれた。

〔最近撮影新趣向分譲品〕

極鮮明印画紙焼付写真

逞ましき腎責め

大手札三枚一組 三〇〇円

美木乃々子 略号(ぬい)

柔軟二つ折緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円

美木乃々子 略号(ぬに)

猿ぐつわ全裸縛り

大手札五枚一組 五〇〇円

美木乃々子 略号(ぬへ)

真紅腹巻着用縛り

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号(ぬち)

柱縛り宙吊り晒し

大手札二枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(つめ)

柱縛り全裸腎晒し

大手札五枚一組 五〇〇円

大塚 啓子 略号(つま)

柱正面縛り折檻

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(つも)

座禅縛り足吊り揚げ

大手札二枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さは)

柱抱擁全身厳重縛り

大手札二枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さけ)

足挙げ全一正面縛り

大手札二枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さこ)

柱縛り臀部晒し

大手札三枚一組 三〇〇円

東浦ひかる 略号(さく)

柱縛り正面晒し

大手札三枚一組 三〇〇円

鼻腔煙草挿し責め

大手札三枚一組 四〇〇円

美木乃々子 略号(ぬと)

鼻責めのアップ

大手札五枚一組 六〇〇円

美木乃々子 略号(ぬは)

強烈縛り美貌翻弄

大手札八枚一組 八〇〇円

美木乃々子 略号(ぬほ)

開股高手小手逆吊り

大手札二枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号(つほ)

高手小手逆吊り正面

大手札二枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号(つふ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 五〇〇円

美木乃々子 略号(ぬる)

施される浣腸の義味

大手札五枚一組 五〇〇円

美木乃々子 略号(ぬか)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(ると)

縄に悶える裸身

大手札三枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号(さひ)

全裸股間縛り

大手札三枚一組 三〇〇円

木村 洋子 略号(さふ)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 三〇〇円

大塚 啓子 略号(るち)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 四〇〇円

大塚 啓子 略号(るて)

相撲着用裸女艶姿

大手札十二枚一組 一〇〇〇円

美木乃々子 略号(ぬわ)

六尺着用裸女艶姿

大手札七枚一組 七〇〇円

美木乃々子 略号(ぬお)

本誌二〇〇号突破記念原稿

アリアドネ

黒淵 嬰 一

ビブリオテーカー さいへんせい
／＼希臘神話の再編成／＼

ティフォン

精鋭を誇ったクレテ海上帝国の無敵艦隊が何故一日で潰え去ったか。

一千年の伝統を保ち、富裕を極めたクレテ王国が野蛮なギリシャ人の為に如何にして滅亡したか。

エウクシノミアとモルパディアは、その状況を交々アリアドネに語り聞かせた。概略次の如き物語である。

此の事件は西紀紀元前一四九五年七月。即ちアリアドネやモーセがハビル人と共にエジプトを出ようとしていた頃に起った。

クレテ海上帝国は総力を傾注してアッティ

カを圧伏せんとしていた。渡洋進攻した兵力は三層機漕戦艦二百隻、運送船五百隻、小舟や快速艇等約百隻、戦闘員四千を含み総人員は十万に及んだ。その主力はミノス五十三世グラウコスの直率下に在ってサラミス湾からファレロン湾一帯に停泊し、別働隊は王弟デウカリオンに指揮されてマラトン附近に進攻し、アッティカ半島を南北から挟撃する態勢にあった。数百の連櫓は海上に森林を生じ、ピレウスの沖一帯は陸地と化して、神話に言うポセイダンの竜宮城が海底より湧き上ったかと疑われる程だった。テセウスはアケーヤの青年達を励して抗戦に努めたが、クレテ軍の科学兵器と合理的戦術の前には蛮勇も奮う由なく、チャリオットに依って平野から掃蕩

され、アクロポリスの丘に籠ったものの弩砲や擲射器に撃たれて損害続出し、興ったばかりのアテネは萌芽の内に摘み取られ、後年の隆盛を見る事なく滅亡するものと思われた。テーベ、アルゴス、ミケネ、スパルタ等の諸王はクレテ王国の勢威に恐れて来援せず、テセウスのアテネだけが孤立していた。艦船の鳴らす金鼓喇叭はヘリコン山から芸術女神丘一帯を震撼させた。

大彗星が地球を擦過したのは正に此の時である。希臘神話の伝える怪物ティフォンの襲来は天体現象を思わせるものがあり、且つ諸国民の神話と多くの類似点を持っている。

アポロドロスに依れば、ティフォンはギガンテス（巨人）が亡びた後、同じ母の大地が

ら生れた。上半身は男、下半身は大蛇で、一方の手は東天に在り、他方の手は西空に及んだ。肩からは竜の頭が百箇生え、紅舌を閃かせて凄じい音を発した。ティフォンが疾駆すると旋風が捲き起り、山は持ち上げられ、峯からは血（熔岩か）が噴き出した。血漿山ヘムスの名は此の時から附けられた。大神ゼウスは有翼馬に牽かせた戦車を駆ってティフォンを追ひ雷電を放って打ち、金剛石の鎌で斬った。ティフォンはカシウス山で傷つき、シチリヤで寸断されてエトナ山の下に埋められた。カシウス山は「十戒」で有名なシナイ山の別名である。ティフォンの血は全世界を赤く染めエトナ山は時に死にきれないティフォンの吐息を噴き上げて熔岩を流している。

此の物語中、相当多くの要素が旧約聖書や其他の神話に共通している。怪天体の彗星状の尾は首の部分を地球に通過された為に引き千切られた。頭部は固有の運動を続けて遠い宇宙空間に去り、尾部は地球の引力圏内に留った。それは「煙の柱」の如く、亦「大地を一巻きする程なミッドガルド蛇」にも見えただ。地球引力の干渉で一本の軸だったものが次第に分裂し、八頭八尾の「八肢大蛇」に変化し、九頭のヒュドラから百蛇のティフォン

に迄成長した。そして遂には寸断され、稀薄な雲状物質となり、大氣に混じて地表に降下した。その一部は隕石となって落ちた場所に竜蛇が埋められた伝説を留め、酸化鉄を含む赤色可溶性色素は世界を血の色に染めた。善神が大蛇を斬り、その血が世界を赤く変え、大蛇の尾部から墜ちた石又は金属が神聖な遺物となった伝説は、ヴェリコフスキーの説に依ると「斯かる主題を神話中に持たない民族を求めのに困る」程沢山ある。

ティフォンは嵐の擬人化でもある。これはタイフォン颱風と同音同義である。暴風はTyphoonと唸りながら全世界を吹き荒れた。

暴風、電光、世界的な津浪が、エジプトの世界最強陸軍を紅海に亡し、クレテの無敵艦隊をエーゲ海に破壊した。堅固な戦艦も巨大な輸送船も、陶器の如くに粉碎され、アッテイカ沿岸からイストモス地峡一帯に残骸を曝して潰滅した。将兵や虜囚奴隷の水死体はサラミス湾を埋め、陸上に在って溺没を免れたクレテ人は孤立状態でアケーヤ蛮族の反撃を受け、殺戮されたり捕えられたりした。テセウスは思い設けぬ勝利に狂喜した。十九才の蛮王は一躍全ギリシャの救世主的英雄となった。此の戦役は新興アテネ独力で戦われたも

のであり、アッテイカ壮丁の損耗は莫大だったが、難破した艦船や漂着した装備はすべてテセウスとその部衆の所有に帰した。クレテ製の甲冑刀剣、馬匹車輛其他莫大な青銅武器がテセウス等の手に入った。テセウスの名望を慕って全ギリシャから青年達が集り、新興アテネはギリシャの大勢力に成長した。

希臘神話はクレテ王ミノスがダイダロスを追ってアテネに渡ろうとし、暴風に遭ってシチリヤ島に吹き流され、其の地で謀殺された次第を伝えている。筆者は此のミノス王を第五十三世グラウコスと仮定したが、何れにしてもクレテ王が海外で異常な状況下に死んだ事が暗示されているようだ。

王弟デウカリオンの乗艦は、エウボエア島の蔭に在って難破を免れた。彼と共に遠征軍の僅少な生存者が帰って来た。希臘神話の伝えるデウカリオン洪水は此の転訛かも知れない。希臘神話は巨人プロメテウスの子デウカリオンが、世界的洪水に際し方船に乗って妻と二人だけ生き残った次第を語るが、筆者はミノス大王の子デウカリオンがこれと同一人物であると推定する。希臘神話中デウカリオンの名を持つ人物は此の二人だけである。「悲しい事実を報らせなければならぬ。グラ

ウコス殿は亡くなられた。海軍も船隊も失われた。青年達は永久に戻って来ない。海上の王者クレテ王国が没落する時が来たのだ。三神は我等を見離されたに違いない」

辛くも生還したデウカリオンは立ち上る気力もなく、悄然と砂浜に坐り込んだ。

「貴方はグラウコス殿亡き今、クレテ王ミノス五十四世を名乗るべき大切な身です。艦隊を失った位で国王の義務を忘れてはなりません。クレテ王国は厳存しています。次の時代に海軍を構成する子供達も残っています。国内の治安はわたし達女が固めています。必ず新しい艦隊を作って差し上げましょう」

クレテ王国の首相たるアンティオペーは努めて平静を装った。メラニッペーやエウクシノミアやデクシテア等の女性は何れもアンティオペーの態度を見習い、デウカリオンの帰還を威儀を正して迎えた。凱旋を歓迎する慣例通りの態度だった。

併しアンティオペーの心情は外見と異り、千々に乱れていた。彼女自身は国王である夫を失って寡婦となった。クレテ王国は物的、人的な大被害を受けていた。

港に立って眺めると、

高さ四百キュービットの大灯台は海中に倒

壊して港口を閉塞している。沿岸用小舟艇や荷船は浜に打ち上げられて散乱し、未だ葬られない死屍が岸近く漂っている。

堅固なラビリンス大宮殿は地震の害を免れたが、クノス市は火災で半ば潰滅した。造船所の被害は全滅に近かった。技師、熟練工は設備資材と共に津浪で押し流され、レバノン杉の山林は焼失した。艦隊船団の再建は陸上施設や人の教育から始めなければならなかった。

人の喪失は一層決定的だった。クレテ王国を形成する自由民十万の内四万が天災の中で死んだ。それは青年及び壮丁の殆んど全部を含んでいた。将兵、航海経験者、貴族男性は悉く海底の藻屑と消えた。残った者は女と幼児と老人ばかりだった。

歴史の教える処では、大海軍が一度亡びるとその再建は困難である。(陸軍の再建は比較的容易である。)海軍は艦船の整備、維持並に人員の熟練等、長年月の基礎工事が必要である。スペインの無敵艦隊や帝政ロシアの太平洋艦隊、ドイツ帝国高海艦隊。日本聯合艦隊等、すべてその例である。

クレテ王国は一千年に亘り地中海の制海権を掌握していたから、国防の一大危機に際し

て海岸に要塞無く、都市に城壁無く、国内に軍隊すら無かった。個人としては勇敢練武なるも集団訓練を欠く婦人警官三千を擁するのみである。デウカリオンがミノス五十四世を号して王位に即いたが、彼には指揮すべき艦船も軍隊も無く、権限内の任務はオケワヌス(海神)の祭祠だけだった。ラビリンス(迷宮)の主人であり、王国の首相でもあるアンティオペーが巍然たる態度を堅持して王国の再建を命じなかったら、クレテ王国は内部から崩壊していたに違いない。

クレテ王国が保ち耐えたのは、全国的女性達が団結して働いたからだった。予備役の婦人警官は招集に応じて国内治安と海岸警備の任に就きメラニッペーがその指揮を執った。ラビリンス宮殿の修理は後廻しにして、道路とチャリオットの整備が急がれた。自由民の女性や子供も奴隷に交って労役した。新しい造船所の敷地がフェイストスに物色され、僅かに残った艦船は沿海哨戒と乗員訓練に使用された。併し自由民の壮丁は補充に数年を要し、力量ある焼漕奴隷も少く、当面の乗員は女性士官や少年水夫、女奴隷等で充足しなければならなかった。

ローマの博物学者プリニの記す処に依れば

「世界年二四五三年（紀元前一四九五年）に火の玉状をした彗星が現れ、当時のエジプト王ティフォンの名が冠せられた。同じ頃へブライ人はモーセに率いられて約束の地に向っていた」のであり、ティフォン彗星の出現とモーセの出エジプトを同時代の事件として扱っている。

ヴァロは「オギゲス王の治世に於いて、金星の色、大きさ、形、運行経路に空前絶後の変化が現れた」と述べている。希臘神話は此の王の統治期間中に起ったオギゲス洪水を伝えているが、天体の異状と地表の変動は何か関係があるように思われる。ヴェリコフスキは旧約聖書第二十四章第七節にある「彼等の王はアゴグより高くなる」という句から、アゴグはオギゲスであり、オギゲスはモーセと同時代人であると推論している。

希臘神話は怪物パラスを殺した処女神アテナの武勲に就いて物語る。これはゼウスのティフォン討伐に酷似し、同一事件の登場者名だけを入れ替えたものと思われる。アテナの誕生は即ちアテネ市の興起であり、アテネの建設者テセウスも亦同時代の人物である。

ギリシャの野蛮人は造船や航海の術を知らない筈だった。併し津浪で坐礁したクレテ艦

船の中には小修理で使用し得るものが有った。溺没を免れた機漕奴隷の中には艦船運用法を幾らか心得ている者が居たし、テセウスは協力者として大技術者ダイダロスを持っていた。クレテ王国が富裕で無防禦なのを知っているテセウスは、全ギリシャに檣を飛ばせて冒険者を募った。

ギリシャは小さい国であり、英雄が現れて一事を提案すれば、瞬時にして全国に行き亘る。希臘神話のアルゴ船遠征やキタイロン猪狩を聯想すればよい。トロイ戦争の如きも斯かる例の大規模なものに過ぎない。テセウスが余りに若令だったから君主級の者は誰も来なかったが、青年は大事業を計るに足る程参集した。

希臘神話は、パロス島に於いてミノス王の息子四人がヘルクレスに殺された事を伝えている。ヘルクレスはテセウスの同時代人とされている。クレテ島を窺うギリシャ人は先ず前進根拠地パロス島を襲ったものである。ミノス五十二世ラダマンテュスの第三夫人パレイアとその息子達。若死した王太子アンドロゲオースの子供達が此の島を領していたが忽ちテセウス等に征伏され、クレテ人は殺戮されるか又は縛りあげられた。希臘神話はパ

レイアが生んだ息子四人の名をエウリュメド、クリュセース、ネーパリオ、ピロラオスと記している。七才から十二才迄の少年だったが何れも浜辺で首を斬られた。アンドロゲオースの子アルカイオスとステネロスは他のクレテ人と共にギリシャ本土に連れ去られた子供達を失って発狂したパレイアは縛られた俵エギナ附近の海中に飛び込んで見えなくなった。アッテイカに生れたパレイアは十五才の時に貢納としてクレテ島に送られ、ミノス五十二世ラダマンテュスの寵を得て王子四人を生み、二十四才にして寡婦となり、二十七才で子供達を殺され、故郷のアッテイカに捕虜として曳かれる途中で自ら姿を消した。

紀元前一四九四年秋。二十才のテセウスを首領とする数千のギリシャ青年は百余隻の船舶舟艇を連ねてクレテ島を襲撃した。クレテ島に対するギリシャ本土からの進攻は漁舟を以てしても可能であり、これを阻止し得るのは海軍力だけである。クレテ島は東西に長く上陸可能な湾や浜も多く、島内の全人口を動員しても総海岸線を防禦するには足りない。一旦敵の上陸を許すと、山の多い地型は防禦兵力の集中を妨げるから、勇敢有為な進攻者は各個撃破の機会を掴み易い事になる。

一九四一年。ナチス・ドイツの山嶽兵団はカイーク船を連ねてクレテ進攻を試みた。イギリス地中海艦隊がこれを邀撃し、ドイツの精兵数千は空しく海中に溺没した。然るに二十世紀のクレテ島攻防戦は、結局イカロスの末裔が勝利を収め、海軍を持たないドイツ軍は空中から大兵団を降下させて此の島を奪取した。

紀元前十五世紀のクレテ島攻防戦は何のようなものだったか。

防禦側の総人員は、攻撃側と同等乃至幾分優勢だが島内各地に分散していた。高速車輛は道路以外で戦力たり得ず、防禦軍は愛国心と個人的武勇に優れていたが、組織的戦闘の訓練と経験を持たなかった。そして侵攻者は掠奪の希望と復讐の意気に燃えていた。此の条件は一九四一年と紀元前一四九四年に等しく適合する。

アティオペーは武装した女官達を従えてラビリンスの正門階段に立っていた。メラニッペーも八人の親衛隊も、大部分の婦人警官と共に港方面の防禦に向って大宮殿を守る人員は文官が僅かに残るばかりのようだ。

六軒ばかり離れた港は一面の猛火に包れていた。邸宅も倉庫も燃えている。テセウスの

率いるギリシヤ人は港から直路クノスを衝いた。市街の各所からも既に火の手が上りつつある。これはクレテ王国の国制と地理を熟知する者にして始めて可能な作戦だった。極度に中央集権であるクレテ王国にとってクノスは後退を許されない死守線に当る。其処は政治中枢であると共に三神の聖地でもあった。而してクレテ王国数千の婦人警官は奴隷数十万に対する治安と沿岸防禦の為に哨兵線式配置を余儀なくされていた。唯一の頼みは精巧な兵器だが、ギリシヤ人は既に捕獲した青銅製武具で完全武装し、その使用法にも習熟していた。

「カイラトス川の防禦線が破られました」
血に塗れて顔の見分けもつかなかったデクシテアが妹のエウクシノミアに肩を支えられて退って来た。

「御苦労でした。其方は暫く休みなさい。敵は間もなくラビリンスに寄せて来ましようが今度はわたしが代って戦います」

アンティオペーの語調は静かだった。既に今日ある事を予期していたのだろうか。

「敗けた。クレテ王国も今日が最後だ。余を双頭戦斧の室に移せ。ミノスの王位、海神の御神体と共に灰となろう」

満身創痍のミノス五十四世デウカリオンは青銅剣を杖に突き、王妃メラニッペーに抱かれるようにして神殿へと歩み去って行った。それを見送ったアンティオペーは、間近に迫った戦気を膚に感じながら、最後の冥想に耽っている。

「三十二年の生涯は、何と波瀾の多かった事か。テミスキラの女王ヒュッポリテーの娘に生れ、コルキウス随一の容姿と剣技を認められた二十年。これは自惚ではない。クレテ王国の王太子に嫁ぎ、内治最高の地位を得て十二年。それなのに結婚運に恵まれず、柔弱な男を夫とし、遂に子供を得ない俛寡婦となった。十二年間に素晴らしい男と会ったのは唯一度。そのテセウスが戻って来た。併し敵として来るのだ。テセウスとの間を遮るアリアドネもアカレーも居ないと言うのに剣が邪魔している。間もなくテセウスは此処に現れるだろう。愛しているのに剣を持って対面しなければならぬ。そして二人の何方かが殞れる運命を持っている」

海神殿からは火焰が噴き上げていた。最後のミノス王デウカリオンはオケワヌスの斧と共に焼けているに違いない。

同じ頃、アンティオペーの密命を受けたエ

ウクシノミアは、王子エウクサンティオスを連れ、地母神の御神体を奉持したモルパディアを伴って太陽神殿へ向っていた。

近代考古学の発掘に依り、クレテ海上帝国の没落は紀元前千五百年から千四百年の間と推定された。此の年代は遺物の比較に基づくエジプトからの類推及び放射性炭素の測定で算出された。線文字Aは突然使用されなくなり約二百年の空白期間の後で線文字Bが現れて来る。線文字Bはヴェントリスに依って解読され、ギリシヤ語である事が判明した。ギリシヤ人がクレテ島の新しい主人になった証拠である。支配者の交替は迅速に行われたらしく、ラビリンスは居住可能の状態で新しい住人に引き継がれている。

テセウスはラビリンスの正門階段に立って征伏したクノスス一帯を見廻した。其処は一時間前迄ラビリンスの主人アンティオペーが立っていた場所である。

テセウスはクレテ風の金銀透し彫を打った青銅製胸甲を着用し、大剣を帯びていた。併し此の剣は抜かなかったようだ。主として用いた武器は鋌を打った棍棒で、柄の部分迄赤黒い血が流れていた。幾つの頭蓋が此の武器で叩き割られた事か。

イーリアスはトロイを攻略したアケーヤ諸王の武勲を誇り高く歌っているが、考古学的に觀察する限りテセウスとアキレスを同格の英雄として論ずる事は出来ない。クレテ王国の滅亡は冒険者数千人の手で国民五十余万を擁する強国が絶滅された大事件であり、三百年後のトロイ戦争は全ギリシヤの人員と資源を傾注し、十年を費して人口二万位の小さな城市を亡した事業に過ぎない。テセウスに必敵する征伏を為し遂げた英雄は史上数える程しか居ないのだが、それにも拘らずトロイ戦争のみが有名になったのは軍中に伴われた優秀な報道機関、即ち従軍記者ホメロスの存在及び英雄詩を好んで傾聴する社会の誘因がテセウスには欠けていた為に他ならない。

ギリシヤ人達はラビリンス正門前の広場に掠奪品を山と積み上げていた。金銀器、青銅器、玉器、錫器、陶器、甲冑刀剣類、染料、亜麻織物、象牙細工、貝細工、香料、車輛、馬、鏡、葡萄酒等、何れもアケーヤの野蛮人にとって垂涎の財宝だった。

広場の一隅にはクレテ側の遺棄死体が並べられ、ギリシヤ人が武器甲冑や戦袍を剥いでいた。テセウスは会心の微笑を浮べながら戦者死の間を通過した。切り揃えた金髪が肩の

辺で揺れている。

「何処かで見た事のある顔だ。生きていた頃は美人だったろうが」

テセウスは女戦士の骸を蹴返しながら言った。甲冑は既に剥がれ、胸骨の上に止めを刺した致命傷が認められた。血は未だ凝固していない。四肢も硬直していなかった。勇敢に戦って死んだデクシテアだった。

戦死者の大部分は女性だった。時に男が居てもそれは少年か老人に限られた。武器を把って交戦した者自体が婦人や少年達で、壮丁や青年達は既にエーゲ海に沈んでいた。

戦利品集積所の隣には一層価値の高い戦果が並べてあった。クレテ人の捕虜達である。武器を持って戦った女戦士や少年少女達が、力尽きて捕えられ、後ろ手に縛られたり連縛されたりして引き据えられていた。

クレテの軍服は袖も裾も無い胴着である。兜と胸甲を剥奪された女戦士達は腕も脚も露出していた。その戦衣も亜麻製の高級品はギリシヤ人に脱がされ、よく抵抗した者の軍服は破れ裂けて身体を掩う襤褸布と化し、その下に血が滲んでいた。兜を被る為に鬚を解いた黒髪は乱れに乱れて顔や肩に降り掛っている。重傷を負った俘捕えられた者も多く、治

療されない傷口から鮮血が溢れていた。屈辱と苦痛に耐えずして縄目の尽絶命した女戦士もその姿で放置されていた。

「俺は勝った。遂にクレテ王国を亡し、俺に恥を与えた女共を此の手で縛りあげた。併し此の寂寥感は何うした事だ。俺は本当にクレテ王国を倒したかったのか。それとも只一人の女が欲しかったのか」

テセウスは誰にも聞こえないように呟きながら縛られている女達を見廻した。すると一人の少女が目についた。それは記憶の中にある顔と余りにも酷似していた。

「アリアドネではないか。会いたかったぞ」
テセウスは駆け寄った。蛮王の顔が急に歓喜に燃え出した。併し忽ち失望の色を浮べながら頭を左右に振った。美少女の縄を解こうとした手を止めた。

「いや、錯覚だ。此の顔は三年前のアリアドネの顔だ。アリアドネは俺と同年。今生きているなら二十才になっている筈だ。こんな小娘の尽でいるわけがない」

縛られている少女は恐怖の叫びをあげた。アケーヤ、ギリシャ語は解らないらしい。併しアリアドネという固有名詞だけが理解出来たのか、慄えながらもテセウスを上眼遣いに

見上げた。

「アリアドネはファイドラと呼ぶ同腹の妹が居ると言っていた。七才下だったか。すると今年十三才だな。よく似ている。三年前のアリアドネはよく覚えていたが、この通りの顔だった。もう少し年長で、幾らか身体も逞しかったような気がするが他はそっくりだ。アリアドネを忘れた事は一度もない。矢張り俺はアリアドネが欲しかったのかな」

テセウスの独り言の中でファイドラという発音が聞き分けられたものか、美少女は慄え上り、不自由な体を揺すり、足だけを使って後退した。十五才位の端麗な少年が隣に縛られていたが、急に立ち上ってファイドラの顔を塞いだ。その顔が又、驚く程アリアドネに似ていた。今年十六才のカトレウスだった。

テセウスは視線を移した。すると凄眼で征伐者を睨んでいる女丈夫と顔が合った。濡れたような黒髪の美人だった。縛られていながら、同様に両手の自由を奪われた一群の女戦士達に囲まれて主将然と控えている。

「デウカリオンの妻だな、覚えているぞ」

テセウスは近寄って、棍棒の尖でメラニッペーの顎を押し上げた。頑強に抵抗したと見えて、首筋から肩を経て脇の下を通り腰の辺

迄革紐が幾重にも往復し、荷造り然と締め上げている。両手は背後に高く吊られ、二十九才の逞しい半裸体が縄目の下で恥辱と怒りに震えていた。

突然テセウスとメラニッペーの間に割り込んだ者がある。群を抜いて雄偉な体軀の女戦士二人だった。肩と腿に傷を負い、血を流しながら背中合せに連縛されている。上半身は隙間もない程革紐で巻き締められ、陽焼けた肉塊が縄目の間から盛り上って見えた。不自由な姿勢で傷と疲労に喘ぎながらも呼吸を揃えて立ち上り、メラニッペーの危険と屈辱に代ろうとしたものの如くだった。親衛隊八人の中のペルーサとエイオネである。

「無理をするな。だが勇氣と忠誠心は認めてやろう。確か八人組だったな。五人は死体になっている。二人は捕虜にした。もう一人居た筈だ、牛跳びの上手なのが。逃げたかな」
幾重にも連縛され、地に倒れて起き上れずに居るペルーサとエイオネを見下しながらテセウスは更に歩を移した。

メラニッペーの向う側に、鎧下着だけの中年美人が倒れていた。意識はないらしい。甲冑と武器は奪われていたが軍服は脱がされていなかった。両手は背後に重ねて革紐で縛っ

てあったが拘束はそれだけで、首筋や胸廻りは縛られていなかった。どうやら特別の配慮が加えられているらしい。三十二才のアンテイオペーだった。

「姉上、無念です。クレテ王国の行政と治安を預るわたし達姉妹が共に蛮族の手に捕えられ、斯かる屈辱と桎梏に喘がなければならぬ」とは

メラニッペーは逼り寄ってラビリンスの女主人に呼び掛け、胸と肩で揺すったがアンテイオペーは醒めなかった。

「心配しなくてもよい。殺してはいないのだから。俺は手加減して死なない程度に打つ事が出来る。だが、そうしようと思って苦労したぞ。此の女は割合強かったからな。俺を名指しで挑戦して来た時には少しばかり驚いた。一種の自殺だ。でも俺は殺さなかった。

俺はクレテ王国とその国民全部に恨みがあるが、此の女に危害を加えようとは思わない。本来クレテ生れでない外国人だからだろう。三年前に来た時、俺に好意を見せてくれた者は、アリアドネを除けば此の女だけだった。その為だろうか」

テセウスは誰にともなく言った。アンテイオペーの美しい顔は失神当時の苦痛をその俚

留める如くに歪み、唇を噛み、単睨の眼を閉じ、長い黒髪は首に巻き附いている。

「三年前にアンテイオペーは俺に言った。強く逞しい女は嫌いかと。俺は黙っていた。だがどうやら答える時が来たようだな。三年前のアンテイオペーは王太子妃だったが余り地位は高くないみたいだった。今はクレテ王国の女王だ。女王としての尊敬を払って鄭重にアテネへ連れて行くぞ。俺は必ず仇を返すが受けた好意も忘れはしない。アンテイオペーには必ず返礼しよう。但し、俺の好む方法でな」

テセウスはアンテイオペーとメラニッペーの姉妹を見較べていたが、突然迸るような声をあげて哄笑した。だがその声には何処か悲しみの響きが混っているように聞えた。

× × ×

テセウスがアンテイオペーをアテネに連れ帰り、強制結婚した事は希臘神話中の圧巻を構成するし、その結婚から一男ヒュッポリトスが生れ、十余年の後、悲劇詩人に好題目を提供するようになるのは衆知の事実であるから筆者が詳述する必要はない。チョーサーもシェクスピアも好んでこれを主題に採用した作品を残している。但し希臘神話のアンテイ

オペーは時にヒッポリテと呼ばれ、或はメラニッペーと同一人物とされ、又はグラウケイと言われる事もある。何れもギリシヤ的な女名であり、本当のクレテ名は別にあるのかもしれない。兎に角テセウスとアンテイオペーの結婚は捕虜となったクレテ遺民の生命を保証する効果が有ったと認められる。そしてアンテイオペーは表面的な忍従と、内心の歓喜を以てテセウスに征伏されたと考えたい。

テセウスはクレテ島から掠奪するだけの物資と捕虜を持ち去ると後は抛棄した。後には無政府状態と荒廃が残された。アケーヤ系の移民とクレテ王国の元奴隷が野蛮の状態で全島に居住し、ラビリンスや道路網等の文化遺産を無秩序に継承利用した。要するに海運と中央政府を失ったクレテ島は甚だ価値の低いギリシヤの一地方に転落したのだ。

希臘神話はアンテイオペーの出身地をテミスキーラと記し、且つその前身をアマゾン族の女王と伝えている。活発で魅力的な美人というのが通説である。年令は不明だがテセウスと余り違っても困る。数年後にファイドラに地位を奪われるのだから矢張り三十才位だったのではあるまいか。且つ女であると同時に女王であるから、二十五才以下では權威を

欠くと思われる。筆者が三十二才と推定したのは前後の時代に合せたと共に以上のような効果の計算も入っている。

筆者はアンティオペーの出身地をクレテ島でなければならぬと確信しながら不学にしてそれを決定する文献を発見出来ずにいる。筆者の知る限りに於いて、アンティオペー又はヒュッポリターとクレテ島との関係を暗示する文献はシェクスピアの「夏の夜の夢」及び佐藤健児氏作「女闘美八景第七景」だけである。シェクスピアはおそらく未発見の古資料より題目を得たのであろう。「女闘美八景」の作者はプルタルコス「対比列伝」其他を参照したものと思うが明確にアンティオペーを「クレテ島より連れ帰り」と記述している。その慧眼に感嘆すると同時に、如何なる資料に基いてアンティオペーの出身地をクレテ島と断定したものか知りたいと思う。

「クレテ王国が亡びた後、貴女方は何うしたのですか。これだけでもせよ艦船と人数を集める事が出来たのは何故ですか」

エウクシノミアとモルパディアの語る悲痛な亡国譜を、アリアドネは涙を堪えながら聞いていた。

「クレテ王国の元植民地を廻っていたのです。ヒュペリオン神殿を再建するに足る青年を集めたかったのです」

大天災の後に生き残ったクレテ自由民は六万程も居たが、青年や壮丁は殆んど死に絶え女や老人や幼少者ばかりでしかなかった。テセウスの侵寇に際してその大部分も討たれたり捕えられたりした。そうでない者は五十万に近い奴隷の中に埋没し去った。生存者の大部分はアッティカで蛮人の妻や奴隷となり、エウクシノミアの手中には僅かな艦船と二千人程の女や少年が残るだけだった。彼女は太陽神の黄金円板と地母神の蛇連環を擁してシリヤ島に渡った。此の島のアシユナロス河流域地方にはクレテ王国の植民地が有り、ミノス五十二世ラダマンテュスの長女クセノデイケーが総督の息子に嫁いでいた。紀元前四九四年当時は本篇第三章に登場したアシユナロスが総督の地位に就き、妻との間に同ドクセノデイケーという名の娘があった。

「太陽神と海神の祭祠は王族の女でなければ出来ません。ミノス大王陛下の長女であるクセノデイケー様こそ適任者と考えたのです」

併しクセノデイケーは次女のアカレーや三女のアリアドネと似ない病身で気の弱い女性

だった。クレテ王国再興の重任に耐えられる心身の所有者ではなかった。

エウクシノミアがクレテ遺民を率いてシリヤ島南岸に上陸した時「神意に叶える選民の国スケリア(シチリヤ)」は荒廃の極に達していた。世界的暴風は此の楽園をも破壊し土着民は叛乱し、アシユナロス河は氾濫して全地の表面に水を拡げていた。

エウクシノミアは河の中洲に建てられた磔柱を見た。柱には女の幼児が縛られていた。アシユナロス夫婦の独り娘で母親と同名のクセノデイケーだった。理由を尋ねると蛇神テイフォンが現れる季節に当って捧げられる犠牲との事だった。エウクシノミアとモルパディアはクレテ遺民と共に河竜を退治し、クセノデイケーを救出した。河神は蛇に化け、牛に変化して抵抗したが遂に征伏され、金の牛角を折り取られた。

古代の神話学者は偶意を解説する。河竜の現れる季節とは増水期を意味する。蛇に化けたとは河の屈曲を象徴し、牛は水の咆哮を表し、折れた牛角は新水路の切断に当る。

エウクシノミアは氾濫の原因を究明した。河の上流を巨大な岩塊が閉塞し、その為水脈は分裂し、大規模な洪水が起っていた。此

の岩は天を掩ったティフォン彗星の尾部から落下した隕石だった。

エウクシノミアはクレテから持ち出した唯一の宝石を人命に代えた。鱗型の鋼玉髓を磨耗させて石脈を削り、青銅剣で碎片を掻き出した。巨岩に裂目を作ると中にタールを注入して焼いた。小山の如き岩は遂に割れ、人力

四人の個性のある美女の 縛られポーズの代表的作品集

限定版
写真集

豊満と清楚

頒価一部一〇〇〇円 略号「限二」

登場モデル 長野良子—大塚啓子
五月亜紀子—新井マリ子

グラビア印刷による女体緊縛写真ばかりのアルバムです。内容は若々しい豊満な肉体美を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に發揮した縛られポーズの大胆奔放な素晴らしい場面のかずかずを画面いっぱいに所狭ましと活躍させました。更に前記二嬢とは対照的に、清楚にして純情な初々しいフェイスと伸々とした若鹿のような肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子の痛々しいばかりの緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

を以て運搬し得る程度に分割された。河流は旧に復し、土地は元の豊饒を取り戻した。

隕石の核から未知の金属塊が採取された。

青銅よりも遥かに弾力のある物質で光沢があり、硬度も大きかった。ヒッタイト地方から産する貴金属の鉄に似て更に強靱だった。怖らく隕鉄の一種だったろう。隕鉄は酸素の稀薄な上空で熔解し、石質の中に不純物を除去され、ニッケルやクロム等の微量を含む事もある天然の特殊鋼である。エウクシノミアは此の金属から一口の剣を鍛造した。それは素晴らしい斬味を示した。

アシュナロスの領民は救済に歓喜した。青年男女多数が、クレテ王国再興の義軍に加った。幼児のクセノデイケーはミノス五十二世の遺児エウクサンティオスと同年だったが、未来の配偶者として差し出された。エウクシノミアは、艦船の整備と食糧の補給を行った後、東部地中海に向けて出航した。

クレテ遺民は海上漂泊民だった。艦船を修理し、水や穀物を補給する後背地が絶対に必要である。近代の空軍が数時間しか滞空出来ないのと同様に、二十世紀中葉迄は真の意味での海軍は存在しなかった。此の後背地はカーン沿岸に求められた。艦船を漕ぐ奴隷や

整備の労働者も入用だった。エウクシノミアは社会制度に対して旧式な思想しか持っていなかったから、クレテ王国の奴隷制をその俾再建しようと試みた。カーンで労働適令者を捕獲したのはその為だった。

「よく解りました。貴女達の苦勞に較べたらわたしの遍歴など物の数にも入りません。太陽神と地母神の祭祠は謹んで継承致します。でも此の非常時に際しては女王も兵卒も区別はありません。クレテ王国再興の為、一兵卒として挺身しましょう。戦争の指揮では貴女やモルパディアの方が先輩ですから」

アリアドネは黄金円板と蛇連環を拝礼して受け取り、更に言った。

「海神の双刃戦刃は失われました。併しクレテの神は三幅対で一体を成すもの。力の神が欠けてはなりません。併しその力は仁と愛の力でなければならぬと思います。シチリヤで万民の苦患を救って得られた剣を新しい海神の御神体に仰ぎましょう。ミノス王位の継承者エウクサンティオスが祭祠すべきです。カーンでモロク神に打ち勝った天来の神剣こそオケワヌスの象徴に相応わしいであります」

(未完)

— 奇クモデル嬢ファンタジー —

『百合子屠腹』

麒麟児

久

一、トイレの誘拐

百合子は、どうしてこんな場所に来てしまったのか、罪悪感にせめられた。

途中から観たつまらない映画が終って、場内が明るくなった。客席の前や横から男たちがじろじろ盗見する。真紅なオーバーコートも人目につくし、黒髪を短くセットした女が若い美人だと判ると、一層もの欲しそうな好奇の視線を送ってくる。

百合子は羞恥に首を縮めた。ういういしい少女のような横顔だった。目もとの涼しい長い睫毛だ。耳うらから首すじにかけて、ぬけ出るように色が白い。それがポーッと薄紅色

にそまっている。

そこはガード下の或る地下劇場だった。百合子の勤めているオフィスの途上にあるのだが、入口には『もだえる処女』『淫獣』『襲われる人妻』とか毒々しい煽情的な絵看板やポスターを貼って、エロダクションものを三本から四本立上映している。

いつもは見るのもけがらわしいと足早やに通り返るのだが、その日だけは別だった。ハイヒールが躓いた眼の直前に、異様なスチール写真を貼つけた看板があった。縛りつけられた女の写真が一面にピンで留めてある。黒髪を乱した女達は半裸に近い姿で、言語に絶した残虐な拷問に苦悶している。

百合子は、その陰惨な同性の被虐図に、眼を外らした。しかし身体中が縛られたようになって、黒いハイヒールの爪先はピンク映画館の前に釘づけになってしまふ。

見てはいけない……. と思っても、体の奥深くから、抗し難い不可思議な戦慄がわき上ってくる。劇しい羞恥を伴った異常な誘惑。百合子は軀が竦んで、路上に跪きそうになる。何か眼には見えないドス黒い手が、彼女の背中を入口に押しやるかのようなだった。

百合子は夢中で入場券を買々と地下室の階段を降りた。モギリ嬢の眼がまぶしかった。背中一面に、うしろめたい羞恥を感じながら彼女は駆け込むように階段を下りた。



まくり上げられた湯文字一枚の女体をへび

スクリーンは白い内腿をちらつかせた濃厚なシーンが大写しになっている。彼女は暗い席に坐った。暗闇になれた目で、そっと周囲を見まわすと、男の客ばかりである。彼女は再び、なるべく客の居ない坐席を選んで坐り直した。

看板で見た映画が『日本拷問刑罰史』と判ったのは、再び場内が暗くなってからである。

百合子は、こんな映画をよく映倫が許可したと思う。

が這い廻るかと思うと、身にまとうものは縄目だけの美女が三角木馬の稜角で責められる。へび責めの女囚は狂乱の顔をしてのたうちまわったが、木馬責めの裸女は諦観に打ちしおれた哀切な表情をして、足首から大きな石の重しを双つ吊り下げている。

それから石抱きや火あぶりとスチール写真通りの拷問刑罰場面が次々と上映された。

暗い客席は、男達ばかりではほぼ満員だ。そっと窺うと、彼等は息を詰めて画面を凝視している。年配の客が多い。画面にあらわな肌をさらした女優が登場すると、観客の緊張も熱の入りようも俄然違ってくるのが、手に取るように判る。自分の娘ほどに齡の違う、みずみずしい若い女体が裸に剥がれて、エロとグロに溢れた責め折檻に、シネスコの画面いっぱいのにたうち回るのだ。

百合子は何度も席を立とうと思った。男ばかりの暗い映画館で、こんな映画を見ている自分がつくづく羞しい、なさけないと思う。映画館の路上からずっと続いている罪悪感と自己嫌悪が増々激しくなり、吐き気をもよおしそうだ。

しかし何か麻薬のような、おそろしい力が百合子を坐席にがんじがらめにしてしまう。顔

を覆いたくなる気持とは逆に、瞳孔はいよいよ大きく開いて画面に吸いよせられるのだ。彼女は、自分が危険な状態に陥り始めたことに気付く。

視界いっぱいに拡がった白い女体と、ほとばしり出る悲鳴と呻き。倒錯した何らかの百合子は呪縛されていた。スクリーンの女囚に同情や憐憫の情を抱くより、抑え難い羨望を覚える。そんな自分を異常な厭らしいものと自覚し、その自己嫌悪の念さえ、一種の刺戟剤の働きをするのだ。

胸がきゅうと締めつけられ、握りしめた掌に汗がにじむ。頬が火照って、咽喉が渇く。息が弾んで、異常な何らかの心も肉体も反応したことを自覚しないわけにはいかない。

百合子はスクリーンを、振り返り見ながら、暗い通路をトイレへと急いだ。彼女は興奮したり、恐い想いをするとう尿意を覚える習性があったのである。

男性専用ともいえるこの狭い地下小劇場では、婦人用トイレなど利用者が殆んどないのである。申しわけ程度に一個しかない。それも鍵はサビ付いて、内側からドアを押えているより仕方がない。

スクリーンの阿鼻叫喚が、ここまでよく聴

える。一体どんな責め場面が展開されているのか。続きが早く観たい。百合子は気がせきたつ。眼の前で木馬責めの女囚や、石抱きの拷問場面がちらちらする。

婦人用トイレには人影は全くない。タイルも乾燥して白っぽく光り、長い間利用者がなかったことをしめしている。少々の悲鳴などはスクリーンの噪音にまぎれて観客には判らない。ドアには鍵もかからない。殿方トイレは離れて、場内の反対側にある。

とつぜん、トイレに靴音が響いた。

百合子はギクリと緊張した。本能的にドアの握りをつかんだ左手に力が籠る。しかしドアの下の際間から、赤いハイヒールの爪先が覗かれたときは安心した。お互にノックを交換し合って、その女客は順番を待っている様子である。

いきなり、おそろしい力でドアが引き開けられた。

百合子が「ああッ」と振り向きざまに、構えられた小型カメラのシャッターが鳴った。

彼女は羞恥のポーズに屈み込んでいる。

ドアを握っていた片手で顔を隠す暇もない裡に、カメラは無防備で動物的な姿勢をした被写体を狙ってシャッターを切り続けた。

百合子はあまりの羞恥と恐怖に咽喉が詰って、助けを呼ぶ声も出ない。「フッフ、そんな姿では、逃げ出すわけにもいくまい」

見上げたつぶらな瞳が恐怖と怨みに凍ついて、顔面は蒼ざめている。

服装は確かに女性であるが、真冬だというのに濃いサングラスをかけている。コートから覗いた毛深い臍。低い殺した声だが、確かにず太い男の声帯である。

助けを呼ぼうにも抵抗しようにも、こんな見苦しい姿では——女性のつまましい美德がさえぎる。生れて始めて醜態を人目にさらした劇差が一層、気持を顛倒させる。左手でやっと眼だけは蔽ったが、もう一方の手はウエストのあたりまでお臀をまくり上げている。立ち上ろうにも、どうすることもできない状態に、百合子は自分から束縛しているのだ。

男は、敏捷だが落着いた動作で、片手撮りしたカメラをポケットに納める。片手は侵入した時から、しっかりドアの把手を握り締めている。

「おとなしくするんだな。それより、すませるものを早くすましていいなよ。いま映画は素っ裸の女が海老責めでヒイヒイ責められているところよ。お客はみんな夢中になって見

物しているってことよ。助けを呼んだって誰も来やしねえぜ」

得体の知れない相手は冷静で、声に顫え一つ帯びていない。黒メガネの奥で眼球が鋭く光り、絶えずあたりの気配に神経をとがらせて、軀に隙きがない。足許にはふくらんだマジックバッグを置いている。

「あ、あなたは一体誰なんです。出ていってください」

やっとそれだけ言えたが、声はおどおどと動揺して、蚊の鳴くように小さい。

「さわぐんじゃねえ」

つつこんでいた片手が、ポケットの中でもぞもぞ動いた。

「キャッ、た、たすけて！」

ピストルか短刃でも取り出すのかと思って百合子は、せいっぱいの悲鳴をあげた。恐怖に臀部が縮こまって、身体中で便器の金隠しを抱くような恰好になる。

ポケットから出された白いハンカチが、百合子の鼻と口をふさいだ。

——あっ、麻酔剤だわ。

そう思った瞬間、百合子はクロロフォルムの刺すような臭気をぞんぶんに吸い込んでいた。いけない、誰か助けて、と叫ぼうとした

が、忽ち脳髓がしびれてしまう。もがこうと
したが生足感覚が失われていく。

三呼吸ほどでトイレの中は静かになった。

男は失心した百合子を抱え込んで身を伏せるようにしていたが、人の気配も足音もないのを確かめると、ハンカチを離した。白眼をむき出した彼女は、男の手から離れると、頭からゆっくり前にくずれ折れる。

「あーああ。このお嬢さん、後始末もしねえで気絶しなされたぜ」

百合子は、便器を抱いたポーズで気絶している。前のめりに屈み込んだ姿勢を、男の手が更に極端な前蹲みにして、前髪の乱れた額をタイルの床につけるようにする。

「綺麗なレディにこんな恰好をさせて、ちょっと可哀そうだが、こんなに酷くよごれていちゃ、しょうがねえ、しばらく辛抱しなよ」

トレイの中に巻紙のチリ紙はない。男はタイルに投げ出された百合子のハンドバッグを摘み上げて、中を覗き込んで、香水のしみた懐紙をとり出した。

男はもっそり立上った。脱いだオーバーを裏返すと、男物のコートに早替りしたし、両脚は膝頭の上までまくり上げたズボン一つである。マジックバッグからズボンと靴下を

取出して素早く身につける。パーマのかづらをとると短く刈り込んだ角刈りの頭があらわれる。赤いハイヒールも爪先の部分を取りつけただけで、脱せば黒皮の紳士靴になる。

それから数刻後、黒と赤のコートを着た一組のアベックが地下階段を登ってきた。モギリ嬢はずいぶん濃厚なアベックだと思っただけだった。若い女はぐったり男の胸に顔を埋めるように身をすり寄せ、眼は心地よげに閉じている。男の横顔は恋に夢中になってモギリ嬢など眼中にない様子である。ちょうどその時三、四人の観客がどやどやと入ってきて、モギリ嬢はもうそれ以上若いアベックのことなど気を付けて観察する暇がなかった。

——或る土曜日の夕方のことである。冬の空は暮れやすく、街には華やかなネオンが輝き始めている。雲まじりの北風が吹きさらして、街路の紙屑を這い回らせ、砂塵が舞う。人々はオーバーの衿を立てて、肩中を丸めてせかせか足早に立去っていく。若い美人を誘拐した平凡な型と色をした国産車が一台、大都会の雑踏にまぎれて、失踪したことなど誰も気付かなかった。

二、百合子嬢CM

百合子とは、いうまでもなく遠藤百合子嬢のことである。

ここまで書いて、彼女の熱烈なファンであるQ氏は、百合子嬢のグラビヤ写真に、うっとり見惚れている。

彼は分譲フォトを只今のところ一枚も所有していないので、グラビヤにのった四枚の写真しかない。布団の上で全裸に近いポーズをとらされた写真が二葉と、黒いパンティを腰の下までさげてヒップを露呈した側面ポーズが二葉——本誌読者なら誰でも知っている作品である。

その中の一枚に、布団の上の坐像がある。百合子嬢は猿轡をかまされて、乳房縛りにされている。身に纏うものは、後手縛りの太腕に残った長襦袢と、前を隠す程度に、腰に巻くというより右の太もものつけ根にわずかに挟んだという感じの布切一つである。この湯文字代りに着用されたプリント模様の布切一枚の使い方が、チラリズムの効果を發揮して、心憎いほど煽情的だ。全身ヌード以上に空想的な刺戟を与えられる。

Q氏はその写真をなめまわすように観賞、いや玩味していると言った方が適当かも知れない。五倍のルーペまで持ち出して、猿轡ス

レスレの位置にある耳を覗き込む。うむう、いい耳の恰好をしていると感嘆の声を発する。むき出しの丸い肩から足の爪先まで眺めまわす。その真剣な眼付は、まるで処女の肉体を吟味する奴隷商人のようだ。しかし耳孔以外は、いくらルーペで拡大してみても印刷のブツブツした粒が現れて、折角のむっちり引き締ったこまやかな肌理が、ザラザラした荒い感じになってしまっているので、肉眼で觀賞することにする。

Q氏には百合子嬢を冒瀆する気持は毛頭もない。ただQ氏はルーペを使うほど、若くてもみずみずしい百合子嬢の艶麗な靈氣に当てられただけである。

その魅力とは——、花なら八分咲きという蕾の新鮮さ。何んというか、女学生の感傷的な誘惑を、Q氏は感じてしまうのだ。

確かに百合子嬢の軀は申分なく発達している。乳房も形よく盛り上がって、同じ乳房責めで布団に転ろがされた別の写真を見ても、その豊かな量感、女体の成熟を感じさせる。尖っている乳首を眺めても、さぞかしその乳量をも含めて艶めかしい桃色にそまっていると想像される。わずかに薄物をまとった下腹も、なやましいふくよかな肉感の中に、贅肉

がなく生娘らしい感じがして、初々しいお色気を匂わせている。羞しげにキュウと締った可憐な小型の臍窩。しどけなく、くの字型に投げ出された太腿、ふくらはぎからまるこい膝頭に爪先と、脚線美を眺めても、すべつく張り切っている。

軀のどの部分を眺めてもすべて魅惑的だ。何よりも若いという魅力がある。全体にふくら肉が張って、しかもなめらかに引き締ったみずみずしい肉感が、たまらなく男の心を挑発する。

それに顔の表情が、いかにもあどけなく可愛らしい。美少女の倅が残っている。Q氏の所有する写真では、百合子嬢は全部眼を瞑っている。カメラを正視することが羞しい、こわくて耐らないという痛々しい印象だ。固くなって伏せた顔。睨からは天然の長い睫毛がのぞいて、眼もとを涼しく可憐にしている。パッチリ開けば、きつとつぶらな美しい瞳であろうが、これは想像するしかない。いや、清純、明眸可憐——きつと、そうだとQ氏は想い信じている。

その困惑した処女の含羞の表情と、発刺とした水々しい肉体美に、Q氏はなぜか女学生のイメージを抱いてしまうのだ。

誌上で、丸いすべすべした肩に申しわけ程度にまとった長襦袢の代りに、濃紺に白線入りのセーラー服を着せてみたくてしかたがないのだ。

読者諸君はそう思わぬか。きつとよく似合うぜ。奇クモデル嬢中でも百合子嬢が一番女学生姿にピッタリだとQ氏は勝手に決めこんでしまうのだが、あいにく奇クの分譲フォトの目録にも、そういう作品はなさそうだ。

ましてや、遠藤百合子嬢をモデルにした女学生切腹フォトなど想像しただけでも、愉しい。胸が疼くのである。

——さて、それでは、ピンク映画館のトイレから誘拐された遠藤百合子嬢は、その後一体どうなったのか？どんな悲惨な運命にもあそばされるのか？

Q氏の空想は、果てしなく拡がっていく。

三、百合子とエロ事師たち

頭の芯が重く、軽い眩暈がする。意識だけはハッキリ醒めていた。両手はどうなっているのか、肘や手首の関節が痛い。

百合子は上体を起しながら、呻いた。

——アッ！監禁されている。

しかし声は出ないし、両手の動かぬことを



知る。鼻腔や口唇に薬品臭い痺れが残っているためだけではない。唇と歯を割られて、頬に痛みを感じるほど強く、皮の嵌入口具が喰い込んでいる。両腕は嚴重な後手縛りにされている。

——あれから、どうされたのか、もしや？ 百合子は愕然と色を失った。隣室から淡い灯りが流れている。できれば直接手を指を触れて大事な軀を調べたい。彼女は背を左右によじって身悶えする。おろおろと泣きだし、そんな表情をして、血まなこになって軀中を眺めまわす。処女の女性本能が悲壮にむきだされた一途な百合子の瞳。

彼女はホッと安堵の溜息をもらした。オーバーは脱がされているが、スーツも下着も無事だった。

——だが一体、ここはどこだろう？

不安な眼で薄明りの室内を見廻す。暖房がよく効いて、ホテルという感じの相当大きな部屋らしい。綴帳のような重々しいカーテンで仕切られ、それが半分ほど開かれた向うの部屋には、幾人もの人間が居る様子だ。ここからは三人のスポーツシャツを着た男の横顔しか見えないが、麻雀牌をじゃらじゃら鳴している。

「おい、気が付いたようだぜ」

百合子の監禁された部屋に黒い人影が迫って、天井のサークラインが点けられた。五人の男と一人のかなり美人が、百合子を取囲み、その中から真赤なセーターを着た長身の男が、屈み込む。笑いかけているが、冷徹そうな眼付きをしている。

「遠藤百合子さん。こうして実物を眺めると写真よりずっと美しい。とうとう我々の罠にかかりましたね。貴方のグラビヤを見てから、ずっと貴方に白羽の矢を立てて狙っていたんですよ。我々は美しい女しかタレントにしない。軀も立派なグラマーしか相手にしな

い。その点百合子さんは、その少女のようにあどけない顔といい、身体 of 立派なことはもう雑誌で知っている。我々の条件にピッタリだ。とうとう今夜、待望の貴方を手に入れることができた。一つ今夜は身も心も恍惚の天国に遊ばせてあげますよ」

——貴方達は一体誰？早く帰えして。

怯えた眼が、そう訴えている。百合子は男達に背中を見せて蹲り、顔だけねじって見上げるのがやっとだ。

「ここは或る温泉マークの地下室。入口のドアがあるだけで、窓は一つもない。防音装置も通気装置もある完全な密室ですよ。それ、そんなに震えてばかり居ないで、よく見回してごらん。この十畳に向うの八畳には、貴女を可愛がってあげる大きなベッドもあるし、バストイレも付いている。それにあっちこっちにライトがあるのが判るでしょう。あれは物凄く明るい天然色用のブルーランプ。ハミリカメラも何台もあるでしょう」

蒼白い顔色をした男は、パサパサとした長髪が額に落ちかかるのをかき上げる。

「つまり我々はエロ事師、秘密映画の密造団ですよ。百合子さんは、その女優として働いてもらうわけですよ。ここは我々のスタジオ

です。女を虐じめたり、喜ばせたりする道具は全部揃っている」

百合子は畳を蹴り上げて、逃げ出そうとした。見たことは一度もないが、ブルーフィルムのモデル。どんなあさましい演技をやらされるか、彼女にもおおよそ見当はつく。そんなエロ映画のために大切な操をけがされるくらいなら、死んだ方がいい。誰がそんな女優なんか死んだってなるものか。

もがいて、やっと立上った腰を、長髪の男につきとばされて、百合子は赤い絨氈の上に尻餅をついて横転した。

「フッフ。いくら泣きわめいたって、あばれたって無駄ですよ。入口の錠は金庫と一緒に特殊な鍵だ。我々しか開けることはできない。旅館だって鼻薬がたんまり効してあるんだ。見て見ぬ振りをしていますよ。万が一にも助かる見込みはない。自殺されたんじゃ、商売はできなくなるし、我々も高い金を払って誘拐団から貴女を買ったんだ。それでは折角の上玉が元も子もなくなる。しかしフッフそれでは舌も噛めんでしょ。なんなら映画でよくやるシーンみたいに、逃げ廻る君と追いかけてもいいんですよ。だが貴女の演技はやがて判るでしょうが、スゴく体力を

消耗する。途中でへばって動けなくなっても我々は容赦はしない。結局一番損をするのは百合子さん、貴女ですよ。まあ諦めて大人しく、我々の言うままに何んでもハイハイと服従するのが一番利口ですよ」

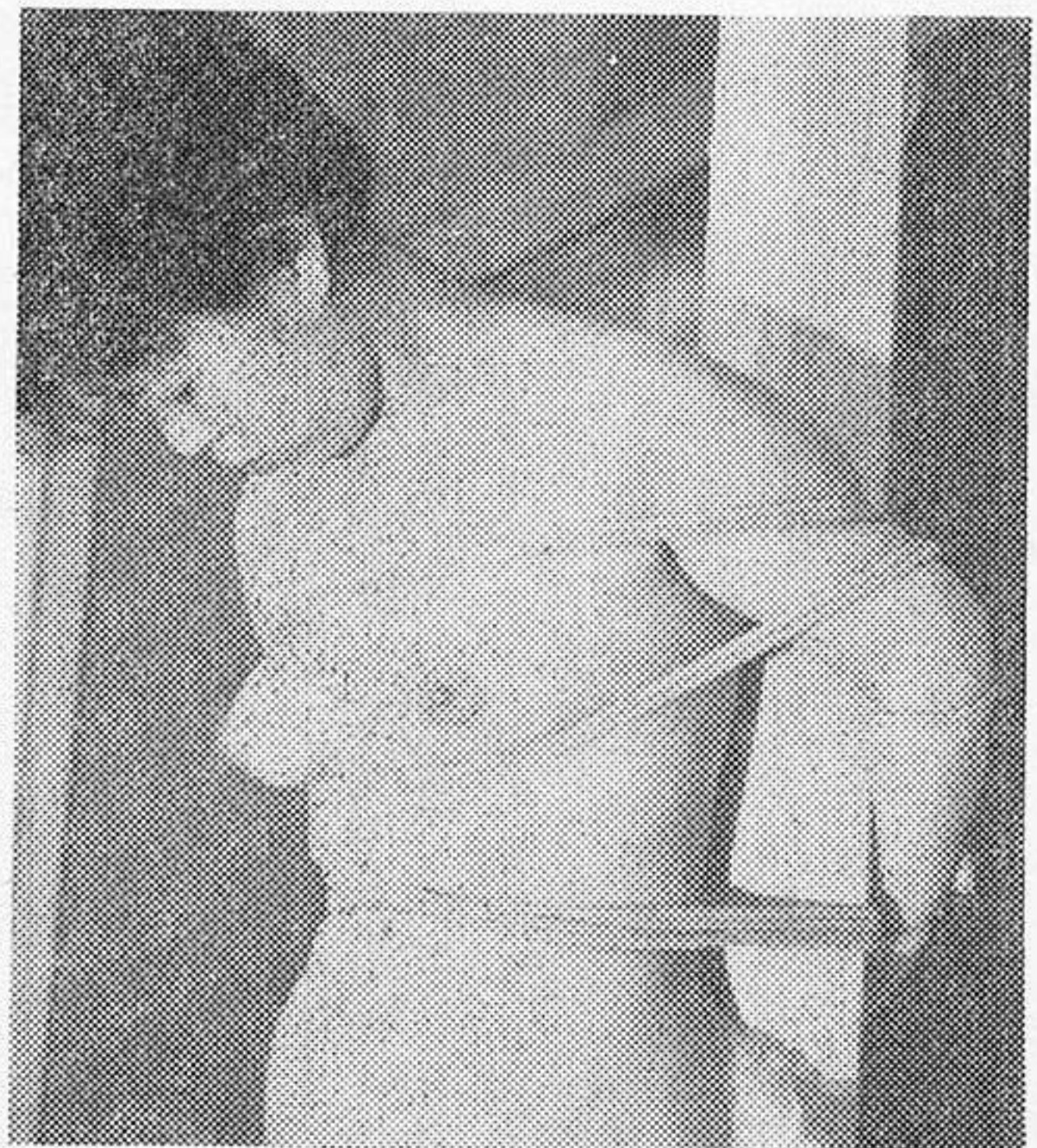
スポーツシャツと寝巻姿の四人の男達も、若く美しい新入りの女優に、軀中をぞくぞくさせて、欲望をむき出しにした粘っこい視線で、新鮮な獲物を凝視している。

百合子は畳に身を伏せて戯戯している。恐怖に軀を縮めて震え上る美少女という感じである。

——お願い、許して、早く、帰えして。

それでもときどき絶望に沈んだ顔をあげては、上眼使いにエロ事師たちを見上げる。顔は隠し切れない憎悪と怨恨に歪んでいるが、泣き脹らして真赤になった眼もとには、つとめてやさしく甘美な媚びさえ含んで、可憐な瞳には懸命の哀願が籠っている。

長い睫毛に光る涙も哀訴も、この男達には通用しない。スポーツシャツの若い男がニヤ



ニヤ笑いながら、話し始める。

「何んでもお嬢さん、用便の後始末もしねえで気絶したっていうじゃないか。お前さんをよ、誘拐した男がよ、お嬢さんを引き渡す時にこぼしていたぜ。便所の中に紙はねえし、お嬢さんのハンドバッグの塵紙だけじゃ拭き切れなかったってね」

百合子は、トイレの中の屈辱のポーズを思い出す。あれからどうなったんだろう？
「おいおい、もうそんな話は、それくらいで

勘弁してやれよ、おめえもくどいね、もういい加減にしたらどうだ。あんなお人形さんみてえな可愛らしいお目めを真赤に泣きはらして、恥しがっているじゃねえかよ」

百合子の知らない間の出来事を喋りたくてたまらそうな若い男を、たしなめたのは、額が禿げ上った色の黒い四十気配の男で、棒槌の浴衣一枚である。

「それじゃ、女優さんに、そろそろ準備してもらいましょうか。監督さん、こりゃ一つ女学生ものでいきましようよ。軀は立派に女になり切ったって感じですが、顔はどことなく子供っぽくて少女みてえに見えやす。こりゃ必ず受けますよ」

監督と呼ばれた長髪の男は頷いてから、男達とは少し離れて、片膝立てて坐り煙草をふかしている女を、手招きして呼んだ。

「さあ顔を上げてよく御覧。この人はね、我々の業界じゃ山本富士子っていわれたピカ一の女優さんだ。顔だって、そっくりだろう。軀だってびっくりするほど素晴らしいぜ。それから、あの方の演技も濃厚でモノスゴいんだぜ。だが百合子さんみたいに生娘には見えないよな。この人がね、君と一緒に風呂に入って体を隅々まで洗ってくれたり、我々の

演技も君に色々と親切に教えてくれるんだよ。羞しがったり拗ねたりしないで、大先輩だと思って尊敬して、何んでも素直に言うことをきかなくちゃ駄目だぜ」

かたわらで佇んでいるエロ女優を一瞥してニヤニヤしながら、その視線を百合子に落とし手を伸して、やわらかい顎を上げる。

「それからこの人はね。百合子さんと一緒に、縛られたり虐められたりすることが大好きなマゾヒストなんだ。君とはきっと話がよく合うぜ」

——ち、違います。百合子、そんな……。

百合子は狂ったように首を振って、嵌口臭の奥で、言葉にはならぬ呻き声を出す。

「ホーウ。それならどうして責めのモデルになんかあったの。日本拷問刑罰史なんて男ばかりしか入っていない映画館に行ったの。そんなに羞ずかしがらなくとも、ぼくにはちゃんと判っているんだ。よし、いいものを見せてあげよう」

監督は女を見上げて、命令する。

「おい、マリ、裸になって見せてやれよ」

女は甘えた眼差しで監督を眺め、ニイーと笑うと、ルーージュに染った煙草を男に啞えさせて、ナイトガウンに両手をかける。

「そら、眼をそらさないでよく見るんだ。身体中傷だらけだろう。彼女はあやうて虐められないとエキサイトできない軀になってしまっているんだ。それからの彼女の熱演は、さっきも言った通り物凄く濃厚だぜ、どんな愛し方をするか、お風呂の中でよく教えてもらえよ。サジスムとセックスの二本立、そこに我々のブルトフィルムの特徴があって、大歓迎されるの、判ったかい？」

小麦色の肌は、圧倒されるほどのグラマード。胸の隆起は外人のピンアップガールのように豊かなボリーム感に溢れている。黒いパンティが密着した腰部も、悩殺的な急カーブを画いて、丸々と爛熟している。男が云う通り上半身は前も後ろも酷い痣になった縄模様や、赤黒い鞭の条痕が一面に附着している。

百合子も奇クの新人として被縛の経験者だが、こんな劇しい縛られ方をされたこともないし、ムチ打など一度も受けたことはない。同性の裸体に残された加虐の痕跡を痛ましくて、見るにしのびない。

「おいマリ。もっとパンティをさげて、お臀の創をよく見せてやれよ。それから、おい君彼女は嬉しがって見てもらいたがっているんだぜ、顔をそらさないで、よく觀賞してやれ

よ」

マリは命じられる俛、下着を太腿までくるくる巻き下ろすと、自ら後向きに屈み込むようなポーズをとり、豊満な尻をくまなく展示する。

——も、もう結構です。や、やめて。

同性の百合子にはただ羞しく嫌悪をもよおすだけだ。声さえ出たら、そう絶叫したい。

女盛りの双丘は、無惨なミミズ脹れに一面はれ上がり、真新しい鞭痕は凝血しかかったドス黒い斑点が付いている。そこにラードのような脂剤が塗られて、テカテカ光っている。

「判ったかい？あんな軀では当分彼女は使用物にならない。百合子さんのようにシミ一つ、かすり創一つない真っ白な肌を縛って、

悲鳴と一緒に純白の肌が一筋二筋と赤い鞭打の縞模様で埋められていく。そういう新鮮味をお客達は一番喜ぶんだ。当分は君のその水々しい軀で稼がせてもらうよ。早くマリを見習わなくちゃいけないぜ。彼女はよく達の従順な女奴隷だ。裸になれといえど喜んでなるし、ムチ傷を見せろと命じれば、ああやってお尻をまくって見せる。あの傷だらけのヒップだって、これから鞭打をさせるといったら

血を吹きだして気絶するまでやらせるぜ。そ

の外にも、彼女は色々とめずらしい芸当ができる。よく達や映画のお客を喜ばせるためなら、どんな真似でも進んでやる。そういう風にばく達が調教したんだ。いいかい、君もマリみたいにも一日も早く一人前の女優、いやばくらの忠実な女奴隷になるんだぜ。さあ早くお風呂に連れて入ってもらいな、寝化粧も奇麗にしてもらうんだぜ。反抗したり泣いたりして、お化粧を落さないように、いいね、判ったね」

裸体が舞台衣裳のマリは、パンティ一枚の姿で、畳にしがみついて泣き伏す百合子の縄尻を掴んで、監督に凄艶な秋波を送りながら浴室に連行していった。

四、もだえる女学生

「フッフ、この子、まだヴァージンらしいわよ。よく調べてやったの。お乳も大きいけど固そうよ。乳首なんか、桃色にほんのり染って、女のわたしだって、ぽーとしちゃうくらいよ。それに触感反応も敏感よ。摘んでやったら直ぐ乳首を尖らせるの。顔もあどけなくて可愛らしいしさ。本当に掘り出し物よ。あんな達もお楽しみが多いわね」

女は湯上りの軀にバスタオルを巻きつけたままの姿である。蓮っ葉な調子で盛んに新入りモデルの宣伝をする。

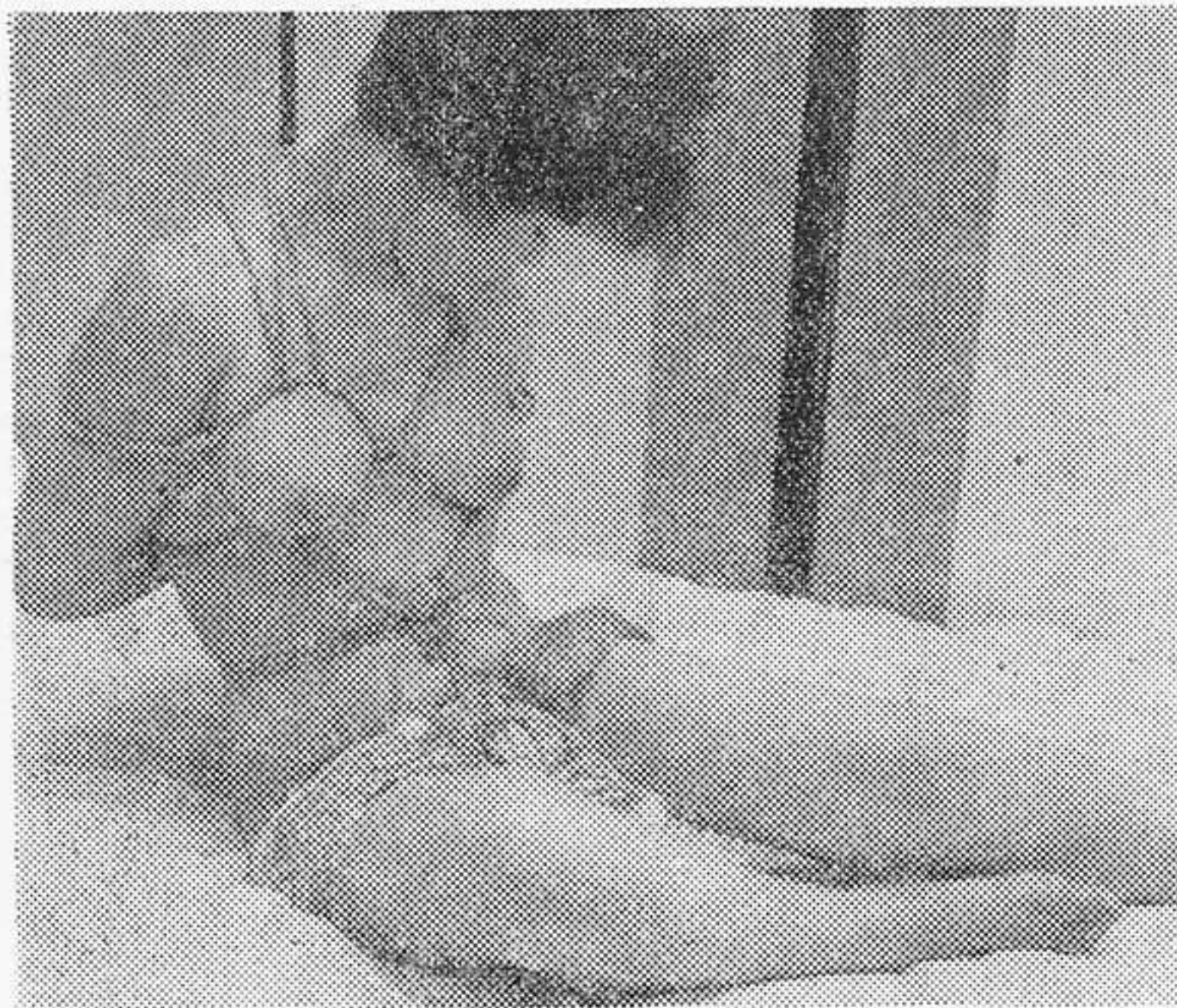
百合子は、屈辱にそまった顔をうなだれて、露骨な軀の批評を聞かされている。

彼女は女学生の服装をさせられている。

男たちは眼を丸くして 百合子の変貌振りを恍惚として観賞している。

濃紺のセーラー服は、可憐な魅力をつくり出している。百合子の美少女という感じの顔立と、若い弾力に富んだみずみずしい肉体によく似合う。紺の胸当をはずされた襟もとから、湯上りの肌が白ゆりの花卉のようにしっとり潤って、こぼれている。櫛を入れた漆黒の短髪。控え目なお化粧をどこかされた顔は匂うようにういういしいが、ふっくらした頬を歪めて嵌口具がはめられている。黒いストッキングも、清純な女学生のムードを出している。

十畳の間の真中には、机と椅子、整理ダンスの上に置いた人形ケース、スチール書棚に教科書や参考書を詰め、机を色鮮かな造花で飾り、女学生の勉強室らしいセットがしてある。隣りの八畳間は、仕切りの重い緞帳カーテンも取除かれ、四角い大きなベッドが真中



に運び出され、艶めかしい豪華な夜具が用意されている。照明も各室とも適当な位置に採光され、用意スタートとなれば点灯するばかりになっている。

女学生姿の百合子は背中をこずき回されて、大きな肘掛椅子に坐らされた。監督が白線の三本入ったセーラー襟の肩を抱くように

して説得する。

「いいかい。このシナリオに書いてある通りにやれば、この苦しい嵌口具は脱して上げるよ。ぼくらはストーリー上、こんな猿轡みたいなものがあっちゃまずいんだからね。我々の映画は難しい演技など、それほど必要ないし、ストーリーだって単純だ。録音はあとでマリーに吹き込ませるから、君はセリフを言う必要もない。要はモデル——百合子さんのように若くてピチピチした美貌のタレント次第なんだ。ねえ、君は演技、いや初夜の心得はマリーからよく聞かされたろう。ハッハ、ズバリ本番でいけば物凄い迫力が出るてもんだよ。さあ一度、筋書だけでも読んでごらん」

指先をわななかせて、手渡された原稿用紙に四、五枚の脚本を一枚読んだだけで、百合子はシナリオを放り出す。両手で顔をおおって、机に身を伏せてしまう。

赤い絨氈に落ちた脚本の題名は『もだえる女学生』と書いてある。仕方がないと舌打して、監督がストーリーだけ簡単に説明する。

「いいかい。君は勉強室で家族が寝静ってから、百科辞典の中に隠して置いた秘密写真を取り出して眺める。それは縛られたり、鞭打たれたりする場面から始まって、最後には責めの苦痛と歓喜に敗けて、自分から軀を委せてしまう一連の写真だ」

話の途中で、監督はポケットからその実物写真を取り出して、机の上に並べる。

「さあ大きな目を開けてよく見ろよ。モデルは、そろこでニヤニヤしているマリーだよ。どうだい、スゴイ虐められ方をしているだろう。色々な責め道具があるね、さしずめ日本拷問刑罰史の現代版ってとこかな。ソラこのマリーの顔を見てごらん。だんだん縄とムチの魅力に負けて、恍惚としているだろう。フッフ、これは両手を合せて自分から身を委せる寸前。それからこれは生娘には眼の毒かな。感激した女奴隷が御主人に感謝の奉仕をしているところだが、百合子さんには、こんな羞しい真似はできないよね。とにかく、この女奴隷の軀全体で奉仕しているマリーの写真を眺めて、君は感じ易い思春期の女学生だ。せつなく胸を抱きしめてもだえ。判ったね、君にも経験はあるだろう。独演しながら色々想像している裡に、マリーと百合子さんがいつのま

にかすれ替って、縛られたり鞭打たれるマリの写真を始めからオシマイまでやることになる。まあざっとこんなストーリーだ。平凡で簡単だが、へもだえる女学生Vなかなか面白そうだろう」

俯伏した美しいえりあしまで劇羞に紅潮させている百合子は、話の途中から人さし指で両耳にセンをして、机の上でイヤイヤをしながら、嗚咽をもらしている。

その震える肩を、マリが叩く。

「いくらそうやって拗ねていたって、あんたの軀には高いお金が支払われているんだよ。いくら泣いたって許してくれる相手じゃないし、生娘のあんたをただで放って置くわけないでしょう。もういいかげんに諦めなよ。馴れてしまえば、こんなこと、なんでもないので。さあいつまでも、めめめしていないで顔をあげてしゃんとおしよ。何も使ったって減る物じゃないでしょう」

百合子は顔をねじ上げて、思い詰めた瞳でマリを睨みつける。可憐な眼がつり上がって声に出せない口惜しさ、痛恨が顔一面にあふれている。白い歯を割られた唇を戦慄させて何か必死に訴えようともがく。

「まだ百合子、男を知りませんと言いたいん

だろう。バカだねえ。そんなこといったら、益々男たちが喜んで、軀に火をつけるだけだよ」

監督が男たちに目配をした。男たちは言われなくとも万事承知して、百合子を後手にねじ上げて仰向かせる者、顎を持ち上げる者、睨を開いて眼球をあばき出す者と、テキパキ機敏に立働いて、彼女を椅子に拘束してしま

う。監督が向うの部屋から持ち出してきたキャビネ版に引伸された四、五枚の写真が机の上に一枚ずつ並べられる。

「さあ、一枚一枚よく見て御覧。例のトイレの中の写真だ。超高感度フィルムにF一・四のレンズを使っただけあって、よく撮れているぜ。自分で自分のこんなめずらしい写真を見るなんて生れて始めてだろう」

百合子は頭を乱暴に押えられて、むりやり机の上を眺めさせられる。

「どうだい。これなんか、物凄くグロテスクだぜ」

「ここまで写ってりゃ、大したものだ」

「——う、うう——」

視覚と聴覚の両方で責められて、百合子は咽喉の奥から悲惨きわまりない呻き声をたて

る。蒼ざめた額に脂汗が浮んで、桃色の睨の裏まであばかれた大きな瞳も、涙で曇っている。

——もう見、見せないで、勘忍して。

がちり首を固められて、自分自身の写真に哀訴する恰好になる。

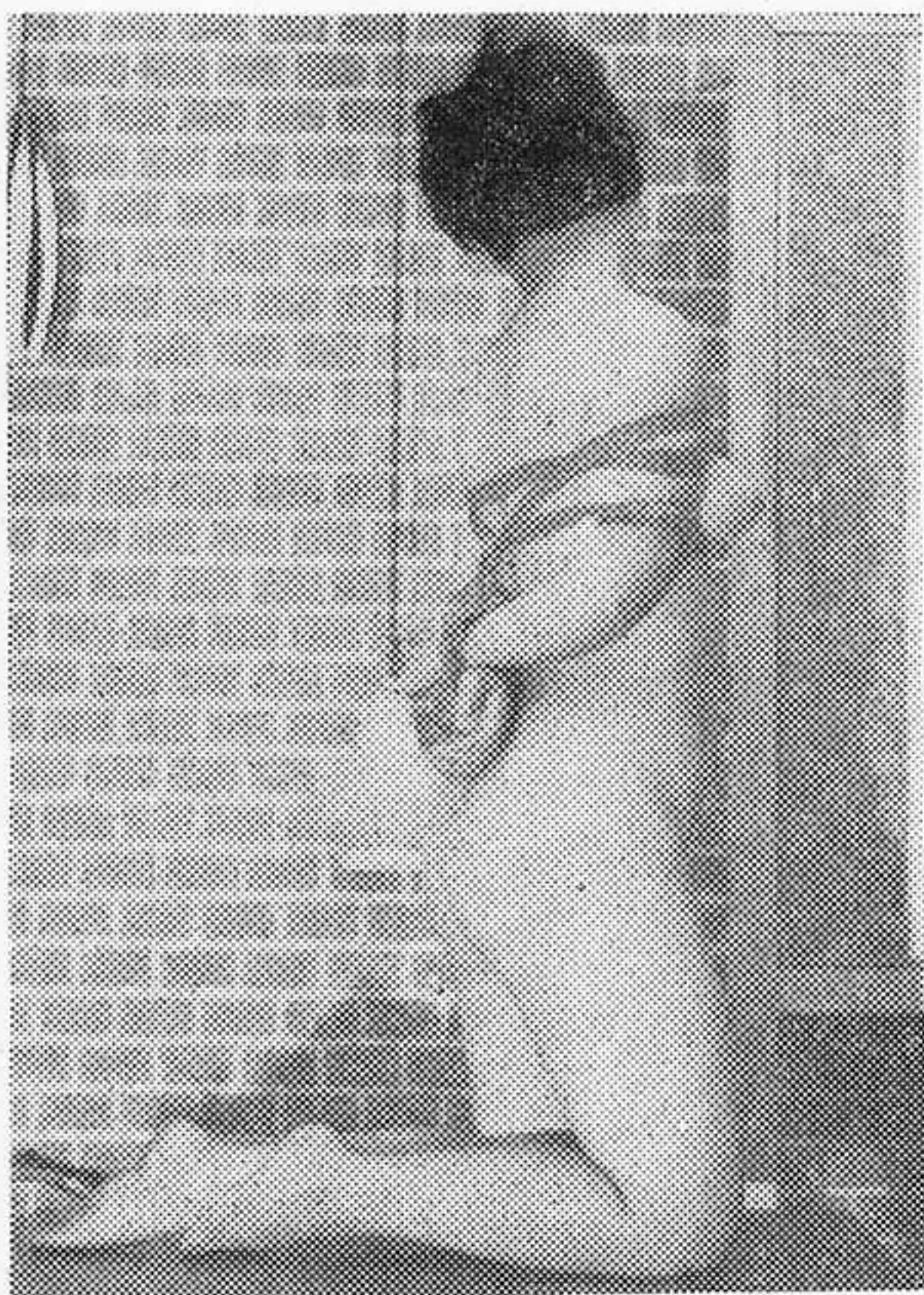
「こりゃ、ひどすぎる姿だ。こんなケダモノみてえなざまは親や兄弟、恋人にはとても見せられない。ぼく達のいう通り演技したら、これから嵌口具を脱してあげるが、もし舌でも噛み切ったら、何枚も焼増して君の家や恋人、勤め先、友人知人にばらまいてやるぜ、それでもいいかい」

頬を締めつける嵌口具が脱された。百合子は、見るもいたましい絶望と諦念に打ちしおれて、戯歎する首をほんのかすかに頷いたからである。

五、女学生の切腹前景

『もだえる女学生』は、二時間近くもかかって全巻を撮影された。

それからまた徹夜で、百合子をモデルにした別の題名の映画が撮影されたのだが、その物凄い内容を赤裸々に紹介すれば、忽ち発禁物だし、空想家のQ氏にもとても書く勇氣



も筆力もない。どうか読者諸君は手許にある女学生もののエロ写真なりフィルムなりを眺めて、セーラー服のスカートをまくり上げて四つんばいになったポーズでも、別のポーズでもよい、どうかそれを遠藤百合子嬢だと思って、想像して置いてくれ給え。

監督とマリは別室に引きあげ、暗闇のなかで、男たちの高聲が聞える。

百合子は何度もベッドの上で失心した。その度にバスルームに運び込まれて冷水を浴びせられ、五人の男を相手に演技を強要され

た。同性のマリまでが彼女をはずかしめた。悲痛でデリケートな反応を示す新鮮で成熟した甘美の果実。白い胸が喘いで、喘いで。徹底的に女体を屈服させようと、悲鳴をあげるセーラー服の美少女に、ムチが鳴りつづけた。そのフィルムは、大きなトランクに何巻も大切に保管あれて嚴重に鍵がかかっている。

さすがのエロ事師たちも軀中の精気を抜き取られて、もう手を出す元気はない。死んだように睡りこけている。

百合子は、うつろな放心の体で、暗い天井を睨めている。

彼女は死にたいと一途に思い詰めた。もう嵌口具はずっと脱されていた。それなのに舌を噛めなかった。一思いにがーと噛み切ろうとしても、紅色の舌は丸く縮んでしまう。

体中が痛んで、痛んで、骨のずいまで絞り取られたような疲労感

魂を抜き取られたような虚脱感。体の芯までけだるく、もう指先一つ動かすのも臆劫だ。

百合子はもう縛られてはいない。誘拐されて必死に抵抗するどの女も、終ってしまえば観念してしまふ。いったんからだを許すと一遍に弱くなる女性の悲しい習性を映画密造団は心得ているのだ。百合子もその例外ではなかったのである。彼女はもう逃げ出そうとも救出されたいとも思わない。こんな滅茶苦茶な軀にされて今更何の意味があるうか。

彼女は冷い涙で濡れた毛布をはねて、痛む上体を起した。百合子は彼等が寝静まるまで、尿意をこらえていたのである。

歩くのがやっとだった。よろめきながらも忍び足で、トイレまで辿った。

百合子は内部からしっかき錠を下ろし、電灯を点けた。建つけがよくドアさえ閉めれば灯りが洩れる心配はない。

トイレの向うが、バスルームでアベック用の浴槽がある。

用を足しながら何気なく浴室を見ると、タイルの上に黒く光る物がある。それは、折り覚み式の西洋剃力らしい。

何か得体の知れないものに憑れて、百合子はカミソリを拾い上げた。丁度お尻について

髭を剃る位置にある壁鏡の下で、男達が使用して忘れて置いたのだろう。開くと電光にピカピカ閃く刃は十センチ以上ある。首すじがゾーとする蒼白い冴えた光芒。鋭利な刃は一番厚い部分が二ミリくらいある。彼女は蒼ざめた顔で、魅入られたように瞠目する。

にはかに、百合子は兇暴な自虐の衝動に駆られた。

彼等が憎い、殺してやりたい。しかし操をけがされた最初の男を呪わしく想うその一方に、複雑微妙な愛憎と離れがたい執着を感じ始めている自分に気付いて、彼女は齒ぎしりする。許してはならぬものを許しながら、エロ事師の陥穽に屈伏してしまつた百合子。彼女は処女の血に変わりはない事を、軀と心で知らされてしまった。未知の感覚に欺歎した女体の弱さや生理が、自分でもつくづくあさましい情無い。

諦めて麻痺していたつもりの屈辱と慚愧の感情が、炎となって甦ってくる。絶望と敗北が、狂暴な自虐の発作を伴って、身体中を責めさいなむ。狂態を演じた自分の肉体が、所有されけがされた女としての臓器や重要な内臓が呪わしい。思いきり切り刻んでやりたくなる。

百合子は切腹という最大限の苦痛を伴う自殺行為に、贖罪の念と復讐の痛快さを感じたのだった。

彼女は、独り静かに死のうと思った。

もう一度トイレの鍵を改めた。ドアに耳を当てて八畳間の気配を窺う。白河夜船のいびきが聞えるだけだ。あの調子では当分目醒める心配はないし、気付いたところでしばらくはこの頑丈な扉がふさいでくれるだろう。

これがわたしの死装束になるのか。百合子はセーラー服を眺めた。哀切な苦笑が浮ぶ。たとえエロ映画に強制された扮装ではあっても、真裸で惨死するよりいいし、セーラー服とは感傷的で、いまのわたしの心境にピッタリだわ、と思った。

百合子は自決する前に、せめて男達の手垢と汗にまみれた身体を洗い清めたいと思って、お湯はすっかり冷え切っている。蛇口をひねれば時間もかかるし、その音で男達が目を覚ますかも知れない。お化粧だって涙と汗で剥げ落ちている。美しい死化粧をしたいと思つても、ここにはそんな道具もない。

可哀そうな百合子！死ぬが死ぬまで悲惨でみじめな想いをしなくてはならないなんて。けがされなぶられ男たちの気配におどおど怯

えて死に急がなければならないなんて。

百合子は、乾いたタオルの上に正坐した。あまりに佗しい切腹の座だった。裏返しにされた畳もないし、白布も、逆屏風も、短刃を載せた三宝もない。百合子ははずかしめた男達の髭を剃ったカミソリ。スカートの一枚下は、アベックのお臀でさんざん擦すられたタイルで、じんとしびれるような底冷えがしてくる。

確かに、血ぞめにするには措しい、美しい下腹部を持った人気モデルの死場所としては、あまりに物悲しく、わびしかった。

——英、英夫さん。赦、赦して、百、百合子、もう駄目なの、死ぬより仕方ないの。

胸の中で、百合子は悲痛な声をしぼり出して最愛の恋人の名を呼んだ。その人のために守り続けてきた操を。そう思うと、彼とはもう顔を合せる資格もない。

ここでセーラー服のように感傷的な、百合子のロマンスを一つ——。

英夫は身寄りのない貧困な画家である。二人は二年前に雪の降る街路で知り合った。英夫はオーバーもない徳利首のセーターだけで長身な肩をすばめ、真赤に凍った指先に息を吐きつけ、寒さに足踏みしながら、似顔絵の

アルバイトをしていた。長い髪と肩にすこし雪が積って、暗いデパートのショーウィンドーに背中をつけるようにして客待ちをしていた。百合子は英夫の前に立った。ネオンと街灯りに照らされた百合子の顔を、英夫はモリヂアニーのように繊美な天才的な線で画いた——デフォルメされた美しい清純な顔。めばえた二人の恋は、その似顔絵のように清純だった。英夫はひどく胸を患っていた。百合子は貯金通帳を全部下ろして、英夫を海岸にある療養所に入院させた。そこで英夫は創作に没頭し、百合子は会社が終わるとパートタイムで喫茶店に働き、奇巧のモデル料もその一部に使われた。それでも月に一度、療養所がある明るい陽光に黒潮がおどり、オゾンが豊かな海岸で逢引する楽しみを想うと、百合子はどんな苦勞も喜んでできた。早く病気を治して立派な芸術家になってもらいたい、その一念で百合子は献身的に尽した。長い労苦が報われる日が来た。英夫の作品が今年秋期N展で×賞に選ばれ、画壇に認められて作品もぼつぼつ売れるようになった。病氣も回復して来週の月曜日に退院する事になった。

その日は会社を休んで療養所まで出迎えにいくつもりだった。もう直ぐ結婚もできる。

退院の日をあれほど指折り数えて楽しみにしていたのに。

英夫の知的なやさしい顔が喉に浮ぶ。一度だけ逢ってから死にたい。それを思うと死んでも死に切れない。泣くまいと思ってでも恋しい切ない心で胸が詰まり、涙がポロポロ流れる。しかしこんな軀にされてしまったわたしでは。百合子は身を揉んでもだえる。ただ操をけがされただけなら、いくら蹴つとばされようと、いくら軽蔑のツバキを吐きつけられようと、取りすがって赦しも求めよう。いくら嫌われても、死んでも離しはしない。

しかし五人の男の毒牙にもてあそばれながら、喜悅の果てを見せたわたし。五時間以上にわたって撮影されたカラープリントのブル・フィルム。人手から人手に渡って全国の待合や料亭、温泉場で上映される無惨にひらかれた女学生の究極の痴態。グロテスクな排泄中の写真——そんなわたしが将来を嘱望された画伯夫人にどうしてなれよう。英夫の出世のさまたげになるだけだ。一人の天才画家を世に葬り去るだけだ。

百合子は心の中で英夫に手を合せて合掌した。一目でも逢えば、踏んでも蹴られても女の執念がどこまでも追いかけてさうだ。ああ逢

いたい。訣別の痛恨の涙があふれ出る。百合子はスカートをはずした。セーラー服の下は黒い靴下だけである。

撮影が始まってから下着は一切使用を許されていない。セーラー服を着用されているのは女体を保護するためではない。それは好色な男達の目を楽しませ嗜虐心を刺戟させ、挑発または誇示する衣裳にすぎないのだ。紺のスカートが、もものつけ根の一番白いところまでずり落された。もう一度大きな花卉のようにはたらくがったスカートの裾を摘み上げて、つつましく坐り直す。

制服の上著が臍窩の上あたりにある。百合子は胸ホックを脱して、丸丸とふくらんだ胸から、上腹まで充分にくつろげた。

右手には、一握りした掌から十厘以上不気味に閃く刃が出ている。短刃の抜身より、ギリギリ光る薄い刃を持ったカミソリの方が、脆い鋭利さともいうか、凄味のある切れ味が感じられて恐怖をそそる。本能的に逆手に握った右手が慄える。気持はしっぴかり覚悟ができていくつもりでも、ワーンと悲鳴をあげて、右手の物を抛り投げたい衝動に駆られる。

百合子は、黒いストッキングだけの下半身

に眼を落す。引締ってピチピチ弾む肌。

いとしそうに左手で、しっとりと暖い下腹を撫ぜる。自分でも心地よい感触が掌に吸いつくようだ。自愛と愛着を強く感じる。

このお腹を切るのかと思うと、捨て切れない哀惜の念と生への執著——それに、百合子は切なく哀しげに身もだえする。できれば生きて、恋しい、いとしい英夫の手で愛撫されたかったと未練が残る。一度だけでも、そうされたかったと哀慕を感じる。

ああ死にたくない……と心が乱れる。

——で、でも百合子、やっぱり百合子はお腹を切り開いてお詫びしますわ。このみだらなお腹を。英夫さん、このお腹は、はらわたまで、すっかり、けがされてしまっているの。百合子、つらかったわ。しつこくいじめられて、いじめられて、いじめぬかれたのよ。百合子、英夫さんにすまなくて。百合子くやしい。

こみ上げる悲憤の涙に、百合子は咽喉をつまらせる。一途に思い詰めた処女の瞳が、とりすがるように一点を凝視する。そこに恋しい英夫が佇んでいるかのように。

——からだはけがされても、心だけは英夫さんのものよ。はらわたの出た百合子のお腹

には眼をそむけてね。その代り百合子の眼を見てちょうだい。わたしの眼は死んだって貴方を愛しつづけていてよ。きっと百合子の愛がお判りになりますわ。

セーラー服からさらけだされた女学生の肉体は、ぬけ出るように色が白いが、屠腹を寸前に控えて、薄すら蒼い陰翳につつまれている。おぞましい咬傷や歯型、吸われた紫斑、ミミズ脹れの鞭創と縄の痕跡までべっとりつけられて、その中にはなかば失神しながら苦痛とは別の感覚にもだえた口惜しい悲痕もある。

「痛いだけです」

征伏感に赤らんだ男の愉悦の顔と一緒に、また、あの直後強要されて口走った廃残の言葉が耳によみがえってくる。

「これで君は、もう完全に、ぼく達の女奴隷だ。女は一度からだを許すと、どんなに嫌い抜いた男でも好きで好きでたまらなくなる。君はもうぼくから離れられないんだ」

あの、冷たく自信に満ちた男の声を思い出す。

百合子は、美しくまるい自分の腹を憎々しげに睨みつける。冷徹な第三者の眼だった。いくら洗っても拭い去ることのできないお

腹の中の無念な汚辰の痕跡。自愛と哀惜の念が深ければ深いだけ、毒牙にかけた男達が憎い。眼に見えないお腹の中が憎い。男達を喜ばせた肉体がけがらわしくて、嘔吐をもよおす。

想像を絶した切腹の苦痛——それを想うと百合子の気持も臆さないではない。

しかし女体を開腹する苦悶と死にこそ、いまの百合子は惹かれるのだ。裏切られた女の生理の惨無さ。英夫に対する慙愧と贖罪のためには、苦しみもだえる惨劇を惜別のはなむけにしなくてはならない。その自虐の極致には、復讐の痛快さがあるはずだ。それに死が怖ろしくて舌さえ嚙めなかったわたしでも、お腹を切開けば劇しい出血もしようし、内臓も溢しよう。当然伴う人間では忍耐の極限を越えた激痛と苦悶——そうなれば、いくら勇気のないわたしでも、死を英夫さんのように恋しいと想い、少しでも楽になりたい。早く死にたいとひたすら願うはずだ。百合子にはそういう悲愴な計画もあったのである。

——英、英夫さん、サヨウナラ。百合子はあなたを愛して、ああ、もう愛する資格さえなくなったこのお腹をみつぎものに捧げますわ。百合子が痛がれば痛がるだけ、苦しめば

苦しむだけ、英夫さんへの愛情が深いと思うと、百合子はどんなに痛くても苦しくても、嬉しい。我慢できるわ。あなたにあげられなかった操の代りに、どうか百合子の死を受取って頂戴。どうかそれでわたしを赦し、わたしの愛を判ってくださいね。では、さようなら。おたっしやで立派な芸術家になってください。百合子、草葉のかけから一生懸命お祈りいたします。

百合子は胸の中で恋人に哀痛な別れを告げると、正座した背中をタイルの壁にもたせかけ、深く息を吸いこんで、鞭の条痕が残った腹をふくらませた。右手一本では引巻す自信はないし、西洋剃刀は左手を添えるには柄が

女性写真モデル募集

分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

小さすぎる。彼女は刃の上側から左の指頭で押えるようにして、左脇腹に凝した切先を斜め横から引き掻くように構えた。息を詰めて臓腑が露出するのには、何種位切ったらいいかしらと一瞬思った。

我等の遠藤百合子嬢は、女学生切腹をとげようとしている。

読者諸君よ。ここでもう一度、第二章で述べた彼女の坐像フォトを眺めてくれ給え。あのものつけ根に布切一枚まとっただけの百合子嬢、そのこんもりと、ふくれたなまめかしい下腹に、ギラギラ光る西洋カミソリが構えられている。いまにも真白なやわ肌

に赤い血花が咲き、はらわたが溢れ出そうと

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。

○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。

○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。

△奇ク編集部▽

している寸前なのだ。

それも操をけがされたセーラー服の美少女が、そのショックに、この世を果無しで屠腹死しようというのだ。無惨というか悲壮というか、哀傷と惜別の念にきゆうと締めつけられる。同時に妖しい嗜虐感に胸がかきむしられるように切なく、齒がカチカチなり出す光景ではないか。何んとむごたらしく悲痛で、異様に美しい倒錯美の世界ではないか。

しかしいくら明眸可憐な風貌と純真無垢な魂と、またデリケートで水々しく成熟した肉体の持主である百合子嬢とはいっても、ただ貞操をいかに強行に凌辱されたとしても、ただその一事だけで、切腹という最高の拷問刑に等しい自殺方法を選ぶわけはなからう。

なるほど絶望に打ちひがれた悲痛の絶頂にある彼女の心境は判るが、それだけでは或いは納得できない読者もあろう。ここで一つエロ映画密造団の毒牙にかけられた可哀そうな百合子嬢が、どんな想像を超えた屈辱のポーズを強要され、どんないじめられ方をされて、美しい女奴隷化の調教を受けたか——紳士的な奇ク編集部の朱筆でカットされない程度に、彼女のブルーファイルの一部を、そつと覗いて見ようではないか。

(つづく)

戯説

『妹背契二世機関』

河津安春

序章

現代

マンションの一室

時
所
人
物

山川忠夫（三十一才）

美子（二十三才）

幕上る。若い夫婦の部屋。美子、三面鏡の前で髪を梳いている。忠夫、食事を終えて、ソファにだらし無く寄りかかり、煙草を吸っている。二人共、不機嫌な顔色。

忠夫「厭だよ、食器を洗うなんて。オイ、僕はね。会社で一日中働いて来たんだよ。上司の顔色を覗いながらね。もうくたくたなんだ。家へ帰ってから、まだ君の機嫌をとるな

んて真平だと言いたいね」

美子「機嫌をとるとか、とらないとか、そんな問題じゃないわ。自分の使った食器を自分が洗うのは、当然じゃないの」

忠夫「御免だね。真平だよ。もっと亭主らしく、扱ってもらいたいと言いたいね」

美子（冷笑を浮べて）「豪そうに言って、一体、貴方の月給は幾等なの？」

忠夫「毎月封も切らずに渡しているんだ。君が知ってるだろう」

美子「手取り三万八千円ばかりよ。貴方が余り威張るから、忘れたんじゃないかと思っただけよ」

忠夫「それが、どうしたと言っんだ」

美子「それ位の端た金を持って帰って、威

張られたんじゃ、堪らないって事よ。いっその事、会社を止めたらどう？」

忠夫「何だって？」

美子「私の持参金だけで、月五万円程の利廻りになっているわ。それに私がファッションモデルになれば、月十五万や二十万になるでしょう。どう、そんな会社、止しなさいよ。家で留守番をしてくれれば、私が養ってあげるわ」

忠夫（口惜しげに）「ヘン、モデルだなんて、もう五年もして見る。君なんか、ブクブク肉がついて、見られたものじゃ無くなるんだ」

美子「肥るかどうか、今に見せてあげるわ。文句を言わずに、片付けていらっしや

い。その代り、ヘネシイのV S O Pをあげるわ。今日買って来ておいたの」

忠夫ブツブツ言いながら、キッチンに消える。美子、キャビネットからブランドイを取り出し、睡眠剤を入れる。キッチンから戻って来た忠夫に、素知らぬ顔でボトルを渡す。忠夫、コップに注いで旨そうに飲む。美子、横目で忠夫を見ている。

美子（優しく）「どう？ おいしいでしょう。たんとお飲みになって」

忠夫（眠そうに）「フン、フン」
フーツと息を吐くと眠る。

美子（冷たく見下して）「随分憎まれ口を利いたわね。貴方、私の恐ろしい事を未だよく判らないらしいわね。いいわ、今から貴方に前世の夢を見せてあげるわ。私と貴方がどうして結びついたか、よく知るがいいわ」

△暗転△

第一場

時 所 人物

戦国時代
城の見える鎮守の森
ウササカコロンダ
馬坂転太（野武士の頭領）
四十才

操の方（城主の奥方）

三十二才

腰元 四名

野武士 四名

舞台中央に鎮守の社。木立ち程よくあしらう。上手より馬坂転太、四辺の様子を窺いながら登場。汚れた刺子の衣服。毛皮の胴着。髭むじやの顔。序章の忠夫に似ている。微かに法螺の音。

転太「はや、戦いも一段落か。意気地無し共奴。もっともつと殺し合って、死人の山を築いてくれりや、俺様の商売も益々繁昌、たっぷり祝い酒にもありつけようものを。（下手を透し見る）何やら人の気配。落人ならば大事な客人。そうじゃ」

転太、社殿の裏に隠れる。下手より操の方薙刀を手にして登場。手甲、胸当を着けたのみ。白鉢巻き。（美子に似ている）

奥方「二刻余りも馳せ廻ったに、名立たる敵にはめぐり逢えず、手にかけたるは取るにも足りぬ雑兵ばかり（耳をすます）法螺の音も遠のくような。敵の退陣と見ゆる」

社殿の縁に腰を下し、乱れた髪を撫でつける。転太、女一人と見て、大手を振って現われる。

れる。

転太（独白）「今日は何たる吉日ぞ。鴨が城中の椎髻鬚とは。これも日頃信心なす熊坂長範様の御利益か。こいつは堪えられねえ」目尻を下げて奥方に近附く。奥方、キッと睨みつける。

奥方「何奴じゃ。人も無げなその面付き。無礼をしやると許さぬぞえ」

柳眉を逆立てた奥方の余りの美しさに、転太、団栗眼をカツと見開き、今宵はこの天女のような上臈を、我が手に抱けるかと分厚い唇は涎を垂らさんばかり。

転太「フフフフフ。これさ、何もそうしやっちこばる事あねえ。俺はこの辺りでは、泣く子も黙る野武士の頭領、馬坂転太様よ。見かけは鬼をも拉ぐ荒らくれ男だが、しんは奇麗な女にや滅法弱い優さ男。今宵はお前をしっぽり抱いて、泣かして見よう寸法さ。どうだ、嬉しいか、嬉しいか」

操の方、世にも汚ない物を見るように眉を顰めてツンと横を向く。転太、ソロソロと近付き奥方の手を握らんとした途端、仰向けざまに投げ出される。

転太（未だ判らず）「これさ、そう恥しがる年でもあるめいに、さあさあ、怖がる事あ

ねえ。お前と俺と二人っきりで、滅法いい事をして楽しもうと言うだけよ」

その時、腰元四人バラバラと駆けつける。何れも小褌をキリリとからげ、薙刀をかいこんだ勇ましい姿。転太を突きつけると、奥方の前に膝をつく。

腰元一「奥方様、ここにいらせられましたか。味方の勝ち軍さに御座ります。いで、お引き上げを」

とんだ所に邪魔が入り、馬坂転太、苦りきった面持ち。

転太「ヤイヤイヤ、邪魔立てさすな、女郎共。気の毒ながら、その奥方とやはら今宵、この馬坂転太様が抱いて寝る。うぬらトットと立ち帰り、城の旦づくに、そう伝えろやい」

転太、大目玉を剥いたが、腰元達、何れも腕に覚えがあるのか、ビクともせず。

腰元一「おやまあ、汚ならしいこの男。名は体を現わすとか、ホンに馬坂とは、よく付けた。これ、馬は馬連れ、その辺で、一夜五文の野伏せりの盲女でも探すが分相應」

腰元二「それに何やらむさいその髭面、目にする丈けでも胸が悪い。這い踞って早う退りゃ」

同三「愚図々々しやると、目障りな、その馬面を」

同四「叩き落すが承知かえ」

腰元達（声を揃えて）「シッシッシ」

転太、余りの言葉に赤くなったり、青くなったり、汝れと刀に手を掛けるが、凜々しい腰元達の顔を見れば、ぐにやりと成るは好き者の本性。

転太「エへへへ……。何れを菖蒲か杜若。

ピンシャンぬかすが尚、可愛い。オーイ、野郎共」

野武士四人、走り出る。

手下一同「へーい、親方」

転太「見ろやい、手前達。椎髻髻の味は未だ知るめえ。初物喰べれば四十五日、寿命が延びるとか。さあ構う事あねえ、銘々好きな女を有難く頂戴しろやい」

手下一同「へーい、お有難うさんで御座います」

手下四人、腰元達に抱きつくが、忽ち一斉に投げ飛ばされる。

手下一同「痛え、痛え、おう痛え」

転太（カッと目を剥き）「汝れ、汝れ、よくも可愛い手下を投げやあがったな。もう勘弁ならねえ。さあ奥方とやらを、温和しく渡

しやがれ」

腰元一、転太の胸ぐら捕えて、ポンと突けば、転太クルリと廻って腰元二の前、又、ポンと突かれてクルリと廻る。恰かも子供の遊ぶ独楽のよう。クルリクルクル、身体が廻れば目も廻る。ヨロヨロヨロと奥方の足許に倒れて起き上れず。

手下一同「親方！」

と立寄る所を犬ころ投げ。うごめく背なを腰元達、グイと土足で踏まえて動かせず。

腰元一「奥方様、この虫ケラどもを如何致しましょう？」

奥方「犬畜生にも劣ったそ奴等、その俸、踏み殺しても大事ないが、何やらそれも不憫故、向後の見せしめ、片耳削いで放してやりや」

腰元一「ハハッ。これ命冥加な虫ケラ共。

奥方様の有難いお言葉を聞きやったか。（踏みつけた足にグツと力を入れる）これ、動きやるな。動くと首が切れるぞえ」

腰元達、踏みつけたまま、一斉に薙刀を振り下す。片耳削がれた四人の手下達、悲しい声で泣き叫ぶ、さながら霜夜の蝻嘶。

手下一同「おーっ痛てえ」

腰元達、足をあげて蹴りのける。

腰元二「エエッ、見苦しい。仰山な声を立てやるな。命があるのをお慈悲と思い、三拜して這って行きや」

手下一同「それだと言って、親方を！」

腰元三「まだまだ懲りずば、その素っ首をこれ、このように」

手下達、「御免御免」と片耳押えて逃げて行く。腰元四、起き上らんとする転太の襟首を、薙刀の石突きを返して押さえる。

腰元四「奥方様、不届きなこの痴れ者、首はねて、そこな木に曝しましょうか？」

奥方（冷たく）「妾を抱いて寝ようなどと大それた事を申したその口、この俛では済まされぬ。地獄へ落ちてでも大口を叩けぬよう、しっかりと仕置きをしてやりや」

手頃な玩具と腰元達、箸が転んでも可笑しい年頃、ホホホと笑いながら転太を取り囲む。腰元一、石突きを返して、転太を仰向けにする。

腰元一「これ、知ってか知らずか、武勇の誉れ隠れも無い、月之輪城の奥方様に、身の程も弁えず、無礼を働くとは、お前も余っ程の大馬鹿者」

腰元二「その芋虫のように厭らしい、手足の指を一本ずつ」

腰元三「膿の出そうな二つの耳も右左」

腰元四「行儀の悪い獅子鼻も」

腰元一「チョンチョンチョンと切り落し、

最後にむさい素っ首を」

腰元一同「チョンとはねてやりましょう」

腰元達、面白がって、石突きでチョイチョイと突つつく。思いもかけぬ手強い女達、とても敵わぬと馬坂転太、強きに弱い下素の常。

転太「お許し下され腰元衆、命ばかりはお助けを」

腰元一の裾にすがるが、蹴り返される。

腰元一「エエッ、未練たらしい」

腰元二（蹴返して）「潔ぎよう観念しや」

腰元三（蹴返して）「今更泣いたとて、許しはせぬ」

腰元四（踏みつけて）「ええい、じたばたしやるな」

転太、泣き声を上げる。

転太「お許し下され、奥方様。下素な私めが生れて始めて拝みました美しいお顔。ついムラムラと意馬心猿。大それた事を申ししましたも、余りにお奇麗な奥方様の所為。どうでも応わぬ命なら、せめてものお情けに、天女のような奥方様の手にかかり、首はねられ

ば身の本望」

奥方（ニッコリ笑う）「畜生に似げなく、何やら可愛い事を申しおった。よいよい、命ばかりは助けてくれよう」

転太（嬉し泣き）「有難う御座います。奥方様、大慈大悲の観世音菩薩の御姿とも覚えまします。有難や、有難や」

這うようにして逃げ去らんとする側らに、奥方ズイと立ち寄る。

奥方「これ、待ちや」

転太（平れ伏す）「へーい」

奥方「命は助けて取らせるが、雑言吐いたその口は、きつと折檻せざるまい」

転太「命さえお助け下さるなら、どんな折檻も厭いませぬ。雑言はいたこの口で、お草履の泥も舐めます。これ、この通り」

腰元達、ドツと笑い出す。

奥方「ホホホ！ よう言いやった。望みにまかせて、それ」

奥方、転太を蹴返して、顔を草履で踏み付け、グイとしごいて泥を落す。転太の泣くような呻き声。奥方、足を換えて又、泥を落す。

奥方（踏まえたまま）「新らしい草履を持ちや」

腰元一「ハハッ」

腰元一、転太の胸に膝を付き、その顔の上で奥方の草履を取り換える。奥方トントンと踏んで鼻緒の締め加減を見る。

奥方「要らざる事に手間取った。我が夫さまにもお待ち兼ねであろう。さあ皆の者、おじゃれ」

腰元一、古い草履を懷ろに入れようとするが、思い返して転太の傍らに立ち戻る。

腰元一「これ、口を開きや」

痴呆のように、大きく開いた転太の口の中へ、古い草履を押しこむ。奥方、腰元達、振り向いて

一同「ホホホホ！ まあ、あの間拔けた顔わいのう」

転太、ヨロヨロ立ち上り、憑かれたように後を追おうとする。腰元一、振り返り、薙刀をキッと構えて睨む。奥方、笑いながら、それを留める。華やかに退場。

闇黒の中に美子の声

△暗 転△

「これが私と貴方の最初の出逢いだったの。私への思慕の念に取り憑かれた貴方は、古い草履を肌身離さず、かなわぬ恋に悶え続けたの。その執念が再び二人を廻り逢わせたのは

徳川末期の頃だった」

第二場

時 徳川末期
所 街道筋を離れた古沼の辺り
人物 世太郎（井筒屋の若旦那）
白狐のお絹

舞台、荒れ果てた蛇ヶ沼の辺り。遠くに街道が見える。白狐のお絹、下手より急ぎ足にて登場。旅姿では無く、褌をからげた草履ばきのまま、手に三味線を持っている。

白狐のお絹「折角、井筒屋の馬鹿息子を盪らしこみ、たっぷり手切金と思ったに、あの客齋爺いめ、たった十両出したきり。馬鹿らしいったらありやあしない。もう田舎者を相手にするのは、ふつつ厭になった。何だか無性に江戸が恋しくなつて飛び出して来たが、もうほとぼりも醒めた事だろうねえ」

立ち停つて、ハタハタと裾を払う。井筒屋の若旦那、世太郎追つて来る。

世太郎「オーイ、待っとくれよ、お絹。随分速い足だねえ。男の私が大汗をかいたじゃないか」

お絹「オヤ、若旦那。何の用事で来なすっ

た。妾しゃもうお前とは、縁も由縁もない他人の筈」

世太郎「水臭いよ、お絹。たとえ親父が何と言おうと、私しゃお前に首つたけ、惚れこんでいるのは承知じゃないか。柔しいお前の言葉にはだされて、通い詰めたこの私に、たった一夜の肌身も許さず、置いてけ堀とは、お絹、あんまり情れない仕打ちだよ」

お絹「若旦那、その恨みつらみはお門違い帰つて禿頭の親父さんに、お言いなねえ」
世太郎「さあ、その親父とお前の掛け合ひは、すっかり廊下で聞いていた。だから、それ、こうしてお店の金を百両持ち出し、お前の後を追つて来たのさ」

お絹（機嫌を直し）「百両だって？ 若旦那、それは本当かえ」

世太郎「何で嘘を言うものか。これ、この通り」

懐中の胴巻を見せる。

お絹（ニッコリ笑う）「矢っ張り妾しが見込んだ若旦那。ホンに頼もしいよ」

世太郎（やに下り）「エヘヘ！ そうだろう共、そうだろう共。なあお絹、この金を持って、どこか遠い他国へ行き、二人で世帯を持とうじゃないか。お前の為なら、どんな

苦勞もする気だよ」

お絹（うわの空で）「オヤ、嬉しいねえ。でも先ず、その百両の顔を、拝ませておくんなさいな」

世太郎、胴巻を引き出す。お絹、いきなりそれを引ったくる。

世太郎（周章で）「これ、お絹、何をするんだい」

お絹「どうもするものかね。これは妾しが預っておこうよ」

世太郎「そりゃ、どうせ世帯を持つ二人、お前に預けてもよいけれど」

お絹（わざとらしく）「世帯を持つんだって？ それは又、誰とさ」

世太郎「冗談はお止しよ、お絹。今言ったじゃないか。お前と私が所帯を持つのだ。とんと三月のお雛様。さぞや似合いの夫婦だろうぜ」

お絹（笑う）「ホホホホ。お前と世帯を持つんだって？ おいとくれ、馬鹿馬鹿しい。（空を見上げる）ボツボツ日も暮れかけた様子、若旦那、妾し先きを急ぐから、こちらでお別れとしましょうよ」

世太郎（呆っ氣にとられて）「何だって」
お絹（平然と）「判らないのかえ。禿頭の

親父の所へ、さっさとお帰りと言ったのさ」

世太郎（憤然と）「それじゃお前は、私と一緒にになる気はないと言うんだね。今迄の話は、あれは皆嘘っ八なのかい」

お絹（嘲笑う）「ホホホ！ 若旦那。夜毎の客を相手にして、口説を一々本気にされては、身体が百あっても足りませんとさ」

世太郎「エエッ、よくも欺してくれたね。

こんな実意の無い女とも知らず、迷った私が馬鹿だった。もう眼がさめたよ お絹。それじゃその百両返しておくれ」

お絹（馬鹿にした態度）「フッフ！ 若旦那。折角の御親切故、この百両は手切金代りに、有難く頂戴致しますとさ」

世太郎「そりゃ余んまり没義道な。さあ冗談は止しにして、早く返しておくれよ」

武者振りつく世太郎を、突き放したお絹、凄いい眼付きで素早く四辺を見廻し、人影の無いのを確かめると、手に持つ撓で世太郎の額を酷く打つ。

世太郎「アイタタ……」

額を押さえた手の血を見て

世太郎「お絹！ お前、私の額を割ったね」

お絹（他人事のように）「オヤ、割れたかえ。随分手加減をして打ってやった積りだ

が。だから言わない事じあない。早く帰って軍中膏は墓の油でも、たっぷり塗ってお置きな。それじゃ若旦那、御免なさいな。逢いたくなったら又、百両持って江戸へおいでな」
背を向けたお絹に、世太郎、怒りに任せて飛びかかる。お絹タジタジとよろめいて、小石で足の指を傷付ける。

お絹「おう痛い。しつこい男だね。（ガラリと調子を変える）オイ、若旦那、いやさ馬鹿旦那の世太郎さん。一体、妾しを誰だと思う。まだ肩揚げの取れぬ時から、博奕と喧嘩が大好きで、花恥ずかしい年頃には、女だらに押し借り強請り、今では仲間内でも大姐御、白狐のお絹の異名とる、二つ名のある恐ろしい女さ。百両余りの端した金で、この妾しと手が切れりや、おう有難や白狐様、御情けは死んでも忘れませぬと、両手をつくのが当り前。それに何ぞや不服らしく、返せ返せが聞いて呆れる。一旦手にしたこの百両、お前がどんなに喚こうが、滅多に手離す事じゃあ無い。田舎者のお前故、これでふしようをしてやるから、足許の明るい中に消えて無くなりやあがれ」

世太郎「それだと言って……」

お絹、短刀を抜いて突きつける。

お絹「命が惜しく無えのかい」

世太郎「その金を取られては、私は家にも帰れない。お絹、後生だからその金を！」

立ち寄る肩先、軽く一突き。

世太郎「ワッ、切ったな、お絹」

お絹（吹き出す）「馬鹿だねえ、お前。この短刀が偽物では無い証拠に、一寸突いて見ただけさ。判ったら、さあ、諦めてお帰りよ」

世太郎「おのれ、お絹。もうこうなったら是が非でも……」

ヨロヨロと立ちかかるを、又一突き。

お絹「フフフ！ 態あ見やあがれ」

スタスタ立ち去ろうとするお絹の裾、世太郎必死に捕えて離さない。お絹、眉を顰めて、世太郎を見下す。冷酷無惨な表情。白い脛を見せると、世太郎を蹴倒し、起き上らんとする背を踏みつける。

お絹「可哀そうだと思えばこそ、手加減をしてやったのに、お前はそんなに殺されたいのかえ」

世太郎もがくのを、お絹、グイと力を入れて踏みつける。

お絹「じたばたおしでない。もうこうなりやあ、行きがけの駄賃、幸いあたりに人影も

無し、所も野州の蛇ヶ沼、引導渡すにや、あつらえ向き。さあ、観念おしな」

肩先きに一太刀浴びせる。ワッと叫んだ世太郎、余りに恐ろしいお絹の本性にすっかり怖気づき、四つ這いになって逃げ出す。素早くお絹、行く手に立って

お絹「フフフどこへ逃げようと言うのさ」
周章てて世太郎、向きを換えて這い出す鼻先きに、お絹又もや立ち塞がり

お絹（笑いながら）「その傷で、どこへ逃げられるものかね」

追い詰められて世太郎、今は声も出ず、命ばかりはお助けと、両手を合わす、ニンマリ笑った毒婦の本性。

お絹「そうかい、妾しを拜むのかい。無理もない。これからお前に引導渡す有難いお絹様、後生を頼む気持ちは判るが、極楽浄土は承け合わないよ」

お絹、短刀を口に咥え、邪魔な袖を捲りあげて、世太郎の襟首つかんでズルズル。尚も脚にすぎる世太郎を蹴り離し、襟首を引き上げるや、背に足を踏みかけて、力任せに古沼に蹴り込む。

お絹、沼ぎわの木杭に片足かけて、キツと水面を覗む。

お絹「雉子も鳴かずば撃たれまいに。四の五の世迷いごとを並べた揚句がこの始末。若旦那、お前も随分酔狂者。地獄へ落ちたら閻魔の庁で、小野の小町か照手の姫か、外面如菩薩、内心如夜叉、白狐のお絹様に惚れこんだのが運のつき、その手にかかってかくかくの、仕儀と申せば閻魔様も、苦虫噛んだ口を開け、お前の馬鹿さ加減を笑うだろう」
ブクブク泡が立ち、浮き上った世太郎、杭にすぎる。

世太郎「お絹！」

お絹「さあ、惚れた女の足を頭に、目出度く往生しゃあがれ」

あろう事かお絹、白い素足を世太郎の頭に乗せ、力をこめて水中に踏みこむ。激しい泡立ち。

遠くより提灯の明り、人声が近付く。

「世太郎ヤーイ」

「若旦那！」

お絹「惜しい所へ邪魔がはいった。若旦那命があつたら、又逢いましょうよ」

お絹、白い脛を翻えして去る。世太郎、浮き上って、杭にすがり呻る。

暗黒の中に美子の声

△暗 転▽

「あの時、貴方を殺しておれば、二人の縁は切れたかも知れなかった。二世にわたる貴方の執念が、今こうして私達を結びつけているの。でも、前世の貴方の姿を見れば判るように、貴方は生き代り死に代り、未来永劫、私の手に落ちて苦しめられる運命になっているの」

忠夫の呻き声。

スポットの中に、驚される忠夫と、それを

見下す美子の姿が浮び上る。忠夫、眼を開いて、覗きこんでいる美子の顔を見る。夢とも現とも知らず、忠夫、怖ろしそうに身を縮める。美子の魔女のように低い声が聞こえる。美子「判ったわね、貴方の運命が。貴方と私の縁の糸は、輪廻の定めで固く結ばれているの。どんなに貴方が腕いても、決して切れない定めなの。お寝みなさい。明日の朝迄。」

(忠夫寝入る。以下時々呻き声をあげる)

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

明日は会社へ辞表を出しなさいね。これからは、貴方は家事に励むの。一日中家にいて私の為に、こまごまとした仕事を片付け、そして私の帰りを待つ。いいわね。貴方の世界は私だけ。貴方の喜びも悲しみも、皆私の手の中にあるの。寝ても醒めても、貴方は私の事のみを思い続ける。だって私は貴方の総てになるのですもの。私の一寸した不機嫌にも、貴方は紙のように震えるようになるわ。私の一寸した怒りにも、貴方は悲鳴をあげて許しを乞うようになるわ。だって私は貴方の全世界になるのですもの。貴方はいつも、びくびくしながら、その癖、犬のように舌を垂らして、私の顔を窺うようになるわ。気紛れに与えられる私の恩寵は、貴方にとって最大の幸福になるのよ。だから貴方は一心にその恩寵を待ち続けるの、いつ与えられるとも判らない私の気紛れな恩寵を。これから先の永い一生を、そうして暮すのが貴方の運命なのよ。それが輪廻の縁で定められた貴方の運命なの。(エコー) 運命なの。運命なの」

スポット消える。

美子の笑い声のみ高く響く。

(終)

S M カメラ・ハント

「妻こそわが命」

△新宮明夫・洋子夫妻の巻▽

辻 村 隆

「妻こそわが命」

新宮明夫氏の夫婦プレイのフォトが、始めて奇クの誌上を飾ったのは、昭和三十八年の八月号であった。当時私は奇譚三十九夜物語を掲載中であつたが、彼等の夫婦プレイのフォトに接して、事実驚愕してしまったのを今もありありと覚えている。それまで読物なり告白などで、夫婦プレイに関する記事はあつたが、フォトを発表されたのは新宮明夫をもつて嚆矢とするからである。

そのフォトは、ややマンネリズム調だったグラビヤに新風を吹込み、レギュラーのモデル達とはまた違った身近かさと親しみを感じさせたのである。一連の処刑ものに引続き、

生首ものを引っさげて登場。これに刺激されて、岐阜の水野弘氏が生首、長田実氏が夫人のものなどを発表され、S M夫婦プレイの分野が拓かれ開花していったのであつた。

折も折、私も三十九夜物語で、比較的多く夫婦プレイのものを書いていたので、箕田氏と出逢つた節、彼との連絡を依頼したが、快く応諾してもらつて爾今新宮明夫氏との文通は続いた。三十九夜物語の最終回の時、彼にのみ出席してもらつたが、多くの人々と一緒に、ゆっくり話す間もなく別れた。それ以来文通はつづいたが、彼自身、フォトの行き詰りから、だんだんと発表する情熱を失いつつ

あり、且つは奇クの方針でグラビヤ廃止も契機となつて、幾分過去存在となり果ていた近頃であつた。その新宮明夫氏が、正月頃突然夫人同伴で春に私を訪問するといつてきたから、これはまたどんな心境の変化だろうか。一度是非とはいひながら、いつも立消えになっていたのに――。

話は現在に戻る。

×

×

椿温泉は南紀白浜からもう少し奥に入る。その温泉郷から更に十数里奥深いというと、私には彼等の愛の巢のただずまいが見当もつかない。距離的にいっても同じ近畿圏にあり



ながら、東京辺りから出てくるよりは、遥かに時間がかかる。

それだけに新宮夫妻にとっての来阪は、相当の犠牲の上に立ってのことだった。

その地で彼の経営する木材の仕事をすべて指図し、段取りを済ませ、お一人のお子さんを両親に托し、三月二十四日から二泊三日の予定で訪問されることになったが、新婚旅行以来二人揃っての小旅行は始めてだと仰有るお二人にとっては、それこそ清水の舞台から飛び降りるほどの決意が必要だったに違いない。

私を訪問するという日程がきまってからというもの、私と彼との間に頻繁な文通が続いた。詳細なプレイの打合せがあり、私よりは拙宅への明細な地図、電話番号等すべて遺漏のないように連絡した。

彼にとっては、洋子夫人の気持にもっとも神経を配っていることが、彼

の手紙の端々からも痛い

ほど汲みとれた。夫としての彼にはすべてを許しても、第三者の他人である私を交えての夫婦プレイは、洋子夫人にとっては恐らく生れて始めての経験であり、未知への恐怖であったことは推察にかたくない。

口説き落した新宮さんの熱意もさることながら、夫の請願に已むなくとはいえ承知した夫人の心情は、楽しかるべき二人きりの旅行も、その果てに待ちうける夫婦プレイの展開に、いい知れぬ心の負担を感じていたのではなからうか。

しかし、思いもかけず実現への可能を掴ん

だ私は有頂天であった。三月の二十四、五、六日の三日間は、総ての私の仕事を空白の時間に置換えておいた。唯一筋、心にかかるのは彼等のプレイの代償として、私達夫婦プレイをも新宮明夫に実現させることである。この話をしてから、家内は急に食欲が減退してしまった。私の家内とても、他人を交えてのプレイの経験はない。洋子夫人より一廻りも年上の家内においてすらこの通りである。私は新宮洋子さんの切ないであろう心情を察して、有頂天の熱していた気持に、さっと冷水をかけられた思いにかられた。

新宮明夫の便りは、日が迫るにつれて、実現の日の近づくを欲ぶと共に、いよいよ大胆なことを書き送ってきていた。もし出来得べくば、自分の妻と、辻村さんの奥さんとの連縛を希望するとか、自分に代って妻をいろいろに責めさいなんて欲しいとか、少々寒くても全裸逆吊りを希望しているとか、どれもこれも日頃の願望の羅列であった。やっと機会を見つけて、ここまでことを運んで来たのだから、この際一挙に日頃の願望を叶えたいと願う、彼の気持も分らぬではないが、私とは初対面の洋子夫人が、果してどこまで協力する気になっているのであろうか。かなり馴れ



着したのである。

× × ×

玄関で車の止まる音。

応接間でプレイの想念に耽っていた私は人の気配を察して慌てて飛出す。

午後二時半、予定通りに新宮夫妻は紛れもなく私達の眼前にあった。

すぐさま、招じ入れたが、洋子夫人は玄関に佇立したまま、いっかな上ってこようとしない。初めて

対面の挨拶も未だ交していない。咄嗟に軽く頭を下げただけである。

「電話があると思っていましたよ。さあ奥さんに早く上ってもらって下さい」

私は安堵感に頬が崩れ、喜びが湧き上ってくるのを覚える。

改めて、私達は応接間で挨拶を交した。とつきの挨拶は硬ばり、どうもぎこちない。洋子夫人は言葉もなく、身を硬くしてうつむき加減である。

いつもフォトでおなじみの夫人であるが、今眼前にある彼女は、余りにも水々しく、若

く美しかった。すらりと伸びた脚線が、グラマーである筈の彼女を予想外にすらりと見せた。水色の爽やかなワンピースの上に、グレイのハーフコートの襟を立てて、ソファに私たちよく坐っている夫人の姿態からは、到底椿温泉郷の奥深き山境から出て来た人とは思えられない、近代的なセンスを身につけていた。こころもち細目の切れ上った瞳に鼻筋の通ったつややかな、やや愁いを含んだ素顔は、私を交えてのプレイを既に想起してか、はにかみに深沈しているかに思えた。

「随分こちらは寒いですネ。どうも運のわるいことに、家内が出発前夜から、軽い風邪を引きましたので、少し加減が悪いんですよ」
「奈良のお水取もすみ、彼岸も終わったというのに、何か底冷えしますネ。でも天気がいいから、少しはマシですが……。ところで、プレイ以外のスケジュール、何か考えられておられるのですか」

「お手紙差上げたようなことを、まあ頭の中じゃ考えて来ているのですが、すべては辻村さん任せのつもりです」

「しかし、あれは一寸オーバーですね。いろいろと考えておられても、いざプレイとなると、その半分か三分の一も出来ないのです

ている筈の私の家内ですら、話をきいてからというものは食欲減退を来しているではないか。さすれば、新宮洋子さんにとっても、あるいは私の家内以上の悩みを抱いているのではなからうか。それに気づくと、私は彼の気持ちに水をさす気ではないが、直ちに一筆かき送った。ぐずぐずしていると先に本人等が到着するかも知れぬから速達で出した。無理はせず、充分彼女の意志を尊重し、彼女の気持ちを主体としてその上で行動されたい——と、大体そんな主旨だったが、時既に遅く、速達を出した日の翌日、新宮夫妻はつつがなく到

よ。ご滞在の間の時間を、すべてプレイに費やすということも出来ない。箕田さんに貴方がたのことを知らせたら、わざわざ出てこられたのだから、京都、琵琶湖、奈良の方へドライブに一日どうかといっておられたが、あなたが断わって来られたので、箕田さんにそう告げておいたんです」

「ええ、とってもそのご好意嬉しかったのですが、私の気持は、千載一遇のこの機会を百パーセント活用したいと思ひまして、今回はご辞退したのです。唯明日は、家内の買物がてら、ひる前から夕方までデパートをあちこち廻ってこようと思っています」

新宮明夫氏はハキハキしたもののいい方だった。頭髮を短く刈り上げているので、それが一見老けた感じにも、若い感じにも受けとれた。いちべつすると、私と同年輩のようにも見え、話していると若さが言葉のはしほしからにじみ出ていた。意志の強い、過去の波瀾の風雪に耐えてきた容貌が、彼を精悍な感じに仕立て上げていた。

「春休み中で、子供が皆ゴロゴロしているものですから、一寸プレイには差し支えるんですが、寝静まった頃から、離れの居間を利用するつもりです。その次の部屋でゆっくり休

って戴くようになっていきますが、夜までの時間がかなりありますので、かねてのご希望通り、いろいろ私のコレクションを見ていただきますよう」

「ええ、それも愉しみの一つなんです。家内も構わないでしょうか？」

「ええ勿論ですとも、しかし、ところどころあなたの方のフォトもありますから、あしからず、あなたから送っていただいたフォトなんですが、これは私にとって貴重なものですからね。まあ時間はたっぷりあるし、ゆっくりと体を休めながら、夜までかかってプレイ談義と行きましょうや」

私は棚のホワイトホースとグラスを三つ握って机上に運んだ。芳野眉美からいただいたこの舶来洋酒も、そろそろ残り少ない。

洋子夫人は意外にワインに強かった。白磁の頬が、桜いろに染まる頃、体の線を解いた彼女は、いつしか柔かい微笑みを浮べて、彼に寄り添い、私のアルバムを真剣に見入って



いた。家内は夕餉の饗応準備にあわただしい。最初にコーヒーを運んで来て、そそくさと初対面のアイサツを交わして以来、顔を見せない。プレイに対する悩みが、家内の動作の一端にチラリと覗ける思いだった。

電話のベルがなった。箕田氏からだ。

「新宮夫妻到着した？」

「ああ、無事に……。唯今、私のコレクションを二人で見ているところだ」

やはり箕田氏なりに気にしてくれただしい。

「カメラ・ハントやるんだろう？」

「うん、そのつもりだけど……」

「ついでに対談の方も出来たら頼むよ」

「何とかネ。しかし、カメラ・ハントとダブるかも知れない」

「それは辻村隆のウデだ。対談の方は主として新宮さんの夫婦プレイのハナシなど引出してくれたいんだよ」

「今夜と明夜、夜おそくプレイの予定で、対談は明日の夕食後準備しているんだけど」

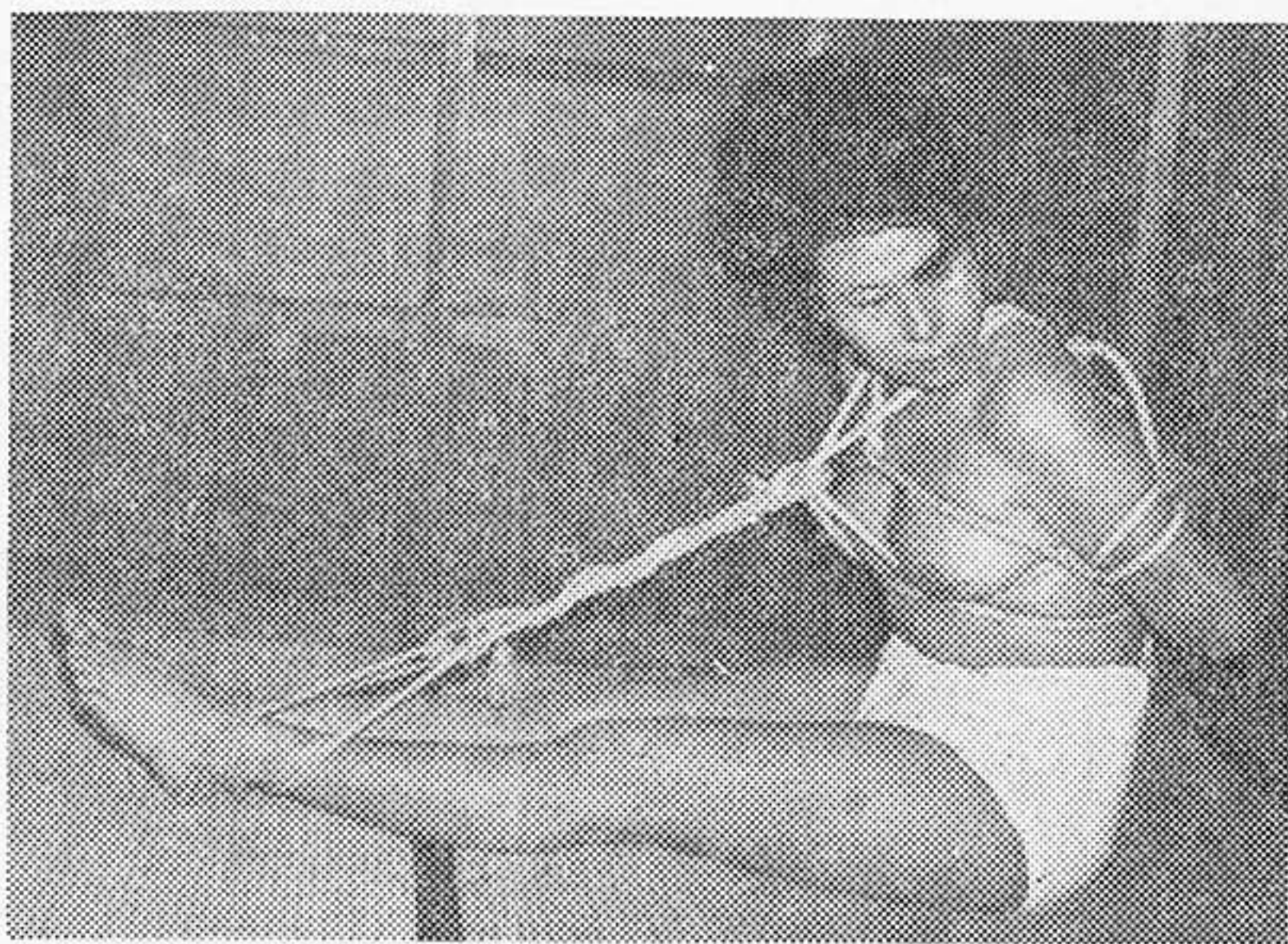
「よろしく頼む。一席もうけたかったが、機会がなくて残念だったと伝えて下さいよ。じゃあ、また電話かけてきくとするよ」

電話は切れる。カメラ・ハントと対談。いつの場合でも、私はハンターの探求心旺盛なのか、世の夫婦プレイ同好者のように、単刀直入に没我の境に入れない。いつの時もペンとつながって行動している。それが今一息のプレイの愉しさを減じる原因となっていた。すべては深更待ちという処だった。

× × ×

家内がうまくいくるめたのか、いつもなら夜おそくまでテレビに張りついている子供達が、案外アッサリと、二階のそれぞれの自室に引揚げていった。

心尽しに沸かした風呂も、新宮洋子さんが



風邪気味というので、最後のしまい風呂になっちゃった。

「家内と一緒に風呂に入るなんて、新婚以来十年経って始めてですよ。こりゃ有難い」

バスクリンをどっさり投入したのか、ジャスミンの甘い香が、座敷まで湯煙りと共に仄

かにしのび込んで来た。新宮氏は流石に照れているが、洋子夫人は既にものおじしない。夜に始まるプレイのことを考えると、夫婦二人で入る風呂など、とても恥かしがっておられる心境ではないらしい。

長い風呂だった。私達はいつも家内と二人で一緒に入れるよう、湯舟は大きく造ってある。小さい子供一人ぐらいなら三人一緒でも入れる大きさであった。ジャスミンの香に包まれて、湯舟にひたりながら、二人はいよいよ近づきつつあるプレイへの展開に、更に二人の愛情を確かめ合ってもいるのである。静まり返って、時々ザーッと湯の流れる音が、物音の絶えた午後十一時の辺りに反響していた。

湯上りの肌を桃色のなまめかしいネグリジェに包み、家内の使っている三面鏡に洋子夫人は向っていた。

私は次の間で、プレイのアイデアをあれこれと考えているが、ともすれば、今垣間みた淡い女の香を撒きちらす洋子夫人の女盛りにほちきれん許りの、ネグリジェを透して息づく肌が、瞼の底に焼きついて離れなかった。人妻にのみ感じ得る爛熟した女体の生々しさが、洋子夫人の全体から発散していた。

「背中を流してもらうなんて何年振りですか。あぁいい湯でした」

新宮明夫は旅の疲れとアカを落してテラテラ光る顔に、ヒゲソリの跡も青々と濃く、浴衣からハダけた胸毛の黒さが、彼の逞ましさを表徴しているかのようにシットリと濡れていた。

子供はまだ二階で起きているらしい。時間稼ぎのつもりで、家内に命じて日本酒とつまみをもって来させ、去ろうとする家内を引止めて四人で乾杯する。くつろぐと、口もほぐれて話は次第に、なごやかに白熱していく。

(この話は対談の方へ譲ります)

兎も角、彼等二人には、山間部に住む泥臭さを全然感じさせない洗練されたものがあつた。新宮明夫は夫人を呼ぶのに『君』という言葉を使った。結婚して十年経って、君という言葉は若い。夫人が彼を呼ぶ言葉は聞き逃したが、一度だけ呼んで、私がええっと聞き返したので、それっきり言わなくなった。土地の方言らしいが、やはりその方言に幾分の恥かしさを感じているのであろうか。音楽が大好き、ダンスとくると今も遠くまでダンスパーティに出掛けて行く、その心の若さが、夫人をいつ迄もみずみずしくさせ、しなやか

な脚をつくり、都会的センスの源泉となつてゐるに違いなかった。

「私はクラシックの方が好きなので、家内と一寸趣味が合わないんです」

新宮明夫は商売柄やタイプに似合わぬクラシック好きという言葉に私は意外だった。冗談まじりに

「おやおや、私はまた、浪花節の方が好きなタイプだと思った。クラシックっていうと、どんな？」

「まあ、例えばベートーベンとか……」

「へえ、私はとてもだ。奥さんダンス好きとあつてはジャズなんか？」

「ええ、ジャズとかクラシック。ダンス曲のスタンダードナンバーのもも好きです」

洋子夫人は幾分顔をほてらせ、なめらかな舌廻りになっていた。

「でも君、流行歌だってウタってるんだらう」とこれは彼より洋子夫人へ。

「流行歌っていうと、例えばどんなもの？」

私もハヤリウタは、年甲斐もなく好きだからきいてみる。

「そうね、今でしたら『骨まで愛して』なんかいいですわ」

「確か城卓也だった。いいですよあの歌は、私も、いい年をして、あの感じにしびれちゃう。以前菊地正夫という名で、東北なまりでへおらが東京に……とか歌ってたが、東芝レ



コードに入ってゲンとよくなりましたネ。姉が『星の流れに』の菊地章子、兄が北原じゅんで作曲、とも角歌い手一家ですネ」

こんな話になると私は雄弁。四方山話はア



私は例の如き手軽なカメラ一式。彼もとるつもりか、これはものものしく三脚からフラッシュ、カメラはコニカ。長尺リリースも私のとダブって持参してきている。

ハナレの六帖の間はムツと石油の匂いを部屋中に立竈めて、部屋の上辺部は汗ばむくらい的高温にあたたまっていた。

プレイの開始——。この一刹那こそがプレイヤーにとって一番肝心な一瞬である。

プレイに対し嫌悪を感じるのも、協力的になるのもすべてこの一刹那にかかっていた。

最初の滑り出しがよければ、爾後は徐々に成長して、満足なSMプレイへと誘導して行けるが、ここでつまづくと、コトは遅々として捗どらず不満のうちに終わってしまうことが多い。

「そろそろ始めるから、君、脱ぐか」

新宮明夫は既に第一歩から、彼の持味の全裸を妻に要求していた。二人きりの場合はそ

れもよからう。しかしここには私がいる。夫人の羞恥の立場も考えてあげなくてはいいけない。私は彼の言葉を押し止めた。

「いや、最初は着衣でゆきましょう。すべて脱ぐと、それ以上は何もありませんからね。ぬがされて行く、その過程に、女のよさがあるもんですよ」

「でも、フィルムが勿体ないですよ」

「いや、私のは七十二枚どりだ。一本とってもフィルムの値はタカがしれていますよ。バリバリとりましょうや」

新宮明夫は大体二十枚どり一本を、一回のプレイに費やし、ライトやフラッシュでやるから、そんな前戯めいたプレイが冗漫に感じられるのであろう。

洋子夫人は私達のやりとりに黙って佇立していた。夫の言葉でネグリジエの紐をときかけた手をとめ、私達のプレイへの方向を思索している。

「じゃあ、そうしましょう。家内の髪は今は短く切ってあって、コマチヘヤーって附毛つけてあるんですけど、とりましょうか」

「いや、最初はそのままでいいでしょう。今までの奥さんにないヘヤースタイルですよ。ブラジャーをつけて、着換えに持って来られ

レコレとほぐれて尽きないが、プレイの時間は刻一刻と近づいている。努めて洋子夫人の気持をホグすように、私も新宮明夫も努力していた。

「じゃあ、そろそろ、ハナレに行きましょうか。少し寒いので、ストーブつけておきましたよ」

さっと一瞬、洋子夫人の表情に緊張のかけりが走ったが、それは諦観の想念にすぐかわった。今は組上の鯉の心情なのであろうか。もうここまで来ているのだという観念が、洋子夫人をアッサリと立上らせた。

たズボンスタイルでゆきましよう。奥さんのこんなポーズは今迄一度もなかったですからね。よかったら、プレイへの最初の誘導は私がやりましよう。新宮式緊縛にはなれておられるでしょうが、辻村式緊縛も偶には変わっていいでしょう」

「願ってもないことです。是非頼みますよ。ネ、君いいだろう」

洋子夫人はうなづいた。夕方普段着用として履きかえたズボンをネグリジェの裾から再びはき終り、ネグリジェをとり、下着をとった。ムッチリとした色白の美肌が、今まざまざと私の眼前に露呈している。しなやかな脚線とは対照的に、臀部の盛り上りは逞ましく、腰はくびれて細く、胸は子供を生まぬ処女のごとく、堅しまりに締まってふくれ上っていた。画家の裸婦モデルには、もっとも典型的な豊かな女のタイプを構成している夫人の立ち姿に、私は改めて羨望に似たものをフト感じた。新宮さんの緊縛方法もやや類型に随し、その典型は胸とみぞおち辺りに二条の横縄をかけて、首縄をねじり乍ら、その横縄を結んで下に降り、股縛り若くは腰縛りとなる型であった。それが夫人には最もふさわしく、又よくマッチする緊縛であることは察し

られたが、私は私なりにその類型を破ってみたい要求にかられた。彼のフオトは、殆んどバックに黒幕を用いた。所謂オーソドックスなものであるが、それも変えてみて、ハナレの部屋で何も小道具を使わずありのままであることをにした。この要求のあらわれは、私に思い切った想念にまでかり立てていった。いつも素顔のままの洋子夫人に、一寸したメーキャップをこころみてみたい気持がおこって来たのである。

彼の諒解を得ると、私は夫人の持参した化粧品の中からアイライン棒をとり出し、眉を

少し長いめに書き、眼尻と上瞼にかなり濃いめにクロを入れた。双つの瞼から鼻梁にかけて青い隈を入れた。その粧いが、よし夫人の素顔の美しさをマイナスにするものであったにしろ、いつもの彼女にないもう一つの顔をつくり上げて見たい慾求が私にあったことは否めない。夫人は素直に私のなすがままに任せて眼

をつぶっていた。化粧が本筋でないから、極く難なよそおいになったが私は満足だった。夫人の美がこれで消えるかも知れないし、奇妙な化粧に新宮氏は不満だったかもしれない。

「時間さえもっとかければ、ぐんと変った化粧させてもらうんですが、これぐらいにしましうか」

「まあ、そんな処でいいでしょう。それより時間も経ちますから、早く始めようじゃありませんか」

今の新宮氏は意馬心猿の心境に違いなかつ



た。化粧よりプレイにと逸っていた。

夫人に対する化粧は私の氣にいったものでなかったが、私は中止した。人妻の顔をこれ以上さわることは遠慮しなくてはいけない。

フラッシュも大変だし、彼と私が同じ被写体を二個のカメラですべてとることにした。

スナップ式に、緊縛の過程をピントを合せることもなく、パチパチやれるからである。今後二度とあるないか分らないこのチャンスに、私達は一枚でもより多くとりたい欲望にかられていた。

新宮明夫がカメラを構える眼前で、いよいよ私の緊縛作業が始まった。風邪気味にもかかわらず、この夜のために遥々私宅を訪問した初期の目的に向って、観念した洋子夫人は心持ち蒼褪めて佇立していた。

「じゃあぼつぼつ始めますよ。若し縄がきつかったり体に挟まって痛かったりしたら仰有って下さいよ」

膝立てになってもらって縄をとり上げる。未知に対局して心が弾み、心臓の鼓動は急激に高まる。夫人は眼を伏せてこうべを垂れて膝立てのポーズをとった。先ず首縄をかけることからプレイは始まる。胸で二本の縄を一結びして結び目をつくり、股に通して背後に

廻す。廻した縄で後手に縛り、腕にかけてひきしめ、胸の二本に通して引き絞ると、菱形が胸に出来る。ブラジャーをずり下げたそこに、かたちよい若さのみなぎった乳房が突出している。

「私に代らせて下さいよ」

彼のやや上ずった声で私は腕をとめ、あらかた縛り終っていて交替する。私のカメラは二人に向って閃光を放つ。このポーズのあと直ちに二人で縄をとき始める。

「君、君、ズボン脱いじゃえよ」

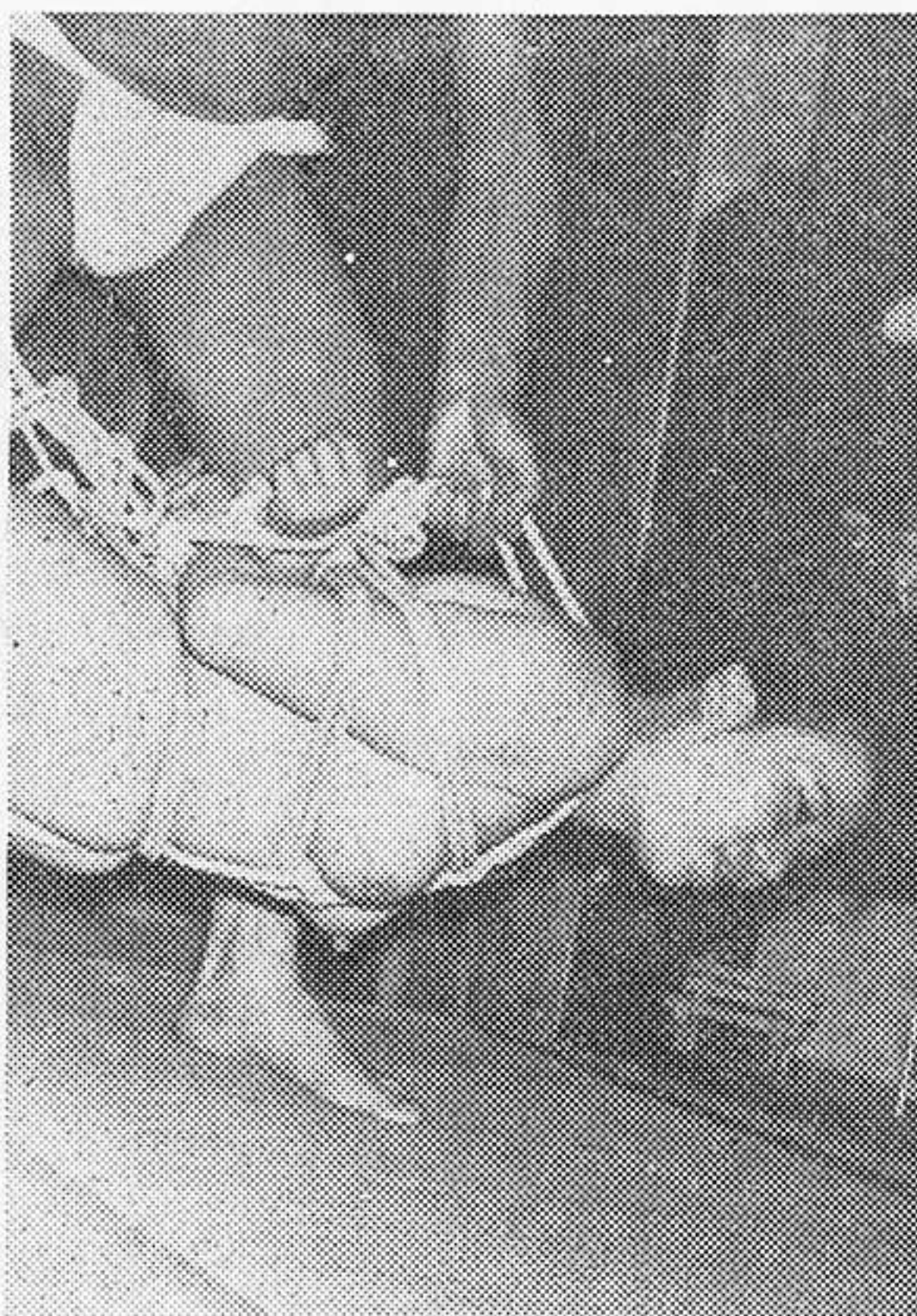
新宮明夫の声につられて、腕をさすっていた彼女は素直にズボンをぬぎ捨てる。

パンティの夫人に向って、今度はこれも新宮流には滅多に見られぬ猿轡をはめる。胸、首に縄、乳房で交叉させて高手小手縛りである。新宮明夫の弾む息で、彼の昂奮状態が分る。今彼は、私の眼前で黙々と縛られている、最愛の妻の姿に、Sでのみしか知り得ない力

ンゲキの極みにあるのだ。愛すればこそ縛りたくなり、何もかも奪いつくして止まぬ、男の真の心が露呈してくるのだ。二人のみでのプレイの、やや飽和状態に達した愛情の結末を、辻村隆というピエロを交えて、新鮮なプレイを探索しようとする、新宮明夫の真底には、愛してやまぬ妻の被虐性を、より高めようとする深い魂胆が潜んでいたのではなからうか――。

カメラの間にも、彼はかけよって、この緊縛ポーズに変化を加えていた。胸縄に更に一本の縄を通し、前かがみの夫人の両脚を縛っ





て、彼の得意である、縄ねじりを連結する縄にこころみていた。

彼の眼には、夫の命令に服従して、今ここに緊縛の姿にある洋子夫人に、激しい歓喜と優しいいたわりが交錯して瞬いていた。

ここで暫らく一服——たちまち彼は妻にかけよる。愛撫するように縄をといて行く手かもどかしげだ。私はピースを深く吸い込む。ストロブの熱気が竄って、じっとりとひたい

が汗ばみ、のどが渴いてくる。私は二人をその場にそっとしておいて、台所へお茶をとりに立った。魔法瓶と湯呑みをたずさえてハナ

レに近づくと、二つの影がシルエットとなってヒタと寄り添っていた。私は思わず立ちすくむ。軽く咳払いして、ハナレの障子をひらく、彼の手は妻の赤く条痕の残した二の腕を、柔かく撫でさすっていた。

「辻村さん、私もぬぎましようか。禪を準備して来たのですが……」

「ああどうぞ。いよいよ本格的になって来ましたな」

笑い乍ら茶を汲む私の傍らで、待ち兼ねていたように新宮明夫はクルクルと素裸になり、馴れた手付で禪をしめた。豊かな胸毛が私の眼にしみる。私には残念乍らあの胸毛の逞ましさはない。スベスベして都会的であり過ぎるブヨブヨ肥えだ。

「では次は私がやりましょう。辻村さん、とて下さいよ」

既に逸り切っているのだ。悍馬の如く洋子夫人に近づくと、さっと縄をとり上げ

「君、君、もうぬげよ。」

いいだろう」

声をかけ、新宮式緊縛法にかかり出した。

二条の胸縄、首縄よじりの股縛り。それを手馴れた手付で、彼はさも嬉しそうに着々と運んでいった。洋子夫人にも今は、私の眼の意識はなかった。いつかの夜、いつかの様に、こうして縛られて、こうしてプレイした。それと同じことが、今こで行われているに過ぎないという様に、徐々に変化していた。

殆んど先刻まで無言で通し、眼をそじていた洋子夫人の睨めは、いつしかぱちりと見開かれ、夫に甘える言葉の端しだが、小声でささやくように時偶唇をついて出る様にさえなっていたからだ。

例えば、「少しきついわ」とか「ウーン、いやよ。そんなに握じあげちゃ」とか「右手首もう少しゆるめてえ」とかETC——。

私は夢中でとりまくっていた。この夫婦のプレイには、増田みゆきと喜代司夫妻のような若さとたどたどしさはないかわり、成熟した練達さと、手馴れたキャリアがものをいう四年に亘るプレイの実績があった。

いつしか腹に縄をかけ、足首を縛って、新宮明夫は力をこめて足縄と首縄とを左右の手で握って、えいと許り洋子夫人の体を持ち上



げた。弓そりになって、瞬間ウーンと苦悶の呻きが彼女の口から洩れる。それは幾分私を意識しての、我慢の呻きであつたろうか。しかし真実我が体重の重みに耐えかねてか、皮肉に喰い入る縄目の疼きを、洋子夫人は必死にこらえている様子であつた。両手の力の限界がきて、彼は静かに降す。

フーッと、大きな吐息が彼女の口から洩れた。しかし新宮明夫は、持つ手を変え、二度三度、彼女をバーベルの様に持ち上げた。逞ましい暴虐の猛者が、狙った美しい獲物を高々と誇示するかの様に――。

き始めた許りじゃありませんか」

「でも、もう午前一時を過ぎていますよ」

「始まるのが遅かったのだから仕方ないでしょう。じゃあ、大急ぎでコスチュームでやりましょうや。折角辻村さんが準備しておいてくれたのですから……」

彼の謂うコスチュームとは、チョンマゲ姿と町娘スタイルであつた。しからば、やってくれるというなら、こちらには無論異存はない。私は更に洋子夫人の顔をえどった。しかしこれはまずかった。眉毛も下り眉毛に太く書いてしまつて、折角のキリリとした彼女の

夜のしじまを前触れもなく裂いて、春の突風が

ゴーツと音を立てて吹き抜けていった。風に揺れる葉ずれが、断続して聞

え始めた。午前一時過ぎ――。第一夜はこのくらいにしてやめておこう

と、私は息使いも激しい新宮明夫に声をかけた。

「どうですかそろそろ」

「えッ、もうよすんですか、飽気ないなあ。さっ

顔がすっかり消されてしまった。新宮氏にも眼許やヒゲを書いてあげる。

裸に着物一枚を引っ掛けて、禪一丁に大刀をさした男が女を襲うという、新宮好みの設定である。

私の下手な顔づくりに、しかも幾分小さい目のカツラをつけたものだから、手鏡を覗いて、彼女は自分の顔に笑いがとまらない。笑える程心にユトリが出来てきたというのか。

若し仮に、この町娘の緊縛フォトを黙って奇クに発表すれば、誰一人それが新宮夫人であると当てる人はいないだろうと思えるほどの変りようである。

私はもう一度顔の手直しを考えて、新宮明夫にそういつて見たが、時間を気にして、この俤も又変つていて面白かろうと仰有る。

私のカメラの前で、夫妻は激しく動き始める。着物の上から押し倒して縛り、さながら角田喜久雄描く小説並みに、順次着物を剥がし、凌辱して行き、遂には大刀を引抜いて、彼女を打首にし、切りさいなんで行く。

もう彼は夢中で、このとっておきの演技に没頭していた。すべては彼が夢^{ムビ}寝にも忘れ得ぬ、プレイの真髓を次々と演じていたのだ。時には叱咤し、時には圧倒し、そして彼自身



このプレイに酔いしれていた。私の存在など早くから眼中になかった。私は只管傍観者として、カメラのシャッターを覗いていさえすればよかったのだ。雲助と町娘。美女と野獣といった、一幅の時代めいた構図を、迫真的なプレイのうちに、その場でおのずからつくり上げていった新宮明夫は、名演出者であり、名演技者でもあった。それにも況して、彼の挑みに協調し、自分も打ちひしがれて、呻き、のたうち、悶える夫人の真に迫ったポーズは、カメラではまったく惜しい、いわば八ミリの動きを多分に盛り上げていた。二

千分の一のシャッタースピードになるストロボなれば、どんな動きに対しても、ブレることなく、確実に、瞬間的ポーズをカメラに納めていったことはいったが――。

私は或いは背延びし、或いは腹ばい、時には斜に構え、一言も指図がましい合間もなくこの数十分をあっという間に過ぎていた。

流れる汗が夫人のひたいに溢れ、かつらは無情に押しひしがれて髪はくだけていた。手持フィルムも殆んど消化した。午前三時、もう体力の限界が私にも来ている様であった。「未だ続けますか？」

感興を削がない程度にそっと声を掛けた。夢からさめた様に彼は私を振り返り、大きく息を吸い込んだ。小さい部屋に熱気は充満してノドはからからである。

「ストープをとめて下さい。夢中だったが、急に苦しくなっちゃった」

急いでストープの栓を廻し、障子をあけると、さっと冷気が部屋に押し

よせて来た。

あわてて障子をしめ、そこで私と彼は煙草を手にとった。

「奥さんを解いてあげないの？」

「いや、もう少しこうしておきましょう。あして、苦しんでいる姿を、もう少しこの眼に灼きつけておきたいんですよ」

じっと彼は妻を凝視していた。そして物懶げに近よると、のろのろと縄をとき出した。

「午前三時です。もうこの俤にして休みましょう。寝床は次の間にとってありますから」

彼に声をかけて、ぐったりと喘いでいる夫人をチラリと見やり、私はそそくさと片付け始めた。気味悪い許りの静寂が辺りを包んでいた。

× × ×

午前十時、腫れぼったい眼を交して、私達は朝食を終る。今日も風は冷めたく、空はどんよりと暗い。洋子夫人も元気がなく物懶げだった。風邪の体に長いプレイは、少し体をこわし、風邪をこじらせたのかも知れない。

それでも予定通り、ひる前新宮夫妻は打揃って雑踏の街へ出掛けていった。

「昨夜のプレイ賃に、今日は大分デパートでねだられそうですよ」



彼は苦笑し乍ら、出て行き掛けに私にそう囁やいた。

夕方までは我が家の時間、何となくホッと
する。昼下りのテレビを見乍ら私はいつしか
ウトウトと仮睡していた。僅かの間の夢の中
に新宮洋子夫人の面影が浮び、その豊満な体

に圧倒され乍ら、私は必死になって唯一人で
逆吊りを敢行しようと汗をかいていた。私も
禪一本の裸。縄を梁にかけ乍ら、その重さに
負けて、どんなに縄を引いてもいっかな上り
そうにない彼女に、私は懸命に挑んでいる。
その私の滑稽な姿を、緊縛されて地面から見
上げる洋子夫人の顔に、憐憫の苦笑が走り私
を笑っていた。いつか私が両手足を縛られコ
ンクリートの地面に転がり、洋子夫人が縄を
引いていた。私の体はまるで軽石のようにす
るすると逆吊りに上り、洋子夫人が大きく笑
った。血の気の下った私の顔面に立ちはだか
った彼女の体から、さんさんと輝やく太陽の
光を浴びてキラキラ光り乍ら、生温かく降り
そそいで来て、私はハッと目覚めた。心に冒
瀆の観念が去り、束の間これが正夢となる日
を想って、フト心が騒いでいた。

「ウンウンいってましたわネ」

家内がそういってお茶を入れていた。こん
な夢を話したら何ていうだろう。私は大きな
アタビにまぎらわせて、心は今頃何処を歩く
か、新宮夫妻の周辺に思いをはせていたので
ある。

× × ×
「遂々、ダンスをせがまれちゃって、疲れて

いるのに踊って来て、クタクタになりました
よ。それにしても土曜日の大阪はタイヘンで
すネ。人の浪でしたよ」

夕食を共にし乍らの、新宮明夫の述懐であ
る。きけば夫人は近頃流行りのモンキーダン
スマでやるらしい。ダンスがメシより好きな
んだそうである。Fホールのあの広いフロア
で、エレキの強烈なリズムに合して踊りまく
る、洋子夫人のあで姿を、私は一眼見たいと
思った。

夕食後、洋子夫人は私の子供達とぶらりと
散歩に出たが、帰って子供の話をきくと、食
後半時間たらずなのに、お好み焼をたべてき
たとの事だった。その健啖ぶりは大したもの
である。昨日初めて来訪した時に引きかえ、
よく喋べり、子供達と談笑していた。

「あれが家内の本当の姿なんですよ。未だは
たちぐらいの気持でいるんですからね。のん
びりしたものですよ」

「いやいや世帯じみなくて何よりですよ。妻
はいつつ迄も若く美しく、そして新鮮でいてほ
しいものですよ。あなたのところは子供さん
一人だが、うちじゃ四人、新鮮さはありませ
んよ。私達の仲はプレイを通じて到っていい
ことはいいいですが……」

「その点有難いと思いますよ。女房はダンスで、亭主は子守って状態でも、私は妻を心から愛していますよ。世間相場なら悪妻みたいでも、夫の私にとっては愛妻なんですネ。辻村さんはモデル相手に随分撮っていらっしゃるが、私は家内一人です。これから若しかりに機会があったとしても、やはり私は家内一人を守り通し、家内一人のみに満足して、似たようなフォトリ許りを取りつづけて行くだろうと思います」

けだしこの新宮氏の言たるや、妻を愛するの一言に尽きると思った。

話がこうなってきたので、私達は応接間に場所をうつし、夫人をオブザーバーにして、夜ふけまでの時間を「対談」にきりかえた。改めて対談しなくても、一緒に起居を共にするこの一両日に、私は彼等の人となりを知り生活をしり、プレイの様相を知り得た。反って対談と改まると、話が弾まない。何となく奇クへの世評、あり方などを話すうち次第に話が佳境に入る。

今夜にはもう一つ目的がある。新宮明夫が期待しているプレイとは、私達夫妻のSMプレイ。それにしても時間が勿体ないが、やっ



時間はきたようだ。

「私、もういいんでしょう？」

最大の義務を果し終った顔付で、洋子夫人はさばさばといった。私の与えられた役目は終わったという安堵感が、いっときに空腹と結びついて、夕食後の好み焼となったのであろうか。

それに引換え、家内は夕食もロクロクとっていない。刻々と迫る私とのSMプレイに対し、深刻に悩んでいるに違いなかった。私と二人だけのプレイなら、如何なることも許容する妻も、第三者介入となると、そうそうおいそれとは出来ない。私はいみじくも水野弘夫人のことを思い出した。京都のT氏が、岐阜まで遙々プレイに出掛けてくるときかされて、水野夫人は数日食事がノドを通らなかつたと、あとで聞かされたが、さもありなんと今ここに切実に自分等の立場に立到ってきてしじみと感じた。恐らく洋子夫人も同じ思いだったに違いあるまい。昨日のあの切迫した顔、それに引換え、好きなダンスを愉しみ子供達と語る明朗そのものの顔、これが到底同一人とは思われぬ変りようであった。

子供等が引揚げるのと相前後して、新宮夫妻もハナレへと引揚げていった。新宮明夫と私との間には、二人のみの密約があった。否応なく私達も間もなく始めねばならない。

× × ×

雁字搦自に家内を縛り終え、目隠し猿轡をはめて、私はヤレヤレと思った。もう妻も観念していた。心の重さを払うように先程のんだ酒の匂いが、スツと妻の体から洩れてく

る。酒でもものまねば、やり切れなかったに違いない。今夜許りは、辻村隆の妻たることを悔いているに違いない。

妻の述懐を聞けば、自分と同程度の体なら劣等感も感じないが、新宮洋子夫人は余りにも豊満すぎ若かった。確かにそれは私にとっても苦痛だった。若い娘達を縛りつづけてきた私にとっても、妻の緊縛は今更痛々しかった。約束とはいえ、後に引けない気持で応じたものの、年令的に肉体的に、どう見ても洋子夫人より見劣りする妻を、彼の眼には曝しなくなかったが、私の妻で、彼の喜びをみたせれば以て瞑すべし。私は何とか妻を納得させてここまで運んで来たのであるが……。

「洋子夫人の様に、お前だってもう十二、三年若ければ、見劣りしないさ。その心配はないよ。彼女だってお前の年になれば同じだよ」こんな言訳も内心は心苦しく、しかし私は約束通りハナレに足音を忍ばせて行った。

既に洋子夫人は、深々と布団をかぶっていた、睡っていたか、仮睡をよそおっていたかは私は知らない。しかし布団は微動だにしない。新宮明夫は、服のまま手持不沙汰に私の呼び掛けを待ち兼ねていた様子だった。

二人して引返す。そして茲で私達夫婦のプ

レイが、新宮明夫の眼前で展開される。

プレイの模様は、唯一人新宮明夫のみが知る激しきであり、今茲に描く必要もない。私達夫婦のやむにやまれぬ成行上のプレイだったのだから。

しかし、昨夜の借りを返した気持だった。山間から遥々と出難いところを、夫婦打揃ってプレイのためやって来た夫妻に

対して、これがせめてもの私達同好者のお返しといえるものであった。

『濡れぬ先こそ露をもいとえ』という言葉はさながらプレイの場合、ピッタリといっているほど当て嵌った格言である。

洋子夫人も私の家内の場合も、プレイが始まり、一旦もう既に露に濡れたとなると、あとは一瀉千里、日頃のお互いの二人同志だけの場合のプレイに還元して、第三者の眼が気にならなくなる。新宮明夫のプレイに対して私は私のそれなりに、何とか彼等以上のもので酬いたかった。それが妻の肉体的、年令的



劣勢をカバーし得る唯一の手段であったからである。

「ああ、感激しました。驚ろきました。来た甲斐がありました」

プレイのあとの放心のひととき、新宮明夫は讃嘆ともとれる呟きを残して、そそくさとハナレへ引返した。彼のあの精神状態では、夜明けまでひねもす眠れず、夫人を求めて疼いていたかも知れない。

私は役目を果し終えた妻を、強く抱きしめた。（よくやってくれた）そんな感謝の言葉は反ってよそよそしかった。抱きしめて頼ず

りし、妻の乱れたおくれ髪を静かに撫でてやっていた。無言の思いやり、それが今の私達には最も安楽と休息のポーズであった。

× × ×

再び夜が明けた。いつもは早起きの妻も今朝は流石に遅れた。そして新宮夫妻の憩うハナレからは、ひる近くなっても起きる気配もなかった。いつまでも寝かせておいてやろう。彼等は私達の家で今やすっかり心を許しているのだ。そして安息と愛情を確かめ合っ

ているに違いないのだ。

朝食、昼食が兼用になった食事。新宮夫妻は晴れ晴れとした笑顔で、旨そうに朝食の味噌汁を啜り、昼食の菜を片端しから平らげていった。

「気が向いたら草深いところですが、是非来て下さいよ。その時又、愉しみにしていますから——」

私も行きたいと思う。こんな機会は二度とある様なない様な。もしあるとすれば私達夫

◎本誌二〇〇号突破記念◎ △原稿募集▽

▽内容△

一、特異なる風俗文献誌を標榜する本誌にふさわしい内容の力作をお待ちします。
一、見る雑誌より読む雑誌として脱皮するため、後世に残しておきたい文献的価値のある資料は、長短に拘らず歓迎します。
一、S M の他、フェテツシュ、切腹、女闘美、女相撲などは勿論のこと、新しく登場した生首狂崇、妊婦嗜好などの例にみる新分野の開拓を大いに期待します。
一、形式は創作、小説などのフィクションも結構です。自らの体験をお持ちの方は告白も大いに結構です。更に論説、意見、感想、手紙、随筆、シナリオなど、最も効果を發揮できるものを、お選び下さい。

一、内容については、今後毎月課題を出したいと思っております。

▽規定△

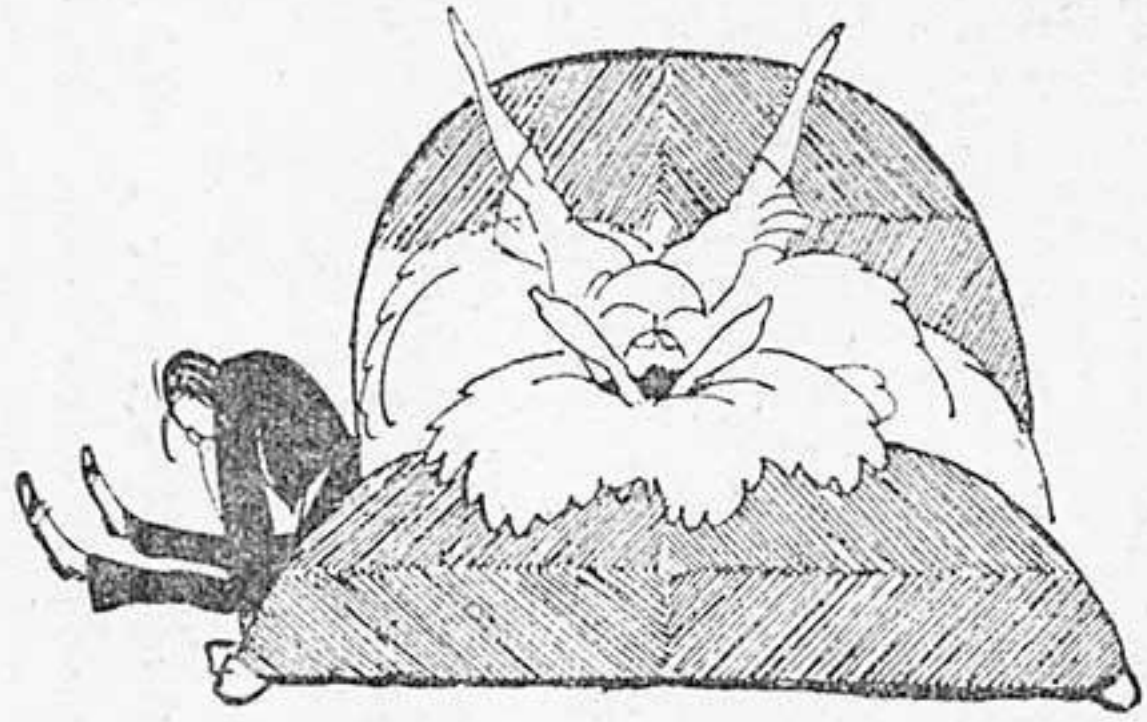
一、作品はすべて未発表の自作品に限ります。引用部分の出処は明記願います。
一、枚数は一切御自由です。
一、締切日は別に定めません。優秀なる作品は、最近号に掲載いたします。
一、採用原稿に対しては、作品相当の稿料をお支払い致します。
一、御送稿は開封第五種便（五〇グラム毎に十円）にてお願い致します。
○以上の内容規定にて、奮て御応募下さらんことをお待ち申し上げます。

婦が彼等を訪問した時であろうか。

彼の謂う「愉しみ」それはズバリ、プレイへの一言に尽きた。風は納まり天気はよかった。今日中に或いは帰り着かれぬかも知れないが、その時は白浜温泉辺りでもう一泊するつもりだと新宮氏はのんきだった。ずっと持ち続けて来た目的を果し終えたあとの、空虚さと満足感がミックスしてか、彼に來た時程の意気込みは見られなかった。

二人を送り出した空は、晴ればれとさわやかに照り渡り、昨夜、一昨夜のあの異妖な雲囲気とムードは、私達の周囲からは毛頭感じられなかった。僅か二泊の旅に着換え類やら、カメラ類を持参した、その重いトランクを持たされた新宮氏とは対照的に、白皮の洒落たバッグを腕に提げて、新宮洋子夫人は、こぼれる様な笑顔で振りかえり振り返り手を振って消えていった。その手は私にはなく、同じく手を振って送る一夜でなじみになった子供達へであったにしても、私にとっては、スタイルブックから抜け出したような、鮮やかな肢態の、彼女の後姿をいつまでも、いつまでも、網膜深く灼きつけて見送っていたのである。

(おわり)



濡れにぞ

濡れし

△春夜半▽

芳野眉美

四十年度の読者通信から

浣腸の好きな女性

責めてほしい女性

なんとなくの女性

お尻に敷きたい女性

男一対女二

夜行動物の飲料水に就いて

三月廿九日春夜半

四十年度の読者通信から

寝そびれることがあるものだ。どうしても眼が閉じてくれない。商売がら、アルコールを丁寧に体内に流し込むのだが、酔うのも早ければ醒めるのも早いというあまり有難くない体質なので、アルコールが睡眠剤になるわけにはいかない。むしろ適量のアルコールの

結果、親子して寝そびれて、おたがいに慰め合うのが落ちである。親は亀井勝一郎の『現代人生論』などを開いて、

「人間である限り、なんらかの遊びなしには生きられない。むしろそれは快楽でなければならぬし、快楽の連続を欲するということだけはたしかだ」

とか、

「人間は実に遊びたがっているにもかかわらず、遊び方、遊びの技巧をほとんど知らないでいる」

とか、

「其の道徳家とは、遊びのあらゆる様相に通じているものでなければならぬ。その楽しみにも痛みにも」

とか、道徳的な顔をして、読んでいるのだが、息子のほうはさっぱり面白くないから、やたらに反抗して聖なる読書を妨害するのである。

そこで、セイはセイでも、性なる読書をしようにと二人の趣味はたちまち一致して、四十年度の読者通信をまとめて一冊にしたのを書類入れから取り出した。これで安心して親子ともども読書に親しめる。

女性の通信だけを拾って読むのは親子とも

健康で寝そびれてしまった男だからである。男性諸氏の通信がつまらないわけではない。それにしても、現代女性は浣腸が好きで、アヌスの好きな息子はますます興奮して、寝るどころか逆効果になってしまう。

△浣腸の好きな女性▽

——西原アサ子さん（東京）

「最近どういうわけか便秘しがちなので、薬局へイチジクを買いにいきましたが、恥かしくてとうとう買えませんでした」

とある、微笑ましい。

「お通じがないせいか、人前でもいつも顔が赤くなるようなことが起ります」

いけませんねえ。もじもじですね。

「時々、他の女性の方からイチジク浣腸をしていただけたら、と思っております。おはずかしい事ながら……」

上手な文章ですね。

「静かな部屋の中で、お互いに浣腸をしてなぐさめあえたら」

いいねえ、この感じ。

——青木恵子さん（岐阜）

「妹に美人になりたければ、浣腸をすればいいわと教えて」

いる明朗なおじょうさん。

バスト九一センチ、ヒップ九七センチ、ウエスト七四センチ、体重六八キロ、身長一米六九センチ、とくわしい。二十四才、未婚。「四つ年下の妹と二人でアパート暮らしをしております。もし私を責めて下さる忠実な方がありましたら、一度たずねて来て下さい」とあるのだが、さて？

「浣腸液やオシメなどは用意してあります」
そうだ。

以上、四十年三月号読者通信。

——中村優子さん（川崎）

「はじめてお便りを差し上げます」

という女性が多い。中村優子さんもその一人。二十一才。

「私は色々なプレイの中でも、アヌスプレイが一番好き」

とある。即ち、

「手足の自由を奪われて、浣腸で責められたら」

ということ。そしてまた、西原さんと同じ様に、同性のパートナーを求めているらしいものも、若い女性の共通点かもしれない。

「私をご指導して下さる方（特に女性の方）写真同封の上お便り下さい。」

四十年五月号読者通信より。

——大西まさ子さん（名古屋）

「おなががはって浣腸されたのがきっかけ」とありますが、皆さんそうなのでしょう。

「別にS的な気持などでなく、同好的と看護的な気持のあらわれと思っています」

そういうことです。別にSMを強調することはないのです。自然にいきましょう。

「ほんとはプレイをしたいのですけど、いきなり未知の人とは無理ですわ」

無理はしないことです。

「私も浣腸されてもいいと思っています」

浣腸をしたくなるなあ、もう。

四十年八月号。

——佐々木典子さん（東京）

「ホテルのようなムードのあるところで、恥かしがる私を押さえつけて無理に浣腸していただけたら」

二十一才、BG。

「同好の女性からのお便りをお待ちします」

と、これまた同性を求めているらしい。浣腸と同性愛（とまでは、いえないでしょうが）の関係でも調べてみましょうか。多いですよ。

四十年十月号。

△責めてほしい女性▽

——志村善子さん（神戸）

SMカメラハント「しなやかな女獣」四十年六月号で、豊満な白い裸体を見せてくれた志村善子さんの、はじめての通信が一月号にある。

「誰にも知られず緊縛のモデルになってみたら、と考えてひとりで愉快になっています」と一人で喜こんで、

「一度辻村先生のモデルになって飼育されてみたいけど、先生のご都合如何でしょうか」この結果は右の通り。皆様すでに御存知。

洋裁、花、お茶と花嫁修業中。

「口絵の第一頁に載っている私の緊縛ポーズを、誰も私だとは知らない。私だけの秘密。未来のハズにこれ私よ、といっても信用しないなんて愉快じゃございませんこと」

バスト八五センチ、ヒップ九一センチ、身長一五八センチ、体重五二キロ。

彼女の裸体の海老責めは悩ましい。

だからさ、投稿してみるものですよ。ネ

——藤島万寿子さん（京都）

「プレイ以上の関係は断固お断りですから、徹頭徹尾紳士的で責任の持って下さる方」

「中年の方で妻帯者、そして奥様を心より愛しておられる方」

「プレイは月一、二回で昼間です。ホテル代等の負担に耐えられること」

「そして、私の名前と住所は絶対にお尋ねにならないこと」

この手紙、実感がこもっているとは思わない。二十一才女子大生。いい線いっている。

「生来のMで、あらゆる責めに耐えうる自信を持っています」

とある。四十年五月号。

エリートの手紙らしい。

——花山千鶴子さん（東京）

「何かみたされない気持が、男性におもいきりいじめられたい縛られ恥かしめられたい、責めて責めて責めぬかれないという気持だったことがわかりました」

という優雅な手紙は、

「彼のやさしい愛撫に身をまかせてはげしくもだえるのですが……何かみたされない気持がして」

という赤裸々な問題を含んでいたとは。

「恋人には恥かしくてとてもいえません」不思議な女心。よくわからない。

「ひそかに、この願いをかなえていただきとうございます」

恋人よ、許せ。

「全裸にされ、えび責め、股間縛りと、責められ恥かしめられてもかまいません。ただむち打ちだけは、体に傷がつくと困りますからお許し下さいませ」

そうです、そうです。

二十一才のBG。色白で面長。

「人目のつかない所でしたら、戸外でもけっこうですけれども……」

山の中で裸にしてみたい。

——井手雅子さん（大阪）

Mのムード派のたよりを一つ。

「後手に縛られたまま、夜のドライブを楽しむとか、散歩するとか」

下着を何もつけないでレインコートだけを着て散歩するとか、おしめをして喫茶店に入りそっとおしめを濡らすとか、ネ、ムードでいきましょ。ムードで。

以上四十年十二月号より。

そうそう、ただ莫然と手紙を書いたのが、四月号に三編集集中していて面白かった。より現実的な手紙である。

△なんとなくの女性▽

——山村幸子さん（大阪）

「去年の夏、夜店で偶然見つけてから愛読するようになりました」

という二十三才のB.G.

「自分では何故、どこがひかれるのか、はっきりわかりません」

「読みたいという気持には抗しきれず」

そういうものですよ。

——杉田静子さん（兵庫）

「雑誌を読んでから、矢もたてもたまらず、どなたか異性の方にいじめていただきたいというような気持がわいてきました」

「ただ空想を抱いて」

「もう十冊ばかり、私のトランクの中にしまわれております」

という化粧品店の女店員さん。

——河村隆子さん（大阪）

「SとかMとかは存じませんが」

「一度モデルに使って」

二十三才、小麦色の肌、離婚の経験あり。

「お店に来られたお客さまから貰いうけて読み、生まれて初めてこの様な世界もあったのかと驚き」

世界が広くなって幸です。

△お尻に敷きたい女性▽

わが息子の喜びびそうな通信が、六月号と十月号にあった。

——太田恵子さん（東京）

「私はサド性の強い女性です」

と、この物語は始まる。

「都内の映画館に、私一人にて映画見物に行った時の事です。」

「私が二階の一番あとの方で見ていたら、四十才位の男の人が私の横に座り、お茶にさそわれました」

よくあることです。

「その後、初めて奇クを見せられ、私に顔の上に座るようにたのむので、私も面白半分に坐ってやると、私にネクタールをのませてくれというので、私も初めはイヤダといったのですが、あまりにたのむので、のませてあげたことがありました」

小学生の作文みたいだけど、好きだ。

「私のお尻の下になりたい人、又、私のトイレになりたい四十才以上の人は、私の所に返事を出しなさい」

ということでした。ハイ。

——長谷川洋子さん（東京）

「人間トイレの希望のようですが、ほんとなのかしら？ 少しはずかしいけど、私のお尻のニオイをカガセたら、どんなだろうと思うと、胸がワクワクします」

二十三才の女店員さん。

「犬にしてほしいなどとずけずけいいいますけど、犬は小便でも大便でも平気でナメるわ」とずけずけ書いています。だから、私の小便でも大便でも犬のように、ネ、なんて書きたかったのでしょう。ショック。犬のようにナメたい。

「三十から四十ぐらいの人、私に組伏せられ縛り上げられたい男、私の大きいお尻に顔を敷かれたい人、応募なさい」

——小川雅代さん（伊豆下田）

「世のM男性諸君、誰か私の奴隷希望者はいませんか」

「忠実な奴隷ボーイを二三飼育実験してみようかと思いました」

「本当に心の底から忠誠が誓える人、死ぬまでに只の一度でもよいから女性に奉仕してみたいと願いつづけ、そのみに生きつづけてきた人」

次第に条件がむづかしくなる。

「人格的にも社会的にも経済的にも安定した

人で、私の為なら生命も財産もすべて捧げられる人を、二三四月極め、又は半年契約位で専属奴隷として採用してあげる」

彼女二十才なのだけど、とても二十才の女性を書いた手紙とは思えない。

「ムチと神酒で誓約させる」

瑛峨美智子に似た美女。

「私の足で踏みつけられたい方は、どうぞ」

同じ七月号に、佐川奈津子さんのケツサクな通信がある。四十年代の女性の手紙の中で彼女のが最高に面白い。

——佐川奈津子さん（芦屋）

「奴隷募集で手に入れた奴隷男は、結局ろくなのはいませんでした。やはり家の中の下働きは労働する意志の男ではないと勤まりません」

「とどのつまりは、自分が楽しみたいというさもし根性のなさけない男ばかりで、とても女王様に奉仕するなんて、大それた考えは持てそうにありません」

「いやいじめてほしいだの、ムチをほしいだの、足を舐めさせてほしいだの、それじゃまるで私の方がサービスしてやってるみたいじゃないの」

「女王様として奴隷を飼ったら、気が向かな

ければ一月でも働かせばなしで、顔も見せてやらないって主義なのよ」

「だから採用した奴隷男は、皆逃げていってしまったわ」

「私の方では、安い給料でマゾ男をこき使ってやろうと思ったのですが、これも甘い考えだったわけですね」

「こんな有様で私もがっかりでした」

本当に私もがっかりでした。

「こちらからサービスはしませんよ。それでよかったら、どうぞ」

と再び奴隷を募集していらっしゃる。

遊びと仕事はちがうってことですよ。

M男はS男より、神経がこまかくて、図う図うしくてむづかしいものなんだ。

これを読んでは、我が息子もやっとなる気になったらしい。

「佐川奈津子さんの神酒を飲んでみたいな」

寝ごとをいうのではない。

終りに、夫婦プレイを。

△男一対女二▽

——松田美恵子さん（高松）

「結婚前から少し夫に変わった癖があるとは感じておりました」

「今ではすっかり私がSMの耽美に引きずり込まれて」

「本当にこんな楽しい刺激があるので、今でも新婚生活に変わらない楽しい生活を送っています」

幸せ。美恵子夫人二十九才、一児の母。御主人は三十六才。

「三十一才の女性の方と、もう二年ばかり交際しております」

「三人仲良くプレイ致します」
いいのかなあ。

「その方はSがかった好みで主人をいじめ始め、二人共本気でプレイしたりするので、私もしまいには少々ジェラシイがわいて困ったくらいです」

幸せ。

「御夫婦の方と交際したいのです」

夜のアルバムは六七冊ある由。八ミリも。

御夫婦で楽しむのは最高。俺も結婚しよう。

気がついたら、朝刊が来ている。腹もへった。親子ともどもくたびれて、朝めしを食って寝ることにした。夜になれば眼がさめるだろう。そうしたら商売を始めればいい。夜行性だから仕方がない。いい天気だ。

夜行性動物の

飲料水に就いて

三月二十九日春夜半――

店の前に、ギャラクシーが止まった。窓から顔を出したG氏が、ヒッカケニイカネエカ、といった。午後十一時である。

「店なんか閉めてしまえ」

「いわれなくたって閉めるよ」

Gの運転は乱暴だ。乱暴でも、ギャラクシーは図体が大きいから死ぬことはあるまい。ホンダスポーツは、おことわり。俺の友達にすっぽり入れるところを、何を感じたのか、ダンプの下にすっぽり入れてしまった奴がいる。スポーツカーも型無し。

六本木にでる。

外国の女性が集るバーがあるのだが、ノ

★代理部の分譲品について★

○本誌上に只今広告してありますものは全部在庫しておりますから、お申込み次第直ちにお送りいたします。○お申込は（大阪市阿倍野郵便局礼書箱第十四号八天星社V）宛に願います。○御希望の品名は、必ず△略号Vにてお書き下さい。

ネクタイではことわれるから、そのまま通過した。二人ともネクタイを好きなほうではない。締め方も知らねえのじゃねえのかな。

ノーネクタイでもいい一軒のバーに寄る。

ここに来ると、作家や俳優やジャズメンに会ってから面白い。別に興味は無いけど。

カウンターで、女の子が二人で飲んでいるのを見つけ、Gはすかさず側の席に坐る。話を進めるのはGで、断じて俺ではない。俺は無口だ。ステーキをつくってもらい、スカッチの水割りをチビチビ飲んでい。運転するGはあまり飲まない。とにかく、なんでも飲むのは俺である。ソウイウコト。

女性同志で飲んでいるのは、別にめずらしくはないが、今夜の彼女たちは、あまりいただけない。そのせいか、Gの口調も熱が入らない。交渉不成立。そのほうがいい。

Gは童顔のギャンブラーである。金さえもつかれば、ハントといく。いいねえ。

午前零時、新宿に出る。

そろそろ、キャバレーのホステスさんの帰り時間なのだが、恰好の相手が、そう簡単に見つかるものではない。クラクションはなかなか鳴らない。夜のドライブだけのことも多い。

と、ライトに、すんなりした二人の女性のうしろ姿が入った。長い髪を無造作にたらし、二人は、レインコートを器用に着こなして、まるで姉妹のようだ。

ずっとギャラクシーが止まる。

「乗らないか」

とGが声をかける。

「近くなのよ」

乗って来ない。

「近くでもおくるよ」

「歩いたほうが早いわ」

「君たちとは初対面じゃないんだぜ」

Gは平気でウソをつく。

フフと二人が笑った。ウソはすぐバレる。

バレてもかまわない。

「とにかく乗れよ」

「素敵な車ね」

と妹のほうが乗る気になったらしい。

「ねえ、ドライブしようよ」

成功。

妹がさっとGの側に坐った。これで二人の取り分は自然に決まる。

二人はヌードモデルだった。似ていたが、二人は姉妹ではない。一緒に生活しているとなんとなく似てくるのかもしれない。

ギャラクシイのうしろの席は、ゆったりしてベッドになる。ベッドになっても、別に使うつもりはない。俺は紳士だ。ウソツケ。

「お店に伺います」

と云ったら、

「ゆかり、です」

と電話番号を教えてくれた。

高速道路に入り、ネオンの東京タワーを一周する。

寿司屋に寄った。Gがビールをぐいぐい飲みだした。つられて二人のモデルも飲む。

さて——本番は、ここからだよ。

車の入れるホテルに直行。さがさなくてもGは知っている。ホテルの前に立つと、ゆかりが腕をつかんだ。時計を見て、

「三時までには帰らせてね」

「それまで身体がもつかな」

「馬鹿ね」

Gからブンドッタ五千円札を、ゆかりのハンドバッグに入れようとする、

「そんなつもりじゃないわ」

「俺のじゃないよ、とっておけよ」

「有難う」

上と下に二組は別れる。

「いいか、三時までだぞ」

Gに念を押さないと、朝まで彼女を返さない。Gはいやになるほど精力がある。

ヌードモデルだけあって、裸になると、均整のとれたしなやかな肢体であった。ほっそりした肢体に、思いもかけない豊満な乳房がふっくらとゆらいで魅了した。

「何をそんなに見つめるの」

「すばらしいからさ」

「お上手ね」

ポーズをつくって部屋を歩く。体毛も美しく、小麦色の肌も荒れていない。

「綺麗だ」

「お湯を浴びるわ」

ドアがノックされて、女中さんがビールを運んで来た。Gが注文したらしい。

「湯上りの一杯といくか」

ビールを飲みながら、くどきにかかった。

「そんな話、本で読んだわ」

客が、雑誌を店に持ってくるらしい。

「飲ませたことあるの」

笑って答えない。

「いろんな客がいるわね」

「飲ませたこと、あるのでしょうか」

「さあ」

客あつかい慣れていると、みた。アイシャ

ドウのせいかな。眼が濡れて見える。

「まあ、ビールをどうぞ」

「おトイレに行かせるつもり」

「そうですよ」

「そうはいかないわ」

ゆかりは知っている。うれしくなった。

「その前に」

立ち上って、ゆかりに顔を近づけた。

「キスしてもいい」

「聞く人がいるかしら」

「そうだね」

しばらくして、

「あたならいいわ」

とゆかりが云った。

「どうやって飲むの」

「そのままでもいい」

ゆかりは、全裸で、椅子に腰掛けていたのである。

それから……

＜女奴隷の告白＞

冬子の日記

(その二)

山中冬子



○月○日

春だというのに、暖かくなったと思うと、また急に寒い日があたりする。一糸まとわぬ身でいるのだから、とても困る。早く暖かい日が続くようになってほしい。でも、ご主人様との契約期限ももう少しで終る。そのあとどうしようか。長かった一年。その大半を動物のように暮した。逃げ出したいとも思っ

た。けれど、今の冬子は本当にマゾの女に仕

○月○日

立てあげられてしまったのだろうか、まだこんな生活を続けたいような気持ちが、心のどこかにある。お金も欲しいし……。始めは、お金のためばかり考えて苦しみに耐えてきたのに……。

○月○日

色々お話ししているうちに、ご主人様が「冬子に鼻輪をつけてみたい」と云われた。私が一番恐ろしがっていることだ。でも、本気ではないらしいので安心した。そんなことがあったせいか、夢で鼻輪をつけられた。夢をみて、一晩うなされた。夢の中で、冬子は、鼻輪に鎖をつけられて、四ッ這いになっている。どこと判らないが、大ぜい人通りがある。誰かが鎖をひっぱる。冬子は這って歩く。何だか、人が何人かで笑ったり叫んだりしている。とても恥ずかしい。「立て」と云われたような気がする。立ち上って直立不動の姿勢をとる。鼻輪から垂れ下った長い鎖がお腹の上をとって足下にまでのびている。すっぱだかで、鼻から鎖を垂らしている。情けない恰好。みんなが見ている。笑っている。悲しい。泣いている冬子……。

鎖がガチャガチャ鳴った。それでやっといやな夢からさめた。鎖は前手錠についているだけだった。鎖はベッドの足につながれているだけだ。裸で寝ているというのに冷汗をかいていた。鼻に何もつけられていないのを顔をふって確かめてみる。ああ、よかった。

ご主人様は朝早く出かけられた一週間ぐらい来れないと云う。今日は、水道工事とかで水道がとまってしまった。お風呂がわけない。

「冬子、銭湯へ連れてってあげる」とくみさまが云われた。でも、お手伝いさん達につれられてお風呂にゆくのは、前に二、三度あったが、この家の風呂場と同じような扱いを受けるので、恥かしくてたまらないのだ。

「今日は、お風呂は結構です……」と云ったものの、「ダメダメ、昨夜、旦那さまにいいめられたんだろ、汚れてるんだから」と云われ、結局連れて行かれた。

こんなとき、トミ子さまのセーターやスカートを貸してもらってゆくが、下着は許されない。午後の三時ごろなので、まだお風呂はすいていた。肌着がないのに気づかれないように他のお客の眼をさけて、さっさと裸になるより仕方がない。湯につかっているときは、のびのびできるが、体を洗うときが一ばん辛い。今日も、いつもと同じだ。

「あの、自分で洗いますから」とくみさまに云う。

「そう、きれいにしなきゃ駄目よ。あんたが汚れてくると、あたし達が叱られるんだから

ね」と云われる。

恥かしいことだが、他人の前で、お手伝いさんたち二人に、体を洗われるのは辛いので、自分で洗うのだが、自分の恥かしい所を丁寧に洗うのは、人眼を意識してしまって、中々やりにくい。「そんなことじゃ駄目だね。やっぱり私たちが洗ってあげよう」といわれた。家に帰ってからが恐ろしいので、言いなりになるより仕様がなない。すいているとは云っても、七、八人の知らないお客のいる中であさましい恰好をしなければならぬ。

他のお客に聞えるように、「旦那さまにかわいがってもらうんだから、体ぐらいきれいにしなくちゃね」などと云いながら、くみ様は、指でごしごしする。思わず声を立てそうになるのを、じっと我慢し、顔を伏せている。母親に洗われている女の子が、「あのおばちゃん、洗ってもらってるわ」というのがきこえる。みんなが、私をみつめているような気がする。どう思っているのだろう。くみ様とは顔見知りの人もいるらしいから、私達が、近所の立派な家に囲われている二号さんだとは知っているのかも知れないと思う。それでもこんな風に扱われるのを見ると不思議に思うことだろう。軽べつ、同情、いろんな

気持ちで見ているのにちがいない。お尻には鞭の傷も残っているのだし……。

やっと、そんな姿勢から解放される。でも、恥かしくて顔を上げることさえできない。「私達、まだ自分の体洗わなくちゃ、先へ出て待っててね」といわれる。それで、脱衣場へ出たが、ハッとした。着てきたものは、ロッカーに入れてあるし、その鍵はくみさまが持っているのだ。手拭も自分の分はない。くみさまに、鍵をもらおうとしたが「すぐ出るから、待ってなさいよ」といわれて、もらえない。結局、そのままの姿で十五分くらいも待たされた。体をおおう手拭さえなく、脱衣場の縁台に座っているより仕方がない。後から入ってきたお客が、不思議そうにジロジロ見る。くみ様の意地悪で人前でさらしものになったわけだ。

大きな鏡に写る自分のしょんぼりした姿を見て泣きたかった。番台の、まだ若い女の子が、横眼でチラチラとこちらをみる。情なかった。見知らぬ人たちの前にまで、全裸の姿をさらすことは、たまらない。

○月○日

ご主人様留守。午前中の家の中や、庭の掃

除。いつものようにほとんど一人で走り廻る。お手伝いさんたちは、テレビを見たり、週刊誌を読んだりしている。広い家なので、疲れきってしまう。幸い、手錠も足錠もつけられていないから助かるが、裸のまま働かされている女奴隷……それが私。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です
毎月確実に二十五日発売！

一月分	一冊	三〇〇円
三月分	三冊	九〇〇円
半年分	六冊	一八〇〇円
一年分	十二冊	三六〇〇円

○本誌は只今の情勢から場所によっては入手が困難な所もあると思われましますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に（阿倍野局私書箱第十四号）予約購読料をお払込み下さればよいのです。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下されば結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従って、予約購読料は一カ月一冊三〇〇円、三カ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌

午後は、退屈したらしいお手伝いさんたちのお相手。庭で、投げられたボールを四ツ這いでとりに行き、口でくわえて戻ってくる。犬の真似だ。ゴムホースを尻尾にするといわれて、入れられる。チンチンして、そのシッポを振れといわれた。ひざで立って、両手を

代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので、お留意願います。

○予約金が無くなりましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受け取りになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局（特定郵便局でも結構です）と受取人のお名前とお知らせ下さい。

ば、当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

前にさし出して、チンチンの恰好はしたもの、ゴムホースを振ることはできない。「ダラシのない犬だよ」と云って笑われた。

○月○日

今日もご主人様留守。トミ子さまが読んでおられた小説のページが一寸破れていたとかで、それを私のせいにされて、さんざん叱られた。そんな本さわった覚えもないのに……。

反省させてやると云われて、水責めにされることになった。庭にタライを出して、水を一杯いれる。自分の体を責める道具と自分で用意しなければならぬ。そして、後手錠をかけられ、足首も錠でつながれて、水の入ったタライの中に正座した。今日は暖かいとはいえ、水は冷たく、丁度正座すると、おへその下くらいまで水があるので、だんだん冷えきって、感覚がなくなるほどになる。二時間くらい放っておかれた。頭までフラフラする。トミ子さまが来られて、「何だか臭いみたいね、水の中でもらしたんじゃないの」と笑われた。そんなこと、いくらなんでも……。

翌朝まで、下半身が、ふやけたような、だるい感じが残った。

「痴人の糧」

……ちじんのかて……

山本一章

拷問

(三)

屋前から天候が変わった。最初は灰色の雲がゆっくりと青空を消して行くだけだったが、次第にその速度が早くなり、なま暖い風が庭を吹き抜け始めた。そして風に水滴が加わった頃には、空は鉛色一色の重苦しい様相に変わっていた。小型ではあるが台風が接近していることをラジオが報じ、新聞も警告していたのだが、この屋敷にいる誰一人としてそれに気を留めている者はいなかった。

苦痛に充ちた礫から降ろされたアケミは、痺れてギクギク鳴るような両腕を後手に縛り直されて、十字架の柱に繋がれていた。鄭や大山等の姿はなく、庭の真中に立たされている白い体だけが寒々と柱に凭れていた。柱を

背負うように後に廻わした手首だけが縛り合わされ、目かくしも胸の蛙も取り去られていた。しかし縄の轡は頬に食い入ったままで、半開きの唇の端から時々唾液が筋を引いてこぼれ落ちた。白い肌のところどころに縄の跡と鞭跡が不規則な模様を作り、内出血した個所が赤く痛々しかった。その惨じめな裸身を雨が横から叩きつけて飛沫を上げるのだった。

アケミは疲れていた。体が痛んだ。寒かった。そして心細かった。

風雨が強くなった。アケミは柱に両腕を廻わしたまま膝を曲げて、地面に腰を降ろした。冷たい土が臀部に気持の悪い柔らかさで

触れた。そして、泥が彼女の顔までではね上ってきた。時々口の中にまで飛び込んでくる泥水はにがかった。

(大山さん！ 助けて！ 早く来て！)

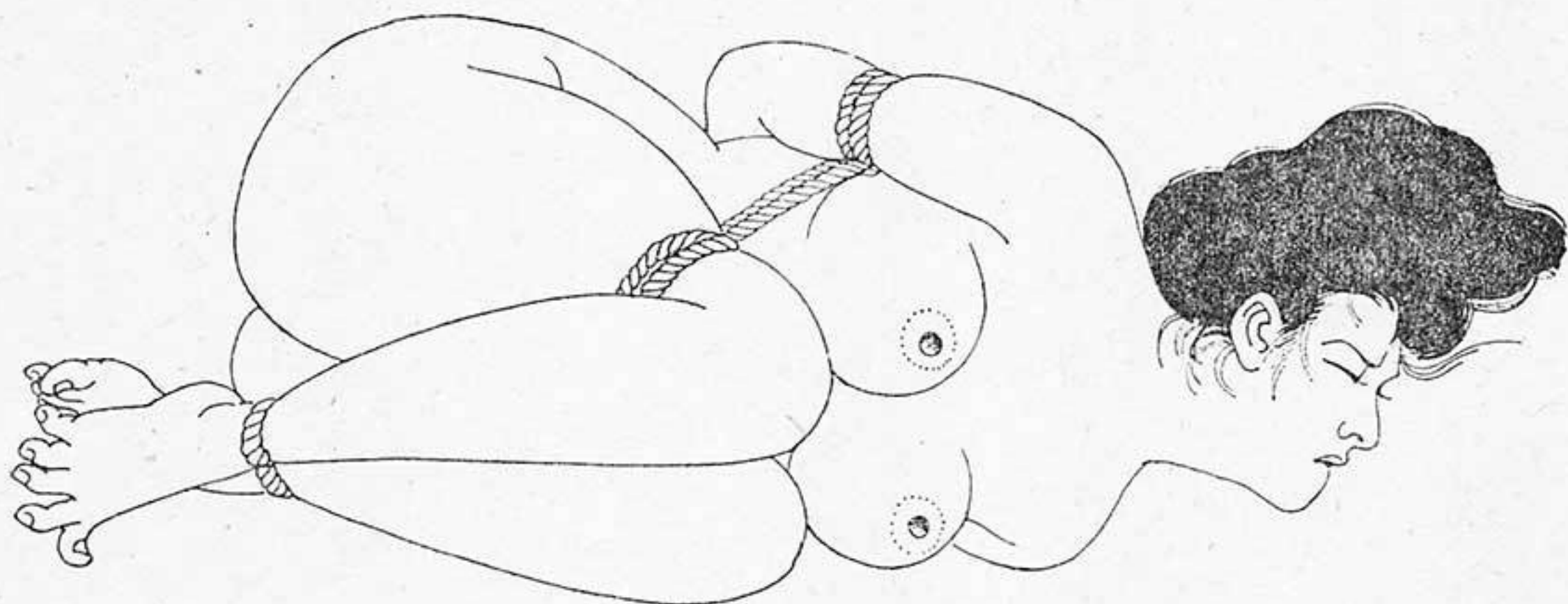
早く来て！ 死んでしまおう！

アケミは心の中で泣き叫んでいた。心までも凍らせてしまうような咆哮が庭を吹き抜け、横なぐりの雨が彼女の素肌をパチパチと打ちつけた。なにもかもが汚れ切ってしまったような感じだった。

時間の観念はなかった。悲情な嵐の中で、ひたすら、大山を待ち続けているアケミだった。体が冷えるために彼女は柱の下にうずくまったまま、幾度となく放尿した。そしてそ

のなま温い液体が足にこぼれるのを快くさえ感じるのだった。それは確かに生きていた証拠だった。無残な放置の中での哀しい生理さえも、今の彼女にとっては僅かな救いに思えるのである。

責められしいる時の苦痛や羞恥は、耐えること自体にいくらかでも快感を伴っていた。しかし裸のまま自然の荒々しい折檻の中に放置されていることは、時間の経過と共に彼女の心を死の不安に包み犠牲者の陶醉を醒まして行くのだった。だから、柱に繋がれてから二時間以上も経った今は、ただこの束縛から逃れたい一心だけが彼女を支配し始めていた。身動きの全くできないような束縛ならまだしも諦め切れたかもしれないが、後手以外自由に



動かせる姿勢が反って彼女を苦しめたのかもしれないかった。

体がぶるぶるふるえた。

そして腹部に厭な蠢動が起った。冷えたため下痢症状を催し始めたのだった。流れ散るような不快な排泄作用が間もなく始った。それは腸を絞るような苦痛だった。しかし雨と風はそんなアケミの苦しみを知らぬかのように、彼女の肌を打ち続けるのだった。彼女の意識が腹部の痛みか離られて深く遠い闇の中に落ちて行ったのは、それから間もなくだった。横倒しになった後手を柱が引張り、顔に泥水がはね上るのを感じながら、アケミは思った。

（アケミは、大山さんが好き。死んだら泣いてくれるわね。きつと抱き締めて泣いてね……）

○ 最初に嵐に気がついたのは百合子だった。

彼女は小用を催して、鄭らのいる窓のない倉庫のような建物から母屋へ行こうとして扉を開けたのだった。

「ひやっ！ 大変だわ。物凄い雨だわ。アケミちゃん大丈夫かしら」

「ええっ！」

大山は扉の外の荒れた様子を見るや、顔から血が引くのを感じた。

「しまった！ 早く！」

彼は靴もはかず嵐の中に飛び出し、その後を百合子が追った。鄭も突然の事態に慌てて部屋の中央に棒のように吊り下げられているセツコを降ろした。そして彼女の目かくしや口の縄を解いて自由にさせてから、扉のところにへ走り寄って外の様子をうかがった。セツコの裸身の点検から股裂きの拷問、そして吊り責めと続いた折檻の二時間余りは、鄭らにとっては決して長い時間ではなかった。そして、これからという時に、この事態が起ったのであった。

後手で柱を挟んだまま、泥の中に横たわったアケミの裸身は、泥と排泄物とで汚れ切っていた。そして服の汚れるのも気にせず抱き

上げた大山の手に、彼女の肌は体温を伝えなかった。

「アケミ！しっかりしろ、アケミ！」

手首の縄を解きながら大山は泣いていた。そして泥まみれのアケミを担ぎ上げると、母屋の方へ走った。百合子は彼の傍でうろろろするだけで、どうしてよいのか、わからなかった。

「風呂をわかすんだ！」

怒ったような大山の一声に、慌てて風呂の火を点けた百合子だった。

大山はアケミを、浴室の洗い場に横たえろと、泥水をかぶって灰褐色になった彼女の胸に耳を当てがった。

「ああっ！動いてる。生きているぞ！」

彼はぐったりと横たわったアケミの肌をタオルで摩擦した。百合子も、そしておくれて来た鄭も、同じようにアケミの手足をこすった。仰向けに大の字になったアケミの汚れた肌は、三人の手で激しく摩擦されて、少しずつ血色を取り戻し始めた。

それに気づいた大山は、一旦浴室を離れてウイスキーの角瓶を手にして戻り、口にその液体をふくむとアケミの口に唇を重ねた。冷たくて乾いたような唇だったが、大山は強く

押しつけるようにして舌で唇を割りながら液体を注ぎ込んだ。一筋唇の端から透明な酒がこぼれ落ちたが、大部分は、彼女の口に収まった。そして弱々しい呼吸が、彼の頬を軽く撫でるのを、大山はむさぼるように吸い込んでいた。

不快感はなく、反って体の底から熱いものがジーンと音を立てながら上ってくるのを感じていた。

（生きていてくれ！死んだら駄目だぞ！）

彼女の喉がゴクツと動いて、口うつしの酒が飲み込まれるのを見た時、大山は涙をポロポロと落していた。彼は狂ったようにアケミを抱き締めた。

「おあついことねえ」

百合子が、ちょっと妬いたような表情をした。

「大山君は純情なところがあるよ。それにしても驚いたなあ。こんなところで死なれたら処置なしだからな。やれやれ」

鄭は微笑を取り戻していた。彼も一時は肝を潰したようだったが、アケミの血色が戻るのを見てもとの彼に戻って行ったのだった。

「さあ、いい加減にして洗ってやれよ。君の服も減茶苦茶になったんだから、二人で入っ

たらいい。もう大丈夫。僕らは退散した方がいいようだな。あっちにもう一人待っていることだし」

鄭と百合子が浴室を出て行くのを待って、大山は泥と排泄物でベトベトになった洋服と下着を脱ぎ捨てて、浴槽のなまぬるい湯を、じっとしたままのアケミの体に注いでやった。二度三度、そして俯伏せにさせてから三杯ばかりをかけてから、タオルに石鹸をつけて、ゴシゴシと洗ってやった。灰色の汁が流れ、白い肌がまぶしく露出してきた。大きな呼吸を二、三回、そしてアケミの目が開いた。

「アケミ、許してくれよ」

彼女は、ちょっとはにかんだような笑みを浮かべると目を閉じた。

「苦しかった？」

表情の出た顔が、かすかに肯いた。

大山は洗い終ったアケミを抱き上げると、狭い浴槽の中へ一緒に浸った。そして口づけをした。彼女は目を閉じたままだったが、唇には反応があった。

「きらいになった？」

彼女は頭を横に振ると、彼の喉もとへ坊主頭をもたせて顔をうずめた。

浴槽から上ってからも、まだふらふらと足許の定らないアケミを片手で支えながら、大山はバスタオルで丹念に拭いてやった。

彼は迷っていた。そして彼はアケミの全身を拭い終った時、決心した。

(アケミは俺のものだ！)

○

離れの倉庫に戻った鄭と百合子に、セツコが走り寄った。

「アケミちゃん、どうだった？大丈夫なの」

「ああもう大丈夫よ。一時はどうなることかと思っただわ。そりゃすっ裸のままこの雨の中で二、三時間も放って置かれたら誰だって参ってしまうわよ。最初気を失っていたけれども、大山さんが一生懸命介抱したから、もう大丈夫だわ。彼の顔つきったら怖かった」

「大山君は、あの女にはれてるんだな」

「そうね」

セツコはちょっと元氣のない返事をした。

それを百合子が直ぐ感づいた。

「あらっ、セツちゃんも彼にはれてたのね」

「ちがうわ」

「うんといじめてあげる。そうして欲しいでしょう？女の氣持って、男には分らないものよ」

セツコの本心を見抜いた百合子の言葉は、辛らっだった。セツコ自身も自分を滅茶苦茶にして欲しい氣持になっていた。

「破れかぶれっていうとこだな。僕が大山君のピンチヒッターになってやるよ。氣に入らないだろうがね」

鄭は内心この女が自棄になって、被虐の中に溺れてしまおうとしている氣は快く思っていた。責め甲斐があるじゃないか。

セツコの両手を後手に縛り合わせると、縄尻を体の前面に廻わして首に巻きつけた。次いで縄の轡を咬ましてから、その縄で顔をぐるぐると力一ぱい縛り上げたので、彼女の鼻は歪み人相が変ってしまった。呼吸は縄を咬んだ口の隙間からしかできず、スースーと妙な音がした。

「逆さ吊りで尻打ちをしてやろう。氣を失うぐらい叩いてやる。いいだろう？」

「いいわ。この娘、そうして欲しいのよ。失恋しちゃったんだから」

二人の会話をセツコは黙って聞いていた。「足は開かしちゃいなさいよ。女のものは開くようにできてるんだから」

鄭がセツコの足を合わせて縛るのを見て百合子が言った。

「そうだな。あんたも大山君に大分教育されたな」

足首には別々に縄が巻かれた。そして天井の上に仰向けに寝かされると、足の縄尻が天井の二メートル近く離れた鉤に別々に通され、百合子と鄭が一本ずつ持って引張り始めた。足が引き上げられ腰が浮き、そして腿が割られた。背中から首筋へと体重が移り、遂には頭だけの逆立ちとなった。

「よいしょ！ よいしょ！ 重いわね」

完全に宙吊りになってからも、縄は引かれ、頭が床から五十センチ程浮き上がったところで両方の縄が壁の鉤に巻きつけて固定された。大きくV字型に開いた腿の筋肉がピクッとふるえた。手首と首を繋いでいる一本の縄が柔肌深くうずもれていた。

「これでやってみるか？」

鄭は奥の物置からサーカスの猛獸使いが使うような長い革鞭を引き取りながら持ってきた。そしてビューンというようない音をさせて空を切ってから、ババーンと床を叩いた。

「凄くない。それはこたえるわね」

「それ程でもないよ。反って棒で打たれる方が体の芯までこたえるんだよ。まあ音だけの

ものさ」

「そうでもないでしょう。痛いわよ」

「この恰好じゃ、少し叩きにくいようだな。短いのにするか」

「いいわよ。わたしに貸して。うはっ、重い
のね」

百合子は二、三度その長い鞭を振ってから、いきなり正面からセツコの体めがけて振り降ろした。近寄り過ぎたためか、鞭の中程がV字型の腿に当り、尖端が少し間を置いて肩を叩いた。縄の食い込んだ柔肌にドスッと当った重量感よりも、後手を越えてピシッと肩を打った細い鞭先の痛さが激しかった。

「ウウウウ——」

逆さ吊りのままのセツコは、一瞬痺れるような痛みの上に体をそらそうとしたが、後手首から首に繋がれた一本の縄がしっかりと柔肌に食い入ったままそれを拒んだ。下半身をしっかりと押えているその縄を無理に動かすことは、その部分を擦ることになるのである。

「むつかしいのね。よし、こんどはおしりに当ててみるわ」

ビューンと無気味な音がした。

「ウウウアアウ、ムムムム」

セツコの悶え方は一通りではなかった。鞭

先は尻を打たず、縄を埋めている個所を打ったからたまらなかった。縄と鞭に柔肌が挟まれるようにして打たれたからだだった。どこか皮膚が破れたような痛みだった。

「駄目だな。そんなとこへ当てたら使いものにならなくなるよ。可哀想じゃないか」

鄭はぶざまに脚を上げたまま苦しそうに悶えているアケミの傍に寄ると、鞭の当たった部分を軽くさすってから、縄を両手の指で少し持ち上げて見た。充血した個所があったが、皮膚は破れてはいなかった。

「その鞭は足を揃えさせて使う方がいい。これでやろう」

鄭は物置から乗馬用の短くて先に革の小さな輪のついた鞭を二本持ってきた。

「尻と腿ならいくら叩いても大丈夫。力一ぱい叩いてみるか」

「わたし、こちらから打つから、鄭さんはそちらからどうぞ。同時にやりましょうよ」

百合子は軽く鞭でセツコの尻を突ついてから、腰をかめて縄に埋もれてひしゃげたセツコの顔に口を寄せた。

「セツちゃん、苦しい？ もうしばらくだから辛抱しなさいよ。おしりを叩くけど構わない？」

セツコは縄の下からスースーと短い呼吸を繰返しながらも、僅かに肯いてみせた。

頭に血が下り、呼吸が縄のため自由にできないのが苦しかった。上げた腿のつけ根も痛かった。しかし彼女はこのぶざまな逆吊りの体を滅茶苦茶に責めて欲しかった。体の苦痛が心の迷いを麻痺させてくれると感じたからであった。

ピン！ パーン！

二本の鞭が左右から殆んど同時に尻の柔かい肉を打った。尻に力が入る。

パーン、パーン、パーン！

横なぐりに打つ鞭の音が高く、音に比例して苦痛も激しいようだった。

「ムムムムッ、アウウウウ」

白く盛り上った二つの半球の、量感のある曲線がふるえ、鞭の淡赤い筋が刻み込まれて行く様子はセクシュアルだった。

百合子の鞭が内股に移った。斜めに振り降ろされるその鞭は、臀部に倍加した苦痛を与えた。

「打ちにくいわね」

そんなことを言いながらも、百合子の鞭は執拗に蠕動した。鄭は黙ったまま左右に開いて上向いている足の裏の土ふまずに鞭を当て

た。逆吊りになって鞭打たれている若い女体を眺めている内に、その女体が男のために存在し、男の手によって開花されるのを待っているように思えてきた。

百合子の鞭が少し加減しながら、腹部と乳房を打った。

「だいぶこたえたようね。足の裏って打たれたらどんな感じかしら。鄭さんはそこ専門だけど、誰に教わったの？」

「別に教わったわけではないさ。日本の昔の

女性切腹（時代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま2）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

若き女性の切腹のイメージを時代風俗に求め、その構想を縦横に發揮しようと試みたのが、この時代篇です。近代的なリアルなタッチを活かして、美しい過去の女性の姿を追求して貰いました。

- 一、落城の姫君、火中の自刃
- 二、武家の娘、覚悟の切腹
- 三、恋人に抱かれて切腹
- 四、介錯に落ちる女の首
- 五、死を賜った腰元の切腹
- 六、操を守る若妻の切腹

ここに掲載しました「えま2」「えま1」二組の切腹画は以前感光紙焼付にて分譲したものですが、今回御希望の方にのみ特に印画紙に焼付けて頒布いたします。

刑罰にあったとかで絵を見たことがあるんだ。ここはどんなに打っても命には別条がないし、内臓にも影響がないからね」

「もう降してやりましょうね。最後に強いのを一つずつプレゼントしてからね」

百合子は大きく振りかぶると、全身の力で鞭を尻に当てた。ビシャッ！直ぐに鄭の鞭が続いた。その二つの打撃が余程痛かったのか、セツコは上げた脚に力を入れてビリビリとふるえ、頭を振って悶えた。

女性切腹（現代篇） 絵巻

四馬孝画

略号（えま1）

大中判印画紙焼付 六枚一組 一〇〇〇円

その精細にしてリアルなタッチにて、数多くの口絵を發表して、斯界に独特の新風を吹き込んだ四馬孝氏が、女性切腹をテーマに制作の意欲を燃やして、うら若き現代的な女性に絶対命の境地に追い込まれて、自らの手で自らの命を断たなければならぬ場面を設定して、その哀婉に満ちた現代女性切腹の姿を彩管に托して、ここに華麗な絵巻が完成しました。

- 一、将校と女学生の切腹情死
- 二、女間諜ゆうべに切腹す
- 三、大和撫子、乙女の自刃
- 四、美女、雨中の腹立プレイ
- 五、夜会服貴婦人の切腹
- 六、女子大生の切腹自殺

床の上に降ろされたセツコは、手足の縄を解かれてからも、ぐったりとして動こうとはせず 大きなせわしい呼吸だけを繰返した。

「大山さんらどうしたんだらう。二人でよろしくやっているのかしら」

「気にしない、気にしない。妬けるんなら僕が可愛がってやろうか？」

「いやだわ。そんなに飢えてはいないわよ」

「ふーん、僕は振られどおしだな」

「それより、この娘をどうする？」

「海老縛りにしよう。そして浣腸してやるよいい」

セツコの後手の体は腰で二つ折りにされて縄を掛けられた。両膝で縄をかけられたままの顔を挟むようにした姿勢で、脇腹と腿とを合わせて、しっかりと縄が巻かれたため、下半身はしっかり固定された。

「この恰好はいいな。絶対無抵抗だからな」

「いやなひと」

鄭が出て行くのを見送ってから、百合子はいきなり横倒しになっている二つ折れのセツコを上から抱いた。

「すきよ、セツちゃん」

○

アケミは座敷の布団の上に裸のまま横たえ

られていた。傍に大山が腰にバスタオルを巻いた姿で坐っていた。彼はアケミを愛しく思った。連続の拷問に疲れ果てた女体だったが、反ってそれが彼には限らない魅力を持っているように思えた。完全な征服感があった。

「縛って！」

口づけが終った時、アケミは小さな声で要求した。縄がなかったので大山はタオルで彼女の手を後手にして縛った。

「ウムムム」

そこには快感はなく、疼痛だけがあった。しかし精神的な愉悦が彼女を幸福感で包んだ。

（わたしは大山さんのものになった！）

自分はまだ大山のものになったという満足感が現実のものとして存在した。

孤独な男と孤独な女が、その孤独を埋め合わそうとして肉体を結びつける。——その形式が結婚であろうとなかろうと、その方法が正常であろうと変態であろうと、本質には何の影響もない。形式や方法で本質を歪めることの多い現実の中で、大山とアケミの二人はこの時点において正しく孤独と訣別していた。或いはこの結合が更に二人を孤独に追い

やることになるのかもしれない。しかし今の二人にとっては未来もなく過去もなく、現在だけが幸福感をばらして存在しているだけだった。

愛とは、そんなものかもしれない。

○

大山とアケミと百合子の三人が、セツコだけを残してこの屋敷を去ったのは、もう陽も落ちてからだった。

縄を咬まされ後手に縛られたセツコが、素足のまま鄭に引かれて車のところまで送ってきた。アケミを苦しめた風も雨も嘘のように収って、濃紺の空には星さえちりばめられていた。

「鄭さん、セツコのこと宜しく頼みます」

「ああ心配いらないよ。二、三日したら送るから。そうだな、送る前に電話するよ」

セツコは悲しそうな目をして、大山とアケミを見つめていた。アケミの表情は疲れてはいたが、どこかに幸福感がただよっていた。

それが女のセツコには本能的に解るだけに、涙がこぼれる程悲しく妬ましかった。複数の男の玩具にされた体を、この好色で残忍な三国人もむさぼり犯すに違いない。そしてそれは大山からまた一步遠去ることしか意

味していないように思えるのだった。諦めてはいた。しかし一人だけ惨じめな裸身を晒して置去りにされてみると、辛抱にも限度があった。

「セツコ、泣いているな。放っては置かないから辛抱してくれよな」

彼女に近寄った大山が小声でささやいた。そして後手になった手を強く握った。それだけでセツコは満足していた。そして止まらなくなつた涙が一気にぼろぼろと胸を濡らすのだった。

「セツちゃん、早く帰っていらっしやい。うんと歓迎してあげるから。鄭さん、あんまりむごいことするんじゃないことよ」

自動車の窓から百合子が言った。鄭はニヤニヤ笑ってセツコの肉づきの良い臀部をさすっていた。大山が運転席に乗り、エンジンの始動が始まると、セツコの目から再び涙が溢れた。オースチンは三人を乗せて薄闇の中に赤いテールランプを遠去けて行つた。

「さあ、いつまでも泣くことはないよ。あんまり泣いていると、池に漬けるぞ」

鄭は哀れなセツコの腰を押して、屋敷の中へ引返した。

（つづく）



(フェチ小説)

カード・プレイ

その四— 完結

富 樫 丸 三

(一)

午後十時きっかり、カード・プレイ決戦の火蓋は切られた。レフェリーは白のセーターに紺のストラックスを、ぴったりに着けた敬子。僕は緒戦で先ず二つ先行し悦子を鼻の先

であしらった。

第一戦は配札でツーペア、第二戦はジョーカーを引きあてて早くも悦子の制服を上下脱がせてしまった。悦子とてまだ少しも動じる様子もなく丁寧にスカートの襞を揃えて畳んで仕舞った。

「悦子。しっかり、落ち着いて」

洋子の黄色い声援が飛ぶ。既に刑の明けた洋子はリラックスな軽装に着替えていたが、それは仲々に男の目を眩惑するスタイルだった。ブラウスの上に深紅のカーデガンを羽織った洋子の下半身は、お尻が隠れるかどうかすれすれの短いスカートの白がコントラスト

も鮮かに形のよい瑞々しい素脚を惜しげなく晒けだした挑発型。悦子を側面から援護射撃しようという魂胆と承る。

運命の第三戦であった。勝運に乗った僕はクラブのフラッシュに自信満々敵を追い詰めたかに見えたが、悦子の起死回生のストレイトに逆襲された。少なからざるショックであった。附きが変わった。それからのゲームをずるずると六つ続けて失ってしまった。脱衣は捗ってアンダーシャツだけになった。

「もうひといきよ。悦子、頑張ってえ」

小躍りして喜ぶ洋子。スカートが揺れる度にお尻に貼りついたパンティがチラチラ眼に入る。残念ながら敵のお色気作戦は成功したようだ。第九戦を辛うじてものにして反撃の糸口を掴もうとしたが次も駄目。いよいよブリーフ一枚のマッチ・ポイント。

僕は一瞬目を閉じて呼吸を整え覚悟を決めた。勝負を賭けながら勝負にこだわらないという矛盾した考えも此の際必要だった。其の甲斐あってか、僕は背水の構えから三つ続けていただいて悦子のストリップを楽しんだ。今迄隠れて見えなかった靴下止めがブルマーの裾から引き出された。次に黒いストッキングがくるくると太腿から足の方へ丸い輪にな

って落ちていった。しまいはスリップが頭の方へ手繰られて肩先から消えた。小麦色の四肢と対照的に胸の白さがむきたての果物のよう。その素肌は黒いブルマーの上下のゴムの所でぶつくり遮断される。

ノー・ブラジャーの悦子は流石に片手で乳房を隠す仕草に処女の羞らいを見せたが、次のゲームの札が配られると思いついて胸を膨らんで立ち向ってきた。思いのほか豊かに脹らんだ乳房が二つ僕の前に突き出されて僕の官能を疼かせた。ブルマーの下にもう一枚登録済みであることは判っていたが、今見る悦子は腰のもの一つきりの全裸に等しく僕と同一線上に並んだ形である。

(よくこれまでに漕ぎつけたものよ)

急に潮が退くような気持で僕は戦意を失った。むしろ健気な悦子に敗れて存分に処刑を受けたいような被虐への憧れが僕の心を支配し始めた。それは妙に甘い感傷を誘い兎に角異常であった。

第十四戦目がマッチ・ゲームになることは僕だけが知っていた。僕は配札のワンペアをわざと崩した。悦子は勿論真剣そのもの。カードを捌く指は細かく震え胸の鼓動さえはっきり読みとれた。辛くも悦子のツーペアが僕

を上まわった。敬子の右手がさっと上った。「ゲーム・セット」

悦子の裸の肩ががっくり落ちて両手を畳について支えた。そして緊張にはりつめた頭を左右に何度も振っては大きな息を吐いた。気丈な質とはいえ、まだお下げ髪の女学生である。その短かい髪が幾筋も汗ばんだ頬に張りついて悲壮な美しさを漂していた。僕は此の結果にすっかり満足した。

「悦子。やっぱり君の勝ちだよ」

敗者の僕は余裕に充ちて微笑みを勝者に送り腰を上げた。その声でやっと悦子の顔に勝者の傲慢さが宿り持前の勝気を取り戻した。起ち上って僕を後手に縛り念入りにも床柱へ括りつけた。

悦子の刑の執行はプレイを楽しむというより仕事に励むような真剣さに溢れて僕も却って幼稚っぽい感傷に引き込まれた。そのように先ず僕の自由を奪ったあと悦子はいよいよ男のブリーフに手を掛けた。流石に目をそむけたが息を詰めて一気に足許まで引きずり下ろした。

急に冷たい風が僕の前に吹き込んで心地よい解放感と同時に禁忌の臓腑を六つの眼のいきにえに晒してしまった被虐の昂揚が、ある

うことか我れにもあらず、その姿をむっくりと虚空にあらわしてしまったではないか。

(二)

僕は狼狽した。冷汗がどっと腋の下に湧いてきた。誰にも向けられない腹立たしさをグロテスクな僕に向けて恨んだ。悦子こそ仰天してしまった。そして自分のことのように見る見る真赤になって目のやり場に困惑した。先ず次になすべきことに狼狽えてしまった。手に長い晒を持っていることから、それが処刑の第二弾のつもりであろうが、生捕る術を知らず溜息を洩らした。と、うしろから洋子が処方方をコーチした。

「ナイトさんは、かわいそうに炎症を起こしているのよ。膿を出してあげたら、その腫れは退くわ」

「……………」

「先ず冷たいガーゼを患部に当てなさい」

厳しい女医の口調に代った。洋子の衣裳トランクの中から救急箱が持ちこまれた。その時から羞らう初心な悦子は消え去って、患者に対する冷酷な看護婦が僕の前に甲斐甲斐しく立ち振舞った。冷たいガーゼが湿布された。手を放しても落ちない力強い支えが下から働いた。それは患部に気持よかった。

「そんな屁っぴり腰じゃ駄目よ。ガーゼを固定しなくちゃあ。上からしっかり抑えるの」

また女医の叱咤が飛ぶ。僕はもう重症患者の気持で不慣れな急造看護婦のなすがまま身を委ねていた。

「軀を勝手に動かしちゃあいけません」

今度は患者が叱られた。女医がつかつかと寄ってきて僕の太腿を平手で叩くと、そのままうしろから床柱へ二本揃えるように抑えつけた。ひんやりと血も通っていないような冷たい女医の手が僕の自由を奪い去った。

二人がかりの治療も大詰めに近づいた。僕は複雑に濁った頭でガーゼとピンセットの動きに痺れた。

「この恥知らず。バカ、バカ、バカ」

ピシッ、ピシッと悦子の右手が僕の両頬に炸裂した。小気味よい痛みが突っ走る。一つ二つ三つ……。

往復三回、悦子の手の方が先に痺れて止んだ。僕の頬は見る間に紅潮して脹れあがった。痛みは火照りに入れ変わった。頬がやけに暑い。僕はそれでも悦子を憎めなかった。ヒステリックな程の処女の潔癖が却って清々しい位に僕のマゾ性は昂進していた。膿を出し切った患部は嘘のように腫れが退き惨じめな

敗残を晒していた。

「いやよ。そんなのイヤ」

悦子は洋子の性悪な煽動を拒否して、ブルマーを足から抜き取った。急に眩暈を感じたか、それとも精魂尽き果てたか、ショーツ一つの軀を、いとおしむように胸を抱いて、その場に埋くまってしまった。

「ねえさん。わたし、くたびれたわ。頭もずきずきするの」

悦子は母親に甘える小さい女の子のように洋子を振り仰いで助けを求めたのであった。

(三)

サディスト洋子が腰のショート・スカートを翻えして悦子の援軍に派遣されると僕は今迄と違って目まぐるしく翻弄された。先ず布告があった。要するに今迄は治療の段階で前は罪人であるにも拘らず有難い治療に浴した。お蔭で患部も治療したので、これから刑の執行に入る。しかも看護婦悦子の献身的奉仕に応える所か彼女を冒瀆した廉によって処刑時間を一時間延長する。というのである。既に時計は十一時半を廻っている。

僕は奈落の底に一段一段下って行く自分を感じた。騎士であった一時間前から或る重症患者にそれから今洋子の前にいる此の僕はさ

ながら女達の奴隷であった。社会的な転落が僕の人間性の喪失を容易にする。恥も外聞もない。動物的感觉だけが僅かに蠢いていた。

間もなく洋子が戻ってきた。グリセリンのエネマ・シリンジを片手に。僕のうしろに廻って立禪をゆるめて持ち上げると、出来た空間から冷たい異質な液体が注入された。たいした分量でもなくわけなく終った。五〇CC位か。脱脂綿で蓋をして元通り縛り直された。直腸に心持よい刺戟が浸透してゆく。

洋子はさっきの女医の面影よろしく、そこで手水を使って一服した。ハイライトの煙が真直に天井に向ってたゆたう。悦子呼んで何か命じた。制服のスカートの着繕った悦子が僕の周りに畳二畳分位の大きなビニールを敷きつめた。それから剃刀を用意して洋子に献げた。腿も膝も胫も綺麗に無駄毛を落していった。悦子が剃りあとを蒸しタオルで拭き、クリームまでサーヴィスしてくれて、どうやら女装化の第一段階が終った。妙にさっぱりした気分である。我れながら見られる脚が二本、そこにあった。

「お前の脚、割かしい線してるじゃない」
洋子が僕の太腿を折り畳んだナイフの峯でピタピタ叩いて口を歪めて笑った。

女装化の第二段階。それはファンディションであった。ふたり掛りで禪の上から襦袢が当てられ襦袢カバーでがっちり止めた。そうしておいて真新しいズロースがセロファンの包みから解かれて僕の足に通した。レナウンの無垢の白さが僕の下半身の装身の仕上げであったのだ。

ふたりの美容師は、そこで少しあどすさりして離れた距離から、その出来映えを眺めやうとした。

「割といい恰好ね」

「ほんと女みたい」

「足の大き過ぎることを別にすればね」

ズロースは形よく脹らみ太腿の上に安定した。去年の夏のようなことはない。内部でどんな変化が起ろうとファンディションが三重四重にしてある。厚着のうっとうしさがあらためて便意を刺戟する。下腹が鳴り出して時々鋭い便意が脳天まで走り抜けた。

と、悦子が何を思ったか、さっき汚染を苦に部屋の隅に脱ぎ捨てたブルマーをひっ掴んで一つ大きく叩くと、それをもって又僕の足にはめこんだ。

「お前に呉れてやるわ。今日の記念にね」

悦子も異常な昂奮に人が変わったように叫ぶ

とブルマーを僕の腰に深くたくしあげたが、サイズが小さ過ぎてホックが合わさらない。だが狂った悦子の執念は布も裂けよとばかり腰のジッパーを絞りあげた。

さっきから何処へいったのか姿を見せなかった敬子がひとりの客を連れて戻ってきた。ブラウスの上から麻紐で緊縛された女囚が淑江と判った時、僕は愕然とした。淑江の目の前でだけは惨じめな粗相はしたくないと思つた時、粗相が始った。実に皮肉だった。こらえようとしたが、一旦坂の上から転がり出した車輪は止らなかつた。こらえようとする程屈辱が奔流となって逆巻いた。僕は人間であることを、この時放棄した。

(四)

恐らく、洋子とふたりで計った陰謀であろう。少なくとも悦子の処刑のプログラムには、それはなかつた筈だ。淑江に対する嫉妬が洋子と別の意味で敬子の胸にくすぶり続けていたことに僕は、あらためて或る恐れを感じた。(げに恐ろしきは女の執念)あの夏の日以来、何度か秘かなプレイを重ねたが、その間おくびにも出さず、内攻した恨みが半年経った今、このような残酷な復讐をお膳立てしようとは。知られざる敬子の陰性さであつた。

た。

淑江は無慙な僕の姿を正視できず眼を外らしたまま緊縛の身を震わせて咽び泣きに泣いた。そんな淑江を敬子は一旦縛しめを解いて自由にした。そして急き立てた。

「着物をお脱ぎ。早く」

「……」

「恋人も同じよ。喜んでなるわね」

「……」

「若し聞かなければあ、わたし達の手で剥いじゃうまでよ。みんな、きっとパンティだつて許してあげないと思うわ。さあ、どうするの、淑江さん」

淑江は服従した。そうするより仕方がなかつたからだ。涙に濡れた面をあげ、自分を欺し辱かしめる敬子と洋子のふたりを睨み据えると、蒼白な頬を引きつらせて応えた。

「判ったわ。大人しく脱ぐわ。わたしにもビール頂戴」

「いい度胸だわ。淑江さん」

「ご立派ね。悦子、ビール差しあげて」

悦子の差し出すグラスを一気に飲み干すとお代りを自分の手で注いで狂ったように傾けた。一筋二筋尾を曳いて顎に伝った。口端を濡らした泡を無造作に右手の甲で拭いとると

はやその手で腰のジッパーを下げた。スカートが音もなく畳に滑り落ちる。ブラウスとストリップがその上に重ねられた。ヒップアップのガートルの吊具から、ストッキングも離れた。またたく間に白い裸身が浮彫りされた。ブラジャーからはみ出した胸の盛りあがり淑江の成熟を物語っている。

「そう、そう。そうしてブラジャーもね」

敬子が満足そうと催促した。ちょっと躊躇したが、その声のする方を唾するように一瞥すると、意を決して背中のかきホックを外した。遂にパンティ一つの裸身を六つの眼の前

に晒して淑江は思わず白磁の胸を両手で抱き締めた。新たにこみあげてくる羞恥と無念の涙をじつと歯を喰いしばって堪えた。

「何をぐずぐずしてるの。さあ早くいとしの君のおしもを綺麗にしてあげなくちゃあ」

促がされて僕に向った淑江の顔には絶望以外の表情はなかった。もう一度テーブルのビールを鷲掴みに仰ぐと髪を振り乱して突進してきた。ブルマーの下からぶうんと臭気が漂ってきた。ズロースまではまだよかった。襦袢カバーはほぼ完璧だった。だが、それから先きはひどかった。強い臭気の中で淑江は実

に甲斐甲斐しく処置を取った。

「恰も卑しい六つの眼から、それを守るように淑江は俺に武者振りついてきた。誰ひとり予測できなかった。またその殺気立った淑江の行為を誰ひとり制止すらできなかった。」

「アッ」

固唾を飲む三人の加害者たち。

「ヤッ、何をする。淑江」

思わず口走った僕。あの惨じめな粗相からこっち、魂の脱殻みたいに動物的感觉だけを触角で受けとめ、加害者の蹂躪するままになつていた僕の心に、人間らしい感情が蘇って今始めて淑江に声かけた。

今迄にない暖かな情感が僕の全身に潮が満ちるようにヒタヒタと押し寄せてきた。それはさっきの虚空を蹴った空しい快感と本質的に違った力強さに溢れた充実感を伴って大きく育っていった。

六つの瞳の凝視する内に僕は脚の痺れも肉体の疲れも忘れて、古武士が立腹を搔っ捌く悲壮な陶醉にも似た感覚で、不自由な姿勢のまま大往生を遂げていった。

時はまさに午前二時。

あたりはしいんと静まり返って物音一つしなかった。

現在在庫『本誌既刊、限定版写真集』案内

○限定版写真集「豊満と清楚」女体緊縛グラフィ集

頒価 一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版写真集「美しき縛しめ」第四集

頒価 一〇〇〇円 略号「美4」

○限定版写真集「女性刑罰拷問特集」日本版

頒価 一〇〇〇円 略号「美5」

○限定版写真集「緊縛美女艶姿百態」

頒価 一〇〇〇円 略号「美6」

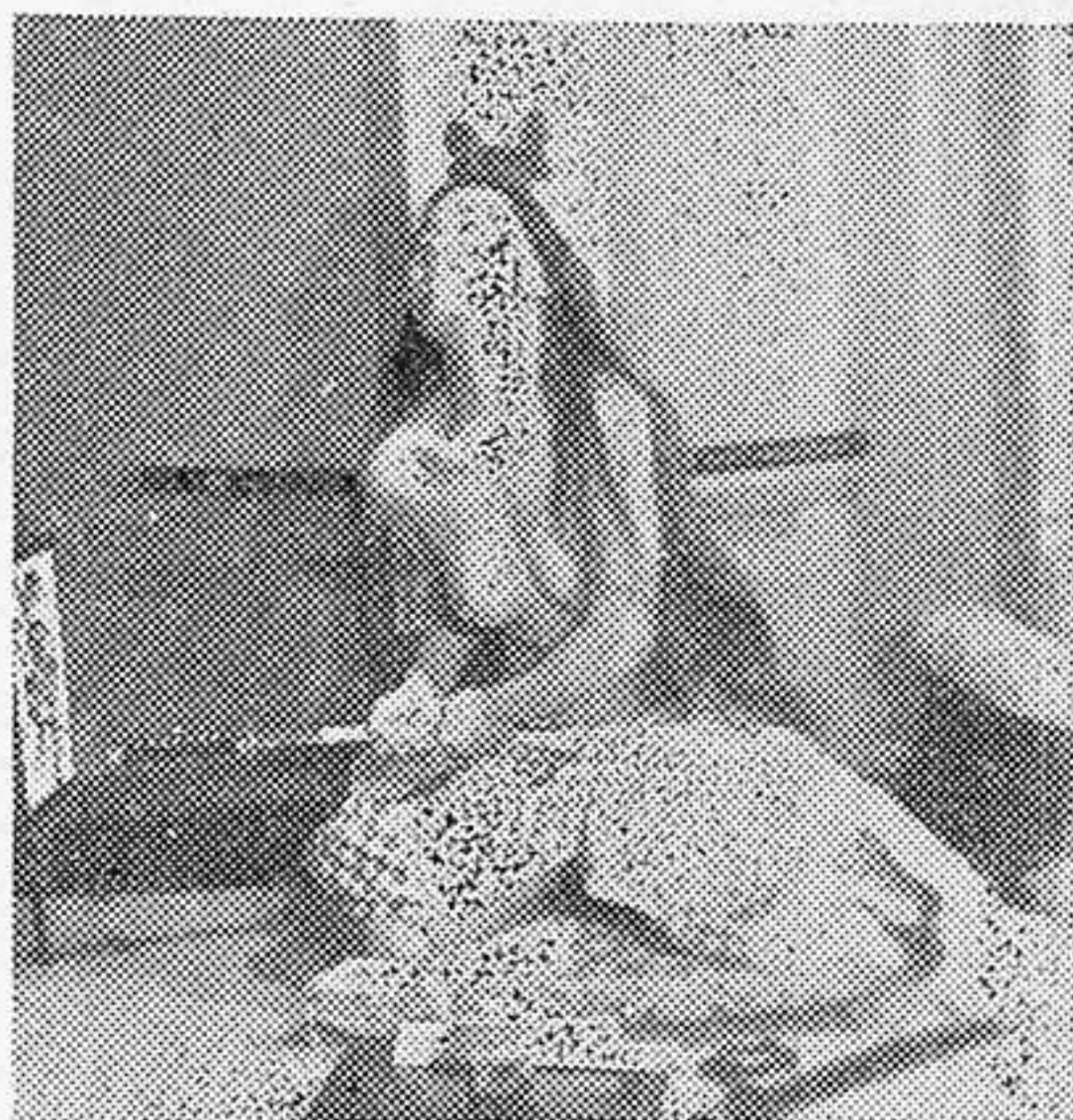
○限定版写真集『刺青の魅力を探ぐる』

頒価 一〇〇〇円 略号「美7」

○限定版写真集「女斗緊縛競艶写真特集」

頒価 一〇〇〇円 略号「美8」

(おわり)



奇ク誌の

整理と活用

—分譲写真の説明利用法—

高野 原 美

本誌の分譲フォトの説明書きは、マニアの

心を惹きつけ購入意欲を持たせるものでなければならぬ。これはテレビ広告のスポットと同じもので、強烈であり短い文章の中で簡潔、適確に、要領よくまとめられる必要がある。

それだけに毎月の分譲フォトの広告を見るのが、一つの楽しみともなっている。次々と撮られるマゾ・サドフォトに題名をつけ、更に説明を鮮明な印象付けをさせるように書くと言うのは大変な努力である。それだけに注

意して読むと味わいがある。

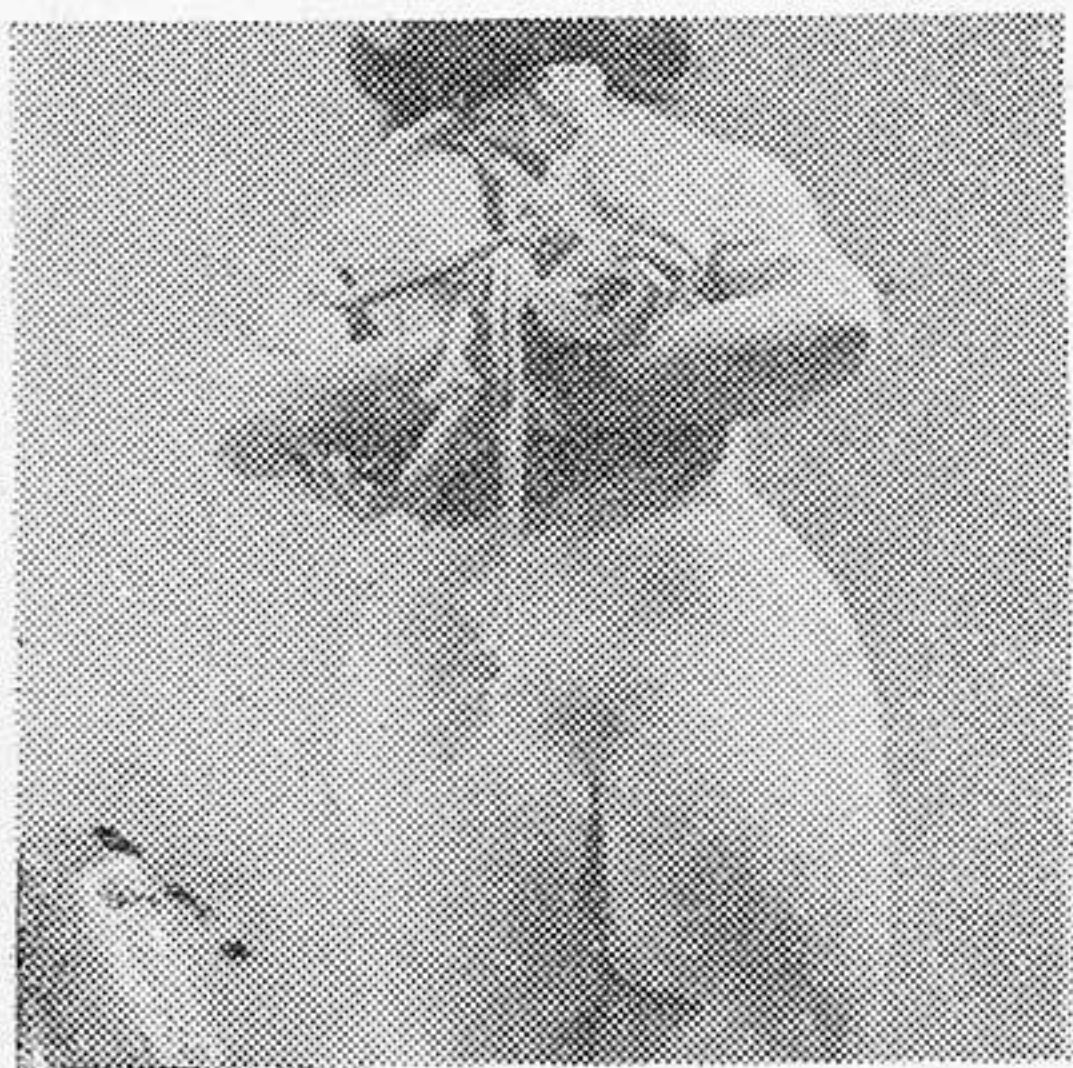
さて、私は、この広告文を文章を作る上で参考にして、今日までの創作をつくってきた。いつだったか「文章を作るのは難かしい」と言うようなことを読者の一人が言っておられたが、決して難しいものではない。私は、今日まで女性切腹や妊娠腹の創作、随筆等を発表してきたが、この文章は、また表現方法は、この広告文におうところが多いのである。

もともと私は、女性切腹愛好家である。

しかし、この切腹は悲惨、苦悶、自虐のよせ集めみたいなので、それには救いが認められないものである。残酷と言う意外にはない。しかし、私達は男性切腹ではなくして豊かな白磁の柔肌を切り裂く女性切腹を愛するところに救いが認められ、無限の悲壮美が存在するのを愛している。

それだけに女性切腹は、女性のナルティズムと豊かな曲線美が土台となって、その神秘的な美の自虐性としての凄惨さを描き出すことに救いと楽しみ、異常美を見出すのである。腹を切る相手が女性であること、その下腹部が豊かな脂肪におおわれた豊麗なエロティックささえもたたえた肉体であることが必須の条件である。私達は、その故に切腹とともに豊かな女体を愛する。

余談になったが、この広告文は、実にマニアの心をよく捉えて、心を惹きつけずにはおらない。そこで、私は、この広告を幾つも合わせて一つの文章にすることを考えた。できるだけ多く、広告の言葉を取り入れ、自分の言葉を挿入することは少なくして一つの文章を組み立てるのが原則である。私は、この文章に満足し、ノートに書きとどめ、創作をつくる時の参考としている。



前に私の文章が「文学的であるとの評判」
 とのおほめの言葉を頂戴したが、その謎はこ
 う言うところにあったのと、できるだけ登場
 する女性を愛して温かい眼で見守ってやりた
 いと言うヒューマニズムの現われでは無いか
 と思われる。

マゾ・サド文学は全てそうだと思うが、登
 場人物を絶望のドン底におとし入れ、残酷な
 非人間的な扱いをする訳であるから、作者が
 その女性に温かい愛情と理解をもって取扱っ
 てやらないと、救いのない絶望的暗黒と後味
 の悪い砂を噛むような思ひしか残らないもの

である。

私の広告文組合せの実例を二、三あげてお
 くので、この愛情―責められる女体に対する
 ヒューマニズムを理解していただきたいと思
 う。

(例1) 全裸になった東浦ひかるの豊満な柔
 肌は、切腹を前にして息づいている。巨大な
 膨らみを見せる乳房、柔らかに膨れる白い豊
 かな下腹。今、啓子の手によって切り裂かれ
 ようとしている。

背後に廻った啓子の手は、きりきりと窪ん
 だ臍の下を切り裂いて行く。下腹を真紅に染
 めて仰向きに倒れた東浦ひかるを冷やかに見
 下して、大塚啓子は、更に右手にした脇差
 で、ひかるの胸を、脇腹を、下腹を切り裂い
 てゆく凄惨な介添切腹が演じられていた。

これは「血紅使用介添切腹」と「柔肌を切
 り裂く」を合作したものであるが、やや愛情
 と状景描写に欠ける嫌いがあり、もう少し説
 明が必要となる。

(例2) 正面に坐して、静かに切腹する汚れ
 なき白磁の女体が、やがて迫りくる激痛に身
 悶えして、あられもなく狂態を演ずる。まも
 なくおそいくる感極まった法悦の境地、むん
 むんする妖気に満ちた切腹。

大塚啓子は東浦ひかるの死屍を前にして、

白く輝く豊満な裸身を惜し気もなく晒して大
 勢の男の眼の前で、自らの手で豊満な下腹か
 ら脇腹、更に臍の傍から鳩尾へかけて脇差に
 て切り裂いて行く。豊麗な女体の下腹部を朱
 に染めて、手まで血だらけにし、激甚な苦痛
 に悶え、のたうちつつ崇高な儀式を演ずる女
 の哀れと美しさ、この悲愴美を異性の眼の前
 に展開したいという切腹女性の昂揚するマゾ
 ヒズム。

やがて豊満な下腹は切り裂かれて咽喉元に
 止めの一刀、下腹部を朱に染めて斃れた血ま
 みれの美しい女体は、今や血汐の中に横たえ
 ている。

彼女の柔肌を割いた刀は、血を吸って白い
 肌の上に、鮮烈なコントラストをつくってい
 る。仰向けになった死屍には、胸と咽喉笛の
 刺傷から血汐が溢れでている。眼をむいて息
 絶えているのだが、そこには凄惨の中にある
 無惨美が全面に漂っている。女の全身を血に
 染めた、女の美しさが最高の美と見守る男へ
 の感動を与えた。

これは「屠腹される女体」「美しき女の屍
 体」「血紅連続写真」「切腹した女の死体」
 「立腹に悶える女体」「切腹に苦悶する女」

の六つを合作したもので、文章を面白くするために、大塚哲子が東浦ひかるを介添切腹させたあと、自ら豊かな下腹を切り裂き死体となって横たわるように創作してみた。

これなどは、切腹する女、その血まみれの死体に対して限らない愛情と、その切腹する女性への理解、あくまで凄惨である女性切腹が「美」として感動させると言う、女体切腹の本質をよく描き切ったものになっていると思う。

(例3) も早や逃れられないと決心した美しい姫君は、死んで操を守りぬこうと、着物の前をくつろげて、双肌ぬぎとなるや、ふくよかな胸、まろやかな肩口、可愛いくふくらんだ雪をあざむく真白い下腹と、すべすべした柔肌のすべてをさらけ出して腰巻一つの裸身となって覚悟の切腹を果す。

守り刀を抜き放って、白く輝くふくらと脂づいた豊かな左脇腹へずぶりと突き刺し、下腹のたっぷり肉ずいた皮下脂肪を切って臍下から右脇腹へ。守り刀でしたたかに切り回し、更に豊かな臍下へずぶりと突き刺し、鳩尾へかけて十二分にはねあげて凄惨にして美しい、あっぱれ覚悟の十文字腹の見事な姫君切腹。

抜いた刀を左の乳房の下に止めの一刺し、介錯の刃がきらりと一閃、麗わしの美女の細首が、さっと飛び散る血しぶきと共に身首異にする凄絶さ。

これは、二月号一七七頁、四馬孝の「時代風俗、女体切腹図絵」を合作したもので城主の姫君の見事な切腹が描かれる。

切腹ばかり紹介したが、例えば山原清子の「股間縛り」では

(例4) 肉づきのよい肌をまるで俵をくびるように区切った横縄は、豊胸をくびれさせ、その麻縄は全身を縦に真二つに割り裂く強烈な股間縛り。トゲトゲとした荒縄が柔肌を痛めつけ、背中の刺青をいっばいに見せて荒縄が双丘に陥没する微細な縄の行方をみせる強烈な股間縛り、更に浴槽に浸されて緊縛する荒縄が全身を締めつける緊縛感に、山原清子に苦悶の表情が漲る。そのうえ、その両膝を八の字に開かせ両足首を括った縄を左右に引っぱって後手の縄に連結した凄い縄目のむごさ、股間縛りと刺青の競演は、むごたらしいサジスチックな連想を画面いっばいにふりまいている。

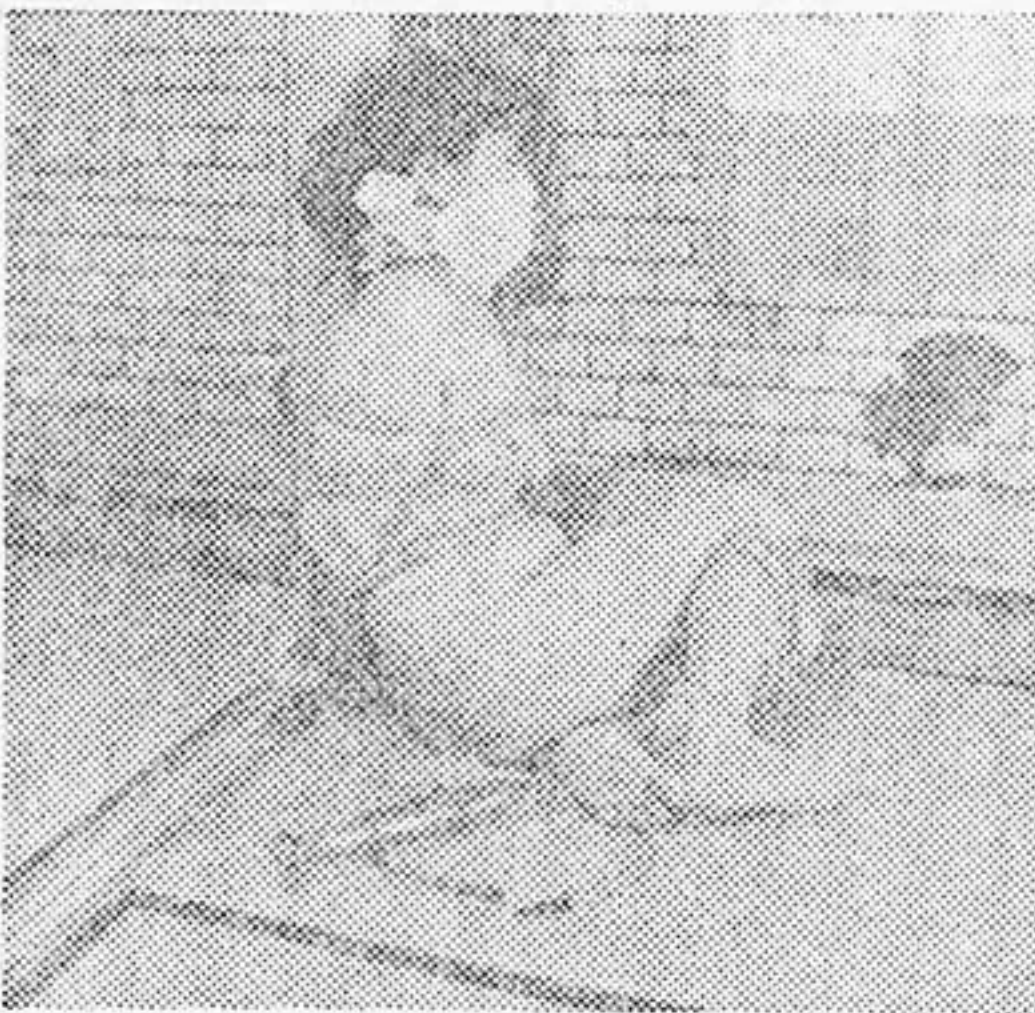
これは二月号表紙ウラの広告の合作である。責めのシーンは、次々と幾らかの場面を

つないで行くことによって、女体責めの名場面が妖艶な筆致で次々と展開されて行き楽しいだろう。

本誌の利用法

毎月の奇ク誌を本棚に飾るわけにも行かずと言って本屋に売るのは余りにももったいない。一冊、二冊なら問題はないが一年、二年とたまって行くと保存に困ってくる。

私は、この雑誌の保存に困った揚句、次の方法をとって来た。少し邪魔臭くはあるが、やって見ると結構楽しいものである。





毎月の雑誌を読み終ると留金はずしてバラバラにする。豪華なフォトのあった時には、フォトだけをまとめて毎月として行く、一年分もたまると立派な写真集になるので厚紙で表紙をつけて製本をする。これを私は大切に保存している。

本誌の方もバラバラにし、自分の投稿した文章をはじめ、「花と蛇」など残しておきたい連載ものだけを選び出す。勿論これらも別にとじて部厚くなれば製本する。その外の九割ほどの部分はズタズタに切り裂かれる運命にある。

机の上に大学ノートが用意されてある。私の好きな「女性切腹」「妊娠腹」「磔」「女性解剖」その他の殺し場面などは、写真、さし絵は切り取られ、上記のクライマックス・シーンがノートに筆記される。そのシーンに適した写真、さし絵が貼りつけられる。

こうすることによって長い文章も、その殆んどが大学ノート一頁以下に納められてしまふのである。即ち、私の殺風景な大版の大学ノートは、豊満な奇クモデル嬢たちの裸身のマゾ・サドのフォトと名場面の記事で埋まった珠玉のノートと変じるわけである。

私は、数年程前からこの作業を続けてきたので切腹だけでも三冊に埋まり、切腹名場面特集号となっている。私が前に書いた「女性切腹の可能性」は、こうして、まとめられた高野原美編集の「切腹特集号」が文献として大いに利用されたのである。

しかし、不思議なことに、私の切腹特集号には、随所に「蛙腹」の記事が挿入され、大塚啓子、東浦ひかるの豊満な腹部のフォトが貼られているのである。無意識に言えば誤りかも知れないが、彼女らの豊満な皮下脂肪で膨らんだ下腹部こそ、女性切腹の極致であり、私達マニアには憧憬的であるのだ。そ

れだけに切腹フォトだけでは飽き足らず、啓子嬢のこの豊満な下腹部が無惨にも氷の刃で切り裂かれるのであると、強調するかのようになっている。女性切腹の記事の真中に堂々と貼り出されているのである。これこそ腹部ナルチズムⅡ女性切腹の体験的実証であろうかと思われる。

勿論、私らの要望に応じて、各マニア毎の特集号を出版していただけるならば、こんな手間は省ける訳であるが、自分で紙面にいろいろの写真を貼り、記事を転載して編集して行く面白さは味わえないであろう。

女性切腹の小説、随筆、読者サロン、読者通信等から、広く題材を集めて、ある時には、切腹する登場人物を大塚啓子に名前をかえ、またある時には、前編のように二つ、三つの作品を集めて、より充実した作品に作りかえてみたり、自分の好みのままに、このノートを創って行く、また違った意味の面白さが生れてくるのではなからうか。

この他、いろいろあるが、愛読者のかわった活用法等もあれば発表していただきたいものである。

×

×

散文

(サロン散文のつもりが、枚数増加してしまいました)

「日常の周辺から」

——車中にて——

保藤久人



ラッシュ・アワー

前の男の背中と、横から押す男の肩がごつごつして、その圧迫の激しさは息苦しさを覚える程。左腕は挟まれて、抜くことも曲げることでもできず、少し痛れて感覚が乏しい。

足の位置も変えられず。身体は斜傾して平衡感覚を失っている。

車体の動揺につれ、立っている人間すべてが、絡まり固まった巨大な帯のように、うねうねと緩かに動く。吊皮を持つ右手が痛い。全く嫌な感じだが、お互さまだ——と、玉の汗を浮かべながら耐え続ける。

これは、サラリーマンなら大抵の人が体験する日課の一つであろう。

その朝、わずかに動く首を廻してみると、

すぐ隣の方にふくらした丸い肩があった。

内心、しめたッ——と思う。

満員地獄のような苦しさを、幾分かでも忘れることのできるのは、こういう折をおいて他にはない。そう思うと、もう必死になる。

遮二無二、傍らの奴を突きのけ踏み分け、柔らかそうな背に寄りかかろうとする。

前に廻りたいな——と、心のどこかがささやいている。

そしてその時、この気持は、HなのかYなのか、それともワイセツなのかと、ふと思う。

意識すると、自分だけが異端のような気がして、きゅっとなが縮んでゆく。

罪悪感も加わり、或る種の羞ずかしさとともに図々しくもなれず、逆に、奇体な寂しさがついついてくる。

結局は「善良」から一步も踏み出すことができず、苦心して確保した位置なのに、無意識のうちに彼女を守ろうと、自分の身体を波堤にして強圧に対してあらがい始める。

一そう苦しくなり疲労感を覚え……そのころから、心が妥協しようとする。

堅い圧迫より柔軟な方がいいと思うのは、万人共通の偽わりのない実感じゃないか。切

羽詰った、救いを求める本能的な心理動向だろう——と、別の心が反問しつつ勢いを得てやがて、勝手な結論へと導いていくのだ。

すると、寸前の奇妙な劣等意識も薄れて、硬直から解放されたように、安易な気持で柔らかい背に接することができた。

電車は漸やく、目的の駅に滑り込んだ。

午後のひととき

ゆったりと空席に坐った。

陽光が、うしろの窓から差し込み、斜前方に及んでいる。その光の先に、素晴らしいものがあることに気がついた。

優美な脚線は、お行儀よく揃って斜めに傾むき、シームレスが、光線を跳ね返えしながらも中味を透かして見せ、それが、膝小僧の上の方まで続いている。

スカートの短いのである。

これは——と、思わず目をそばだてて注目した。可愛い感じの、おとなしそうなお嬢さんである。

彼女、視線を意識したのか、ふと顔をあげて、激しい目色で睨むように見たが、不意の闖入者の傍若無人な瞳の攻撃に恐れをなしてきゅうに、もじもじとし始めた。

ちらちらッと、瞳が動く。気がつく、その視線は左右二方向に別れているのだ。

はてな？ 同類がいるのか——とそっと窺ってみると、右手四人目に、和服の中年婦人が坐っている。確か一緒に乗車した人だ。

全姿に気品がただよっている。が、細ぶちの眼鏡の表情は、何となくいかめしく、P・

T・Aの役員さんのような気がする。

よくよく注意して見ていると、彼女がもじもじして、意識的に、短いスカートの端を引っ張り、露出部分を隠すような仕種をするのは、この小母さんの、眼鏡越しの瞳を恐れてのためらしい。

P・T・Aの小母さんの眼は、冷く非難をこめて、きらきら光っているのに違いない。そうだろう、そうに違いない——と心にうなづき、小母さん、そんなに意地悪く見ないでやって、小母さんは彼女の若さに嫉妬しているのでしょう——と、心の中で呼びかけるのだが、テレパシーでもない限り、こちらの意志は通じそうもない。

彼女、同じような動作を繰り返しながら、次第に、こちらを窺がう度合が多くなっている。

何故だろうか。凝視されるのが羞ずかしい

のかしら。いやそうではなからう。男にならむしろ見られている方が、彼女の心は豊かなのに相違ない。

羞ずかしいような仕種で、無意識のうちに隠蔽動作を繰り返している姿は、何ともいいようのない可憐さが滲んで愛らしく見える。

だが、彼女の心のうちには、彼女自身も気づかぬ潜在性露出願望の心理が、潜んでいるのではないかと、思いみる。

彼女、単に流行を追っているのではない。それは、清々しい感じの白いブラウスから察知することができる。

心は一体、どこにあるのだろうか——と、なおも観察して、心の中まで読み取りたくなってくる。

しかし残念！彼女、途中から席を立つ。男の目よりも、あの意地悪そうな婦人の視線に耐えかねたのに違いない——と、勝手に決めて、自分の心を慰めることにした。

夜ふけの車中で

疲れた身体を落すようにして坐った。

癖になっっているもので、まず、前方にスーッと目を走らせる。割合に遅い時刻なので空席が目立った。少し斜前にふたり連れが身体を

寄せて坐っている。別に、意識してそのふたりの前に陣取った訳ではないのだが。

何となく目障りである。

男と女が並んで坐っていても、それがどうということはない。一向に珍らしくないことなのに、目障りなのは、そのふたりの、人もなげな振舞い、少し馴れ馴れしすぎるのだ。

多分、今が一番楽しい盛りなのだろう。

仲の良すぎるふたりを眺めて、若さを羨やむ気持がないでもないが、本来なら、妬心よりも、青春を謳歌する若者たちの姿は見るのが楽しく、祝福したい気持の方が強く作用する場合が多い。

それなのに、何故か気になるのだ。

そしてやがて、気になるのは、男の方の気

弱な様子からだ結論していた。

車中、人目があるので、若い男は萎縮している。きつと照れくさいのであろう。

ところが、女性というものは、こういう場合でも、割合に平然として、クックと笑いながら、男にもたれかかって耳元でささやいている。その様子は、何とも甘ったるくてなやましく、見ている方が、つい目をそらしたくなるほどである。

無頓着なのか、大胆なのか図々しいのか、と、感心しながら眺めていると、不意に女の方がキツイ目をして男の様子を見た。

衆目を意識して、話に実の入らない相手にじれったくなつたらしい。

男の耳を、キューツと細い指先でつまんで自

分の方へ引寄せたのである。男は当惑した様子で、しかし、女の意志に従ってゆく。

この一事で、観察眼はガラリと変った。

きゅうに男が羨やましくなった。心が妖しくなり、想念が妄想となって果しもなく拡がって行こうとする。

かえって、見ているのが苦しくなってくるのだからおかしい具合である。とうとう、こちらの方が席を立てしまった。ドアの側まで行ったが、やはりふたりが気になるのだ。

逃げ出したいと思ったが、急行電車は停車を忘れたように突ッ走っている。

仕方なく、また窺うように望見する。

女の眼が切れ長で極めて印象的だった。

△次回——町並にて——▽

至っては論外です。

これでは、引きあいに出された千草氏も、さぞ迷惑なことだと思います。そこで麻生は『のおと・あと・らんだむ』をまた改めて読

みなおしてみましたが、麻生とは考え方のちがいがあるにもせよ、教えられるところが多く感服しました。特に今回の麒麟児氏の暴力的投書の直接の原因ともなった「セックスとエロティシズム」(五月号)は、いろいろと

麻生保氏の生活と意見

麻生保

六月号の読者通信で、麒麟児久氏の非常識きわまる投書を読み、憤慨にたえません。

全くもって、他人の立場を一切認めないで「俺はいま人間らしいことを言っているのだと(中略)信じている」「才なく学なく俗悪

下等な」投稿者には愛想がつかます。

しかも、特定の人物の名をあげて、作品を書くことを「中止されるよう一読者として要求する」などという、蓑田胸喜(麻生註・戦争中の右翼文芸界の黒幕)的言辞を弄するに

興味深い問題を含んでいますので、これに関連して麻生もいささか考えるところを述べてみようかと思ひます。

千草氏の『ペルソナ説』、および『セックスとエロティシズムの混同不可論』は、ともに卓見であり、麻生も全く同感です。そして「エロティシズムをぬきにしたSMなどはナONSENS」という点も賛成です。いや、麻生は、そんなものは存在しないとさえ思っています。「純粋なSMというものは、(中略)エロティシズムから絶縁することによって得られるのではない」と言われていますが、これも麻生の日頃の見解と同じです。

ここまではよいのですが、次のくだりには大いに疑問を感じます。

「スーツに身を固めた女性と、ネグリジェを着流した女と、どちらにエロティシズムを感じるかといえば、バカでも後者と答えるであろう」とのことですが、麻生にしてみれば、「バカは後者と答えるであろう」とさえ言いたいところですよ。趣味のよいスーツを着こなした女性は、しどけないネグリジェ姿の女よりもエロティックであり得るところこそ、SMの醍醐味であり、尽きぬ興味の焦点ではありませんか！ こんなことでは、一体千草氏

は本当にSMの世界の住人なのかどうか、まことに疑わしい次第です。

SM更に「奇巧の意味に於けるアブ」とは何でしょうか？千草氏の言われるように、エロティシズムのペルソナの現れには違いありませんが麻生は次のように考えます。「セックスが昇華される時に出来る結晶体」だと。

ただし、昇華とは、「エロティシズムと絶縁する」ことではありません。それどころかエロティシズムはより純粋となり、地上のあらゆる束縛からときはなされ、同時に大胆な価値の転換がなされます。すなわち、ネグリジェよりもスーツが、スリッパよりも荒縄が、快楽よりも苦痛が、時には異性よりも同性が、エロティックに高い価値を持つに至るのです。そしてそれが、極めて高度な結晶作用によって美化されるものなのです。これの理解出来ない人達、昇華されたセックスにエロティシズムと美を感じない人達は、真のSMを味わい得ないのです。田舎のうす汚いショーで「女の縛体図を見て、しびれるような昂奮を感じた」(麒麟児氏)などというのは、麻生の言うSMの名には値しません。まあ、ゲテモノセックスといったところでしょう。

千草氏の書かれるものに、麻生は反撥を感じ

ることも少くありませんが、いつも敬意をもって愛読しています。しかし、千草氏の尻馬に乗って暴走した麒麟児氏の無作法狼藉は許せません。読者通信欄がいかにもフリートーキングの場だからといっても、今回のような明らかに悪意から出た個人攻撃に類する代物は、没書されて然るべきです。心から愛する本誌の品格を保つ上から、編集部毅然たる態度に期待する次第です。

△短 信▽

黒淵嬰一様

さぞ今頃は、クサツたり、スネたりして賀集子夫人に、ダダをこねていることでしょうね。目に見えるようです。でも、甘ったれの儀が一しきりすんだら、また元気を出して書いて下さいね。何やら、近代的アマゾンの登場する作品を計画中とかうかがいましたが、楽しみにしています。

三原寛様

むかしに書いたお恥しいものに過分のお褒めをいただき汗顔の至りです。このところ、忙しいため心ならずも、ついつい筆不精をきめこんでいるような次第です。

貴兄の書かれるものは、いつも興味深く拝見しています。一層の御健筆を祈ります。

女相撲物語

花の女斗美たち

(7)

奮斗士好太

△カット・雪崎京人提供▽

さて、いよいよ、今年の体育大会に出場する私たちの代表―五人の選手たちが決まりました。

選手は五人、それに補欠が一人というメンバーで、このうち三年生は選手三人、二年生は選手が二人、補欠が一人です。

三年生の部員の中には、まだ一度もこうした大会に出場したことのない人もいるので、そんな人にチャンスを与えるという意味から選手全員を三年生でそろえることにしたらという意見が強かったらしいのですが、そうやったところで、やはり一人はどうしても補欠にまわらなくてはならないので、全員出場ということにならず、では、どうするかという

ことで部長先生も大分頭を悩まされたという話でした。

もちろん、今井さんや野川さんのように、絶対ぬかすことのできない人は別ですが、あとの三人くらいはなかなか人選がむずかしくて、申し込みにおくれそうになったくらいだったのですが、結局これまでの練習での進歩とか、これから伸びる人に来年度のために度胸をつけさせるという狙いなどから、二年生の人を加えたということでした。

さて、それでは私たちの代表選手の顔ぶれを紹介しましょう。

まずトップは野川弓子さんです。一六二センチ、五十七キロというバランスのとれた体

格で、もちろん大きい方ではないのですけれど、色白な柔らかい体を生かしたスピーディな相撲ぶりは、見ていてほんとうに気持のよいものです。

素早やく相手のふところへ飛び込んで行って前陣に喰い下がり、胸に頭をつけた体勢から一気に押して出たり、相手が土俵際でこらえると見ると、ひねりや投げ業など息もつがせず攻め立てるのです。

前にも書きましたように、来年のホープのひとりである、例の美人グラマーの中川さんなどは、この野川さんが最大のニガ手で、五回対戦したらそのうち四回までは、必らずこのとくいの体勢になられて、押されたり引か

れたり、あるいは前へ横へと振りまわされては転がされてしまうのです。

「まるで、ヒョウが牛やなんかを襲ってるようネ」

と、私たちはささやき合ったものです。

しかし、この野川さんも、大体同じタイプの今井さんに対しては、どうも分が悪いようでした。

今井さんも、低く構えて出るタイプなのでせつかくの突進もあまり効果がなく、前陣を引いたとくいの体勢になれるという時はほとんどありません。

大ていの場合、四つになって胸を合わせ、両マワシを十分に引き合った体勢になってしまふのでした。

そして、そういう体勢になってしまうと、野川さんの柔かい体が、その持ち味を発揮することができず、たても横も一まわりずつ大きい今井さんに体負けしてしまう感じで、ジリジリ攻め立てられるのです。そして苦しみがれみたいに投げを打っても、まるでそれを計算して待ちかまえていたかのような今井さんに、あべこべに打ち返されて負けてしまうといったことが多いようでした。

けれども、明るく、くったくのない野川さ

んは、誰からも好かれていましたし、その表情に富んだ大きい目をクルクルさせながら話しをすると、何でもない事までが、何かとてもおもしろい内容の話でもあるような感じがして、そのムードに知らず知らずのうちに、引きこまれてしまふのでした。ですから野川さんの物おじしな性格と、キビキビした相撲ぶりとは、こういった大きな競技会にはなくてはならないものでしたし、そのトップを勤めることも、文句なしに決まったのでした。

二番目は二年生の金子雅子さんです。

この人は、私たちが、初めてマワシをつけて練習場に入った日に、ブツカリげいこをしていた人です。それだけでも忘れられないのですが、そのぶつかりげいこが終ったあとも、私に手伝わせて、乱れたマワシを締め直したりして話しかけてくれた人なので、上級生たちの中ではいちばん親しみを持っている人なのでした。

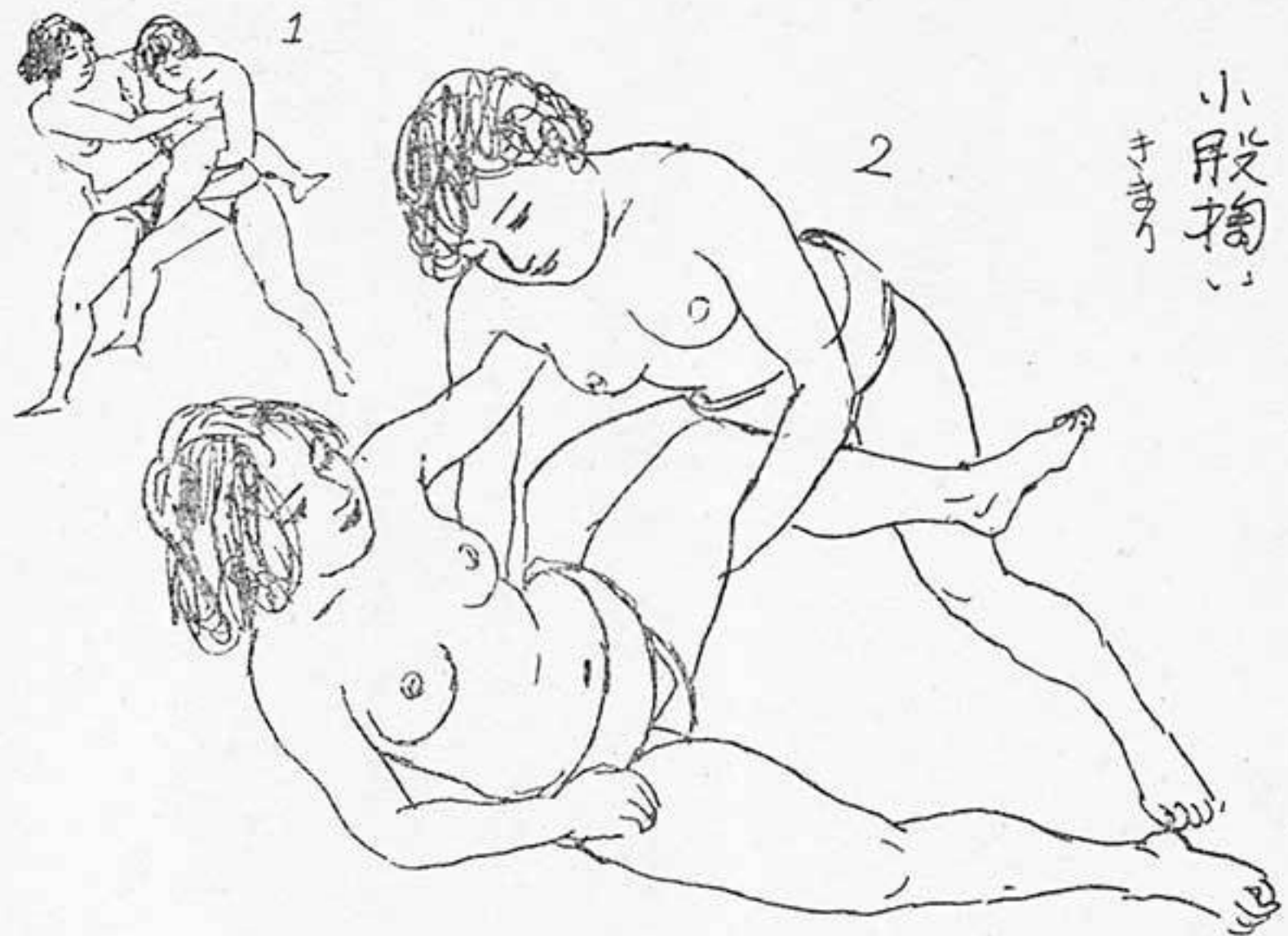
一六八センチ、六十キロとかなりの大柄でその相撲ぶりも、ガップリ四つに組んでから吊りぎみに寄り進むというスケールの大きいものです。マネジャーの笠原さんの批評では、少し力まかせなところがあって、無理な

体勢から投げを打ったりするので、自分が攻めている時はよいのですが、逆に攻められている時に、その不利な体勢を立て直さないまま、力まかせな投げを打ったりすると、外がけや、切り返しなどを喰って、あっけないくらしいの負け方をするのが欠点だということでした。

まじめな人なのですけれど、私たちといっしょになっておしゃべりをしている時など、時々、思いがけないようなおかしい冗談を云ったり、シャレをとばしたりして笑わせます。そのくせ、笑わせた本人はすました顔をしているので、よけいおかしくなるのです。色の白い肌のキレイな人で、ポツと赤味のさした頬に二つ三つ小さいニキビがのぞいています。制服を着ている時は、ほんとうに物静かな感じになって、マワシを締めて土俵へ上った時のあのファイトなど、どこへ行ってしまったのかと思うくらいに、まるで別人のよう感じを受けるのでした。

さて、三番は三年生の池田淳子さんです。ところでほんとうにおかしなことなのですけど、私は、この池田さんは、裸の時しか見たことがないのでした。

服を着ている時だけで、裸を見たことがな

小股掬きまり

ですから、私が池田さんのことを思い出そうとすると、必ずキリッとマワシを締め、練習をしている人たちを見つめているところとか今井さんや野川さんたちと激しい申し合いに汗を流しているところなどしか頭に浮かんでこないのです。

これは、私たち一年生が練習する時間と池田さんやなんかやって来る時間とが少し喰いちがっているためで、とくに私などは、真っ先に練習場へ入ってしまう方なのです。池田さんの部屋へやって来るのに会ったことがないというのも無理はないのでした。

それに池田さんは新学期の始めごろは学級当番で、放課後にいろいろ用事があったし、しばらく練習も休んでいたもので、なおさらなのでした。

練習に参加するようになってからも、少しおくれてやって来るのですが、そのかわりに他の人たちよりおそくまで練習しているようで、上級生たちより一足先に練習を終えてしまう私たちとは、どっちにしろ、いっしょになることはないのです。

そんなことで、池田さんは、私の記憶の中では、いつもマワシ姿の裸ということになっ

てしまうのでした。

この池田さんは一七〇センチという長身で相撲ぶりははげしい突張り、組んでは相手を抜き上げるような吊り出しと、気持ちの良い動きを見せてくれるのですが、惜しいことに体重が五十五キロと、一七〇センチの長身に比較してやや不足なのです。

池田さん自身も、それが残念らしく、「わたしに、もう三キロくらい体重があったら、県下のベストテンのトップとはいかなくても、五位くらいまでには入れると思うんだけどなァ」

などと、ボヤいているのを聞くことがあります。

やせていると云ったって、私みたいなヒョロヒョロではなくて、筋肉質だというだけなのです。

男の人みたいにゴツゴツした感じで、腰も細い感じだし、胸のふくらみも淋しいのでした。

でも、引き締まった体格はほんとうにスマートで相撲なんかしているよりも、陸上競技の選手にでもなった方がいいんじゃないかしらなどと思うほどです。

事実、中学校では陸上の選手だったそう

いというのなら、普通のこと、おかしくも何ともないのですが、その反対に池田さんの場合は、そう多くもない部員の中だということに、制服をつけているのを見たことがなくてマワシ姿しか知らないのですから、考えて見るとふしぎみたいな気がするのです。

で、この高校へ入った時も競技部から盛んに引っぱられたということです。

しかし、池田さん自身は選手をしていた陸上競技をえらばず、相撲部を希望したというのですから、おもしろいものです。

それで、二年生の時までは、リレー要員に時々借りられて出場したりしたことがあるのだと池田さんが笑いながら聞かせてくれたことがありました。

「どうして、陸上の方を止めて相撲部へ入ったんですか？」

と、ヒロちゃんが尋ねたことがあります。

すると池田さんは、

「だって、毎日々々走ったり飛んだりしてるだけじゃつまらないの。それよりも一対一でエイヤツと相手を投げとばしたりした方が何倍もおもしろいじゃない。わたし最初は、柔道をやろうかしらと思ったんだけど、柔道って、ホラ、あの押えこみってのがあつて、あれが嫌なのよ。押しつぶされてヒイヒイいってさ、首を締められたりするのはマジピラだワ。それより相撲の方が勝負があつさりしてるしかえって女性むきなんじゃないかしらと思って相撲をえらんだってわけよ。ただ素ッ裸になってマワシを締めるのだ

けは、ちょっと抵抗を感じたけど……でもそれも最初のうちだけね。なれたらかえってこの方がサバサバしてよっぽどいい気持だわ。人間なんて、どうせ裸で生まれて来たんだから、裸になってるのがいちばん自然なんだわね。マワシだって、ビキニスタイルみたいな中途半端なものなんかよりも、ボリウムがあつてずっと立派だと思うわ」

「でも……」

と、となりでいっしょに聞いていた津野さんが、口をはさみました。

「なんだか、もったいないみたい」

「なにが？」

「だって、せっかく選手になれるのに、止めてしまふなんて、惜しいわ」

津野さんは、まるで自分のことみたいな、いかにも惜しそうな口ぶりですが、池田さんの方はあつさりしたものでした。

「どうせ、あたしくらいの記録なんか大したことはないのよ。全国大会にだって出られるかどうか怪しいものだわ。それに……陸上競技なんか、せいぜい学校にいる間だけでしょ。卒業してしまえば、まさか町の中を歩きまわってるわけにもいかないし」

「そうですね」

と、ヒロちゃんが今度は体ごとわり込んできました。

「相撲だったら、卒業したって、できますもんね。庭でだってできるし、道具だって何もいらぬいし」

「マワシだけはいるわよ」

津野さんがまぜっかえしました。

「マワシは道具じゃないわ。あれはユニホームよ」

ヒロちゃんは、そういい返して「わたし、お嫁に行ったら、お庭に土俵を造るのよ」

大へんなことをいい出しました。

「それで、どうするの？」

池田さんまでが、びっくりして聞きました。

ヒロちゃんは、とくいになって

「それでね、近所の子供たちを集めて、相撲道場を開くのよ、そしてわたしがコーチになるの。どう？　すごい夢でしょ」

「へエ、女の子だけ？」

津野さんが、またからかいます。

「バカね、まじめな夢なのよ。男の子でも女の子でも、やりたいって子はだれでもよ」

「相撲幼稚園ってわけね」

私もつられて軽口をたたきます。

池田さんもニヤニヤしながら

「子どもなんか相手にしてないで、旦那さまとやんなさいよ。あんたの旦那さまになる人だったら、きつとスポーツマンよ」

話が思いがけない方へ発展してヒロちゃんがドギマギすると、からかうのが大好きな津野さんはすっかり喜んで

「そうよ、そうよ、あんた体格が良いから旦那さまもよっぽど体格の良い人を選ばなきゃ釣り合わないわよ」

などとヒヤかします。

ヒロちゃんが、その方を向いて何かいおうとするのへ、池田さんが、

「そして、夫婦ゲンカの勝負を相撲でつけるなんてことにしたらどう？」

ヒロちゃんは真赤になり、私たちはゲラゲラ、中でも津野さんなどはおなかを押さえ、体を二つ折りにして笑いころげています。

するとヒロちゃんは、いきなり私の方へ向いて

「あんたまで笑ってるのッ」

と飛びかかってきて、いきなり私のタテミツのお尻のあたりをつかまえて、グイグイとゆすぶりました。

「きやア、イタイ、イタイ、やめてエ」

マワシの喰い込む痛さと、転びそうになるのとで私が悲鳴をあげると、池田さんが止めに入って

「ホラホラ、間違えちゃダメよッ。この人はあんたの旦那さまじゃないんだから」

また、ドッと笑いが湧いて、とうとう口をとがらせていた、ヒロちゃんまでが吹き出してしまいました。

ひとしきり笑いが続いたあと、ようやくそれがおさまると、池田さんが

「いったい、何からこんな話になっちゃったのかしらねエ」

と、思い出したようにいいました。

ヒロちゃんが、あきれて

「あーらイヤだ。ひとごとみたいにな。何からって、池田さんがどうして陸上の選手をやめたかってことからなのよ」

「アラ、そうだったわね」

「おかげで、わたしばかり、いじめられちゃった」

「アハハ、ごめん、ごめん。でも、あんたの夢をきかせてもらって大分参考になったわ。あたしも旦那さまと相撲をとろうかしら」

池田さんは、こう云っておもしろそうに笑いました。

体重が、もう三キロあれば、県下のベストテンに絶体入れるという、池田さんの言葉は決して強がりだけのものではなくて、ほんとうにそういっても恥かしくないだけの實力は持っているのだということは、今井さんをはじめ、三年生の人たちだって認めているようでした。

相撲にとって体重ということは、ほんとうに大切なのです。

ガップリと組みみ合って、おたがい十分にマワシを引き合った時とか、五分五分の体勢で突き合ったり押し合ったりする時には、この体重の差は、そのまま勝負を決定してしまいます。

ボクシングやレスリングや柔道が、体重制をとっているのはそのためなのです。

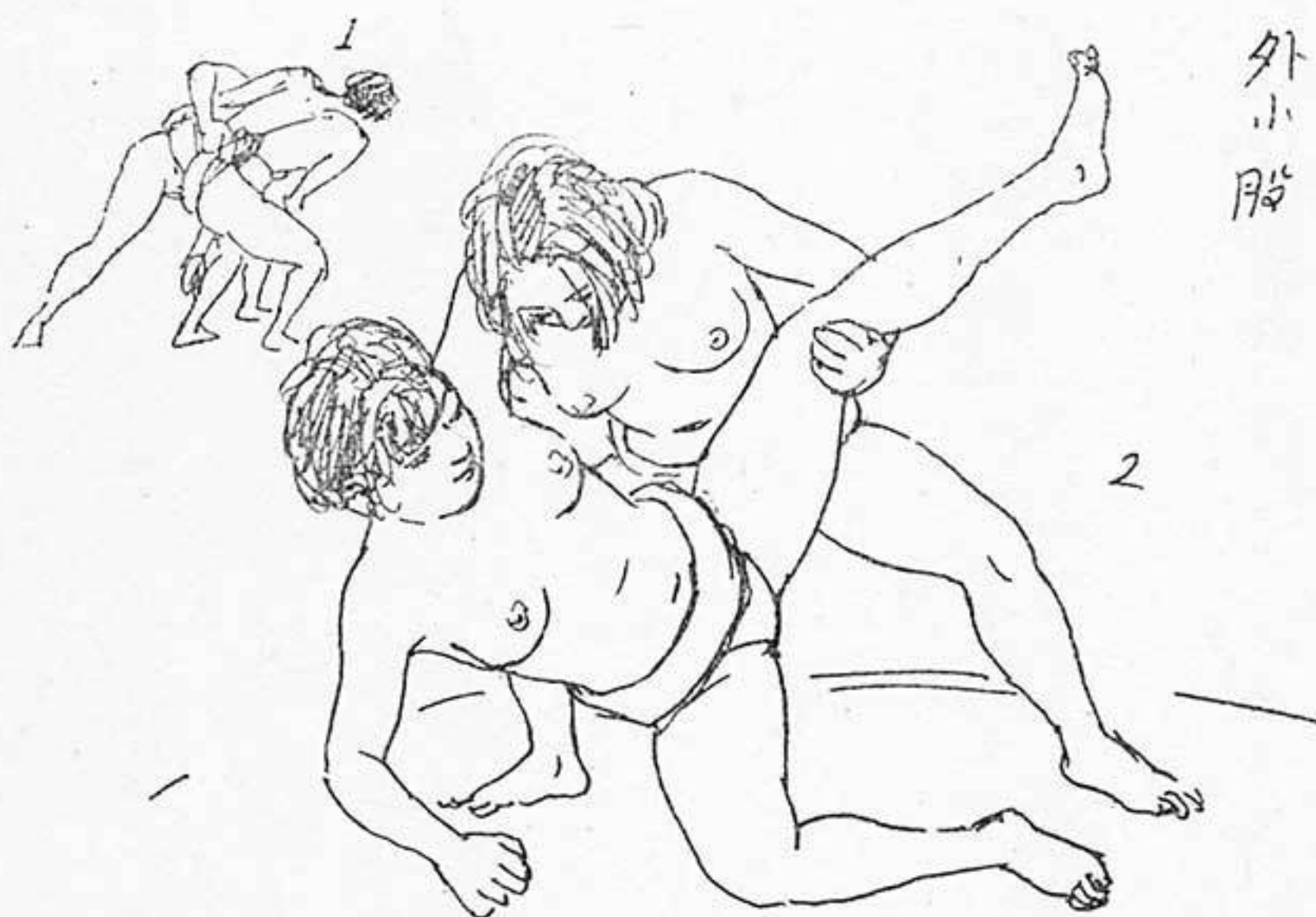
相撲の場合には、勝負はデリケートなもので、はずみで指の先がほんのちょっと土俵をかすったって負けになるのですから、体重の差は有利であるとかだけはいえないかも知れませんが、それでも同じ大きさの人が同じくらいの力でぶつかって行ったら、体重の多い人の方がはね返されないのは当たり前です。

池田さんはスピードがあるので、まだ条件が良いのですが、先手をとられたら大変で

す。けれども、いくら池田さんがくやしがつても体質だけはどうしようもなく、スマートな体は相変らずで、突然の変化は起きそうもないのでした。

ところで、この池田さんには、一つおもしろいクセがあるのでした。

外小股



ろいクセがあるのでした。

おもしろいなどというところ、池田さんに叱られそうですが、それは、池田さんが緊張した時に、心ずちちょっと中腰になって、うしろタテミツを左手で軽く握って、それをスッと下へ引きおろすようなしぐさをすることなのです。

緊張した時とか張り切ってる時に、きつとこれが出るのです。

そして、このくせが出た時にはきまつてスゴイ突っ張りが出たり、気持のよい吊り出しなどで素早い野川さんや、重い小林さんでも敵いません。池田さんのいう通り県下ベストテンの上位の実力十分というところなのです。

しかし、この池田さんの悪いところはムラ気なところなのです。

最初の勝負に妙な負け方をしたりすると、すっかりクサッて、その次の勝負までなげてしまふところがあり、十分な力を出さないで終ってしまふことが欠点なのです。

でもこれは池田さんが正直なせいなのでしょうし、そんな人柄が何とな

く親しみを感じさせるものになっているとも思うのです。

さて、四番目は小林千鶴子さんです。

名前こそ「鶴」なのですが、体の方はどこから見ても鶴らしいところは一つもありません。

一六五センチ、七十二キロと、わが相撲部最高の重量です。

この人のことは前にも書きましたので、簡単な説明でやめておきますが、中川さんが、来年度の最大のホープだとすれば、小林さんは、さしずめことしの最大のホープです。

まだまだ動きがにぶくて、そのため野川さんにはカモにされているのですけれど、メキメキと強味を増していちじるしい進歩ぶりなのだそうです。

相手の突っ込んでくるのをただ受け止めようとするだけの相撲だったのが、新学期になってからすっかり変って、自分から前へ出て行くというようになり、自分の重い体を利用する攻撃を覚えて来たのだそうです。

元々体操の選手をしたことがあるくらいですから、体は柔軟で、安定が良いのです。タカレても、なかなか手をついてしまふというところもないし、投げにだって案外に強い

です。

ただ、今までは、急に肥ってしまったため自分の体重が自覚できないみたいところがあって、肥る前のような動作をするつもりなのが、思うようには体が動かないということからのギコチなさだったのでしょう。

それが、最近では、自分の体重がようやくのみこめて、それに合わせた動きをすることができるようになったのです。

こんなことをいうと、私がまるで相撲解説者みたいですけど、これはみんなマネジャーの笠原さんや、野川さんからの受け売りなのです。

メキメキと力をつけてきた小林さんは、もう三年生の人たちを相手にしても、ほとんど見劣りはしません。

動きの速い野川さんには、その動きにあわてないで、ジックリと受けとめて、相手をつかまえようとします。

突っ張りの強い池田さんには、体勢を低く構えて突張りの効果を、何とか弱めようと、そして突張りを止めることに成功すれば、体重を利用した押しでグングンと攻めるのです。おたがいマワシを十分引き合ってしまったら、おそらく今井さんだって勝てる

といい切れないかも知れません。

ただ、スピードがないので、立ち合いから一気に押して行く今井さんや、同じ二年生の金子さんの強引さが苦手のように見えます。

でも、丸々とした小林さんを見ていますとむかし盛んだったというプロの女相撲の人たちも、きっとこんな体格をした人たちだろうと思って、ふとこの小林さんが、りりしい相撲鬻に結び上げ、そしてキレイなマワシを締めて、土俵入りをしている姿などを想像して見たりするのでした。

最後の選手—キャプテン—は、いうまでもなく今井さんです。

一六六センチ、六十キロという、ちょうどトップの野川さんを身長、体重とも一まわりずつ大きくしたような体格ですが、野川さんの方が全体に柔か味があって、いかにも女性らしい曲線的な体つきをしているのにくらべて、今井さんは頑丈づくりというのでしょうか、肩巾も広くガッチリしていて、手も足も太いのです。

そして、相撲ぶりもこの体つきのとおりに低く構えた押しの攻撃法で、ほんとうに無駄な動きのない教科書みたいな相撲です。

ちょっとした相手のスキや乱れも逃さず、グングン攻め込んで行くのは全く感心してしまふのですが、優等生タイプとでもいうのでしょうか、機械みたいでおもしろくないという気持ちもします。

野川さんなどは、この今井さんのことを「ゆうずうのきかない相撲で、おもしろくないわ」

などというのですが、苦手に対する悪口だとばかりもいえないようです。

相撲ばかりでなく、勉強の方も優等生なのだそう、部長先生の信頼も厚いのです。

マネージャーの笠原さんとは、中学校からの親友、しかし、私とヒロちゃんとの関係のような、「悪友的親友」ではなくて、ふたりとも、学年委員同士だったというのですから、とてもくらべものになりません。

私などにはちょっとマジメすぎて、親しみにくい感じがするのです。

何かを尋ねようと思っても、気おくれがして、つい言いそびれてしまうこともありますし、勇気を出して声をかけようとしても、キレイな目で見つめられると何だかこっちの心の中まで見とおされたような気持ちになって何も言わないうちに顔が赤くなってしまい、い

いかける言葉も忘れてしまおうのです。

この感じは、私だけでなく、ヒロちゃんや

津野さんも同じらしく、

「今井さんて、何だか親しみにくいワね」

「大体立派すぎるのよ。わたしたちのようなオテンバなんかと元々出来がちがうのネ」

などというのです。

でも、口数が多くないだけで、ほんとうに良い人なのです。

私たちを指導する時でも、チットもからかうようなところはなく、たとえば、押しの型を練習する場合などには、私たち一人一人の体格に合った教え方を、その理由からちゃんと説明してくれるのです。

ですから上達しないと申しわけがないような気持がしますし、熱心に練習をするようになるのです。

カンの良い松田さんなどは、たちまちのうちに上達して四股ふみや運足の練習などは私たち一年生のうちで、いちばんうまくなってしまいました。

今井さんのような尊敬できる人をキャプテンになっていてもらって、ほんとうに私は幸せだったと思うのです。

さて、補欠は、美人グラマーで、来年度の

最大のホープ、そしてユルフンなのが玉にキズという、賑やかな肩書きのついた中川元子さんです。

この人については、前にくわしく紹介しましたから説明をはぶきます。

これで、私たちの代表選手たち全部の紹介を終ったわけですが、この五人の選手がそれぞれ異ったタイプであるのが、私たちのチームの特色で、バラエティに富んだ陣容なのですが、またそれだけに、私たちの相撲部が、まだ歴史が浅く、部としてのある一つの型がはっきり生まれていないということもできるかも知れません。

選手が決まってからの部の練習は、当然選手中心のものになってしまい、土俵の方は、もっぱら、例の青いマワシを締めた人たちが占領して、激しい申し合いが続けられるのでした。

いいおくれましたが、選手に決まった人たちは、硬い選手用のマワシを体になじませるためと、他の人たちと区別するため例の青いマワシを練習の時も締めているのです。

そしてそれが他の人たちを、うらやましがらせるのです。

青いマワシをキリリと締め込んで取り組ん

でいるのを見ますと、何だか急にたくましくなったように感じられて、白い練習用のマワシの私たちが弱々しく見えてくるのでした。

「いいわネ。わたしも早くあの青いマワシを締めてみたい」

選手の人たちの練習を見ながら、松田さんがいいました。

「あんただったら、来年からきっと選手になれるわ。こないだも、笠原さんがぼめていたわ」

「アラ、何で？」

「とても素質がよいんだって、運動神経が発達してるのネ」

「アラ、わたしなんか、今までほとんどスポーツらしいことなんかやってないのヨ」

「スポーツをやっても、そのくらいできるんだから大したもんだワ、カンがよいのネ。それに比べると、わたしなんか転び方ひとつうまくでしゃしない」

転び方というのは、つまり受け身のことですが、ぶつかりげいこの時に相手を押して行って、土俵ぎわでグルッととんぼかえりのようにころがる―あれです。

私は、どうもこのころがるというの怖くてもうまくやれないのです。

背中を丸めて思い切ったところがあれば、自然に一回転して起き上がれるものなのですが、何だか頭をおつけるような気持ちがして突っ込めないのです。

そのためにかえって背中を打ったり、マワシの結び目に腰をイヤというほど突き上げられて息が止まりそうになったりして、一回転どころか、まるで投げとばされて、仰向けにひっくり返ったようなブザマな格好になってしまふのでした。

私のほかには西田さんがにが手らしく、時々、逆立ちを失敗したような転び方で背中から、ドタッと落ちたりしています。

ヒロちゃん、津野さんはうまい方ですが、とくに松田さんは鮮やかで、まるで軽業みたいにキレイな回転をしてヒョイと起き上がるのです。

四股ふみだって、それが自慢？ のヒロちゃんなんかより、よっぽど型の良い四股をふみます。最近ではヒロちゃんも、それを認めたらしく、

「あの人って、何をやらせてもうまいわネ」
「でも、取り組んでみたらわからないわヨ、わざの方だったら、ゼツタイ自信があるワ」とまだ強気を捨てません。

でも、今のところでは、私たちのいちばんのホープは松田さんであることは、間違いないようでした。

明日からいよいよ大会という日でした。例によっていちばん乗りをした私が誰もいない練習場で、四股をふんでいると、練習場の戸を開けて誰かが顔をのぞかせました。ヒロちゃんでも来たのだろうと思って、かまわずに四股を続けていますと、

「チョットチョット、テルちゃん」

ふりかえると、小林さんが、入り口から顔だけのぞかして呼んでいます。

私がふりかえると、小林さんは

「たのむわ。マワシ、マワシ」

と手まねをしました。

私が部屋へ戻って見ると、小林さんは、もう裸になって、マワシをつけ終っているのです。

でも、小林さんは

「ひとりでやると、どうもしっかり締まらないのよ。やり直すから、手伝って」

と云って、私に端を持たせると、グルグルと体を回転させながら解いていきました。

下にたれないように、私はそれをたぐっていきます。

すると、小林さんは
「ここじゃ、せまくてしにくいから、広いところでやりましょう」

と云って、ひろげて前に当てたマワシの胸のあたりを左手で押さえ、股を通したお尻のところを右手でにぎって、ちょっと足を開いたおかしな歩き方で、誰もいないガランとした練習場へ出て行きました。

そのうしろから、ちょうど小林さんの尻ツボを引っぱっているような恰好で、マワシの端を持たせられた私が続きます。

練習場へ出た小林さんは、さっき私がひとりで四股ふみをやっていたあたりまで歩いて行ってやっと止まりました。

そして、両足を開いて、ヒザを直角くらいに深く曲げて、上体を起すと、グッと構えました。

腰から太モモのあたりにかけて、よく肥った脂ぼうの内側で、きたえられた筋肉がモリモリと緊張するのがわかります。

ポテポテしていた丸いお尻も、一段とたくましく盛り上って、パチンと音を立てるくらいに張り切りました。

そして小林さんの力を入れるのにつれて、角張ったり、力味かえったり、いろんな表情

に変化するのです。

「タルマなように、引っぱってよ」

小林さんは、マワシのうしろを持っています。私に声をかけると、ひろげて前に当てたその上の端をアゴでおさえ、あいた両手で、股を通すところを、それこそ一センチの乱れもないくらいに、キチンと折りたたむのでした。

臼のようなボリュームのある二つの半球を深く割った谷間までが、すっかりムキ出しになって、見なれてはいる姿と云っても、さすがに、まぶしいものを眺めるような気持ちになるのです。

「マワシを締める時の格好って、あまりイカさないわね」

津野さんが、いつかそんなことを云っていたことがありました。

「足を開いて、ヒザを曲げて、マワシを股に当てがうなんてのは、ウラ若きオトメといたしましては抵抗を感じるわ。あんたなんかどう？」

「そりゃそうよ。だって、あんまり、人の前でやるものでもないんだし……」

「だいたいスポーツなんて、女の子が飛んだりねえたりすることは、昔ふうの礼儀作法から云ったら、それこそとんでもないことなん

でしょ。だから……仕たくしてるところなんか人に見せるものでもないし……気にしないでもいいんじゃない？」

松田さんも、口をはさみました。

「そうネ。なればいいわけネ。そんなことを気にするのは、まだ熱心でない証拠かな」

津野さんはそう云って、私にチョット片目をつぶって見せたのでした。

しかし、考えて見ると、私がいつも真先にやってきて、ひとりでマワシを締めて、練習を始めるというのも、心の中にマワシを締める姿を人に見られたくないという気持ちがあるためかも知れないのでした。

素ッ裸になって、津野さんの云ったような格好をするのは、たしかに私たち若い娘にとっては、なれないうちは、かなり恥しいものなのです。

「あたしもまだ不熱心の部類なのかしら？」
そんなことを考えている私におかまいなく小林さんは、キビキビとマワシを締めるのでした。

キチンと折りたたんだマワシを、小林さんは、まるでホウタイを巻く時のように、ていねいに股に当て、お尻に引き上げます。
それから、今度はウンと胸に息を吸い込ん

でおなかをへこませると、体を回しながら、マワシを腰に巻いて行くのでした。

一回、二回と腰へまわすと、

「思い切って引っぱってちょうだい」

と私に声をかけて、グイッ、グイッと腰をひねって、まるで腰の肉へマワシが喰い込んで行くように締め込むのです。

力一ぱい締めては巻き、また締めては巻きして、固い選手用のマワシの上下に、ムックリとした小林さんの腰の肉が盛り上がるほどになってしまいました。

おなが、こぼれ落ちそうなくらいに、マワシの上へせり出しています。

締め終わった小林さんは、

「アアよく締まったわ。いい気持ち、どうもありがとう」

と、云いながら、軽く四股をふんだり、伸脚運動をしたりしていました。

「小林さんのマワシって特別なんですか？」
おそろおそろ私が聞きました。

「なにが？」

「あの……長さやなんか……」

「ああ、そんなこと？　そう、ほかの人のとちがうのよ。わたしのは男子のと同じなの」
「へえ」

私がびっくりすると、小林さんは

「サイズが同じだよ。もちろん生地やなんかは女子用なのよ。あんな固い男子用のマワシなんか締めたら、わたしなんかのヤワ肌がスレちゃうわ」

と笑いました。そして

「わたしたちみたいなデブちゃん用に、特別なサイズがあるのよ。つまりL^{エル}サイズって

ヤツ」

私が本気にしてうなずいていると、小林さんは、もういちど笑って、

「そんなことより、どう、一番ぶつかってこない？」

私はちょっとあわてて、

「え？ ハイ」

と答えましたが、ぶつかりげいこなどは初

めてなので、嬉しいような、怖いような気持ちで胸がドキドキしました。

それに、小林さんの練習はちょっと荒っぽいのです。

小林さんは心配そうな私の顔を見て

「軽く押すだけよ、さあ」

私もそのくらいならと思って、土俵へ入りました。
(未完)

△浣腸夜話▽

夢のない救急箱

栗 瀬 長

健康保険組合から組合員各人に救急箱一箱がおくられるという。政府管掌の健康保険財

政は赤字続きとかで、厚生省も頭が痛いというが、民間の保険組合は比較的黒字の所が多いという。企業である以上、社員の健康は直接生産に影響する所が多く、健康管理に並々ならぬ方策を用いるからだというが。

ともあれ、保健財政が黒字であって、それを救急箱配布という形で還元するなどは、誠

に結構なことであろう。喜んで頂戴ということになる。

急救箱といえは、昔ながらに富山の売薬箱よろしく、無地の木箱を連想し勝ちだが、最近のは立派なものだ。ツートンカラー、赤と黄の色も鮮かなプラスチック、蓋には緑十字が浮きぼりになり、取手も回転自由といった近代感覚充分、一寸ハイキングにでも持って行きたくなるようなセンスのある箱とは相成

った。

中も三区劃に仕切られ、その仕切も自由に動かせるという。さて、何がめられているのだろうか。一寸胸をわくわくさせながら蓋をとる。どうして胸が躍るかって、それは後にしよう。

右の区劃には、

- | | |
|---------------|------|
| 一、繃 帶 (川本繃帶) | 四・五米 |
| 二、ガーゼ (同) | 一 米 |
| 三、脱脂綿 (同) | 二十五瓦 |
| 四、油 紙 (同) | 五 枚 |
| 五、テープ (新日本薬品) | 六 米 |
| 六、繃帶留 | 十 個 |

がきちんとおさまり、一寸した怪我には、これで充分といった所。

左の区劃には、ちゃんと格納用の穴があっ

て、そこには、

- 一、ハサミ 一個
- 一、ピンセット 一個
- 一、綿棒 一本
- 一、トゲ抜 一本
- 一、ナイフ 一個

が、きちんと納められている。右側の繃帯類はこの左側の道具によって、その機能を十分に發揮出来るわけだ。

さて真中の仕切りは最も大きく、薬の小箱がぎっしりつまっている。

- 一、感冒薬 アルペン（中外）二五錠
- 一、鎮痛剤 セザール（大日本）十二錠
- 一、綜合胃腸薬 （田 辺）五十錠
- 一、ヒスタミン剤ベナパス（田辺）十瓦
- 一、軟膏 テラマイシン（台 糖）三瓦
- 一、外用 マーキュロ（新日本）二五cc
- 一、うがい薬コルセダン（〃）十五cc
- 一、整腸剤 ワカマツ（中 滝）三五錠
- 一、外用 オキシドール（タツミ）百cc
- 一、皮膚薬軟膏ペークミン（全薬）二〇瓦

これで全部。まず一寸した腹痛、風邪、怪我位なら、医者に行くまで一応これで応急の処置はとれそうだが、一寸まって、何か大切なものが欠けてはいないだろうか。いや、そ

れが入ってやしないかと、私は胸を少しばかりときめかしたのが、やはり期待はきれいに裏切られた。

やっぱり入ってなかった。それは浣腸薬である。若し私が、この救急箱の製作担当者であつたなら、

- 一、ガラス製 グリセリン浣腸器三〇CC
- 一、グリセリン液 百グラム

を入れるであらうし、もし容積、コストの点で不可能であるならば、少くともイチジクかオロナインのような軽便浣腸の一個や二個は入れる筈である。勿論全部揃えば、それにこしたことはないのだが。

昔のように、「発熱だ、それ、××浣腸」という程、浣腸は行われなくなったようだが、子供の便秘、ヒキツケ等にまず浣腸は常識なのだから、浣腸薬が救急箱に備えられてもちっともおかしくはないと思う。

現に、この救急箱の中には、「あわてないでとっさの手当」という三十頁の立派なパンフレットが入っている。その中にも、「子供がひきつけたとき」

(6) 浣腸をしましょう。

「赤ちゃんが熱もないのに、何回も急に吐き、ぐったりして顔色も蒼白になったとき」

(2) 腸閉塞かもしれません。すぐ診てもらえない時は、ぬるま湯に食塩をとかし、全部で五〇〇から一〇〇〇CCくらい浣腸します。

こうなると、浣腸薬どころか、エネマシリンジでも入っていないければ間に合わない。

「便秘」

(3) 四、五日も排便のないときには浣腸をしましょう。

これだけの注意事項がありながら、浣腸薬のない片手落がなげかれる。

早速私は、私の救急箱ならぬ浣腸箱といった方が早いと思われるが——そこには、三種のグリセリン浣腸器、エネマシリンジ、イリリガートル、グリセリン五〇〇瓦ビン、ドナン五〇〇瓦ビン、フリートエネマ、ゴムスポイト、各種嘴管、ワセリン、ゴム布、差込便器、そして、イチジク、オロナイン、ハート十字、ビワ、サクラ、ウサギ、リスカン等の軽便浣腸等が入った——正に浣腸七つ道具箱から、オロナイン浣腸二十瓦入りを一つとり出し、そつとこの新しい救急箱の底にひそませるのであった。

これで名実ともに立派な救急箱になった。私は、そこでホッと溜息をついたのであった。

花

と

蛇

はな

へび

団

鬼

六

続編（第十九回）

変身

ぎっしりと部屋の周囲を埋め尽している男達は、このすさまじいショーに息を呑み、一言も発する者はなく、凝然として、揺り動く白い二つの肉塊を見つめている。

躍動する豊満な乳房、うねりつづけるくびれた腰、たしかに、客席へ強烈な刺激を与えたようである。男達の間から、吐息と感歎の聲が渦巻きあがった。

熱い息を吐き合い、汗みどろになって踊りつづける静子夫人と京子は、もう埋め尽す男

達の視線や哄笑など感じる余裕もなく、自分の身体を相手に与え、また、相手の身体を自分にひきこみ、烈しく泣きつつ、荒々しく……を……っているのだ。

ゆで卵の白味のように艶のある夫人と京子の柔軟な肌は、完全に一個の……と化したよう官能の火花を散らし合っている。

互に両腕は、きびしく後手に縛りあげられているのに、その一点だけで、ぴったりと連結し、そこに命を賭けたよう荒々しい悲しみの中で、必死に踊り合っているのだ。

「——お、奥様」

「——京、京子さんっ」

静子夫人と京子は、ひょっとすると、もうこれが最後とでもいう感慨があったのである。底知れぬ切なさ、恋しさをこめて、一層激しく……うのであった。

銀子は、茶わんにウィスキーを注ぎ、それを口に運びながら、二人の美女の狂態を見つめていたが、また、何時かのように、邪悪な妬ましさ、じわじわ胸にこみ上ってくるのだ。

本当に、この二人は、愛し合っているのだわ、そう思うと、キリキリ胸が痛んでくる銀子である。

何時か銀子は、静子夫人に対して、特殊関

係を迫り、柄にもなく、優しい言葉を口にして口説いた事がある。自分とそういう間柄になつてくれたなら、うんと楽な生活を保障するともいったが、夫人は、それを拒絶した。つまり、如何に羞しめられ、虐たげられようとも、私の心まで変える事は出来ないわ、と夫人は銀子を突っぱねたわけだ。

そして、静子夫人は、京子と、本格的に身も心も、そういう関係になつてしまったのであるが、それは、銀子や田代や森田組、川田等に対する反逆行為でもあると受取れるのである。それを思うと銀子は口惜しくて仕方がない。可愛さあまって、憎さが百倍というわけだ。

銀子は、フン、と鼻で笑つて、茶わんを口から離すと、フラフラ立上った。

火のように………させて、演じ合つている夫人と京子の傍へ銀子は近寄る。

「フッフ、ハッスルしてるわね。それだけ熱演してるのだから、二人仲良く一緒に——しなきゃ駄目よ」

そんな銀子のいたぶりも、もう耳には入らない夫人と京子である。

お互に、涙で濡れた頬と頬とをすり合わせ激しく………合いながら踊りつづけている

のだ。

「わかつたわね。そういう風にしないと、また別のお仕置を考えるわよ。フッフ、お互に呼吸を合わせて、——するがいいわ」

銀子は、上気した二人の美女の横顔を見ながら、更につづける。

静子夫人と京子は、一層、声を震わせて泣きあい、………あい、激しく………うのだつた。

朱美が、眼をぎらつかせている男達に向つていう。

「じつと見ていただけじゃ芸がないわ。手をたたいて、この別嬪さん達に調子をつけさせましようよ」

朱美の音頭に合わせて、男達は、一せいに手をたたき始める。

「お客さん達の拍手に合わせて、………のよ。大きく、のの字を書くように動かしてみな」

銀子は、静子夫人と京子の尻に再び平手打ちを喰わして、いうのである。

男達の酒に濁ったがらがら声が、室内一杯に渦巻きあがる。

へ一つ出たはのよさはのはい——淫猥な男達の歌声に合わせて、………

せ合う美女二人は、一層、客席へ強烈な刺激をふりまき始めたようであった。

男達の歌のテンポに合わせて、肉づきのいい柔軟な………が海蛇のようにうねり舞い、豊かな乳房がゆさゆさと揺り動く。

次元の違った世界での出来事のように、静子夫人も京子も、ただいらずに、………のようになって、火花を散らし合っていたのであるが、ふと二人は、ズベ公や見物の男達が期待している落花無残の状態に、………到着しかけ始めている事を感知する。

——いけないわ、いけないわ——静子夫人は、齒を喰いしぼり、狂ったように首を振り始めた。

だが、調子づいて踊り出した身体は、一旦止めようとしても止まるものではなかった。ゴールに向つて、驀進しつづけるのである。

「お、お、奥様！」

京子も、明らかに、………である。戻るといふ事が不可能なれば、突進していくやり方法はない。京子は、もう前後の見境もなく、一段と調子をあげ始めて、………出す。

「あっ、ああ——京子さん！」
「——奥様っ、許して！」

京子は……くようにして、ラストスパ
ートを開始したのである。

銀子の哄笑、朱美の嘲笑。

「いいわね、一緒よ、ホホホ」

静子夫人は、もうどうしようもなくなったように、京子の白い肩へ、がっくりと首を落とした。白い頬を充血さし、やりきれない、たまらない衝動が、内部から、こみ上って来た静子夫人は、身体をがたがた慄わせつつ、無意識のうちに、京子の肩に噛みついてしまふ。

二人は、あふられ、まきこまれ、意味のない言葉を叫びつつ、血でも吹き上げるような狂おしいものに打ちのめされて、がっくり、互の肩に美しい顔を埋め合ったのだ。

相ついで起る発作に、太腿から……まで脈打たせる美女二人を見た男達は、もう歌など唄う者はいない。息を殺し、眼をギラつかせて、このすさまじい光景を蕩然として見つめているだけであった。

「一巻の終りってわけね」

銀子は、ほっと息をつくようにして、再び二人の傍へ近寄ってくる。朱美もくすくす笑いながら、銀子のあとについてやって来た。

銀子は、静子夫人の赤らんだ頬を指でつつ

き、

「フッフ、奥様——」

静子夫人は、首筋まで熱くしながら、もじもじし、眼を閉じ合わせたまま、かすかにうなずき、京子の肩に一層顔を深く埋めるのだった。

「どう、京子さん、貴女も——」

朱美に、頬をつつかれて、京子も夫人の肩に顔を埋めたまま、震えるように小さくうなずくのだ。

「フッフ、両手は後手に縛られたままだというのに、ほんとに、あんだ達、器用な人ね」
銀子は、そんな事いいながら、身をかかめ……る。

夫人と京子は、……、美しい眉を寄せ合う。

「まあ、あきれた。ちょっと、朱美、手を貸してよ」

朱美も手をかして、二人を引き離すようにし、ようやく……のだった。

「まあ、いやだ。すごいじゃない。ひどい汗だわ」

「そりゃ仕方がないさ。いくら高嶺の花の令夫人でも、やっぱり女ですものね」

銀子と朱美は、夫人の腿にまで伝わる汗と

脂を見て笑い合う。

身体を……れて、ようやく夢から覚めたよう夫人と京子は、そっと眼を開き合う。

ふと、二人の視線はからみ合った。その途端、浅ましくも衆人監視の中で、共に敗北してしまった羞恥が、二人の顔に紅を散らし、同時にはっと視線をそらし合う。川田が、ニヤニヤしながら、いった。

「何も今更、照れる事はねえだろう。今の感激を語り合ったら、どうだい」

吉沢も井上も、田代も森田も、二人の美女のそらせ合う横顔を眺めて、ゲラゲラ笑っている。

京子は、急に眼を開き、静子夫人に対し、悲痛な思いをこめていった。

「奥様、京子、京子は幸せよ！」

恐らく、京子は、この地獄屋敷の中で、快適に暮すべく決心する事が、残された唯一の救われる方法だと思い、夫人に同意を求めたものと思われる。

京子の声に静子夫人も、胸をしめつけられるような思いになって顔を上げる。

「京子さん、静子も、静子も、幸せだわ」

静子夫人と京子は、たまらなくなったように、こみあげてきた思いをぶつけ合い、ぴっ

たりと唇と唇を合わせ合った。むさぼるように互に舌を吸い合い、長い熱い接吻をつづけるのである。

川田は、どうです、といわんばかり、誇らしげな顔つきになって、田代を見る。二人の美女がようやくこちらの思う壺に入ってきたぜ、という事がいいのだ。

川田は、ようやく唇を離し、熱い頬と頬とをすり合わせている二人の美女の傍へ一歩踏み出していった。

「どうやら二人とも、本心から、こういう事を悦び合えるようになってくれたらしいな。俺達も仕込み甲斐があったものだ。見ろよ。客人達も大喜びだ」

静子夫人は、ニヤニヤしてそんな事をいう川田に美しい切長の瞳を向けて、小さく声をかけた。

「——川田さん、手がしびれちゃったの。縄をといて休ませて下さらない」

京子も、すぐ横に来て、突っ立っている吉沢に声をかけるのだった。

「あなた、お願い、少し休ませて——」

川田と吉沢は、顔を見合わせ、北叟笑み、「いいとも。だが、その前に、完全に満足した事を客人達に点検してもらおうじゃないか」

川田がそういうと、静子夫人と京子は、再び、ぼーと上気して、美しい眉を曇らせる。

「お客様方に後始末をして頂くんのだ。な、いいだろ」

川田がそういうと静子夫人は、川田の眼がゆらぐばかりの妖艶な眼差しをつくって

「嫌、嫌、そんな事——」

夫人は、鼻を鳴らすようにしていい、身によじったが、それは完全な拒否ではなく、それを認めつつ、甘い否定の姿態をとったといえる。

もうここより逃れる術はないのだ。羞恥の片鱗も忘れて京子と演じ合った今のショーで静子夫人も京子も一段と飛躍し、川田達が期待する女に前進したといえる。夫人も京子も悪魔達の調教の中で強い羞恥心を感じている限り、その辛さはつづるばかり、こういう川田や吉沢達の考えるいたぶりを一つの快感として受取るよう自分で自分を教育しようと努め出したのである。それに、肉体そのものも、巧みな鬼源の調教で、色々な責めを被虐的快感として受取るよう段々と作りかえられて来ている事も事実であった。

男達の積極的な愛撫を一層受けとるための意識的羞恥、すなわち、それを遂に發揮する

段階にまで、夫人も京子も近づいて来たわけなのである。

川田は、満足した。そして、命令する。

「さあ、お互にまわれ右して、お客様の方へ正面を向け合うんだ。ゆっくりと、くわしく検査して頂くんのだよ」

それを聞くと、静子夫人と京子は、別離を悲しむ恋人同志のように、も一度、ぴったりと寄り添って唇を合わせあい、激しい接吻をくりかえすのであった。

「奥様、京子、たとえ、どんな目に合っても奥様の事は忘れないわ。好き、好きなのよ、ああ、奥様」

「京子さん、よく言って下さったわ、静子だって、静子だって、貴女の事は——」

唇といわず、頬といわず、耳といわず、熱烈な接吻をかわし合い、後手に縛られたままの肉体のあちこちをさすり合わせた二人の美女は、再び、川田にきびしく叱咤されて、ようやく、互に背を向け合い……周囲を埋めつくす野卑な人間達の眼に、あますところなくさらけ出すのであった。

酒に濁った男達の眼は、一せいに……集中する。

静子夫人と京子は、ぴったりと背と尻を合

わせ合うようにし、そんな野卑な男達を下げすむように、空虚な瞳を前方に向け立っているのである。

銀子や朱美、それに、悦子や義子達までが近寄って来て、夫人と京子の赤い……ではじき、……て、男達に何かいい、共に大声で笑い合う。

静子夫人と京子は、どうとも勝手にするがいいわ、とでもいうような無表情。しかし、背に高々と縛り合わされている手首を動かして互の手を握りあい、この屈辱を共に必死に耐え抜こうと合図しあっているのであった。

銀子が、ふと何かを思いついたように、部屋の隅へ行くと、長い一本の青竹を持って戻って来た。

「フッフ、お客達は、……花の実を、もつと、くわしく調査したいそうなのよ。男達って、ぜいたくだわね」

朱美も銀子に手伝って、身をかかめる。一本の青竹を足枷にして、二人の足を割り開かせようというのだ。

身をよじり、顔をそむけ、二人の美女は、拒否的な姿勢をとりつつも、それは、あくまで消極的なものであった。二人の間に青竹がさしはさまれると、夫人も京子も、ズベ公達

の手に肢を任せ、羞恥の衣をかなぐり捨てたような心境で……互の足首を一本の皮紐でキリキリとつなぎ止められてしまうのだった。

野卑な男達の視界にはつきりと……させ、彼等の卑劣な探求心を満足させねばならなくなった静子夫人と京子である。

男達の感嘆の溜息、卑猥な揶揄、そうしたものを二人の美女は、冷静に、いや、冷静さを装って、軽く黙然したまま聞いているのである。

密談

田代は、おそい朝食をとっていた。朝でも肉類を食べねば氣のおさまらぬ田代は、分厚いビフテキの肉をフォークで切りながら、鼻唄をうたいつつける。

昨日、美津子と文夫のショーがあっけない幕切れとなり、一時は、客人達が口々に不平を並べ出し、どうなる事かと思ったのだが、静子夫人と京子が特別出演として登場し、熱演して、とにかく、一座を満足さしてくれたのであるから、気嫌がいいわけである。

ノックの音がして、入って来たのは、川田と森田であった。

「昨夜は、うまくいきましたね、社長」

川田はそういうと、もうすっかり森田組の幹部気取りで、肘掛椅子に坐り、卓の上のウイスキーをコップに注ぎ始めている。

「静子夫人も京子も、どうやら、こちらが狙っているタイプの女に生まれかわってきたようだな」

田代は、えびす顔になっていい、手をのばして、卓のウイスキーをとり、川田のコップに注ぎ足し、森田にもすすめるのであった。

「ところで、社長」

森田は、ウイスキーを少し、口に含んで、コップを置くといった。

「先程、電話連絡がありましたね。いよいよ関西の岩崎親分、明日の飛行機で、こっちへおいでになるらしいですぜ」

「そうか」

田代は、そわそわした気分になる。

「いよいよ、大物の御入来ってわけだな」

岩崎親分の東京における遊興の相談は、すべて、田代が受持ち、とにかく、この屋敷で大がかりな賭場を開張させ、一千万は下らぬと思われるテラ銭を岩崎上京の折毎に儲けようというのが、田代の目算であった。

「手筈はととのえておきました。明日の夜に

は、大親分、ここへ到着するという段取りになっております」

川田は、そう報告する。

田代は、うなずきながら、ショーのプログラムの方も大丈夫だろうな、と念を押す。

「まあ、鬼源とわっしとが、腕によりをかけて、面白い番組を組んでお目にかけますよ。ま、社長は安心して、高見の見物をしていて下さい」

川田にいわれて、田代は何度もうなずく。

田代は、ショーに関しては、川田や鬼源に、すっかり任した形なのだ。

「岩崎親分は、日本趣味、つまり、時代劇ムードがお好きなようなんです。それで、鬼源と相談したんですが、やっぱり、日本髪が一番似合うのは、何といっても、山本富士子ばりの静子夫人です。そこですわね——」

川田の田代に話したアイデアというのは、そのものズバリのショーを演ずるよりは、一つの芝居を演じた方がいい、ということである。筋は単純だが、女を責めるという事を主眼においた芝居——銭形平次に捕まって、島送りになった与太者が島破りをして江戸にもどって来て、平次に仕返しをする手段として、平次の恋女房のお静を手ごめにするとい

う設定らしい。

「成程、静子夫人がお静に扮するというわけか。悪くない筋だな」

田代は腹を揺すって笑った。川田も笑いながら、

「その島破りの与太者、辰次をやるのは、この俺なんですよ」

お静を納屋へ監禁し、辰次は、白痴の乾分の捨三をけしかけて、お静を羞しめる、という事になっているらしい。勿論、白痴の乾分捨三を演ずるのは捨太郎である。

「いよいよ愉快だね」

田代は、浮き浮きした気分になっている。

普通の芝居ではないのだから、そこへ救援者が現れて、お静が救出されるという事はない。お静は納屋の中で辰次と捨三のために徹底的に罵られるという事になっているのだ。

「鬼源と相談して台本も作りましてね。今朝早くから捨太郎も混って、何回もリハーサルをやったんです」

川田は、ウィスキーをなめるようにして、

田代にいうのだった。

「リハーサルとは、よかったな」

田代は、ますます上機嫌になる。

「そこで、社長」

次に森田がいった。

今までのように、素っ裸のまま、舞台の上へあげるのは、興味も薄れることだと思いますので、一応、衣裳を揃えてみたいのですが、というのである。

時代劇ショーであるから、まして、遊び人の岩崎親分の気嫌をとるものであるから、安手なものは駄目で、艶やかな静子夫人の肢体を包むのにふさわしい華美で豪華な着物を一応揃えてやっていただきたいと、森田は、このショーを見ごたえのあるものにすべく張りきっているようであった。

「よかろう」

と田代は二つ返事で承知する。

「一流の呉服屋に頼んで、着物から下着まで極上品を揃えろ。それ位の投資は仕方がないと思うよ」

「いえ、ショーは明後日、今から呉服屋に注文してたんじゃ間に合いませんよ。うまい具合に、千代夫人が、このショーに手を貸してくれる事になったんです」

森田はそういった。

「遠山家へ戻って、静子夫人にびったりの和服を取り揃え、持って来てやる、と千代夫人が協力してくれる事になったのです」

何の事はない。遠山家へ千代が戻って持つて来てやる着物というのは、静子夫人の所有物なのであるから、体にぴったり合うのは当然の話だ。それに、日本髪のかつらも、日本舞踊の名取りである静子夫人が、浅草の老舗に作らせたかつらが幾つかあり、それも千代が持つて来るというのだから、何の苦勞もないわけだ。

「段取りも、こうまで調子よくいくと、笑いがとまらんじゃないか」

田代は、再び、大口を開けて笑うのであった。

美しい静子夫人が、その華奢な白い首筋を鹿の子絞りか何かの半襟に艶めかしく浮きたたせた、ぞくぞくする色っぱさが、田代の脳裡に浮かび上ってくる。

なるほど、静子夫人の扮するお静、こいつは楽しいショーになるぞ、と田代の顔は、ひとりでにやにやとくずれるのであった。

「それから、いよいよ今日から、小夜子の調教にかかります。あれだけの別嬪、何時までも遊ばしておくのは勿体ないですからね」

川田がいった。

「そうだな。弟の文夫が美津子と一緒に、仕事を始めたってのに、姉の小夜子が地下室の

奥で、すましこんでるってのは妙だよ」

田代もうなずいた。

その時、庭の方が急にさわがしくなった。

田代は、椅子から立上り、窓の外へ眼を向ける。

日は、うららかに空は青く、庭の芝生の土からは柔かい陽炎が立上ってくるようないい天気で、その中を、銀子や朱美達のズベ公、それに、竹田や堀川達のチンピラ達の一団が陽気に唄をうたいながら行進して行くのだ。

「何だ、陽気がいいので、銀子達、うかれ出したのかな」

田代は、そういつて笑ったが、仔細に見ると、その一団の中に、文夫と美津子が混っているのである。丸太の馬に乗せられて、庭中を引廻されているのだ。チンピラ四人は一本の丸太を担ぎ、ズベ公四人も一本の丸太を担いでいる。チンピラ達の方へ乗せられているのは美津子、ズベ公達の方へ乗せられているのは文夫、共に……ままの姿のまま、キリキリと後手に縛りつけられ、丸太の上へ跨がさられている。

窓をのぞいた川田がいった。

「そうだ。銀子の奴、文夫と美津子が夫婦になった祝賀会を開くとかいつてたっけ。きっ

とそれですよ、社長。今日は天気がいいので野外で何かまた奇妙奇てれつな事をやらす気であるでしょう」

田代は、なるほど、とうなずき、次に、川田と森田の顔を見ていった。

「俺達も一つ出むいて、お祝いの言葉をかけてやろうじゃないか」

舌と唇

樹々は一せいに新緑に包まれ、あふれるばかりの日光を受けている。

花の散った桜の木の下まで、文夫と美津子を運んで来たズベ公とチンピラ達は、芝生の上へ二人を投げ出す。

後手に縛られている美少年と美少女は、重心を失って、芝生の上へ、もんどり打って転がった。

チンピラとズベ公達は一せいに笑う。

「さ、いらっしゃい」

ズベ公達は、芝生の上で、互に身をちぢませている若い二人の肩に手をかけ、引き起した。

一米ばかりの距離をおいて、さほど太くはない幹の桜の木が二本立っている。手頃な立

柱だとズベ公達は、あらかじめ、この場所を選定しておいたのである。その一本へ文夫を、隣の一本へは美津子を、それぞれ背を押すつけさせ、かっちりと立縛りに縄がけをするのであった。

二人を立縛りにした前の芝生へ赤い毛氈が敷かれる。義子や悦子達が、ビールやカンヅメを運んでくる。野外パーティは開かれた。

文夫と美津子が結ばれた祝賀パーティという名目で、また、この若い二人を精神的にも肉体的にもいたぶりぬき、野外で飲む酒の肴にしようというハラである。

文夫も美津子も、一時のように、狂乱し、屈辱にのたうち廻るといふ事はなかった。静かに悲しみをもって、自分達の運命をあきらめているという風に見える。

悪魔達に色々な方法で教えこまれた秘密の身体——美津子は、それが、いわゆる快楽といふものである事に気づき出してきたのである。か。闇に眼が馴れてくるように、やがて、こういういたぶりも、苦痛ではなくなり、それが快楽といふものに変化していくのではなからうかと美津子はそう考えると、ふと自分が恐ろしくなり、びったりと両腿を閉ざし、首を深く垂れてしまふのであった。文

夫とて、何かを切替えた別の新しい心の斜面、つまり被虐性の倒錯した快感めいたものが、じわじわ肉体の内部からこみ上がってくるような心地になってきたようである。それに、二人は、こうした悪魔達の見守る中で、二人共通の秘密を持ったのだ。強がりはい、抵抗し、拒否しても、それは、すべて、悲しい空しさ、悪魔達を一層、嘲笑させるだけのものであるという事を二人は感じとるのである。

ズベ公とチンピラ達は、ビールを飲み、スルメをかじって、美津子と文夫の方へ眼を向け、何か小声で話し合って、どっと笑い合っている。

「フッフ、あんた達はね、昨日、めでたく結ばれた夫婦よ。お互に思いがかなって嬉しいでしょう。葉桜団に大いに感謝すべきだわ」ズベ公達は、そんな事をいって、笑い合うのであった。

「これから夫婦仲良く、しっかり稼いでくれなきゃ駄目よ。二人とも学校じゃ優等生だったかも知れないけれど、そんなもの、ここじゃ通用しない。文夫の——と美津子の——が一番ものをいうってわけさ。だから、お互にそこを大いに鍛えて、立派なスターに早く

なって貰わなきゃ困るよ」

義子は、そんな事をいいながら立上り、若い二人の傍へフラフラやって来ると、二人の身体を見くらべるようにして、くすくす笑うのだ。

「夫婦ともなりや文夫さんとか美津ちゃんとかいういい方はおかしいよ。これから、文夫は、美津子、とはっきり呼び、美津子は、あなた、と妻らしく呼ぶんだ。さ、一度やってごらん」

朱美は、ビールのコップを口へ運びながらそんな事を楽しそうにいう。

「さ、呼んでみる」

チンピラの竹田と堀川が、残忍なものを底に浮かべた陰のある眼つきをして立上り、文夫の前へ歩み寄る。

この二人のチンピラにしてみれば、自分達の手で開花させようとした美しい花を、この文夫に横取りされてしまったというような恨みがあるらしい。

「よ、二枚目、何でえ、昨日のさまは、見てはいられなかったぜ。相手の身になって、もう少し、喜ばせてやるって事を考えろ。……えのをぶら下げてやがるくせによ」

そんな事をいいながら、竹田は、文夫の頭

髪をわしづかみにして、ごしごしごく。

「さ、いうんだよ。ね、美津子、僕の……
……、どうだった、とね」

坐って、ビールを飲んでいるチンピラとズベ公達がそれを聞いて笑いこける。

朱美は、よし、それならば、と首を深く垂れて、美津子の横に立ち、あごに手をかけて、美津子の美しい顔を正面にこじ上げた。

「フフフ、文夫さんが、そういったらね。貴女はこう答えるの。——すばらしかったわ。でも、美津子の……味、あなた、如何がだった——とね」

さ、ぐずぐずすんねえ、と、竹田は、ポケットから、ジャックナイフを抜き出し、その先端で、文夫の身体のおちこちをチクチク突き出した。

うっとうめいて、その痛さに、狂おしげに身をよじる。そんな文夫を見るに見かねたのか、美津子が涙でひきつったような声をはりあげた。

「文夫さん、お願い、こ、この人達のいう事にさからわないで！」

文夫は、はっとしたように、首を曲げて美津子の方を見た。美津子は、美しい黒眼に一杯、涙をにじませ、文夫の覚悟を求めるよう

な表情をしている。

文夫は、それを見ると、眼を固く閉じ、顔を正面に向けた。

「——ね、美、美津子、僕の、僕の……」
「はっきりにえよ。僕の——だよ」

竹田と堀川は顔を見合わせて笑い合う。
「——僕の、僕の……、どうだった」

わっと、ズベ公達は肩を抱き合うようにして笑い合う。そして、すぐに美津子の方へ眼を転じるのだった。

美津子は、顔を横へそらせるようにして、唇を動かす。

「——す、すばらしかったわ。でも、美津子の……」

美津子は急に首も顔も燃えるように赤くして、やはり、口もってしまふ。うら若い十八の乙女として、死んでも口に出せないような、いまわしい単語である。

「美津子の、ああ、美津子の——の味——」
ようやく、必死な思いで、それを口にした美津子は、ひどく狼狽したように、真っ赤な顔を再び、深く垂れてしまふのであった。

それは、見守っているチンピラやズベ公の眼に何ともいえないじらしい風趣に見え、また十八の乙女の白磁の裸身全体から、桜の花

でも散りこぼれるような艶めかしい色気が発散されるのが感じられたのである。

それに味をしめたズベ公達は、盛んに、二人に口が歪むような卑劣な会話のやりとりを強要する。文夫や美津子が少しでもためらったりすると、朱美が青竹のムチを振り、竹田がナイフの先でつつくのだ。

美少年と美少女は、もう麻薬に脳が犯された人間のようわけもわからず、ズベ公達の強制する言葉を口に出し合ってしまう。

「——あなたの——とても……たわ」
「——美津子の——だって、すばらしかったよ」

真っ赤な顔をそむけ合って、そんな会話をつづける若い二人の周囲に陣どるズベ公とチンピラは、キャッキヤツと愉快でたまらぬというように笑いこけてしまふ。

「さて、お坊っちゃんに、お嬢ちゃん」
銀子は、鼻の先をピクピク動かすようにして二人の前に立った。

「あんた達に対する祝福は祝福、お仕置はお仕置よ。昨日のプレイはまるでなっちゃいないじゃないの。五分もたたないうち、身体という事がきかなくなるなんて、情なすぎるわよ、ええ、お坊っちゃん」

銀子は、文夫の全身をしげしげと見つめながら、残忍な光を眼に浮かべた。

朱美が、ついと横から出てくると、ジーパンのポケットから、細い皮紐を取り出し、フフ、と含み笑いしながら、文夫の前に身をかがめる。

「何をするのさ、朱美」

「ちよいと、しごいてやんのよ」

朱美は……その紐を……出したのだ。

「うっ、な、なにをするんだ」

こらえにこらえつつけてきた文夫も、遂に声をはりあげ、両肢をばたつかせる。すると忽ち、チンピラ達がわらわらと押し寄せて来て、文夫の両肢をかいこむように取おさえ、……るのだった。

「こうすると、少しは、強くなるそうよ」

朱美は、紐の先端を握り、毛氈の上へもどって来ると、力一杯、ひっぱるのだった。

文夫の紅潮した顔が屈辱に歪む。

「ね、あたいにも貸してよ」

と、義子や悦子が、かわるがわる皮紐をつかんで、ぐいぐいとひっぱるのだった。

「うっ、うっ——」

文夫は、齒をかみ鳴らし、獣のようにうめき出す。皮紐がキリキリとしめあげ出し、……

……錐でえぐられるように痛み出した。

ふと、文夫の方へ眼を走らせた美津子は、あまりの無残さに苦しげに眉を寄せる。恐怖と嫌悪の戦慄が身内を走るのだ。

「やめてっ、やめて下さい」

美津子は、たまらなくなつて、紐を引っ張りつつけるズベ公達に大声をあげる。

その動作を止めた義子と悦子は、今度は、持前の陰険な眼つきを美津子に向けるのだった。

「あら、お嬢ちゃん、貴女が文夫の身代りに立つてわけ。だって、そりゃ無理じゃないの。……るものがないんだもの」

ズベ公とチンピラ達は、声を合わせて笑い合つた。

朱美は、ポケットを探つて、更に一本の皮紐をつかみ出し、美津子の前へやってくる。

「いくら、あたいが器用でも、ないものに紐を結びつける事は出来ないわ。ね、そうでしょう。お嬢さん」

朱美は、腰を低めて、つついたり、さすったりしながら、

「ね、お嬢さん、……どうやって結べっていうの」

それを見ていたズベ公達は、再び、どっと

哄笑するのだった。

美津子は、涙を流しながら、口惜しげに唇を結んでいる。

銀子が、そんな美津子の涙に濡れた頬を指でつつきながらいった。

「昨日のような失敗が二度とないよう貴女の夫の文夫は、大いに……鍛えなきゃならないのよ。わかるでしょ」

銀子の眼くばせを受けたチンピラ達は、桜の木の下ろにムシロをかぶせて寝かせてある大きな木材を引きずつて来た。

それは、角材を十字型にして打ちつけてある礎柱である。それを眼にした美津子は、何か身内がしめつけられるような、ぞっとした気分になった。

「今日は日当りがいいから、文夫を礎にかけ、太陽に向けて一日さらしておくのよ。鍛えるためには、太陽光線の直射を受けさせるのが一番いいと鬼源さんがいつてたわ」

銀子は、そういうと、竹田と堀川に、美津子の縄をとくようにいった。

「恋しいあんたの夫が、今日一日礎にかけられるんだ。励ます意味で優しく抱いて、接吻してやんな」

竹田達に、縄をとかれた美津子は、その場

へ、小さく跪まづいてしまったが、彼女に向
って銀子は、そう浴びせるのだった。

「さ、行くんだよ。恋しい人の前にな」

竹田は、ナイフの背で、美津子のなめらか
な白い背をたたきながらいう。

美津子は、ふらふらと立上り、文夫の前へ
すすむ。

今にも泣き出しそうな気弱いまたたきを文
夫に向けた美津子は、次の瞬間には、たまら
ない悲しさが胸の中に突きあげて来て、思わ
ず文夫の身体をかたく抱きしめたのである。

「文夫さん、辛抱してっ、辛抱して頂戴」

美津子は激しく泣きながら、文夫の唇へ唇
を合わす。美津子は、こみあがってくるもの
を押さえ切れなくなったように必死な思いを
こめて、文夫の口を吸うのだった。

「へへへ、お熱い事だね」

竹田や堀川が横からのぞきこみながら、冷
やかすのだったが、美津子はもう何も耳に入
らず、ただいちずに文夫を抱擁し、文夫の唇
を吸いつづけるのであった。

美津子は、心から、文夫を愛している、そ
れを感じた銀子は、静子夫人と京子が、熱愛
し合っている事が腹立たしくなってきたのと
同様、美津子と文夫の間柄が妙に妬ましくな

ってきたのである。静子夫人と京子の場合と
同じく、この美少年と美少女も、銀子と朱美
が、川田達と共謀して、単にプラトニックな
間柄であったものを現実的な結合を強要した
あげく、身も心も離れられない二人の關係に
してしまったわけだ。それをねたみ始めた銀
子自身、自分の浅はかさに腹が立ち、その腹
が立つのを美津子と文夫の故にして、一層、
この若い二人を憎み出したのであるから、い
よいよ救われない話である。

「お楽しみ中だけど、それ位にしておいて貰
おうじゃないの、お嬢さん」

銀子は、美津子の尻をつついた。

それで、ふと自意識を呼び戻され、赤ら
んだ顔を横へそらせてしまう美津子であったが
彼女に対して、追討ちをかけるよう再び銀子
がいった。

「次に少々大事な事を、お嬢さんをお願いし
たいんだけど」

文夫の胸のあたりに美津子は、赤らんだ顔
を埋めるようにしている。

「これから調教するために必要な事なのよ。
大体、何分ぐらいで、文夫さんは駄目になっ
ちまうものなのか、一応、テストしておきた
いの。この前のように、お嬢さんの、その美

しい白い指先をまた使って頂きたいの。わか
るわね」

美津子は、文夫の胸に埋めている首を左右
に激しく振りながら声をあげて泣き出した。

竹田と堀川が、口元を歪めながら近づいて
美津子の白い背に手をかけた。

「嫌っ、嫌、それだけは、それだけは、お願
いっ、かんにんして！」

竹田と堀川の手の中で必死に悶え、声をは
りあげる美津子であったが、銀子や朱美達ま
でが、

「何いってんのよ。始めてというわけじゃあ
るまいし、それに、相手は貴女の死ぬほど好
きな文夫じゃないの」

と、美津子の白磁のように艶やかな両腕を
左右からとって、その場へ、跪まづかせるの
だった。

「さ、時間を計るからね、始めるんだよ」

朱美は、腕時計を眺めながら、美津子にい
う。

美津子は、両手を交錯させるようにして、
胸の隆起を押さえ、深く首を垂れて、すすり
あげている。

「早く始めねえか、え、お嬢さん」

竹田は、靴のかかとで、美津子の背をつつ

く。

「そらよ、お嬢ちゃん」

堀川がかがみこみ、胸を押さえている美津子の手首をつかんだ。

「あつ、嫌っ嫌」

美津子は、尻ごみし、身をよじったが、竹田と堀川は強引に美津子の手首を引っぱって遂に――。

「ああ――」

電気に感電した瞬間のように、美津子は身体を震わせ、首をのけぞらせる。

「しっかり……んだ。おめえの恋人じゃねえか」

竹田と堀川は、震える美津子の手を左右から持ちそえるようにして、しっかりと……るのであった。

恐怖とも羞恥ともつかぬ胸の慄えで、美津子の立膝を組む肢がわなわな動いている。そんな……れている指は、しびれそうだ。美津子は、チンピラやズベ公にやかましく催促され、背や尻を足で押され、遂に、顔を横へそらしながら、静かに……めるのだった。もう抵抗するなど思いも及ばぬ失われた意志で、美津子はその美しい額に脂汗をにじませつつ、ゆるやかに……めたのである。

うっと文夫は、眉を寄せ、狂おしげに首を振る。

涙でキラキラ光る美しい黒眼で、ふと、苦悶する文夫を見上げた美津子は、

「文夫さん、ゆ、ゆるしてっ」

ほざくように泣き叫び、ねじるように顔をそむけ……るのだった。

文夫は、火のように熱くなった顔で美津子を見おろし、

「美津ちゃん、僕を、僕を笑わないで――」

「文夫さん。私、もう、どうなっても、かまわないわっ」

美津子は、毒婦にでもなったつもりで激しく泣きながら……い出した。自分で、自分の無残な心を煽り立てるように、必死な思いになったのである。

「よう、よう、その調子。なかなか巧えぞ、お嬢ちゃん」

竹田と堀川は、美津子の両側に、しゃがみ盛んに美津子を擁抱し、齒ざしりして、悶えつづける文夫をあざ笑うのであった。

美津子は、その美しい黒眼がちの瞳に、憎悪の色を浮かべて、キラリと隣に陣どる竹田の顔を見る。

「こんな事をさせて、貴方達、そんなに楽し

いの。貴方達は蛇よ。まるで毒蛇だわ」

美津子は、吐き出すようにそういい、再びすすりあげつつ、……かせるのであった。

竹田が、フンと鼻で笑い、近くに立って、ビールを飲んでいいる銀子にいう。

「銀子姐さん。このお嬢さん、あの京子の妹だけあって、なかなか気性が激しいぜ。お前達は毒蛇だ。なんぞと大きな啖呵をきりやがる」

なんだって、と銀子は急にけわしい顔つきになって、ビールのコップを朱美にあずけ、づかづかと近づいて来た。

銀子は蛇が大嫌い、その言葉は聞くだけでもぞっとするのだ。だから、その蛇だと美津子にののしられたとなると、ただではすまない。銀子は、青ざめた顔つきになり、眼をつりあげて、美津子の横へ身をかがめたのである。

「ちょいと、もう一度いってごらん。私達が一体、何に似ているというんだよ」

銀子の硬化した表情を見て、美津子の身内に戦慄めいたものが走ったが、毒喰らわば皿までといった捨鉢めいた気分美津子はなっってしまったのである。姉の京子に似た気性の強さがふと美津子の横顔に現れる。

「な、なんどだっていうわ。貴女達は蛇よ。人間に化けた蛇なんだわ」

銀子は、こめかみのあたりをピクピク動かして、ついと立上る。そして、仲間の者達を見廻すようにしていった。

「予定変更よ。この礫台には美津子をのっけるんだ。口がまがっても今のような言葉が吐けなくなるまで、さらしものにするのさ」

そして、銀子は、美津子のスベスベした白い背を一発足で蹴りあげるのだった。

——どうでもするがいいわ——

美津子は心の中で叫び、こみあがってくる口惜しさを呑みこみ、あふれる涙を手の甲でぬぐう。

「さ、美津子、礫台に乗っかるのは、文夫じやなくて、お前さんに変更さ。ぐずぐずせず、早くその仕事をすませておしまい」

銀子は、再び、美津子の背を蹴りあげる。すると、朱美が、銀子の横へきて、くすくす笑いながら耳もとに口を寄せ、何かささやいた。

「なるほど、そいつは傑作だわ」

銀子は、動作をくりかえしている美津子を見おろして愉快そうに笑い、竹田と堀川に、美津子をもう一度後手に縛るよう命じるので

あった。

「縛る？ だって、銀子姐さん、もうほんの少しで——」

竹田と堀川は、銀子を見上げて不思議そうな顔をしたが、

「いいのよ。面白い方法で、仕上げをさせるんだから」

銀子は、ニヤニヤ笑いながら、そういうのである。

竹田と堀川は、落ちている麻縄を取りあげ美津子の両手をつかんで、うしろへねじ曲げた。

美津子は、まぶたを固く閉じ合わせ、チンピラ達のするがままになっている。

ふっくらした絹餅のように柔い乳房の上下へ数本のどす黒い麻縄がかけられ、きびしく後手に縛りあげられた美津子を見た銀子は「最後の仕上げは、両手を使わずやって頂くわ。とにかく相手は、貴女と相思相愛の文夫さん。そういう風にしてあげる方が、如何にも夫婦らしくて、いいじゃないの」という。義子や悦子が、吹き出した。

「運動会のパン喰い競争に出る要領でやればいいのよ」

「でも、………を上手に使わなきゃ駄目よ」

ズベ公達は口々にそんなことをいいあい、声をあげて笑いつづける。

美津子は、白い頬を充血さして、かたく唇をかみしめた。毛穴から血が吹き出しそうな屈辱。最初はズベ公達のいうことの意味が、はつきりわからず、ただ深く頭を垂れ、消え入るように小さくなっているだけの美津子であつたのだが、朱美が、美津子に教える意味で、……自分の口を、そっとそれに近づけて、食べるような真似をふざけながら演じるに及んで、美津子は、身体全体が凍るような衝撃を受けたのである。

銀子や朱美達の常軌を逸した着想、あまりのことに美津子は声も出ず、怒りをこめた瞳を、ズベ公達の一団に向けるのであつた。「さ、お嬢さん、始めましょ。恋人を中途半端にしておくのは、可哀そうじゃないの。ね、早くしたら」

義子や悦子は、くすくす笑いながら、美津子の肩をつつく。そんなものを美津子が……って、眼を白黒させる図を想像すると、おかしくて仕方がないのだ。

かたくなに唇を結び、身を固くしていた美津子であるが、しつこくズベ公達が強要し始めると、急に、きつとした表情になって、立

上り、文夫の前に一步前進して膝を折って座る。

こうした悪魔達に対抗し、抵抗する手段は悪魔達の強要することを堂々とやってのけることだと美津子は達観したのであろうか。こみあげてくる涙を齒を喰いしばってこらえ、悲愴な表情であった。

「フッフ、やる気になったのね。いっとくけど、彼氏が完全に——するまで、……しちゃうよ。さ、始めたり、始めたり」

銀子は、チンピラ達と一緒に、はやしたてる。

連続組写真Mフォト

二人の女性の餌食

大手札 三十六枚一組 六〇〇〇円

略号(ほや)

〔MS女性……刺青女性山原清子他一名
M男性……Mモデル志願者M・H氏
男性をいたぶることについては定評のある刺青女性山原清子が、他に一人のアシスタントの豊満な肉体の女性と共に二人して一人のM男性を、こてんこてんに虐じめ差しめ尽す有様を、順を追って刻明に写真化し、ローソク、浣腸器などの小道具を用いマゾファンの思わず、ぞくぞくする場面ばかりを連続組写真に編集しました。〕

美津子は、そうした連中を呪いつつ、研ぎすました美しい黒眼で、銀子や朱美を射るように見る。

「早く始めてよ、お嬢ちゃん」

銀子と朱美は、ただ、えへらえへら笑いつつ美津子の顔を見返すのだった。

美津子は、胸を裂いて溢れ出そうな慟哭を再び、ぐっとこらえ、文夫を見上げた。

相次ぐ暴虐の嵐に、身も心も打ちひしがれた文夫は、もう声を発する気力もないのか、固く眼を閉ざしたまま、観念して次の責めを待っている風であった。

「——文夫さん」

美津子は、涙のにじんだ小さな声で呼び、心の中で、許して、許して、とくりかえしつつ、そっと、唇を近づけていった。

ズベ公やチンピラ達は、急に声を殺し合い息をつめて、それを凝視し始める。

美津子の可愛い花びらのような唇は、ゆるやかに二度三度、その……ていたが、やがて……と一緒に……おしつけ、段々と……づかいになりながら、徐々に可愛い唇を開き、カールされた水々しい黒髪をくねらせるようにしながら……いくのであった。

チンピラ達とズベ公達は、顔を見合わせ、

くすくす笑い出す。

文夫は、うとうめいて、熱くなった顔を右へそらしたり、左へのけぞらしたりしている。

美津子は、膝小僧でつま先立ちするようにして、酸鼻な……、半ば知覚を喪失させてつづけている。軽く冥黙しながら、静かに……かす美津子には、もう羞恥や屈辱などという人間的思念はなく、いわば、無我の境地に酔っているように見えた。

文夫が狂おしげに……よじり、身体を震わせたりしはじめると、妙なことに、美津子は、ためらいがちな……から、積極的な……に移向し始めるのである。

やがて、美津子は、得体の知れない魔物に乗りうつられた如く、後手に縛られた身をもどかしげに揺すって、立膝を組み……更に積極的になり出す。

「フッフ、美津子、ずいぶんおいしそうね。まるで子供がアメをしゃぶってるみたい」

銀子は、美津子の横に身をかがめて、再びはやしたて始めたが、没我の境地にすべりこんでしまっている美津子の耳には、もう何も聞こえないのであろう。……に……ながら……の音をたて……ているのだった。

<創作>

濃 緑 の 谷

福 田 久 文

曇天のしたに薄紫の山肌がようやく濃緑の色を見せはじめたころ、周囲はその麓まで埋めつくしてほとんど人家を見ない一面の青田であった。車は砂利舗装の二級国道をかなりの速度で走っていたが、並行して来た私鉄支線の終着駅の構内が左手に見えてくると、速度が落ちた。万年筆以外の機械に不案内なわたしには、お喋りをかなりのあいだ杜切らせてハンドルに専念していたはずの女がいつ速度を落す操作をしたのか分らなかった。進行方向は弯曲してI山系の麓の林に這入り、左側駅付近の民家が樹木のなかに点在するあたりから現れた別の二級国道が、右側一面の田を二分して長く延びるその四つ辻に、鄙びた茶屋があった。車が停った。

昼まえまで降っていた雨の名残りに道は濡れ、雨雲がまだ空を覆っていて、車のそとに出ても比較的暑さは凌ぎやすい。

店に続いた障子は動かず、その横の暗い炊事場から、太り気味の七十近い婆さんが、割烹着の裾で濡れ手を拭いながら出てきて、女の顔を認めた。

「久しぶりでおます」

わたしへの無難な一瞥に軽い反撥を覚えてわたしは女より先に飲物をいいつけた。

「サイダーください」

「わたしはジュース」

コップと栓を抜いた壺を卓上に置いた婆さんに、女は開いたシガレット・ケースを差し出した。

「おおきに」

女がライターの用済の焰を前に坐り込んだ婆さんに移しおえると、いま一度軽く頭を下げた婆さんが、煙草の煙を吐き出して生真面目にきいた。

「星の家へ？」

女は卓上に肘を立てて煙草を口に近づけたまま意味ありげな微笑を浮べた。中年を過ぎた女に洋服は似合かねものだ。特に、洋服と色を合せた濃い青灰色の帽子がネットを鼻先まで垂しているのが厭味だった。

「ええ男はんで」

お世辞と揶揄といくらかの羨望を交えて微笑を殺したようなその表情は、老嫗の体にまだ消え残っている野鄙な色情を見せていた。

「違うのよ、この人は」この種のお喋りをし
たくて寄ったのであろう。女はグラスを口に
しているわたしを眺めながら続けた。「なか
なか逢って貰えなくて、困ってるの」

「いたぶらっしゃるで」

（この女たちは、いつかここで男とともに卑
猥な会話をしていたのだ）

露骨に発展しそうな会話の雰囲気の中なか
でそう気づいたわたしは

「すっかり田舎の景色だなあ」

と呟いて立ち上った。

「逃げなくてもいいじゃないの」

「ほほ。うぶなお人で」

わたしは微笑を二人に返えして敷居を跨
いだ。

濁って溢れた田の水のなかに、二十糎ばか
りに生え揃った稲が遠く立ち並んで、薄緑一
色に霞むあたりに、薄い竹藪の層が拡がって
山際の田を二分しているのは、そこに小さな
川が流れているのだった。

鈍く光る曇天のしたに、山、林、竹藪、そ
して足元の田と、濃淡を入り混ぜた緑が陰影
を失って色鮮やかに展望されるのを、ひとり
眺めていると、過ぎた少年の日が憶い出され
た。

（情欲の負担を持たず、貪婪な知識欲も知ら
ず、母のいる平和な家を出て、懸命にとんぼ
を追う幸せが、わたしにもあったのだ。いま
の負担と悲しみを怯懦に回避して、サディス
ティックな多情の女に身を委ねるとき、慎ま
しくそれに立ち向う気力は、一属毀損されて
いく。そして、失われた少年の日の調和が、
負担と悲しみに洗われて、崩れぬ輝きのなか
に蘇る日は、もう、望むすべもない）

久しぶりに触れる田園の風景も、それを見
るわたしの物思いに連れて、いつのまにか長
閑さを失い、ただ寂しさをかき立てて拡がっ
ていた。

「電話したの、後悔してるんでしょ？」

女だった。肩をわたしの肩に当ててから、
片手でわたしの背中を抱きかかえ、妖しげに
わたしの顔を覗き込んで、皮肉な声色を作っ
た。

「さ、参りましょ」

女はそのまま車に歩み寄ってドアを開き、
含み笑いとともに、粗暴に押し込んだ。

山に這入っても道幅は変わらず、凹凸もなか
ったが、両側を厚い樹木の層が埋めつくし
て小暗かった。やがて片側に深い溪流が現れ
た。

「わたしのこと、恐い？」

ひどいサディスティンだと思ふかときいて
いるのは分っていたが

「一姫、二虎、三ダンプっていうでしょう。」

お喋りをして、転落でもされたら、恐い」

と答えたら、中ヒールの踵が踝のうえに來
てやにわに突き立った。手をそっと靴下のな
かへ差し入れてみたが、血は出ていなかった。
女は平然とハンドルを保ったまま、わた
しのその動作など見向きもせず、話題を変
えた。それは茶屋へ寄るまえの続きだった。

「奥さんの叔母さんやけどねえ、わたしやっ
たら、娘の入婿とあんたを一緒にして苛める
わ。よかったら誘ってらっしゃい」

へいやらしい——自分のことを棚に上げて、
F（妻の叔母の姓）はそうだったが、たしか
にいやらしい。男の裸体が二つ一緒になっ
ている——想像するのも厭だ

「家へ入れた以上母親らしくするんだって
っていましたし、従弟（Fの家を継いだ）も
それを喜んでいましたよ」

「それで、わたしとまで付き合えないって訳
ね」

「きようは例外です。叔母にも滅多に逢わな
い（すこし事実を枉げた）」

「若い恋人があるの？」

「若い娘とは過ぎたことをしようとは思いません」

「独りでいるより体に悪いのよ、あんたのよ。うなの。その齡で元気がないじゃあないの。」

病気の奥さん、そんなに可愛い？」

（わたしは妻を本当に愛しているだろうか。）

それに、妻から何か返しを受けたことがあるだろうか。わたしのあらゆる努力にもかかわらず、遂に精神的にも全く不毛であることが最近ようやく分った。こうして女の傍に揺られて、いることこそ、その明らかな実証だ。負担と悲しみのなかに佇んでおれる温かさを夫の心へ送ることこそ妻の役目ではないか。満たされぬ肉の負担はまだ耐えられる。耐え難いのは、心情の空疎な妻に描いていた幻影が空しく崩れ落ちるのを見ることである）

わたしが沈み込んだのに気がついたのか、

女はようやくお喋りを止めた。

車が停ったのは三度目に小集落が見えたときだった。

右側道路から家一階分ほどしたに僅かに河原が出来ていて、そこに貸席らしい二階建ての家と小さな平屋が二戸。左側には、峠が辛うじて埋め残した平面があって、別荘らし

い家が一軒と目指して来た旅館しかない。木の門柱に掛けていた白い木の札には、割烹営業中と書かれてあった。大きな泉水を含むかなり広い庭の向うに古い純日本式の平屋があり、門のすぐ右横に独立した離れが一つ、左側は門からすこし離れて斜めに平屋の新館があった。置石と樹がすこし多すぎた。

離れと母屋の間にある泉水から豊富に流出して庭を横断する青い水の滑らかな起伏を見つめていると、帯を締めた女中が現れて、わたしを離れへ案内した。女は一人で玄関へ這入って行ったままであった。

二間あり、奥の部屋の濡れ縁に接するばかりに山肌が迫っていて、緑一色に埋めつくした灌木の葉の匂いが、鼻をつくようであった。中年の女中は、座敷机に茶菓を置くと、わたしなどいないかのように、その奥の部屋に緋一色の地に白抜きのもみじが散っている夜具をせわしく延べて、短い辞去の言葉とともに立ち去った。殆んど入れ替りに女が這入って来た。

「暑いのに、早よう脱ぎなさいな」

そういいながら寝室へ這入った女はすぐ帽子をとり、服を脱ぎはじめた。

クレープシャツのうえへゆかたをつけよう

としたわたしの手は、後に立った女の手で抑えられた。寄り添った女は胸のあらわな黒い下着一枚になっていた。透明なマニキュアの指先が、クレープシャツのボタンを外しはじめた。青草の匂いを抑えて漂う女の生臭い息の匂いと脂粉の香。頬を寄せたその息遣いが白昼を恥じぬ女の意向を如実に伝えていた。

だらりと手を下げたままのわたしからクレープシャツを取り去るや、女はわたしを抱きかかえて、舌を求めながら、夜具のうえに歩み寄り、わたしを折り倒した。

やっと女を満足させてわれに返ったとき、頭痛がしていた。谷間を覆う蟬時雨が頭痛のために耳鳴りのように一段と高まり、そのなかにわたしの耳はまた溪流の響きの交るのを捉えた。眼を見開くと、眼前の山肌を覆う灌木と草の葉の一枚一枚の緑が、芳香を放ちつつ、わたしを蔑んで静止していた。そして、毗のしたにある緋の絹夜具は、その色彩も、ふき出す汗に纏いつく感触も、ともに物悲しかった。

両手も両足も真直に延ばしたまま仰臥して顔を背けているわたしのうえに、全身の重みをかけて腹這った女は、煙草の火をつけおえて、乳房をまたわたしの胸から離れた。醜く

開けた朱唇から、白濁した濃い煙がわたしの顔に降りて、わたしの疲労の息遣いに混乱した。わたしの体を下半身で揺さぶりながら、女は微笑した。

「離れるの、いやいや、ゆうてるわ」

その近づけられた両眼のあいだ、透明のコーティングのしたで、黒い瞳孔のまわりに放射線状に皺を作って鮮やかな茶目は、白昼の光に収縮した瞳孔の底に、網膜をはっきりと覗かせていた。白濁の気配の微塵もない健全な水晶体がそこにあった。

（父の水晶体は、不安のあまりつい労りを忘れて見つめてしまうと、素人にもその濁りの気配が分るほどになって来た。朽ちていく材木のように施すすべのない眼疾、老人性白内障。目を覆うすべのない大手術は、二、三年のあとに、必ず、あの父の両眼を危険に曝すのである）

その時が来るまで忘れていたい現実が、胸に沁むように思い出された。わたしは顔を微かに震わせて頸を枉げ、濡れ縁の先の縁に視線を逸した。

「フ、フ、フ」f子音の捉音だけで笑った女はうなじを傾けてわたしを覗き込んだ。「その積りで火をつけたんじゃないけれど……」

後頭部の上方で煙草を挟んでいた手が鼻先へ廻されて来た。

（女の四肢に身を委ねてわれを忘れるより、その嗜虐の好餌になる方がまだましだ。お前は酒を呷るようにこれに溺れたくて来たのではないか。齒を食いしばれ。手は動かすな）微かに触れただけで、鼻を刺す痛みが、煙草の匂いとともに、息苦しく眉間にまで泌み渡った。

全体が小さなカールに波立ち、水色のビーズの飛沫を散らして脹らんでいる頭髮のしたに、やや長い唇が妖しげに歪められて、鼻孔も拡ってはいたが、女の顔は整った輪郭を保っていた。絶頂の狂乱を過して安らうその表情は、細められた毗に寄る小皺までが過酷な情欲を奥深く湛えて、激痛の襲うわたしの体を竦ませた。

「あら、ごめん。ちょっと跡がついたわ」

女はそういつて煙草を挟んだ二本の指先を口へ移し、また唇をつぼめた。わたしは全体の力を抜き、大きく吐息して頭を横にした。それに合せるかのようにふうっと白煙を吐いた女性は、また胸を降ろし、頬骨をわたしの頬に押しつけて、小刻みに身を震わせた。女も眼を閉じていたのであろう。わたしはその

仕草に『母』を感じようとしたが、嫌いな煙草の匂いが鼻に沁しんで、惨めであった。

「ほんとうは、あの年頃の女がいいんじゃない？」

鏡に向って化粧直しを始めた女がわたしに声をかけた。わたしは飲み残した麦茶の茶碗を手にしたまま、座敷の壁にくり抜かれた丸窓越しに、母屋の座敷の欄干から、若い洋服の一对が泉水の罇を釣っているのを見ていたのである。女の方を見ると、女はまた鏡に顔を向けた。

「わたしぐらいの年頃になると、男は顔よりも体力だわ」軽い侮蔑の翳が鏡に映る女の表情に現れて、女は言葉を次いだ。「抱きたいだけなら、ま、あんたはお断りよ」

浴室は母屋の玄関わきにあった。かなり広く、小さいが底深い湯槽が二つ壁に接して並んでいて、一つは空だった。

「先に行って湯へ這入ってなさい。車から小道具出してくるから」

そういわれて一人這入ったのだが、女の来るのが遅かった。拷問部屋のような薄暗さはわたしを不安にした。

（安心して手足を縛られて、よいのだろうか？）

湯槽に身を沈めて、そこにも、上部の開け放たれた窓辺に、緑の崖が迫っているのを見上げてみると、僅かに覗いている屋根瓦のしたの庇が黒ずんでまだ乾いていないのを認めた。木目に白い波形がついて、縦木と縦木のあいだの板が下方へ脹らんでいるのは、雨水が瓦のしたを流れて、板が朽りかけているのを示していた。それは自宅と同じ状態であった。

(建て直せるだけの用意はあるが、わたしは世間的なことに興味が持てず、それをするのがひどく苦痛になる。学問をする者には珍しいことではないが、わたしには、そのうえ、被虐の情事から来る体力の消耗まで加わっているであろう)

わたしは父の瞳を見つめたときと同じ憂鬱を覚えて、眼を逸し、湯の面に見入った。湯もまた薄暗く、表面には微かにわたしの顔が映り、深い湯の層は頸からしたの皮膚の全面をやや熱く包んでいた。そして、湯に沈んだ体の内部には根強い疲労が淀み、水面に出た頭には負担の多い記憶が抜き難く固まっていた。その肉体の疲労も、重苦しい記憶も、ともに、いまに続く数時間、数十分のまゝに新たにわたしに加ったものばかりではない。少

年の日がすっかり消え去って以来、積りに積って来た根強さがあった。

人の、それも複数の気配がした。その人影は脱衣室で手間取らずに浴室のガラス戸を音高く開けた。着衣のままの女のうしろに現れたのは、割烹着をつけた兎唇の中年女であった。口紅一つ引かぬ浅黒い顔に野卑な好奇の眼を向けて、革製の犬の曳き綱と二、三重の針金の輪を捧げるようにもっていた。

「革紐、湯へ漬けといて」手にしたナイロン袋から濡れていない桶のなかへ、折檻遊戯の小道具を移しながら、女は言葉を継いで、わたしを促した。「出るのよ」

女は手錠を提げて立ち、わたしが前に当たったタオルを片手で引き落した。そして、口元を引き締め、演出とも、習性ともつかぬ強い視線を注いで、手錠をかけた。

「お坐り」と、蔑むようにいって、女中のほうへ手を差し出した。「針金とペンチ」

顎にかけた針金を頭上で結び、ペンチで振じ廻して端を切り落してから、セロテープでわたしの口を完全に塞ぎ止めた。

「これからねえ、ブルー・フオトのいいのを撮らせて貰うんよ」

わたしは、眼を見開いて立ち上ろうとした

が、女の指の一突きを眉間に受けて、あえなくのけ反った。

「かおるさん、足持ってそこへ這入って」

女が、手錠に繋がれたわたしの片腕を持ち上げながら、空のほうの湯槽を顎で差し示すと、女中は早速握り締めた両足首を自分の両脇に抱え上げて、空の湯槽のなかに立った。

女は跪くわたしの体を引き上げ、五十糎ばかり離れて隣り合っている湯槽の縁のうゑに橋渡しにした。

「暴れなさんな、先生」片足を持ち上げる女中の動きに助けられて、わたしを俯せに返しなから女がいった。「顔は撮りませんの」

「学校の？」

背後で、濁った頓間な声がした。女中がそのとき初めて口をきいたのである。

「そうよ、大学の。若いでしょ」

女の手は、湯槽が溢れるのを待って、摘まんだままの蛇口を締めた。

溪流の水をじゅうぶん濾過せずに立てたのであろう。湯は青いタイルとともに黒ずんでいて、漬けられた茶色の革紐が底に近づくにつれて褐色を呈していた。湯のなかで鈍く光る手錠を胸のしたの側面タイルに押しつけて、顔を湯の面から持ち上げているわたしの

眼に、その長い革紐が素朴な恐怖をそそって映っていた。

(五十女の残酷な遊びだからこそ、この革紐は堪能を求めて、顔が湯に落ちるまでわたしを打ち続けるのではないか?)

この種の恐れには、苛む者のエロチシズムが救いになる。わたしの両足首に汗ばむ女中の手が、幸い、わたしの両足を限度一杯に拡げてはまた力を抜く淫らな操作をそつと繰り返えしていた。その玩弄に揺れながら、わたしは憶い返えした。数十分まえそのうえに折り倒された緋の掛け蒲団を。なすがままのわたしの体を掴んでドッキングさせ、愛玩の言葉をお口にしながら愛撫に取りかかった女を。

(あれが愛だ。愛とは自己が悦楽に浸ることである。では、これも愛ではないか。鞭打ちも、それを記録するカメラの準備も)

と、そのシニカルな心の呟きは、一つの感慨を惹き起こして、一挙に消え去った。

(柔らかに、滑らかに纏いつく緋の掛け蒲団のうえで、わたしは、なぜ、いまここに横たわっているように身を竦ませたのか? 狂気のように高まっていくあの愛撫が、本質的にはいま受けようとしている暴行と同じだったからではないか?)

これだけなら何もわたしにとって新しい疑問ではない。わたしに場所も状況も忘れさせたのは、これを収束した一つの閃きだった。

(あの愛の行為は、地上が天界のように輝いて見える天真な新婚夫妻が行ってさえ、それは一つの暴行に外ならない)

この種の知覚は自然科学の新しい概念や事実のように論証によって固定することは結局不可能である。わたしのような非力なものにはある程度まで拡げて見せることさえできない。敢えてすれば傷ついてしまう。他日を期して女にかえろう。

その女が襲いかかるようにわたしに騎乗して来たのである。胃は鈍い痛みを受けて湯槽の縁に当り、いま一つの縁は女中の押えつける操作のために大腿部に喰い込んだ。反り返って上った顔は、やにわに両手で掴まれて、湯のなかへ押し込まれた。

女は、シャッターが降りたあとも、なおしばらく腰を降したまま、悶え呻くわたしを捕捉して、動かなかった。女中も黙ったまま、いわれたとおりに、わたしの足の裏を擦り続けた。

タイム・スイッチがまたセットされた。女は犬の頸輪に繫ぐ革紐を二つ折りにし、折っ

たところを握り締めた。わたしはその濡れた打撃具とシャッターを恐れて顔を背け、女中は力を籠めてわたしの両足を押し上げた。そこへ金具が飛礫のように飛んで来、革の輪が焼火箸のように肉に当たった。そしてその奇妙な打撃音は、正確な間隙を置いてわたしの腰に疼く響きを立て続けた。

(せめて、がっくりと頭を落すことができたら!)

目睫の間に広がる湯もまた、二人の女のように、黒ずんだ情意を湛えていた。そのあと仰向けにされて、胃を責めていた湯槽の縁に後頭部を置くことができたとき、掴んだわたしの片足を自分の……を落し、片手に残るわたしの足を高く持ち上げて、生唾を飲み込む女中の顔を見た。そのとき手錠に繋がれたわたしの両手が頭の斜めうしろへ引き上げられて、そのまま動かなくなった。女が蛇口に巻きつけた革紐の金具を引っ張って手錠の鎖に取り付けたのである。それを待ちかねて、女中が顔を近づけて来た。舌を見せ加え続けたのである。それは、どんなことをされるよりも恐かった。

カメラを三脚から外して思いのままにシャ

ッターを切った女が、ようやくわたしを手離して息づいている女中をからかった。

「それで今夜ぐっすり寝られるわねえ」

「いいや、これから半月ほど、寝られませんか」

「さてっと」女は女中に構わずに呟いた。

「人の賜った子、これから、よく洗いましようか。お腹のなかまでね」

適当に手加減は加えられていたが、もう抗議の意志表示をする気力もなかった。

腰を屈め、顔を寄せて、女がわたしの顔を持ち上げに来た。わたしは宙に浮きながら、わたしの視線など無視している女の眼の光りに惹きつけられた。いましがた白昼の夜具のうでで片腕をわたしの顔に置いて身を浮かせわたしを新鮮に捉え直す手入れをしていたときの凄味のある無表情がそこにあった。と、そのときと全く同じ内心の声が、魅せられたわたしを叩きつけた。

(もう、やめてくれ！)

わたしの頭を開いた股の辺に保ってわたしを眺め降す女の顔を、わたしは確かに見つめてはいた。が、その内心の声はむしろ怯懦な自分自身への反撓だったといえる。人の顔を間近で一心に見るとき、距離の感覚が失われ

て、その顔が遠のくように感じられることがある。幽然と真上に浮び上った女の顔に、わたしは自らを汚し苛んで止まないわたし自身の内奥の暗さを見る思いだった。

(苛む者も、苛まれる者も、ともに、わたしたちを解脱と淨福から根強く遠ざけている普遍的な暗さに、身を委ねているのだ)

女の顔に冷たい微笑が浮んだ。

「演出する(故意に恐がる)わねえ」

両足を捧げるように持って湯槽から出て来た女中が、女と同じ姿態でわたしの両足を持つて立った。女が掛け声を出した。

「さ、そーら」

二人の女は一気にわたしを回転させて、俯せに流し板のうえへ落した。

鼻を避けて板と激突した頬骨、腹に食い込んだ手錠、そしてタイル床を叩いた足。その三カ所の痛みが鎮まらぬうちに、女は女中に頭を置いた方を持ち上げさせて、わたしの手を腹の下から頭の上へ引き出し、板の裏に打ちつけてある横木の下へ手首を廻させた。わたしは、そうして、流し板を手錠で繋がれた手で抱きかかえた格好になるのを待って、流し板はすぐ元どりに降された。流し板の幅は一かかえには少しゆとりがあったから、両

腕を平行に並べて抑えつける板の力を弱めることはできたが、手錠はわたしの胸の上部を載せた重みで斜めになった。そのうえさらに流し台を一つ逆さにして腹の下に押し込んだのち、女はまた女中に針金とペンチを取らせて、両足首を流し板の両端の縦板の上に括りつけた。足の支えも失って体重のすべてを載せた流し板は、手錠を手首に押しつけた。女は三脚からカメラを外して、女中に渡した。

「押したら、ここ、こう巻き上げとくんよ。すぐ、がちゃんと押さんと、そっとね」

女は次に屈み込んでわたしに話しかけた。

「わたしも這入るんだからいいでしょ。不安だったら」眼を輝かすようにして続けた。

「一緒にわたしとこへ帰りましょ。もう一晩ついあいなさい。現像してフィルム渡すわ。休みでしょ」

わたしは女がAという姓であることしか知らなかった。欧米の礼儀作法を守って何一つ質ねなかったのは、女に夫があるのなら、それを知らずにいたかったのである。何も夫である人を恐れたのではない。たとえ妊娠の虞れのない齡であっても、そんな女およびそんな女と関り合う自分を許容することは負担だ

ったのである。

女の誘いは、だから、有夫の女でなかったという安堵と今夜は家へ帰れないのかという不安をわたしの胸に交錯させた。

女はわたしにいい聴かせたのである。わたしの反応など見る必要はない。いい終るとすぐ革紐を取って立ち上り、後ずさりした。

「戸開けて板場へ退って。どっちもきれいに入れるんよ」

そういいながら、金具の付いた端を右手に巻きつけて握った。

「えーっ」

力を籠めた掛け声が、空気を裂く唸りとともに、足の裏に激痛を惹き起した。

女の振るう鞭音は、薄暗い浴室と脱衣場に響き渡って、いつまでも衰えなかった。最後の愉しみ、浣腸責めを求めて、その長い鞭が捨てられるまで。

いつだったか、わたしは私鉄の特急電車のなかで便意を催したことがある。切迫度の嵩進に加速度が加わっていたのは下痢の証拠であった。長いノン・ストップのあいだ、わたしは汚物の纏い付く不快を選ぼうとする衝動を辛うじて抑えた。

苦い記憶を呼び起して、女は実に三個のい

ちじく浣腸を取り出した。そしてセロテープまで。

(肛門を塞ぐ?)

そのとおりだった。塞ぎ終えた女は、わたしの……を付けて、乳牛を搾るように洗い始めた。

「これじゃ、硬うても、うしろへは使えないわ」

女中が笑った。

女が黙って手の動きを止めた。

そして、わたしは、顎で流し板の縁を乱打して、鼻孔の奥に呻きを響かせた。

シャッターの音、巻き上げレバーの音。

あのととき、片手を心地よく握り締めるだけで、嗜虐の贅を小気味よく呻かせていた女の顔には、「ブラディの流血」と名づけられて、当該強制収容所長のナチス軍人をさえ戦慄させた女カポータちと同じ平然たる表情が、漂っていたことであろう。

それは眼を覆ってもなおわたしの心を怯えさせる底深い暗さの現れなのである。

その同じ暗さがエロチシズムを伴って現れるとき、どうしてもこんな心惹れるのであるうか。

五つの公準と五つの公理を信じて始めてユ

ークリッドの幾何学の無矛盾と完全性が現われるように、わたしたちに無矛盾と完全性を与えるものがあるとするれば、そしてそれを信じる事ができるとすれば、それはよくあの暗さの存在理由を解き明かしてくれるのだろうか。

こんな生の論議は書いてはいけないのだった。

女は、そのあと、わたしの腰のそばに立って一つ残したいちじく浣腸を自分に挿入したまま、女中に喫煙具を取らせた。

火をつけた煙草を手にして、女はわたしの腰の上に腰を降した。腕に食い込む手錠の痛みに関りなく、傷ついた腰のあたりへ衰えぬ臀部を押しつけ、こすって、その動作だけでいちじくを空にしようとした。夏の暑さに湯気はないが、濃厚な湿気に蒸れる煙草の匂いのなかで、胸郭を流し台の足に圧迫されながら、わたしの体内は痛みとも苦しみともつかぬ激しい負担を負い続けた。

「桶に湯入れて受け。匂い残れへん」

女は同時に浣腸液をわたしの腰から背中へ放出した。

ようやく束縛を解かれる時が来た。庭を流れる青い水は、普通にゆかたをつけ



<告白>

あさの・かつみ

いつの頃よりか不思議な浣腸の魔力にとりつかれてしまいました。誰にも云えないということが、一層この執念をかきたて今日まで参りましたが、今迄に私の体験したことを同じ喜びと悩みをもつ同好の友に少々披露致したいと存じます。

浣腸は自分自身で施すことはたやすいことですが、それでは興味半減です。異性に施すか、或は男性の場合なら看護婦さんより受け

浣腸の体験記

て女に腰を抱えられたわたしの足取りの不確かさの前で生きていた。

人間の醜さを知った者だけが本当に自然を慕うのである。

(無心の水の細い流れが、こんなにまで人の心を惹きつけて、心の負担を除いてくれるとは)

立ち止ったわたしをしばらく許した女は無言で腰を押した。

曇天の峡の中に、午後がようやく老いて、

空が奇妙な薄桃色を呈していた。蟬の声と耳なりの区別がつかなかった。と、桃色が目に見えて濃くなり、黒い斑点が現れ始めた。

(苦しい！)

わたしは、真黒になった前方へ一本の棒のように倒れて行った。

暗黒の中でわれを失うのは何と素晴らしいことか。小さな一人の娘がいなかったら、そして死が永遠の卒倒なら、礎だけを残して崩れ去るわたしの業績も、遂に逢うことのできな

かったわたしのベアトリチェも、過ぎた日の懐しい思い出も、わたしを引きとめることは、できない。

わたしはただ、実感を述べているだけである。わたしの中の「暗さ」がじれてわたしに涙を出させようとすることもあるが、彼はわたしの次の一言で頭を搔く。

「お前がいては泣けないよ」

(四一・三・二五)

ることが最大のものではないかと思えます。

私はここ最近二、三年の間に延十数人の看護婦さんより浣腸を受ける機会を幸運にももちましたが、そのときの模様の一部を申し上げます。

○

東京・千代田区の〇ビルで、午後の診療所の中は日ざしは暖かく受診の患者も他にはありませんでした。待つほどもなく名前を呼ばれて中へ入ると、内科担当の女医N先生が診察に当たられます。

「どうされました」

「今朝より横腹が痛く頭痛がして仕事が出来ません」

「下痢でもしていますの」

「いや、むしろ便秘で苦しい位です」

「それはいけませんね。そのベッドに横になってごらんなさい。そう膝を立てて……ここは痛くないですか、ここは、ああ大変な便秘ですね。これでは苦しい筈ですよ。早く出してしまいましょね、そうすれば、すぐ楽になりますよ。腹痛もそれが原因ですよ。Oさん、この方に浣腸してあげてよ。いちじくでいいわ。それでは、あちらの処置室へ行って下さいね」

カーテンを開けて処置室に入ると続いてOナースが、いちじく浣腸の箱をもって入ってきます。

「ずぼんを下して、そこに横になって下さい」

ごく事務的な口調で云い乍ら手馴れた手つきで袋を破り穴をあけています。白衣と茶色のいちじく浣腸、この美しいコントラストを見るだけでもマニアにとっては最高の瞬間の一つではないでしょうか。

「さあ、お腹に力を入れずに、らくにして下さい。お口を少し開いてね。もう少し足を曲げて、そうそう、そのままです」

ナースの二本の指がアヌスに触れると少し

ぎくりとします。

「だめよ、力を入れては」

お叱りを受けて、じっと壁を見つめています。嘴管が少し入れられたなと思うと、次は筋肉注射の時のように、ぐっと一気に奥まで挿入され冷たい液が粘膜を心地よく刺激してゆきます。力強く絞り終ると、ゆっくりとり出し脱脂綿で押えられます。

「もう一つしますから、そのまま待って下さいね」

次も同じ動作で繰返され使い終ったカラを箱に収めかける頃から、はや便意を催してくるのです。

「もうトイレに行って、いいですか」

「よろしいが中で出来るだけ、がまんして、こらえ切れなくなってから出すのですよ」

そう云われて大急ぎでトイレに走ります。

この診療所ではその後四、五回浣腸を受けていますが、最近看護婦さんに直接お願いしますと、申し出れば何時でも心よく施してくれます。いつも側臥位ですがナースの方はしゃがんだり、足の方を向いて立ったりで、その人の個性によるのでしょうか、いろいろな型があるのも興があります。

この間、ナースに、この診療所で浣腸を

受ける人は他にあるかどうかと聞いたところ、まずないですね。便秘している人は多い筈ですから皆トイレや家でこっそりしているのじゃないですか、ということでした。

○

関西のある港の見える都市でのことです。

知合いの女医先生と雑談のあと

「便秘で困っているのですが、これから、もう少し旅行を続けるので下剤も飲めないし弱っています」

「それは大変ですね。じゃあ浣腸してあげましょう。すぐ出てしまいますよ。こちらへいらっしゃい」

診療室に連れていかれベッドに横になると間もなく持ってきたのが、なんと百CCシリندرです。

「さあ、お尻を出して下さい。はずかしいことなんかないでしょ。誰でも、これはするのですからね。はい力を抜いて、そのまま動かないで、じっとして下さいよ」

さすが百CCの浣腸器ともなれば嘴管も太く挿入感も絶大で、先生はゆっくり注入すると手早く脱脂綿で押えてくれます。

「すぐトイレには行かないで下さいよ。液を沢山入れましたが、この方が良く出てあとが

さっぱりしますよ」

ほほえみ乍ら云ってくれますが、その時は排出感が一入強く夢中でトイレにかけ込みました。

その後数回その医院を訪れ、その度ごとに看護婦さんからも浣腸を受けておりますが最近「今日は浣腸は」と向うから聞いてくれるようになりました。

産婦人科なので浣腸はお手のものの筈ですが、患者で来るのは女性ばかりのため看護婦さんは競う様にして浣腸を施して下さるのでマニアとしては、妙理に尽きるとも申せましょうか。

○

普通、医院の門をくぐっても大抵の場合、下剤の投薬で終ることはマニアなら経験のある方もあることと思います。

病院、診療所では、こちらから申し出てもなかなか浣腸はしてくれないものではなく、想像のみで不満を耐えておられる方も多いでしょうが、ナースより受けるのは別として女性より受けたいと願っている方にお勧め出来ることは温泉地などにいるマッサージ師です。

最近ではほとんど若い娘が白衣を着て宿まで来てくれますので、ナースと思って受けるこ

とも出来ます。私の体験では熱海が一番よく、三人のうち二人は少しチップを渡せば心よくしてくれます。

あるマッサージ師は彼女がマニアであるかどうか遂に聞きそびれましたが、マッサージ中、ほとんど浣腸の話で終始し、私が持参したいちじく浣腸で実に手際よく施してくれました。やはり側臥位が多く、伊東ではうつ向きの姿勢をとらされたこともありました。頼むときはマッサージ師は一応基礎的な生理理論は学習しておりますし、便秘もしていないのに、又あまりしつこく要求することは禁物で、話を上手にもっていくことが第一条件です。

ある程度浣腸に関心のある娘ならマニアにとっては、案外楽しい一ときを過すことが出来るのではないでしょう。

○

水商売と申しますか、キャバレーのホステス、芸者、仲居等と浣腸について話するのも興あることです。それとなく話をもちかけると予想以上にいろいろ体験談をしてくれる人もいますが、大体十人のうち六人迄はアルコールの為か胃腸障害を起しており、その内四、五人は下剤か浣腸を常用している様で

す。二、三人は確実に浣腸を常用しているとみてさしつかえないでしょう。

ある芸者は。

「そう、浣腸と云えば、こんなことがあったわ。私達芸者仲間数人で長野県の小さな温泉に行ったのよ。そしたら夜になってね、一人が急にお腹が痛くてたまらないで云い出すのよ。近くにお医者さんもないし困ったわ。

しかし聞けば五日も便秘しているというのよ。そこでこれは少しでも早く排してしまわなければと思ってね、宿の人に浣腸はないかと聞きにいったのよ。そしたら、浣腸器はありますが、薬がありませんと云う返事なの。

しかし薬がないからといって猶予できる場合ではないし、大急ぎで石鹼を溶いて、それで浣腸してあげたのよ。そしたらその人、すっかり良くなってしまって、翌日から皆と一緒に元気で旅行を続けられたわ。帰ってから今でもときどきそのことを笑い話にするのよ」

又、ある仲居は。

「浣腸でお医者さんに行くことはないわよ。何も看護婦さんの前でおっぴろげなくてもいいでしょ。私はいつもスポイトを置いておくのよ。便秘したり食中毒みたいになったとき、それに蜂蜜を吸い込ませて自分で入れる

のよ。気持よくお通じがついて、これが一番よいわ。あなたもゴムのスポイトと蜂蜜をいつも用意しておきなさいよ」

キャバレーMのホステス。

「私、お医者さんで浣腸されたことあるのよ。一週間も便秘して苦しくてたまらなかったから行ったのよ。はずかしかったわ。少し年をとった看護婦さんがしてくれたのだけど、そう腕くらいの太さの浣腸よ。楽にしなさい

四馬孝

倒錯美緊縛画集

(題名) 美女のいけにえ

大中判印画紙焼付五枚一組 一〇〇〇円

略号(えと)

一、女体解剖台

黒くて冷たいレザー張りの台上に逆エビ縛り首縄姿で載せられているのは、齡二十才の美女。身体の前面をむきだしにして、台上にころがされたのに対して、これから加えられようとする嗜虐のかずかずを暗示する恐ろしい道具が冷たく見下している。

二、嫉妬の鬼

絶世の美貌の妻を持った平凡な男は、あらぬ嫉妬に悩まされるものだが、自分は醜い容貌でありしかも、妻はホステスのナンバーワンであってみれば、嫉妬の鬼となるのも又当然であろう。

と云われたけれど私、思わずお尻をすぼめちゃった」

キャバレーRのホステス。

「ときどきと云っても、一週間に一回はいちじく浣腸をするのよ。自分でするのが一番よいのですって、アパートの畳の上で横向きになってするのよ。すぐお通じがあつて気持がよいわ。浣腸が好きな人、沢山いるわよ」

三、鼻料理プレー

美しい女性の鼻をいたぶるのは、これ又Sマニヤの醍醐味である。大事な鼻をツンと突き出して、身動きもできないように手足を拘束された美女が、今やその鼻、鼻孔を男の手によって、思うままに料理されようとしているのだ。

四、涙を舐める男

ぱっちり瞳と瞳いたつぶらな瞳。房々とした丈な黒髪は、色白の肌によくマッチしている。乳房や腰部には、むっくりと肉がのつていながら、全体にはほっそりとした身体つき。その華奢な裸身をくびるように掛けた麻縄、そして身体を真二つにするようにけり締めた革紐の首縄、股間縛。

五、山小屋の一夜

山のけがれを知らぬ清純な空気と同じく、彼女も又、山の美しさに憧れた十九になる清純な処女であつた。しかし山小屋の一夜は、彼女にとっては怖い悪夢の一夜であつた。その受難のいまわしい悪夢のページが、ここに展開されている。

職場の花、オフィスガールの中にも浣腸の経験の持主がかなりいる様です。

I嬢「私この間病院に入院していたとき浣腸されたのよ。病院の浣腸って、いちじく浣腸みたいなあんなものじゃないのよ。ゴムチューブがあつて中程にボールみたいなのがついていて、そこを押えて液をどんどん入れるのよ。私本当に苦しかったわ。浣腸なんていやあね」

S嬢「外科の病院なのよ。横になりなさいと云われるままにベッドに寝るとゴム球のついたチューブの浣腸をもってくるのでしょ。私びっくりしたわ。もう結構ですと云って大急ぎで逃げて帰って来たのよ」

W嬢「盲腸炎をしたとき手術の前に浣腸されたわよ。すごく大きいので、それをきゅうとお尻から入れられるのよ」

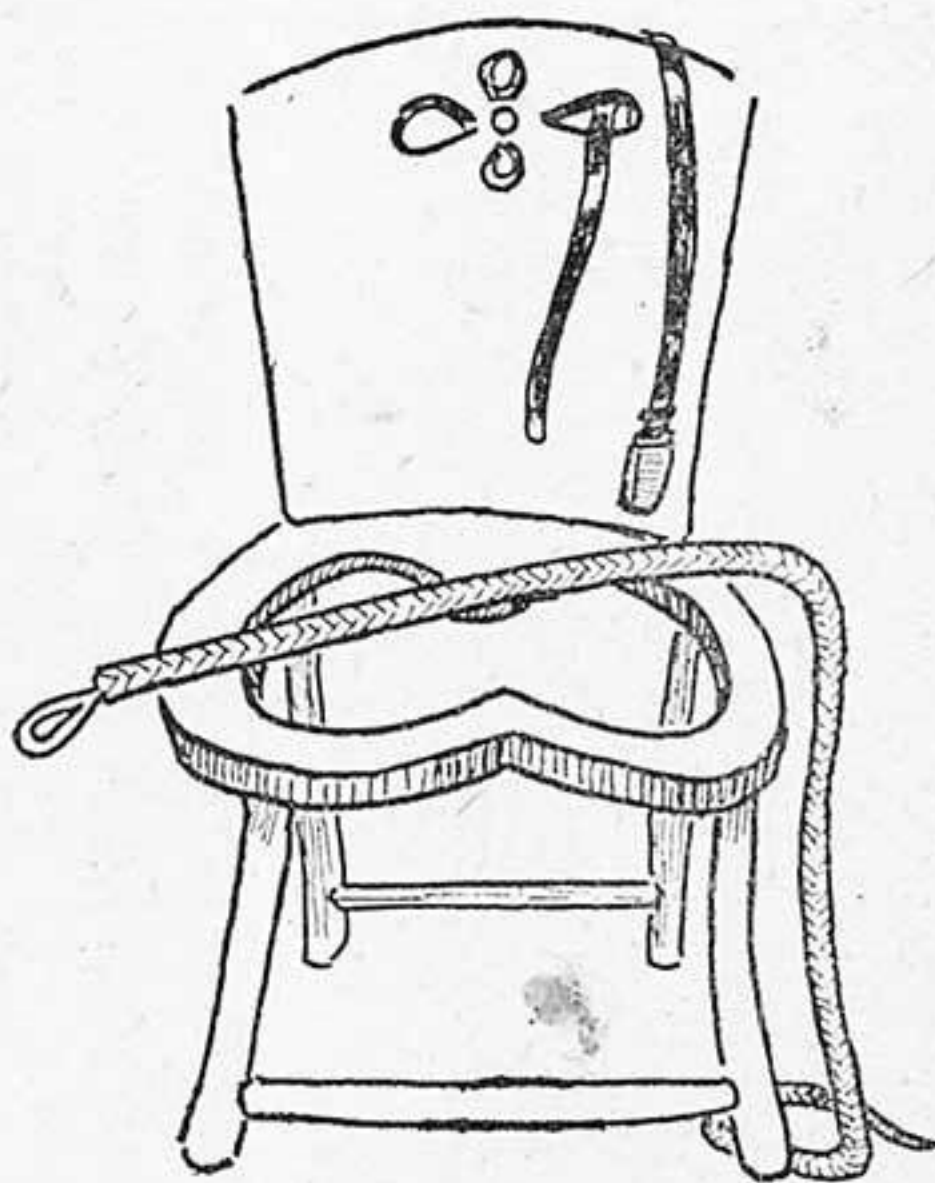
○

いろいろと浣腸されたり他の人より話を聞いたりしましたが、何かしら物足りない感じがするのは、何れも相手がマニアではないと云うことです。誇大な表現かも知れませんが一生に一度でよいからマニアである看護婦さんより、ゆっくりした時をみて浣腸を受けてみたいものと願っております。

心傷たむ遍歴

／＼第二十章 織りなす糸 (三) V

西条操



エメリーヌとアネットは詰所で顔見合わせ
て居た。十時からの公判はリリアンヌ夫人の
公判、おそらく今日が判決だろう。実刑宣告
に備えて、二人は待機臨廷を命じられたの
だ。リリアンヌ夫人は、故ソルボンヌ大学教
授ダルラン氏の未亡人。有能だった若手教授
の夫人にふさわしく、魅力タップリに淑やか
な女性だ。そのリリアンヌが、良人と其の友
人との三人で、シャモニー針峰群の一角をア
タックしたのが一昨々年の五月の話。岩場で
ちょっとした失敗があつて、ダルラン氏は下
に夫人が中に、そして友人の男が岩にしがみ

ついで宙吊りになったのだ。迫る死の恐怖
に夫人はザイルを切断し、ダルラン氏は墜落
して死に、夫人と友人の男とは助かった。其
の友人の男とはロシュフォー・ラフォレ。そ
して、夫人は過剰防衛のかどで書類送検され
て起訴されたのだった。グルノーブルの裁判
所での審理の結果、最善を尽せば被害者を岩
壁に取りつかせ得たであろうと判断され、執
行猶予つきながらも懲役九カ月。不服の被告
側が上告し、リヨン高等法院では緊急避難が
認められて無罪。今度は検察側が再上告し、
去年の夏から一年越し、パリ最高法院で審理

されて居るのだった。事件当初はもとより、
其の後公判ある毎にジャーナリズムのどれ
かが口やかましく、マイヨール弁護士も此の
事件ではシコタマ稼がせて貰つて居る。何し
ろ、リリアンヌ夫人の実家は財閥なのだ。此
の件の担当検事はブランシェ検事。上流階級
の女性が被告人だと、彼は凄く張り切る。豊
かに腐たけて美しい女性を追い詰め、絶望の
眸に涙させるのに快感を覚えるのかも知れな
い。尤も、幾分でもそう云った傾向がなけれ
ば、正義感だけでは長くは続け得ない職務だ
とも云える。三年越しの長丁場もいよいよ大

詰め、今日はおそらく判決だろう。ブランシ

エ検事は、朝のデスクで手をすり合わせた。

彼には自信があったのだ。起訴は出来なかつ

たが事件の立役者の一人、かのロシュフォー

・ラフォレ、彼とリリアンヌ夫人との道なら

ぬ間柄を事件以前に溯ぼって立証し得たし、

現在も続いて居ることも証明出来た。それ

に、状況鑑定に就いても、どうやら判事は第

一審の鑑定に傾いて居るらしい……。

美しいリリアンヌ夫人が思いも寄らぬ宣告

に驚愕し、絶望と恐怖に打ちのめされること

だろう。

(ザマあ見ろ。ソルボンヌの取り澄まし者ど

もめ！)

ブランシは、ソルボンヌの学閥に反感を

禁じ得ない人間の一人でもあった。

最高法院の判決は最終のもの、宣告と同時

に刑は確定する。リリアンヌ夫人は勿論最初

から身柄不拘束、もし実刑判決があっても其

のまま帰し、改めて収監してもいいのだが、

万一悼ましいことになっても困る。それで、

エメリーヌとアネットの待機臨廷となったの

だ。実刑言い渡しがあれば、閉廷後、直ちに

収監状を執行する仕事、あまり愉快な業務で

はないし、相手が楚々たる令夫人ともなれば

なおさらだ。

「その時には、私がペーパーのサイン貰って

来るわね」

エメリーヌが先手を打って云い

「あら、駄目よ」

とアネットが拒む。死刑宣告だと例外もあ

るが、大抵は先ず主文が読まれ、続いて判決

理由の朗読が少くとも二、三分、長ければ三

十分はある。主文で実刑と分れば、直ちに収

監状にサインを貰うために執行課へ走るのだ

が、其の仕事争って居る二人なのだ。サイ

ンを担当すれば、それを示すのも其の人間の

仕事となり、従って、手錠をかけるのはもう

一人の人間の仕事になる。執行課へ走ると云

ったが、実際には、然るべき人間が法廷の近

くまで出張って居るのだ。そうしないと、間

に合わないこともあると云う訳、何もそんな

ことまでしなくとも、あらかじめサインして

法務事務官に持たせておき、不要ならば破棄

すればいいのだが、それが役所仕事のキチヨ

ウ面さと云う所か。

「だって、私、いま収監業務を二人も終えて

来たのよ。ワナワナするのに手錠かけるのは

嫌よ、今日はもう」

収監状持参で出頭して来た女二人を受刑者

にして来たばかりのエメリーヌは、口とがら

せてアネットに云った。

「でも、ワッパが要ると決まった訳じゃない

のよ」

「そりゃそうだけど、待機の際は大概そうな

っちゃうわ。可哀想ねえ、あの奥さん」

「奥さんじゃないわ。未亡人よ。あのひと、

身柄拘束の経験はないのよねえ」

「だから、いやなのよ」

「だって仕事じゃないの。じゃ……」

アネットは腰の手錠を抜き出し、環の一つ

をテーブルにカチャンとおき、両手で隠し

た。

「えーと。表！」

とエメリーヌ。

「お気の毒様」

手錠の刻印は下側にあった。

「すまないわね。帰りにおごったげる」

「マキシムのエスカルゴを頼むわ」

「冗談じゃないわよ。エッフェル塔の上でコ

ーヒーとケーキよ。今日は何日だと思ってる

の？」

嫌な役目はエメリーヌに押しつけられてし

まった。

最高法院の審理には陪審員はない。五名の

判事の長たる裁判長は冒頭、念を押した。
「更に提出する証拠、及び喚問する証人等はありませんか？」

「ありません」

ブランシェとマイヨールが答える。マイヨール弁護士は、半ば敗北を覚悟して居た。制服の婦人法務官を臨廷させるのは検察側の勝手だが、悪い予感確信となつて溜息が出る。彼は忌々しげに検事を眺めた。

(ラムルウ夫人の事件じゃ鼻をあかせてやったからなあ。今度はこっちの番か。ちくしょう。万一、実刑を喰った日にゃ、十万フランの儲け損ないか)

こうなれば、頼みは裁判長がソルボンヌ出身だと云うことだけだ。しかし、それも考え様によっては両刃の剣かも知れない。

黒革バッグを肩にしたエメリーヌとアネット、横手の別席に陣取った二名の婦人看守の姿を見やうと、リリアンヌ夫人は血の氣を失つた。その様子に気付いたヴィヴィアンヌが夫人を励まし力づけ、再び自分自身の悩みに思い患らう。ヴィヴィアンヌは既にフィリップ夫人、敢然として愛し受入れたフィリップだったが、やはり前科がわざわざいして思わしい職にはつけず、漸く得た職場も三日前に鹹

となつたのだった。両親は離婚をすすめ、彼女は愛の相剋に悩む――。

「では、検察側から最終弁論を」

裁判長の声に、ヴィヴィアンヌは我に返つてメモに向つた。

「被告人リリアンヌ・ダルランは、かねてより其の夫エドアル・ダルラン氏に憎悪を抱きあつたことは疑う余地なく……本件に於ける被告人の行動は、緊急避難などとは云うものもろか、過剰防衛、それも極めて過剰の利己的防衛と云うべく、云うなれば悪意ある過当防衛、いな極論するならば、絶好の機会に遭遇して、日頃抱き在った殺意さえもが動かなかつたとは断定し難いものがあります……」

言い回しに注意しながら熱弁振るブランシェ検事は、判事達の顔色を読みつつ思う。
(しまったよ、全く。殺人でやっても行けたかも知れないなあ。残念……)

検事の鋭い舌鋒に堪えるリリアンヌは蒼白な頬、唇をわななかせつつ、思いをこめたまなざしで時々振り仰ぐ。

アネットがエメリーヌを突つついた。

「ね、先刻から考えてるんだけど、此のひとによく似たひとが居たじゃない？ ホラ、えーと、ミシュリーヌと云つたかしら」

「あら、ほんと。思い出したわ。感心したわねえ、あのひとには。心打つ佳人だったわ。ほんと、そう云えばよく似てる。どうかするとそっくりじゃない？」

と、エメリーヌが囁やき返す。

「ほんの少し背を高くして、スポーツさせて引き締めたら、あのひとと此の奥さんと見分けつかなくなるわ。姉妹かしら？」

「まさか。でも、二人とも憎らしいほど綺麗ね。ミシュリーヌ、今頃どうしてるかしらねえ、可哀想に」

検事の最終論告は、過剰防衛の最高刑たる懲役二年の求刑を以て終つた。ほぼ満員の傍聴席、其の最前列近くにはロシュフォール・ラフォレがうつむいて坐り、しきりと額を拭つて居た。彼に云わすれば、死んだダルラン氏にも糺弾さるべき点が多々あるのだ。

飽くまで緊急避難を主張するマイヨール弁護士の弁論が終り、裁判長は午後の再開を告げて休廷を宣した。判決が後日に持ち越されることを期待して居たアネットとエメリーヌは、見合わせた顔を期せずしてしかめた。数多くの裁判に臨んで来た彼女達には、被告側の敗色濃いことがよく分る。人目忍ぶ要も既になくなったロシュフォールは、食事も咽喉通

らぬリリアンヌの不安を慰さめてやるのだった。彼女の肉親は顔を見せて居ない。財閥ともなれば、それぞれ多忙なのだろう。愁いと心痛と恐怖に満ちたリリアンヌの顔に、ふとミシュリーヌのそれが重なる。法院に来ると、思うまいとしても睨に浮かび来るのは、あのミシュリーヌの痛ましい姿だった。

「もし……もし、検事さんのおっしゃる様なことになったら……」

リリアンヌは嗚咽をこらえた。

「大丈夫だよ。ああ云うのが検事の仕事さ」

「でも、もしも……そうになったら、あなた、どうなさって？子供が居なくてよかったわ。ああ、もう私……」

「そんな弱気なこと！」

リリアンヌは男に眸で縋りつき、ロシュフォー

オーは静かに云った。

「どの様なあなたであろうとも、僕は愛するよ。約束する」

「嬉しい。ほんとね？」

女の瞳に歓喜の涙が溢れ、ロシュフォーは又しても思う。あのミシュリーヌにも、こう云ってくれる男が居るのだろうか。可哀想なミシュリーヌ。そのかみの舞踏会の夜更け、全身全霊をこめて囁やいた我が意を彼女が受

け入れてくれてさえ居たら。——そして又、良人を喪った彼女が訪ねて来てくれたあの五月晴れの日、更に膈たけて美しい女盛りの彼女に、思い切ってもう一度求愛する勇気さえあったなら——。二つの機会の一つさえを掴んで居たならば、あのミシュリーヌも受難の道を歩まずに、朝な夕に美しく愛らしく微笑みかけて居てくれることだろう。そして又、今ここに打ち震えて居るリリアンヌも、こんな非運に泣くことはなかったに相違ないのだ。

ロシュフォーは深く息を吐き、幻を振り払って時計を見た。扶けられて立ったリリアンヌの脚がよろめいた。

「被告人リリアンヌ・ダルランを懲役十カ月に処する」

全法廷が緊張し、裁判長の次の言葉を待った。

「では、判決理由……」

台下の床に立つリリアンヌの体がグラリと揺れ、黒色レースのドレスの裾がさわさわとゆらめき、濃い金髪がガクリと垂れた。執行猶予さえもないのだ。記者連中が数人飛び出して行く。此の美しい女性の刑務所行きを、何もそんなにあわてて触れ回することはな

らうに。アネットも靴音を忍ばせ、足早に出て行った。机に両肘ついて顎乗せるマイヨールの胸を去来するは、敗北の落胆と共に、あての外れた資金繰りのこと。ブランシェは押え切れない頬をゆるめ勝ち、ヴィヴィアンヌは鉛筆をほうり出した。もう、苦勞してメモする必要もない。今にも崩折れんばかりのリリアンヌ、ともすれば眼をそむけてしまうエメリーヌだったが、彼女には既に、リリアンヌの挙動を監視する責任があるのだ。肝心の時に居ない担当者を探して手間取ったアネットが、戻って来て息を弾ませた。

「ずい分と長いね。よかった」

「早く済ませてやればいいのに。可哀想よ」

実刑言い渡しに続く判決理由、立たされて聴かされる女性の姿は、大抵の場合哀れなものだ。先週、異例のスピード審理で十二年を言い渡されたアンジェラとか云う女強盗の様な例外もあるが。

たっぷり二十分かって朗読が終り、裁判長は最後につけ加える。

「なお、被告人の身柄は即日収監するものとする」

裁判長も、リリアンヌの身に起る不祥事を警戒したのだ。まだ若く美しい女性が、非破

廉恥罪の一年足らずで自殺などしたら可哀想だ。

「なあーんだ」

とアネットが肩すくめた。裁判長がそう云ってくれた以上、此の収監状はもう要らない。閉廷宣告と共に、エメリーヌとアネットは間髪入れず立った。認めたリリアンヌの顔面から更に血の気が消え、開いた唇がわなわな震える。脚はもう動かないだろうし、自分で立って居るのが不思議な位。さっと近寄って、今は女囚のリリアンヌを傍聴人達の眼から遮ぎってやり、アネットが背後から両肘を掴み支える。

「収監します」

エメリーヌは低く云い、手早く手錠をかけた。あっと云う間に両手にからませてやるのが、却って慈悲だ。いくら音を忍ばせても、鋼鉄の触れ合う音は避けられない。よろめく女囚をアネットが支え、エメリーヌが更に腰ロープを打って、手錠を腹に押える。生まれて初めて受ける手錠と云うものの冷たさ硬さ、両手首にまつわりついた鋼鉄環の非情なきびしさ、喰い入る錠の音ははじめな絶望感と共に耳朶を刺し貫いて、彼女は一生涯、此の感触と音とを忘れることは出来ないだろう。

う。ゆるくかけてやった腰の革ロープも、此の女性にとっては腰も千切れる想いに違いない。弁護士と云えども、これでもう、二人の婦人法務事務官の許可と監視なしには、話しかけることも出来ないのだ。ロシュフォーはそむけて居た眼を戻し、両側から腕扼されて連れ去られるリリアンヌを見送り、法のきびしさと運命の呪わしさを今更の思いで嘆くのだった。そんなことは今の彼にとってどうでもいいことだったが、これで、彼が教授になれる日は少くとも五年は延びたことだろう。通りすがりに、アネットの手が伸びて、女囚リリアンヌのハンドバッグをデスクから取るうとした。

「あとで、ちゃんとしますわ」

ヴィヴィアンヌは拒んで云う。アネットもエメリーヌも顔馴染み、二人の人柄は尊敬して居るヴィヴィアンヌではあったが、其の時には睨む様にしてツンと云ったのだった。固く眼をつぶって、ともすればよろめくりリアンヌ、それを扶け励まし、時には低く叱り、アネットとエメリーヌは手続きのために連れ歩いた。

「思いもかけないことになっちゃったんだから、此のマダムに見りゃ、無理ないけど

さ、それにしても、あんまりダラシなさ過ぎやしない？ 二、三発頬ぺたぶってやるといんだわ」

「あら、いきなりそんなのはお可哀想よ。でも、まるでギロチンの下へ行くみたいね」
心ない娘達は眺めてそんなことを云い、ゆっくりと書類を処理するのだった。大ごとの身体搜検、そしてリリアンヌは囚衣をかぶって着、初めて泣いた。赤縞の獄衣をまとい、再び手錠を受けたリリアンヌは、血を吐く嗚咽を一声洩らし、そして静かに云った。
「すみません。でも、もういいんですの。もう、独りで歩きますわ」

曳かれて歩くりリアンヌには、あたりの光景が地獄の様に思えたことだろう。二人がかりで独房へ入れて鉄扉を静かに閉じると、啜り泣きの声が、せきを切った様に監視窓を洩れた。芯の疲れる一仕事を終えたアネットとエメリーヌに主任が云う。

「お茶飲みながらでいいから聞いてよ。急なことでは無いけど、アネットは明日ツェーロンへ行つて頂戴。アニエス・ノエル的人身柄引取りよ」

「相棒はどなた？ 若手二枚目でしょうね」
「お気の毒。ムッシュウ・ロバンよ。それか

ら、エメリーヌは明日護送してよね。クラリス・シモン。コンピエーヌ。頼んだわ」

「はい、はい」

「コキ使うわねえ。でも、クラリスには氣をつけた方がいいわ。元婦人警官よ。手錠抜けたとかしないとかと云う話だわ」

其の日の宵、二人はエッフェル塔のカフェで憩い、ポムフリットを摘まみ、コーヒーを啜った。

「ポムフリット、あんまり喰べるんじゃないよ。肥っちゃうわよ」

アネットが云いながら、自分はポリポリ喰べる。

「不思議、やめられなくなっちゃう。もう、これでおしまい。納っというてよ」

エメリーヌは笑いながら、馬鈴薯の空揚げの喰べ残しを包んだ。パリ女は案外とつましいものだ。

「ねえ、アネット。でも、不公平だと思わない？ リリアンヌのこと。確定檻へ入れないで未決用独房へ入れさせたじゃないの。そりゃ、可哀想だとは思わ。けど、法の前には万人が平等なのよ。特別扱いはいけないわ」

「法の理念に就いての二、三の考察ね。凄いわ。フフフ。でも、仕方ないじゃないの、エ

メリーヌ。あなた、ドストエフスキーを読んだ？ どの作品だかに書いてあるわ。つまりね、貴族と百姓とじゃ、刑の受取り方が相対的に違うよ。金持は一日の拘留でも死ぬほどだし、貧乏人は一カ月でも平気だと云うこと。分った？」

「そんなものかしら。云っとくけど、私、リリアンヌを撲るかも知れなくてよ」

「どうぞ。でも、擦ぐったいなんて云われないでね」

ところで、ガブリエル・バロー捜査網を解いた婦人警官達は通常の勤務に帰り、暑苦しくもいかめしい制服や、目立たないドレスを再びまとった。

「面白かったわねえ」

とナタリーヌ婦人刑事が云った。

「ほんと。スリルとサスペンスに満ちた一週間。でも、化粧代、足が出ちゃったわ」

とシンシアがこぼす。シャネル五番なんかを使うからだ。シュザンヌのカバーを怠ったことなどはケロリとして居る。

戻って来たセシリアが手柄顔で云った。

「やっぱりマエがあったわ、あの喫茶店のマダム。おとといまでは私達の仲間だった夜の天使の御出身、詐欺で二年の前科一犯よ」

「なら、いいじゃないの。遠慮なく連れておいでよ」

と、シンシアがあっさり云う。

「だって理由がないわ」

「馬鹿ね。相手は前科女よ。ちょっと脅かせば震え上ってついて来るわ」

「そうかしら？」

「そうよ。もし、何だかだと云ったらさ、ガチョンと逮捕しちゃうの。理由なんかいくらでもあるわ。道路に邪魔を出してるとか、ゴミ箱の蓋がとれてるとか、未成年の女の子を深夜まで働かせてるって云う手もあるし……」

「メリケン粉の紙包を落っこしといて、麻薬所持と云うのはどう？ 私の考えた新手よ」

ナタリーヌがまぜ返す。

「そんなの古いわよ。シャーロック・ホームズがやったわ」

・シュザンヌは拳銃を磨きながら、義憤を禁じ得ない。

「そんなのひどいじゃないの。前科があろうがなかろうが、そんなことで差別しちゃいけないんじゃない？」

「ホホホ、シュザンヌは未だ若いわねえ。もっと経験を積まなきゃね」

シンシアが鼻を寄せて笑い、レイモンドが

仲を取ってとりなした。

「ま、何よね、仮釈中の連中になら、少々のことはいいわ。でも、綺麗になっちゃった人間にはね、原則としてーさ。分るでしょ？そりゃ、実際問題としては、いろいろとあるけど、ハッキリさせちゃまずいわ」

最古参者ともなれば、レイモンドも氣を使う。シュザンヌが心待ちして居た書類を、庶務の女の子が届けて来た。いそいそと署名したシュザンヌは張り切って云う。

「警部はどこなの？」

「取調室よ。八号室」

シュザンヌは更にいそいそと、サインを貰いに行った。書類は身柄引取書、容疑者のエリゼ・ヴェルソワは警察病院にいる。エリゼは二十三才の娘、容疑は殺人、それも何と三人を殺めたという恐ろしい容疑だ。妻子ある男に横恋慕し、遂に邪魔者の母子二人を毒殺して男との逃避行、逃げ腰を見せる男に心中を迫って射殺してしまった。男の死体を前に、ムーラン・ルージュのネオンが窓にまたたくホテルの一室で自分も毒を仰いだ、銃声に駆けつけた人々のために手当は早くて一命を取りとめ、回復したとはいえ衰弱した身を、警察病院のベッドに横たえている。自供

によって搜索されたニース郊外の住宅からは、埋められた母子の死体が発見された。シュザンヌの仕事は病院からの身柄引取り、そして一晩ここに泊め、明日正午の列車でニースへ護送することになっている。階段を降りる彼女の脚が軽やかなのは、その仕事を楽しみからではない。護送の仕事は氣を使うし、買って出るほどのことはないのだ。それなのにシュザンヌが浮き浮きしている訳は相棒にある。護送と一緒に担当する相手は、あのアルベールなのだった。往きは厄介な荷物があるが、帰路はアルベールと二人きりの旅になる筈だ。それに、行く先はニース。リビエラ海岸の波は碧く、砂は白く輝やいていることだろう。

(チャンス到来ね)

シュザンヌは書類をヒラヒラさせて扉を押した。

地下の取調室では、一見貴婦人風の女をメグレ警部が追究していた。

「嘘つけ！ まだまだヤマはうんとこさある筈だ。全部ゲロした方がお前の得なんだぜ。あとでバレて、ムシヨから裁判所通いとなりや料理は別皿になるんだ。別コースの代金を頂くことになるぞ。一ダースなら安くなるっ

て、ディオール氏もいっとる。おいっ、どうなんだ？」

この女は宝石専門の詐欺犯、昨日レイモンドに挙げられて来た三十五、六のプラチナ・ブロンド。金のかかったドレスも少しシワが寄り、なかなか頑強だ。

「あの、これお願いします」

シュザンヌは、委細構わず割り込んだ。早いとこ仕事を済ませて早退けし、対アルベール作戦の準備に取りかからねばならない。貯金もおろしたいし、女としての作戦準備はいろいろと大変だ。

シュザンヌはパトカーを病院の玄関に待たせ、冷房のぬるい廊下を急いだ。殺人犯エリゼは、勿論鉄格子付きの特別病室にいる。

「ご苦勞様。これで厄介払いだわ」

鉄格子の前のデスクで、ガッチリした体格の看護婦がそういった。

「ギロチン行きの女がいると、何だか氣が重くてねえ。あ、ちよっと待って」

若い見習看護婦が白衣の胸盛り上げて入って来、伝票を差し出した。守衛の五十男が鍵の輪を取り上げて立ち、見習看護婦は壁際の車椅子を押し、鉄格子戸の前で顔をしかめる。鉄格子の中には、粗末で頑丈なベッドが

十個ばかり。

「ねえ、この方が私達の部屋より冷房利いてるじゃないの。馬鹿にしてるわ」

戴帽式を未だ済ませていない娘はそう呟いてふくれ、罪人の癖に、という風な眼で、横たわる数人の女を見やった。そんな心掛だと戴帽式の感激を味わえないかも知れない。

ベッドの一つに車椅子が横付けにされ、担当看護婦も手伝って、大柄なブルネットの体に移された。

「そいつを今日もまたかけるのかい？ 逃げる体じゃないじゃないの」

車椅子の足許には、鋼鉄の足枷がついている。ガッチリした体の看護婦は、有無をいわせず、両足首にガチンと嵌めた。

「あーあ、ほんとに嫌になっちゃうねえ。これじゃ、癒る傷も癒らなくなるわ。今日も電気かい？ あんな痛い目に逢うと、傷がひどくなっちゃう。ヤブが揃ってるもんだよね。でも、無理ないわ、サツの病院だもん」

「お黙りっ。ひどいよ」

看護婦がきめつけ、白衣にふさわしくない代物をポケットから取り出した。

「今日からは手錠かけるわ」

「あらっ。あたし入院してる患者よ。あんま

りじゃない？ そんなの。痛ましい患者にそんなこと……」

ブルネットは車椅子の上で腕を振り忽ち

「いた、たっ」

と叫びた。痛みは傷か、それとも、足首こじる鉄枷か。おそらく両方だろう。

「おとなしくしないからよ。これっ」

拒む手首を鮮やかに捉え、看護婦は手錠を二度鳴らせた。

「入院患者にこんなことしていいの？ ナイチンゲールに申訳ないと思わないのかい」

ブルネットは両手突き出して罵る。この

女は銀行強盗の情婦、男との添寝を官憲に襲われ、男を逃がしてやろうと武勇伝的一幕、女だてらに刃物を揮って警官に抵抗したあばずれだ。そして、その挙句が胸に貫通銃創、おまけに腰まで挫いてフン捕まり、男の方はピンピンして今頃は既に拘置所だが、自分は病院で唸っているという次第。

「ハイ、鍵」

受け取った若い白衣は、女囚の眼の前でその鍵を胸ポケットに納めて嘲笑を浮べ、ブルネットは娘を睨み上げて歯がみした。

「ちくしょう。忌々しいったら。怪我人に手錠かけるなんて」

「フッフ。馬鹿お云い。あんたはね、患者である前に囚人なの。車椅子を押す私の方がよっぽど忌々しいわ」

見習看護婦は乱暴に車椅子を押し動かし、ブルネットがガクンと頭を打った。

「うっ。静かにおしよ。車椅子も満足に押せないのかい。白靴穿けなくしてやるよ。看護婦の道は嶮しいんだから」

「ほんとにまあ！ お前なんか早いとこ刑務所へ行った方がいいわ。このまま連れてってやりたい位。そのうちに、お前の懲役姿を見に行つてやるからねっ」

若い娘はいきまき、線入り白帽の看護婦が眼顔でたしなめる。

「ほんと、看護婦でなけりゃ、ぶってやる所だけど」

「フッフ。ナイチンゲールに感謝するわ。写真をお部屋に飾って、朝タキスすることにしようっと。急がないからさ、素敵な写真探しといてね。二、三年先でいいのよ。若いハンサムのナイチンゲールを頼むわ」

口の減らないブルネットだ。こんなんじや、もう傷はいいのかも知れない。

「あんた何よ？ 先刻から突立って眺めてるけど」

と今度はシュザンヌに噛みつく。

(こんなのもいるんだからねえ)

シュザンヌはそう思いつつ黙って、男好きする顔立ちの女囚を見下ろし、車椅子の出口を譲った。

「ああ、お前さんはアナポリスだね。牢番女じゃなさそうね。匂いで分るわ。まさか、あたしを連れに来たんじゃあるまいね？ あたしは、まだ一年はかかるわよ。ヤブ医者のお見習い女達におもちゃにされてんだから」「いったわねっ」

「だってほんとじゃないの。気にしない気にならない」

「洗濯石鹸で浣腸してやろうかしら。ところで、アナポリスって何よ？」

「常識のない娘だね。登用試験は落第うけ合うわ」

娘は顔を真赤にして怒る。

「アナポリスっていうのはね、女のデカのこと。デカとはね、ああ、手間がかかるねえ」「その位、知ってるわよ。ねえ、婦警さん。代りにぶってやってよ」

娘はシュザンヌを振り返って訴えた。

「あ、そうか。エリゼを連れに来たんだね。あれはいい女になるわ。でも、いい女は早く

散るものよね。惜しいわ。見習いさん、エリゼを大切にやってやったかい？ 生首が化けて出るよ」

車椅子はようやく去り、シュザンヌはエリゼのベッドに案内された。エリゼは横手の個室、いや独房にいた。

「あら、眠ってるわ、あれだけ騒いだのに。」

「狸寝入りですかしら」

「いえ、ほんとに眠ってるのよ。この娘だけは分らないわ。とても無邪気なところがあるのよ。自殺しやしないかと心配したけど、本人はもうケロリとしてるの」

看護婦は鍵束をまさぐりつつ嘆息した。エリゼはれっきとした殺人犯、両足首をベッドに繋がれている。

「起きるのよ」

足首の鉄環を解かれたエリゼは、起き直って眼をこすった。

「運動なの？」

と、切れ長の涼しい眼で仰ぐ。ほんとに可愛い顔をしている。レイモンドのいうとおり、これだから、顔かたちだけで信用はできない。

「退院するのよ。着替えて」

「あ、そうか。そうだったわね」

病衣を全部脱いだエリゼは

「痩せたわ。股も合わなくなったし」

と自分の裸身を撫で見下ろす。腰骨のあたりが痛々しく飛び出していた。

「鏡ないのね。私のハンドバッグ出してよ」

ハイヒールを突っかけ、レッドゴールドの髪を掻き上げながら素晴らしい、長いまつげをあげてシュザンヌを見た。

「私を連れに来たのね？」

「そうよ。エリゼ・ヴェルソワね？ 後ろ向きなさい。もう、いいわね？」

シュザンヌは肩からむき出しの腕を捉え、後手錠をかけた。白い両腕が背でもだえる。

「あら、ひどい。これじゃ痒いところも搔けないわ。まだ、靴下直すのよ」

「少し辛抱なさい。さ」

「こうしてニースへ帰るの？ せめて顔ぐらい洗わせてよ」

シュザンヌは、もがく肘を掴んだ。

「さ、来るの」

ハイヒールがよろめき、額の髪がはね上げられ、エリゼは恨めしげに婦人警官を見た。

翌朝、シュザンヌは胸躍らせてアパートを出た。考えた末、着替えは持たずにショルダーバッグだけ。だから、帰途に備えてドレス

を選んだ。バッグには、吟味した化粧品の数々が入っているが、心ない女とアルベールに思われるといけないので、今はそれを使っていない。

メグレ警部が、シュザンヌの顔を見るや云った。

「ああ、シュザンヌ。昨日知らせとこうと思っただが、手違いがあつてね。今日のニース行きはもういいよ」

警部はこともなげだが、シュザンヌは吃驚した。

「延期ですの？」

「いや、代りにシンシアをやることにしたんだ。彼女、あの辺に用があるらしいんだな。」

そういつて昨日頼むもんだから。なあと、今のニースは詰らんよ。人ばかり多くてね」

失望の余り肩落したシュザンヌは、アルベールは？と訊ねたいのを辛うじて抑えた。

やはりアルベールは、シンシアと一緒に出発した。

(彼ったら、私でもシンシアでも、どちらでもいいのね。口惜しい。シンシア、嬉しそうにしてたわ)

取り残されたシュザンヌは、泣きたい思いをこらえた。もし、あのシンシアが万一、と

思うと、不安と嫉妬が胸一杯にひろがるのだ。この時ばかりはメグレ警部が恨めしかった。

「大丈夫よ、シュザンヌ」

レイモンドが慰さめてくれる。

「何が大丈夫なのか、私にもよく分らないけど、ともかく大丈夫よ。昨日、大分牽制してやったんだけど、駄目だったの。シンシアの強引さと、警部の鈍感さ加減には呆きれちゃった」

不安と焦燥の三日が過ぎ、戻って来た二人を懸命に観察して見るシュザンヌだったが、どうとも分らない。

「南第二署から連絡はなかったかい？ シュザンヌ。マンデュウ商店の事件だけど」

いつもの調子で訊ねるアルベールに

「なかったわよ。しっかりしないとおミヤ入りだよ」つっけんどんにシュザンヌは答えたのだった。

午後、シュザンヌは地下の道場へ降りた。

ホッとした反面、何だかムシクシヤするの、で、久し振りに柔道で汗を流したくなったのだ。柔道衣を取り出した彼女は、少し離れた洗濯場を覗いた。拘留刑の女囚が四人、のろのろと洗濯している。

「もう済みそう？」

うとましげに振り向いた女達は黙って答えず、一人がようやく応じる。

「無茶いわないでくれ。タツプリ夜中までかかるね。これ見るといいわ」

と、汚れ物の山を顎でしゃくった。二人宛の腰をくびる連鎖が、水音と共にチャラチャラ鳴る。

「そうお。ご苦勞様ね。でも、それならよかったわ。三十分したら持って来るから洗ってね。分った？ 返事ぐらいしたらどう？」

「はい、はい。お綺麗好きでいらっしゃるのね」

「あんたは、洗っておけで済むけどさ、そのジュードーとやらを自分で一ぺん洗って見るというわ。指がすりむけるわよ」

シュザンヌが留置場係でないと見るや、女囚達はかなり口答えする。

「今更何をいつてるの。それが今のお前達のお仕事よ。今度こんな洗い方したら承知しないから。いいわねッ」

シュザンヌは、手にした柔道衣一式を叩いて、きめつけてやった。わざわざ労役の都合を訊きに來てやったのに、癪にさわる女囚達だ。着替えたシュザンヌは、居合わせたセシ

リアを相手に、手ひどく揉んでやった。シンシアでないのが残念だ。

「あんた、ほんとに強いね。参ったわ。スコットランドヤードに勤めりゃよかったのよね。女王様のボディガードになれるわ」

シュザンヌは苦笑いし、途端に頬染めた。いつのまにか、黒帯柔道衣姿のアルベールがそばに立って眺めていたのだ。

（そうだわ。こうなりゃ、今日はもう思い切って……）

文字どおりの体当りをシュザンヌが決意し、眩しいまなざしを彼に向けた途端、セシリアに先を越された。

「ああ、アルベール。少し教えて頂戴。シュザンヌとだと、体がこわれるもん」

シュザンヌはぶいと顔をそむけ、足は心と反対の方に動く。ちょうどあがりかけたサンシールがいた。

「一ちょう、やらないこと？」

「いや、もう僕は……」

彼は彼女が苦手だ。

「まあ、いいじゃないの」

シュザンヌは、逃腰の男の襟を掴んだ。アルベールはわざと負けてやっている。

「シュザンヌ・シャラさんいない？」

給仕の娘が呼びに来た。ちょうど彼女の足払いが決って、サンシールの体がマットに這った時だった。

「メグレ警部が呼んでます。お急ぎですわ」

「そう。じゃ、柔道衣を洗濯場へほうり込んでね。赤縞さん達、まだいる筈よ。いなけりゃショ引いて来て、必ず今日中に洗わせるのよ、いい？」

シュザンヌは、まだ揉み合って楽しげなアルベールとセシリアを、忌々しくも悲しく眺めて道場を出た。

メグレ警部はいった。

「重大なことなんで、総監じきじきに話されるそう。制服はあるね？ 着替え給え」

シュザンヌは緊張して総監室に入った。

「楽にし給え、シュザンヌ君。そうシャちほこ張らないでな」

婦人警察官シュザンヌ・シャラを頭の前から足の先まで観察し、うなずいた総監はいう。

「では、最初に訊ねるが、ここに困難な仕事がある。やるかね？ 独りでやり抜かねばならないし、高度の演技力と記憶力を要する。生命の危険があるかも知れない、下手するとね」

総監は言葉を切り、警部とシュザンヌを交互に見やった。

「そして、国家レベルの秘密を要するんだ。

勿論、強制はしない。いやだったら断わっていいんだよ、シュザンヌ君」

シュザンヌはカチンと踵を鳴らせ、眉あげて云った。

「やりますわ。どんな困難な仕事でも命じて下さい。私は警察官です」

総監は満足気に、大きくうなずいた。

「よろしい。では、刑務所へ入り給え。勿論婦人刑務所だ」

流石のシュザンヌも驚いた。説明された事情はこうだ。

去年の春に検挙された男女二人の盗賊、列車専門の窃盗犯だったが、国際列車の寝台車で、ある外交官の荷物を盗んだことがある。

金品はともかく、その中には、ヨーロッパの某国の王妃殿下が直筆の手紙があったのだ。

「最近になって、その手紙が重大なことになって来たんだ。ま、分るだろう？」

「はあ、では、盗品は発見されていないのですね？」

「そうなんだ。女がどこかに隠しているのは確かなんだがね。あるいは、詰らんと思って

捨てているかも知れん。焼いていてくれたら一番いいんだが、そうなりやまた、それを何とか確認せにゃならん。勿論、繰返し取調べた。手紙には重点をおかないふりをしてね」

「でも、駄目なんだよ」
とメグレ警部が嘆息する。

「女はコンピエーヌにいたんだが、少々はひどいこともしたよ。催眠術も黙認したし、大臣の諒解を得て薬も使ったさ。スコポラミンも使ったしね。しかし、あの女は特異体質と見えて効果なしだ」

「分りましたわ」
シュザンヌは云った。

「女囚になって近付いて、聞き出すんですのね」

「そう。それしかもう手がないんだ。重大な外交問題がからんでる。成功を祈るよ」

細部は、警部が自室で説明してくれた。

「これが君の経歴だ。コンピエーヌには、今までに接触した女はいない筈だよ。すぐ準備し給え。金曜にテストする。アドリエンヌ・メニエルになり切ったかどうかをね。アミアンの拘置所を見ておいた方がいいね。あ、それから欠勤届を出しとき給え」

「どの位？」

「そうだね。十年間にするか。いや、冗談々々。ま、二ヶ月かな。診断書はこっちで作るよ」

「で、いつからやるんですの？」

「九月に入ったらすぐだ。早い方がいいんだけど、暑いとあそこは大変だからな。ま、寒くなるまでには出してあげるよ」

着替えてデスクに戻ると、レイモンドが声ひそめて云った。レイモンドだけは知っているのだ。

「やるのね？」

「ええ」

「そう。うまくね」

そして、突然レイモンドが鋭く云った。

「誰が坐っているといったの。お立ち」

「？」

「そうそう。ちゃんと立って。何故、手を背に組まないの？」

諒解したシュザンヌは両手を後ろに握り、うなだれて立った。

「これでいい？ すみません。お赦し下さいまし」

「ホホホ。上出来よ」

レイモンドは笑ったのだった――。

シュバリエ老夫人は日曜日の朝の礼拝を終

え、ノール駅から汽車に乗った。行先はコンピエーヌ。一緒になったオッセン夫人が、一等車のコンパートメントの向い席から話し掛ける。

「ニースへ行ったらっしゃるんですってね」

オッセン夫人は五つ年下の五十九才、家柄自慢の社長夫人だ。

「私はドービルですよ。エトルタの海岸はいつ見ても神秘的ですわ。でも、海峡の水は冷たくって」

彼女もシュバリエ夫人と同じく、行刑審査委員会のメンバー、避暑先から戻って来ての今日の御出席だ。

「おおやけのお仕事してますと、おちおちバカンスも楽しめないんですものねえ」

オッセン夫人は誇らかにこぼすのだった。

「いいお住まい、見付かりました？ ニースに住みたいとおっしゃっておいででしたけど」

問われたシュバリエ夫人の瞳に、一瞬冷たい色が走った。

「ええ、心掛けてますけど、なかなか気に入ったのが見付からなくてねえ」

答えるシュバリエ夫人は舌なめずりしたい気持だった。今も睨に残る若々しい面影、春秋に富む若い命をドーヴァー海峡の空に散華

した愛息エミール。その心根を想う度に、母シュバリエ夫人はいじらしさに涙するのだ。一人息子エミールの全身全霊からの愛、それをすげなくも受け入れようとしなかった女。

その憎い女が今は鉄窓に呻吟しているのだ。今は亡き愛息子エミールの心を弄んだあの女が、仮出獄のお慈悲を哀願して跪まずく姿を見るまでは、たとえ重任運動をしてでも、この地区の行刑審査委員を辞める訳には行かない。

「でも、どうしてこう、罪を犯す女性が絶えないんでしょうかしらねえ」

オッセン夫人は新聞を眺めて嘆息した。

「私、この頃はもう、時々懷疑的になるんです。ごさいますことよ。私達の努力がちっとも酬われていないんじゃないかしらって」

「全くよね、マダム・オッセン。安っぽい感傷は捨てて、私達、もったきびしい態度を取るべきだと思うわ。哀れっぽい声出して、その時だけしおらしくして見せりゃ、許して貰えると考えてるのが多いんですものね。だいたい、刑そのものが甘過ぎるんですよ。あんなのが、と思うようなのが執行猶予になるし……」

「そうですねえ。でも、リリアンヌ夫人の

裁判は立派でしたわ」

オッセン夫人の良人の事業は、リリアンヌの実家の企業と張り合って居る。

「さあねえ」

と、シュバリエ夫人は同意しない。

「ともかく、リリアンヌさんは泥棒女や横領女とは訳が違いますよ。寒くなるまでには何とかして上げなきゃ」

鼻白んだオッセン夫人は話題を変えた。

「ともかく、私ほんとに失望しちゃったんですのよ。どうして地道に働こうとしないんでしょうかしらねえ、ああ云った女達は」

「そうですね。まじめにやろうとさえすれば、女中でも売り子でも掃除婦でも、働き口はいくらでもある結構な御時世なんですものね。社会が悪いんじゃないやしませんよ。殆んどの場合、本人そのものが悪いんですよ」

「ずい分と冷たくおなりなのね。私、まだ、そこまでは割り切れませんけど、でも、もう二、三年もすればそんな気持ちになりそうですわ」

「人間の社会と云うものは昔から不公平なものだし、これからもそうよ。早い話が、戦争に征ったって、生きて還る人も居れば、戦死してしまふ人も……あるんだもの」

会話が途切れ、そして、リリアンヌ裁判に關して対立した意見が蒸し返され、列車はコンピエーヌ駅に着いた――。

九月の第一火曜日のひる近く、シュザンヌはコンピエーヌ駅でアリサと落ち合った。アリサは、アミアン拘置所勤務の婦人法務事務官、制服の似合う四十過ぎのベテランだ。

「いい？ 口紅、よく落とすといてよ」

人影のないトイレの中で、顔を覗き込んで念を押し、差し出したシュザンヌの両手に手錠をかけた。

「お気の毒だわねえ」

「あら、いいのよ。御遠慮は無用ですわ。筋書どおりにやって下さいね」

シュザンヌは笑ってそう云ったものの、駅前に待つ車までの間、全身を熱くして、何度か脚をもつらせた。

「お嬢さん、あんたはアミアンでしたな」
ハンドルを操つりながら運転手が問う。

「あら、私のこと？ お嬢さんての」

「そうですね」

「嬉しいわねえ。そうよ」

「ところで、其の若い女は何をやらかしたんです？」

「これ？ 銀行強盗。勝手知ったる勤め先の

銀行に男達を手引きしたの。感心な女でしょ」

「へーえ？ アミアンのあたりでそんなことがあったかなあ。そりゃ、いつ頃のことですかね」

「いつのことだっていいじゃないのさ」

と、シュザンヌが捨て鉢に割り込む。

「一昨年のバレンタイン祭あたりからの新聞を調べたらいわ。あーあ、あんなことで六年だなんて。裁判所に火をつけてやるから」

「お金の隠し場所を白状しないからよ。六年でも軽過ぎるわ」

「ふん。しっかりロープを握ってるんだよ。」

今度停ったら逃げ出すつもりなんだからね」

シュザンヌは精一杯にふてくされて見せ、

運転手は

「相当なあばずれですな。それで初犯ですかい？」

と頸を振った。

一方、コンピエーヌ婦人刑務所では、女囚「シュザンヌを迎えるべく準備を完了して居た。予定監房たる第四監舎の第四房にピンクトを合わせ、カモフラージュのためにあちこちで女囚の転舎転房が、ここ一週間の間にこなわれて居た。事情を知って居るのは課長以

上と第四監舎のミシェル看守長女史だけで、数日後、保安課全員と第四監舎のエレーヌ補佐に知らせることになっている。同房女囚は慎重に吟味された。

「四五三号、ミシュリーヌ・ダリュウ。この子はこないだ入ったばかりですけど、いい子ですわ」

打ち合わせの席上で、ミシェル女史がそう言ったことだった。

「ミシュリーヌ？ ああ、思い出しましたよ。」

うん、あの女はいい。シュザンヌ、君は知らない筈だね。確か、君が本庁に来る前だったからね」

佳く美しい女は、メグレ警部にも強く印象づけられて居る。

「ええ、知りませんわ」

「じゃ、この子を一番奥にしましょう。あなたは奥から二番目がいいと思いますけど」

「その前がホシですな」

「そう。そして、その次なんですけどね。私はクラリス・シモンがいいんじゃないかと思うんですが」

と、マルティーヌ課長が澄まし返った。

「ああ、三監の三一六号ですな」

警部が候補女囚リストに眼を落とす。

「おや、この女は、元婦人警官じゃないですか。うん、あれか。しかし、そりゃ危険だな。詰まらないことからバレルおそれがある」

「いえ、私はそうは思いませんわ。三一六号だって馬鹿じゃありませんから、自分の素性は隠しますよ。それよりか、万一の場合に少しでも安全だと思いますわ」

「それ、どう言う意味？ マルティーヌ」

と保安課長女史が太い声。

「お分りにならない？ あの連中が役人を憎む気持って大変なものですわ。特に警察官に対する憎悪は恐るべきものよ。それで私は、シュザンヌさんの素性がバレた場合の突発事故を恐れるんですの。その場合、クラリスなら役に立つと思います」

「ふむ。墮落した元警察官が信用できる？ 味方になってくれると思うの？」

保安課長は、現職警察官を前にして無遠慮に言う。

「ええ、あの女はそこまでは悪くありませんわ。私は信用します」

「いやどうも。光栄ですな。退職者を含めた全警察官を代表して感謝します。ア、ハ、ハ。御本人はどうかね？ シュザンヌ」

「結構ですわ。それよりか、私思ふんですけど、もっと詰所から離れた監房の方がいいんじゃないませんか？ 勝手に話ししちゃいけないでしょ？」

「ああ、それはね、先刻もその話が出たように、君の安全を考えてのことなんだ。近い方が連絡も取り易いし」

「それにね、私どもの経験から言って、四房五房あたりが巡視の盲点になり易いんですよ」

「おや、盲点があっちゃ困るじゃないの。ミシェル」

と保安課長がきめつけ、マルチーヌ刑務課長の長い眉がピクリと動く。

いろいろと検討の結果、四三八号が最前席に移され、前から二番目へは、夫の情婦殺しの四四六号が転房すると言つことに決まつた。

「連絡方法の第一から第三までを言つて見給え。一九〇八年五月には、アドリエンヌ・メニエルはどこで何してた？」

シュザンヌは警部に繰返してテストされ、刑務所側では、シュザンヌと入れ替えに、四二五号を四房から本館個室に移す手筈を整えた。四二五号のデブ女囚は、この前の日曜日

の仮釈放審査を受け、シュバリエ夫人も渋々同意の仮釈が決まって居たのだ。一週間余りで本館個室行きとは異例のこと、その日の朝、四二五号は自分の好運の理由を知る筈もなく、額を床にすりつけんばかりに喜んだのだった。

——シュザンヌを乗せた護送車は、コンピエーヌ婦人刑務所の正門前で、ブレーキを軋ませた。

「気をつけてよっ、下手くそ。縛られてる女が乗ってんのよ」

シュザンヌは後部シートで悪態をつき、アリサが肘を擱んだ。

「さあ、着いたわ。お部屋は取つてあるですよ。降りるのっ、おいで」

「痛いっ。痛いったら。拷問する気？」

シュザンヌは大仰に痛がつて見せ

「二、三発張り飛ばしてやんなさいよ」

と、運転手が忌々しげにアリサに言った。

曳かれて潜った鉄門が背後で閉じ、シュザンヌは自分の体が縮まって行く様な心地を感じた。このまま本当に投獄されてしまうのじゃないかしら、と流石の彼女も一抹の不安と恐怖を禁じ得ない。気を取り直した彼女は筋書を胸に辿り、あたりを見回した。三十米ほど

向うで、排水溝を掃除して居る十名ばかりの女囚達。新入りと知つてこちらを盗み見る顔は、写真で見知つた連中ばかりだ。計画に従つて、四房と五房の全員が連れ出されて居るのだ。瞳を凝らすまでもなく、目的の女囚セルマ・ジャンメールはすぐに分つた。二名宛の腰連鎖の仲間に混つて唯一人、腰鎖の前側から二条の鎖を垂らし、各々を両足首の鉄枷に結ばれて居る。態度粗暴の廉で、両脚鎖の懲罰を喰つて居るのだ。脚を動かす度に顔をしかめて口惜しげだ。

「ねえ、ミシュちゃん」

と、クラリスが手を休めずに囁やいた。

「あすここに立つてる新入りの子、私達の所に来るわ。だって、今朝デブちゃんをほおり出したもん」

「そうかしら。あの人、何したのかしらね」

ミシュリーヌもチラと盗み見て囁き返す。

彼女も、時々交話の禁を犯す様になって居た。規則どおりにやって居た日には気が狂つて仕舞う。

「そりゃいいけど、席が変わらないことを祈るわ」

クラリスはそう呟いて腰を更に屈めた。二人の腰を繋ぐ鎖がチャラと鳴る。先週、三監

から移されて来たクラリスはミシュリーヌを見て飛び上って喜び、ミシュリーヌの前のベツドに坐って言ったものだった。

「これで刑務所に来た甲斐があったわ。あんなのそばに居ると何だか楽しくなっちゃうもの。あら、誤解しないで頂戴ね。そんなんじゃないくて、もっと純粹で氣高いのよ」――。

保安課の制服が二人、靴音そろえてやって来て、シュザンヌの前に立った。

「アドリエンヌ・メニエルです。これっ、ちゃんと立ってるんだよ」

アリサは手荒く手錠をはずした。

「まじめに刑に服するのよ。いいかい？」

「何言ってるのよ。もう、お説教はたくさんだわ。六年だって!! ちくしょう」

「お黙りっ」

アリサの平手打ちが頬に鳴った。芝居とは言え、矢張り痛くて口惜しい。

「撲ったわね。ちくしょう、えらそうにしゃがんで!! 罰が当たるわよ。今日あたしが逃げなかった幸運を感謝するがいいわ。もう、用は済んだんだろ? 早く行ったら? でも、あんまり早く家に帰るんじゃないことよ。妹さん夫婦が迷惑しちゃうからね」

アリサは女囚の利腕を矢庭にねじ上げた。

(あら、矢張り大したものね。本気になっても振りほどけないわ。痛いッ。ちっとは手加減してよ。私、言い過ぎたかしら)

シュザンヌは悲鳴をあげて、身もだえして見せた。

「だいぶ、したたか者なのね」

「そうよ。こんな綺麗な顔しててもね」

アリサは答えて更にねじ上げ、手錠を持つ左手でスカートを直した。濃紺のスカートの左腰で、クローム鍍金がキラリと光る。

「お行き」

と突き放し、空いた右手で髪を直す。よろめいたシュザンヌは膝を落とし、保安課婦人看守の足許に両手をついた。

「立つんだよ。このあばずれ!!」

と、金髪が掴まれて引摺り上げられる。振り回しかけた両手が忽ち押えられ、硬い手錠が喰い込んだ。反抗する女囚を取押えるのが彼女達の商売、馴れたものだ。

「何すんのよ。くそッ。こんな物をいきなり……」

「これは又、御挨拶ね。ここじゃ、おいでになったお客様には腕環をつけて差し上げることになってるの。ちよっとサイズを計らせてよね」

思い切り押し締められた手錠の痛さに、シュザンヌは呻き、もうお芝居はよしておとなしくなろうと思った。

「お前、荷物はないのかい？」

「ないわよ。着替えはいらないと聞いてただけど……」

「何よ、その口の利き方は!!」

往復ビンタの雨が両頬に激しく鳴り、シュザンヌは齒を喰い縛って身をのけぞらせた。自由を奪われて撲られ放題に撲られる氣持がどんなものか、彼女は入獄第一歩にして、忽ち骨身にこたえて知らされた。しかし、保安課長の差し金によって、最も当りの柔かな課員が差し向けられて居るのだ。大抵なら、先ず革ロープの鞭の一ダースほどが全身に降る所だ。

芝居を見せたい相手、セルマの視線を遠く感じたシュザンヌは、再びふてくされた態度を取ってビンタを受け終えた。

「分ったかい？」

「分ったわよ、今はね。でも、六年経ったら分らなくなってるよ」

シュザンヌはセルマに聞える様に大声で言い返し、塩辛い唾を呑み込んだ。

「まあ!!」

色をなした一人が革ロープを取り出し、一人が制した。

「あとにしましょう。外部に洩れるとうるさいわ」

シュザンヌは背を突き飛ばされた。

「凄くイキのいいのが現われたわね」

「いい度胸。でも、あとで、痛めつけられるわ。知らないのよね」

掃除労役の女囚達が囁やき合った。

「度胸はいいかも知れないけどさ、あんなの蛮勇よ。無分別もいいとこだわ」

「蛮勇だか無分別だか知らないけど、あたしや気に入っちゃったね。ああ、ちくしょう、この鎖!!」

セルマは嘆息して、脚鎖を膝で蹴り、ヤケ気味に鳴らす。

「何するのッ。おとなしく働きなさいッ」

飛んで来た婦人看守の革ロープが、セルマの背にビシリと鳴った。

シュザンヌも、追われながら両手をガチャつかせた。

「ゆるめてよッ。こんなの、ひどいじゃないの。初めてだわ、こんなきつい嵌め方。こんな掛け方どこで習ったの? 警察学校かい」
啖呵を切ったシュザンヌは、忽ち失敗った

と思った。

「ソルボンヌ大学よ。ウダウダ言わずに、打ちうなだれて歩いたらどう?」

「またも突き飛ばされて膝が落ち、ハイヒールの片方が飛んだ。アリサが思わず拾い上げる。」

「減らず口を叩けない様にして上げるわ」

アリサの手から引ったくったハイヒールの踵を、矢庭にシュザンヌの口中に押し込む。

「しっかりくわえるのよッ」

「い、いや。いやよッ。ちくしょう」

シュザンヌは本気になって抗らった。

「おや、命令に従わない囚人がどんな目に逢うか、幼稚園で教わっただろう。くわえろと言ってるのよッ」

「命令には絶対服従よ。その方が身のためだわ」

とアリサが軽く尻を叩き、シュザンヌは涙をこぼしつつ踵をくわえた。もとより覚悟はして居たが、苦痛と屈辱を現実に味わう破目になると、職務遂行の意志が崩れかける気持だった。中止のサインを口にすれば、アリサの手によって直ちに自由を得るであろう。しかし、シュザンヌは涙で頬を濡らしつつも、遂に誘惑に勝ったのだった。

「ねえ、課長。今、身柄受領した女なんですけど、あとでショッ引いて来てヤキ入れてやりますわ」

保安課の二人は、憤慨の面持ちで言った。

事後承諾でもいいのだが、と言った軽い気持ちだ。しかし、保安課長は巧みに却下した。

「へーえ。無鉄砲なのが来たものね。それもいいけどさ、これからちよっと皆で打ち合わせしたいのよ。来週あたり、例のキャプシーヌ・エイメの御入来ってことになりそうなの」

「ずい分と早いですこと」

「裁判を急ぐわけがあるのよね。ま、そんなこた私達には関係ないわ。私達は普通どおりやればいいって訳だけど、あれだけマスコミが騒いだし、これからもうるさいことだろうからさ、ちっと心構えしとかなくちゃね。すぐ集まってよ、食堂の特別室。ヤキ入れはマルチーヌに任せといたら」

シュザンヌが、初めての身検に全身を熱くして涙をこぼし、長い説教に脚を棒にし、第四監房の奥から二番目のベッドにぐったりと腰を下ろした頃、御馳走に舌鼓打った二人の保安課婦人看守は、既にシュザンヌのことなどは忘れて居た。

ミシェル看守長女史が鉄格子の前に現われて言った。日直デスクは空らしい。

「どう、気分は？」

四一〇号のシュザンヌは、膝を撫でて答えた。

「ずい分とお説教がお上手なのね。胸にこたえましたわ」

「ホ、ホ、ホ。馴れ切ってるものね。もう、出たくなかったんじゃないの？」

「正直言って心細くなったわ。入れられたって言うより、閉め出されたって言う心境よ。

でも、一生懸命やって見ますわ」

「しっかりね」

「ただ、あの身検だけは泣けて来ちゃう。毎日やるんでしょ？」

「そうよ。分際をはっきりさせるには一番いい方法ね。昔からやって来たことだし、今後先ずやめることはないね。第一、風邪をひかなくなるよ。覚悟の前だったんでしょ？あ、日直が戻ったわ」

ミシェルは笑って去った。

クラリスは、自分の予想が当って得意気だったが、デブ女囚のあとへ位置替えさせられて、おかしいほどにショッげた。

「あーあ、折角佳人のそばに侍べれると思っ

たのに。でも、思うとおりに行かないのが世の習い、まして、ここは牢屋なんだもの。

ま、仕方ないわ。あんたなら譲ったげる。何となくいい線行ってるものね、あんたは」

点呼前の一刻、アドリエンヌことシュザンヌを振り返って眺め、クラリスが言った。

「そうお。何だか分らないけど、ともかくお礼言っとくわ。ありがと」

シュザンヌは、クラリスとミシュリーヌを半々に眺めてそう言った。

「でもさ、あたしゃ不思議だよ」
入獄早々のシュザンヌの勇気を讃えた末、

セルマが首をひねった。

「なんのお仕置もないなんて、狐につままれみたい。あたしゃ、あんたが革鞭の何発目でネを上げるかと楽しみにしてたのにさ。あ、又ズキズキして来やがった。足首の骨がスリ減った様だよ」

セルマは足首を撫でて呻いた。

「あんなものをつけられて痛いでしょ。どうしたの？」

「ほんと、ヤセ我慢張っては居るものの、泣きたい位よ。いえね、ここへ引越す三、四日前に五監でさ、態度が悪いから懲らしめてやるって言われたの。ここへ移っても申し送り

だってヌカしやがるのよ。土下座してお慈悲を乞えばいいってことは分ってるわ。でもさ、そんなことは意地にもしないつもりよ。ところで、どんな手品使ったの？ アドリエンヌ。やつかんでる訳じゃないのよ。教えておくれよ」

「フフフ。今日ね、あたしが独りでここに居ると、看守長の奴が顔を見せたのよ」

「それで、靴の底を舐めたのかい？」

「馬鹿。そんなことするもんか。二人で話し合ったのよ。今はこれだけしか言えないわ。

でも、あたしが何やったか知ってるでしょ？銀行強盗やったのよ。フフフ」

「そうお。薄々分るわ。でも、よく信用したわねえ。凄腕ね。あんたは楽をするよ」

五三〇号のセルマは考え考え言い、シュザンヌは其の背を眺めてほくそ笑んだ。

「だいぶ楽になったわね。汗が出ないもの」

セルマが吐息をついて、ベッドに横たわって呟いた。

「でもさ、いい時候はほんの少しよね。すぐに寒い冬が来るわ」

「ほんとだね。お前さんは何度目の冬？」

「三度目。最初の冬は死ぬかと思ったわ」
答えた四三八号は二十六才の若さ、花の盛

りを七年の刑の女だ。

「何度も言う様だけど、ほんと不公平だよ、ルイズ。あたしは殺人未遂で七年、殺人のお前さんが四年半なんだもの、ちくしょう」

こぼす四三八号に、四四六号の赤毛ルイズが答える。

「愚痴はみっともないよ。事情と動機が違うんだから仕方ないよね、お気の毒」

四四六号は夫の情婦を殺した人妻、発作的な兇行と認められた軽い刑、もう二年を越すから、そろそろ仮釈放嘆願資格を貰える。

どこかの房から誰かが引き摺り出され、哀願の声が聞えた。

「不心得者がやられてるわ。イザベルの時には気をつけなきゃ。ベルトらしいわね。桑原々々。考えただけで切なくなっちゃう」

「イザベルと来た日にゃ、夜よなかでもお構いなし、本銃のあとでも引き摺り出しちゃうんだもの」

予備知識はあったものの、イザベルの意地悪さは、シュザンヌも先刻味わったばかりだ。点呼のセリフを何度もやり直しさせられ、あげくの果、ひれ伏した頭を鉄格子の外から足蹴にされ、胸煮える思いを噛みしめたシュザンヌだった。

「まあ、もうスヤスヤと眠ってるわ、このひと。でも、綺麗なひとねえ」

シュザンヌは隣りのミシュリーヌを眺めて呟やき、聞きつけたクラリスが、向うの方から覗き込む。

「ね、何と安らげき寝顔かしら、心打たれて涙がこぼれないこと？」

「そうね。邪心がないのよね、結局は」

「贖罪の一日々々が嬉しくては仕方ないって言う境地なのね。イザベルだって可愛がってるようよ」

「あんたも早くそう言う境地になることね」

「ハイ、ハイ。あの顔を見たら少しばかり清められたわ」

まんなかに挟まったセルマがうるさげに言った。

「あんたたち、早いとおネンネおしよ」

翌朝、シュザンヌは早速一芝居打った。労役衣に着替えるやセルマは腰鎖を巻かれ、二条の脚鎖の先端の鉄枷を、自分の両足首に自分で嵌める。溜息を洩らして立ち上がったセルマの前にイザベルが立ち、靴先でこじて枷を調べ、セルマは呻いた。シュザンヌは勇を鼓して早速かみつく。

「ひどいことをなさるんですね。足首のむ

ごたらしいこと。いい加減に赦してやったら？聞けば、もう一週間になるそうね」

まわりの女囚達は息を呑み、イザベルも一瞬唖然としたが、忽ち怒心頭に発し、凄まじい一撃がシュザンヌの頬に鳴った。

「どうしたの？」

とすかさずミシェル女史が現われる。

「へえ、お節介な女が居るものね。類い稀なる鉄火女が混っちゃったねえ。イザベル、折角そう言うんだから、肩代りさせておやり」

セルマから除かれた懲罰戒具は、イザベルの手で荒々しくシュザンヌに装着された。

「はだしにおなりッ。当分、履き物なしよ。」

夜だって此のお飾りはつけるからねッ」

ミシェル看守長は困った表情を浮べたが、黙って居た。屋外労役は昨日やったばかりで今日からは坐業の筈、歩き回らない限り大したことはなからうとタカをくくって居たシュザンヌだったが、鉄枷をガッチリと嵌められて見て、忽ち後悔した。じっと立って居るだけで、鉄枷の重みは既に足首に苦痛なのだ。

「済まないわね。借が出来ちゃったわ」

セルマがそう囁やいてくれなかったら、其の日の夕方、房内衣に着替えて再び鉄枷を受

ける時、シュザン又はネを上げて居たことだろう。

「刑務所、刑務所って怖がるけど、全然大したことないようよ。きびしい寄宿舎と同じじゃない？ あたし、これを嵌められて、初めて、刑務所に居るんだって思う位よ」

シュザン又は威勢のいいことを言ってみたものの、入獄二日にして、刑のきびしさに舌巻いて居た。錠と鍵に自由を奪われ、絶えまもない監視を受け、恐ろしい懲罰に脅やかされ、支配者の顔色を覗いつつ、打ちうなだれて過ぐすみじめさ。そして又、課される強制労役の苦しさ切なさ。人間らしい楽しみや慰さめは一かけらもなく、来る日も来る日も反省とやらを押しつけられ、番号で呼ばれての奴隷働きた。シュザン又はには、鉄窓に呻吟する灰色の受刑生活の日々が、現実感を以って理解できた。明日も又、獣同然の扱いを受けて暮らすことだろう。しかし、もはやシュザン又はには、ここから逃がれたいと言う気持はなくなつて居た。出ようとさえ思えばいつでも出れるせいだろう。

(でも、此の人達はそうじゃないんだものねえ。決められた刑期は嫌でも勤めなきゃならないんだもの。罪を犯したからと言え、ほん

とに可哀想)

ところで、ミシュリー又はは思い患らつて居た。いつも口数少い彼女だが、今夜は一言も口を利かない。

「ねえ、ミシュちゃんたら。ちょっとでいいから声を聞かせてよ」

とクラリスが振り向いた。

「何を又、物思いに沈んでいるの？ なにか可愛らしい反則をやらかしたんで、申告しよるか、すまいかと云うのかしら。それとも体工合が悪いの？ 心配させないでよ。もし懺悔するんだったら、日曜日まで待ったら？」

ミシュリー又はは微笑んでかぶりを振った。

彼女は迷つて居るのだ。ミシュリー又はは、アドリエンヌと称する女を見た途端、シュザンヌだと思つたのだ。今年の早春、未決女囚ミシュリー又はが屈辱の悲しい涙を流した北第一署での午後、其の頬をやさしく拭ってくれたあの婦人警官そのひとに違いないと思つたのだ。けれども、あのシュザンヌがこんな所に来る筈がないと思うし、黙って通そうかとも昨夜は考えたミシュリー又はだった。

突如、四三八号のブルネットが最前席で喚いて飛び上った。

「そうだったわ！ やつと思ひ出したわ。あ

んたッ」

と振り向いて、クラリスをキツと指さす。

「あんたは女デカだったでしょ！ 白ばくれたって駄目よッ。六年前の、ニースを忘れたの？ ほら、「フェデリコ」だよッ。あたしが見逃しておくれって頼んでるのに、腕ねじ上げて手錠かけたる。忘れたとは云わせないよ」

クラリスは眼をパチクリさせた。そのかみの光景がミシュリー又はの胸にも甦つて来る。あの時のイヴニングドレス姿の婦人警官の一人が此のクラリスだったのか。クラリスは溜息を洩らした。

「とうとう、旧悪露見ね。ハッキリは覚えてないけど、マルセイユからリビエラあたりでウロチョロ走り回ってたものねえ」

「あら、お前さんはポリだったのかい。へーえ、人は見かけによらないもんだよねえ」と、セルマが憎悪の色を浮べた。

「悪いことをしたと思つたのよ。だから、罪ほろぼしにホテル荒しを初めたの。皆さん、許して頂戴」

あつさりと出られて、皆は毒気を抜かれ、独りシュザンヌだけは苦笑いをこらえた。

「そう云われちゃ、仕方ないわね。でも、云

うだけ云わせて貰うわ」

四三八号は鼻を吸った。

「あたしね、あんたにパクられた時は、起訴猶予で済んだの。成年になりたてだったんでね。でもさ、それからだわ、あたしがグレたのは。フェデリコに勤めたのは、ほんのお金欲しさのアルバイトだったのよ。豚箱にほうり込まれさえしなけりゃ、まっとうな人と結婚できたのよう」

「ほんとかねえ」

とセルマが鼻で笑う。

「ほんとだってば。それが駄目になっちゃって転落しちゃったのよ。あんたのせいよ、クラリス」

「屁理屈並べたもんだねえ。それにさ、女給やダンサーになるのが、どうして転落なのさ。云うこた、それでおしまいかい？」

ルイズが呆きれ顔できめつけた。

「ええ。でも、今更、何ともなりやしないわね。許したげる、クラリス」

「当り前だよ」

とセルマが決着をつけ、クラリスが

「ありがと」

と礼を云った。

此のやりとりの最中、ミシュリーヌは意を

決してシュザンヌに囁やいた。クラリスの素性がバレたのが、ミシュリーヌの心理に響いたのだ。

「ね、あなた、シュザンヌさんじゃありません？」

シュザンヌはビクリと息を呑んだ。こっちの素性が露見するのは、クラリスの場合とは訳が違う。

「やっぱり、そうでしたのね。でも、どうしてこんな所に……。あ、私ね、ホラ、今年の初めに北第一署でお情けをかけて頂きましたの」

「何を云ってるのか、サッパリ分らないわ。

あんた、何か人違いしてるのよ。あたしはアドリエンヌ・メニエルよ」

「嘘ばっかし！」

ミシュリーヌは無邪気に微笑む。

「私、あの時は後ろ手に縛られて珠数繋ぎにされてましたわ。あなたはハンカチで顔を拭いて下すったじゃありません？ほんとに嬉しくて。一度お逢いしてお礼申し上げたいと思ってましたのよ」

綺麗な眸に、感謝と自信をこめて見詰められ、シュザンヌはうろたえた。飛んだ手落ちだ。

「でも、どうして名前知ってるの？」

訊ねたシュザンヌは、相手の純真さに敗北を認めた。

「あら、お召しになってた外套の裏が見えましたのよ。ほんとに、ありがとうございます」

「ね、後生だから、そのことは黙っててね。訳はいつか話すわ。お願い。私はアドリエンヌなのよ。分って頂戴。もう、黙って！」

相手の真心をもて余したシュザンヌは必死に頼み込み、ミシュリーヌは眼をパチパチさせながら、コックリとうなずいた。ミシュリーヌには心中期する所があったのだ。

(明日、イザベルさんに悪いけど衝突いて、シュザンヌさんがやったようにして脚鎖を肩代りして上げるのよ。痛いのは分ってるわ。でも、やるわ)

しかし、ミシュリーヌの健気な計画も水泡に帰した。第一、翌日はイザベルが非番で居なかったのだ。そうでなくても、朝食後ミシュリーヌは本館へ曳かれ、そのまま四監へは戻って来なかったからだ。

×

×

×

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

顔面に女の尻が乗る

大手札七枚一組 略号(あう) 一五〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 五〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 五〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 五〇〇円

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 略号(まひ) 五〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 五〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 五〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 五〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 五〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 六〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 六〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 五〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 六〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 六〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 六〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 五〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 七〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 六〇〇円

絹川文代

絹川文代 略号(そへ) 六〇〇円

SMとエロチシズム

黒井 珍平



美とは何か、それはつかまらない。つかま
えられたら芸術は消失する。美はなくなり科
学だけが残る。SM美とは何か、判らない。
判らぬ所が好きだ。ずいぶんと考えた。心理
学の本も読んだ。しかし判らない。

昨日四月二十八日、古本屋さんで奇ク百五
十九号を六百円で買った。(昔もっていたが
妻が破りすてた) 奇クの性格について「エ
ロカ文献かと言う衣軍一氏の論文をみても
(36年)この(41年)二、三月にぎわっている、
SMはエロと関係ない、いやあると言う論争

をみても今昔に变りのないことにおどろく。

原則的に私もSMとエロティシズムと全く
きりはなすことに反対はしない。然しこれが
事実であるとして、私が五、六才の頃から
げしく内包している縄と後手へのコーフン(決
して性的ではない)は何なのか。誰か説明
していただけないでしょうか。この愛するも
のの相手は祖母や、武者や、荒法師が、やが
て少年になり、同性になり、いわゆる性にめ
ざめて、対象は自分より一才でも年下の(妻
をふくめて)女性に転化して来たのであつ

て、エロティシズムでは説明がつかない。

一方現実的にSMがエロと無縁という印象
を対外的に与えたことが、奇クをここまで辛
うじて支えてきているのは事実だから仕方が
ない。奇クがエロティシズムを全面的に支持
し始めたら、彼ら(?)「いつも私は彼ら(?)
というが、戦前の様に特高や、内務省
や、警察とかはつきり姿を現わさないから言
のだが、しかしどこかにいるのだ」は待って
ましたと、悪書追放やエロ発禁にもって行く
だろうし、SMに無関係なエロ好みにまで割
込んでくる。

キャンディやファニーヒルのような大出版
社の出した、どう考えてもエロ味のないつま
らぬものが発禁にされたのだ。奇クなど簡単
にできると思う。何故ならSM罪と言うのは
今の日本にはなく、ワイセツ罪のように罰し
ようがないのだ。サド裁判の記録をみても、
どちらの側も、エロのみの有無を云々してS
Mについては、弁護側さえも口をつぐんでい
る。

サド裁判(現代思潮社)上下を読むと、色
々参考になるけれど、遠藤周作先生のサドの
弁護ぶりは、サドも(この我等の大先輩は奇

クの先生方のように実演して楽しむこともほとんどできず、現実には一生を牢獄にすごしたわけで、お気の毒の一言につきる。サドの正直な訳者も、正当な読者も、凡てノーマルであり、この世にノーマル以外存在しないとあった論法で、サドを弁護していらっしやる。これには一寸首をかしげざるを得ないが。そんなわけで、読者も少しは我慢した方が好い。廃刊になるよりは好い筈だ。奇クがあまりにエロティシズムに近づくのはキケンだ。

また事実159号のように、グラビア全盛の雑誌を（私は人一人の一生に比肩できると思うが）壮年期にたとえるなら、今はロマンスグレーの観がある。グラビアこそなくとも内容的にははるかにすぐれているし、（妻も写真がみつければ、破くし、敵視するが活字には今はまだうるさくない）第一今の奇クの内容「花と蛇」「悦子恋縄譚」「SMカメラハン」いや「読者通信」までふくめて、これをグラビア化（写真化）したら、どれくらいことで、ひやひやするほどだ。

たまたま手元に159号しかないから言うが、奇クサロンの「作者の姓名についての私見」佐渡健児の文中（妻や子は勿論のこと。両親や兄弟姉妹にかくれて頁をくり、眺め楽しみ

―本書の隠し場所のセンタクまで読者に問う―入手することにスリルがあり、悪くいえば入手することにも罪悪感が伴い、隠し場所に苦心する結果となる）

それは今も一部の（私もふくめて）人には昔も今も同じだろうが、一般的にいつて、例えば204号（昨年7月号）の新宮明夫氏の20頁、夫婦プレイフォト「夫婦プレイを望まれても奥様の協力をえられない方々も多いと思います」が、それは夫たる者の啓蒙不足かと考えます」とあり、私など、妻をしばらくても、あべこべに、写真を見たり、奇クをよむことすら妻に禁じられている人間は、気の弱さのなせる罪、ひたすら身のつたなさをなげくのみ、それにしても、変ったものです。

私はコミュニケーションは判らないが、これも中ソ論争が始まっている。キリスト教、仏教は無数に分裂している。SMをSM教とすれば、歴史と共に、対立や論争はどうしてもでてくる。しかし永続きさせたいなら一致団結あるのみ。

少くともグラビアがなくても私は好い。はつきりいつて一時、私が奇クをはなれたのは、処女的な美しさが、マニア化し、だんだんプロ化したからだ。プロ的なしほり方、モ

デルさんの表情は、つまらない、さりげなくひかえ目に二、三行、かたすすみにかけられた、留守居の人妻が、ありあわせのひもで、一寸後手にしほられた強盗記事の新聞なんて方が、はるかに私を刺戟する。それは空想というもののたのしさだ。空想は無限にぜいたくだ。SMはエロではないという人は食物はカロリーさえあれば好いと言う人だ。しかし、目の前につみ上げられた食物、それがいくらでも食べられる状態は、むしろ食欲をなくす。飽満はSM欲さえなくす。

グラビアがなくなったことはさびしいが、かえって空想のたのしさがふえ、私もまた奇クにかえりたくなった。我々はSMの（もっとも私はMは全然判らない）たのしさにひかれる。しかし、あまりにプロ化した、グラビア全盛の写真群は、そこに限定された顔があり、プロ化された表情があり、私は食欲をなくした。

後手にされた手、たった一すじのなわ。その方が複雑怪奇なしほり方より、すつきりすることもあることは、諸兄がよく御存知であろうと思う。もっとも私の妻は、手を後へ回すことすらいとう。ああ悲劇。

のおと・あと・らんだむ (五)

千草 忠 夫



十 お答え

○橘行司子さま

毎号『KK文芸時評』で御高評をいただき感謝していると共に、大いに力づけられてお

ります。

五月号に「おそかりし——」と書かれるまでもなく、私の小論に対し何ら反応が誌上に現れず、編集方針もこのような論文は極力省く方向にむかっている様子なので、第五回で一応「のおと・あと・らんだむ」を打ち切るつもりでございました。私自身の方も、第五回

まで一応言いたいだけの事は言ってしまったっており、後は皆様の反論を待つだけだったわけです。

前五回ですでおわかりになったことと思いますが、私はこれまで、小説とか告白等に対する論評はできる限り避けて来たつもりであります。(これは、ペルソナを異にする者がお互を批判するの愚を避ける為当然の事と考えております)従って、編集方針が論評を載せないという方向に向かった現在、私のこの小論も当然相手を失い、その発表の場を縮小されるわけで、いさぎよく前回で終了とすべきだったのですが、六月号あたりから、大分反応もあらわれて参りましたので、今しばらく続ける決心をいたしました。しかし、おそらく今後は、これまでのように、正面切って相手を切り伏せようとするのではなく、もっとおだやかな感想といったものになると思います。

若し編集部の方の御好意を得て、続けて掲載していただければ、橘さまはじめ皆様方の御期待にそうべく勉強したいと考えております。

前稿四回を書いて、最も強く感じた事は、私の小論が他の方の論文その他をサカナにし

ている為、独立性が薄く、今度は逆に私の論文に反応がないと、全くその存在すら消失してしまうような心細さを覚えたことでした。

「評論家は小説家に寄生してメシを食っている」とよく言われることが、実感として受け取れました。(もっとも、私など評論家の端くれにも入りませんが——) SMの世界が論評などナンセンスなのではあるまいか、と考えた事すらあります。誰が何と言おうと、我が道を行く、というのが、この道のあり方ですからね。

そこで窮余の一策として、各自の好み(ペルソナ)の奥にひそむものに眼を移し、そこからひるがえって、普遍的なSM的人間像とでもいったものを追求する糸口を見つけ出そうと思ったのですが、結局それも無駄に終りておられるのでしょうか。それでいいのであれば、ことさらに何やかやとあげつらう必要はないのかも知れません。評論を書くなどという作業は、よっぽどのヒマ人か、さもないければ相手(プレイの)がいなくて欲求不満にイライラしている人間のすることなのかも知れませんね。

でも、バチ当りな私は書かざるを得ないの

です。

例えば、最近好評をばくした、辻村隆氏の「可愛い小悪魔の群れ」がありますね。あの中で最も印象に残ったのは、マスマが言ったひとこと、「おじさんうれしい？」だったと言え、お笑いになるでしょうか？

私には、あの一言が△正常な▽世界が△異常な▽世界に突きつけた挑戦状のように思えるのです。私の考え過ぎでしょうか？ たたえ私だけの思い過ぎであつたにしても、この挑戦状を突き返すことができるまで、何かと繰り言を言い続けてゆくでしょう。

エロ本が△正常な▽人に対して果しているのと同じ役割を、KKが△異常な▽人に対して果している——というだけでは、悲しいことですから——

今後とも御鞭撻を切にお願い致します。

○福田久文さま

再度にわたる過分なおほめの言葉や、御忠告、有難く読ませていただきました。

おおせのような「数学の論文」とまでは、とてもゆきませんが、私自身の性格として、モヤモヤとしたものを払拭しなければ、とてもあのような論評は書けないのです。いや、

自分自身の内部にあるモヤモヤを強いて払拭したいがために、あのような肩肘張った論文を書いたと言った方が正確かも知れません。

SやMばかりではなく一般の人間現象を、共感によって主体的にとらえようとするのではなく、理論によって客体的、思弁的にとらえようとする態度——これが、いわば私の支えになっていきます。そして、このような態度を持さない限り、この種の論評は不可能ないし無意味ではないかとさえ考えています。私の理論は、いわば私の「外」にあります。だからこそ、そこに他の性向を持つ人とのより広い触れあいが可能ではないか、と思うのですが——

「文芸」五月号の対談「われわれはなぜ書くか」で、大江健三郎氏が、次のように言っています。

「僕はエッセイを書くときアクティブというか肯定的で、小説を書くときネガティブになる。否定的になってしまうというのを、いろいろな方から言われるわけですが、じゃあ自分の生活、小説家としての生活の上で、どちらの方が僕にピッタリしているかという、やはり楽天的に、積極的なことを考えることはあまり僕の現実感覚とはピッタリしない。そ

れでは僕のエッセイが欺瞞かという、僕は
そう思いません。……」

私の理論が私の「外」にあると言うのも、
若し私が小説を発表するとしたならば、大江
氏の言われている関係と同じような関係にな
るだろう、というところから言ったわけで、
戦略的な意図も多分に含まれていたと御承知
いただければ有難く存じます。(かといって
あれが単なるハッタリだというのは決して
ありません。ただ筆が挑戦的になり過ぎたと
いうことです)

第四回までで、私の手持ち札は、全部さら
け出したつもりであります。お忙しいお体の
様子ですが、若しまとまった御批判がいただ
ければ、これに過ぎるしあわせは、ございま
せん。

○麒麟児久さま

熱狂的なおほめをいただいて、ただただ恐
縮のほかありません。

しかし——と、ここで居住いを正さなくて
はならないのはまことに残念ですが、すこし
く言わしていただきたいのです。

奇クは同人誌ではないとあなたはおっしゃ
いましたが、私の考えでは、営業誌というよ

り同人誌に近い性格を持ったもののように思
われるのです。発表可能と思われる原稿(投
稿)のほとんどが掲載されるということ。い
わゆる職業作家の作品が皆無であること、稿
料がほとんど全く支払われないこと、等によ
って、このことは立証されるでしょう。編集
者は、ただページ数に見合うように原稿を整
理すればそれでいいのではないかと、私は推
測します。若しページ数をオーバーする位の
投稿があれば、それは内容の比重に従って後
にまわされるでしょうし、時にはボツになる
事もあるでしょう。が、なんらかの意義を持
った投稿であるならば、必ずいつかは発表さ
れる事は確実だと思います。(蛇足ながら付
言しますが、私は編集の方と一面識もありま
せんし、地方に住んでいる者なのです)

そこで、我々投稿者が信じていいことは、
(また信じなければならぬことは)編集者
が常に我々の味方だということです。商売気
なしに、とまでは申しません(誰が商売気な
しにこんな事業をやるのですか。そこで奇
クを同人誌と見た場合の限界でもあります)
が少なくとも我々マニヤの意向をくみ取るの
にやぶさかではない人たちが編集に当たって
いると断定できると思います。

もしそうなら、あなたのおきらいになる作
品が長々と奇クに連載されているのは、その
作品を否定するものの恥ではないでしょうか
? 思想の相違はともあれ、編集者をして優
先せしめるような作品を投稿しえないことは
ひとつの敗北ではないでしょうか?

少々ずるかったかもしれませんが、奇クに
載せられている小説(フィクション)につい
て、私が論評をできるだけひかえた理由の一
端はそこにあるのです。

前にも一度触れましたように、奇クに投稿
するほどの人は(たとえそれが読者通信であ
れ)一国一城の主です。またSMの世界にお
いてはそれは当然のことだと言えましょう。
私が「のおと・あと・らんだむ」という貧し
い小論を書き始めたのは、それら群雄割拠の
状態に、統一の糸口でも与えられれば——と
いう希望から出たものなのです。それが行な
われなかったならば、奇クにおける論壇など
は、おそらく、無意味だろうと思ったからで
す。

「韜晦」という言葉を御存知と思いますが、
あなたの非難される「心傷たむ遍歴」や「ア
リアドネ」が韜晦の作品でないと断定できる
でしょうか? この同人誌的な奇クにおいて

さえ、なおかつ輶晦の姿勢をとらざるを得ない(多分、無意識に)人がいるということをおあなたは御想像になったことがありませんか? これは私の単なる推測にすぎませんが、『花と蛇』が露悪的であると等しく、西条氏や黒沢氏の作品は輶晦的であるように思えるのです。

ただ自分の好悪だけで作品の善悪を判断するのを止めようではありませんか。その意味で、私はいろいろなかたの所信をお聞きしたいと思っています。

○田代俊夫さま

心からの共感のお言葉をいただいて心強く思っております。「SMは阿片である」というお言葉、まことにその通りです。そして奇クに集う人たちはみな、この禁じられた快楽に魅せられた異端者なのです。

異端者が世の片隅に肩を寄せ集めて、世間の眼をはばかりながら、わずかに快楽の断片をむさぼっているという現状を、なんらかの意味で打開したいという気持ちから、あのよな論評を試みました。それには、共通の地盤と、自分を肯定する視点が必要と思うのです。もっと広い世界でものが言えるよう、今

後も、お互に努力してゆこうではありませんか。

○夜乃探郎さま

先ず、あなたに対するお礼の言葉を最後にまわしたことに對して、お詫びを申し上げねばなりません。なぜなら、私の「のおと・あと・らんだむ」は、ほとんどあなたの評論をサカナにして展開されたようなもので、若し私の評論にいくばくかの価値があるならば、その一半は、あなたに帰せらるべきものでしょうから。しかし、あなたに対する私の警戒心が、あなたに対するお礼の言葉を最後にまでのばさせてしまいました。

「朝顔的耽美論」を読ませていただき、これまでにないマジメな論調に打たれましたが、私自身としてはまだ完全に警戒心を解くことができないのです。これはおそらく、論理によってしか自己を表明しえない小心な私の思い過しでありましょうが。

世にある雑誌の中で最もマジメ人間の寄り集りであると思われる奇クに、どうして、ローカイと評されて「痛いところをつかれた」と思ったり、「文学的な仲間と駄ジャレ連発している気分」で筆を取ったりなさるのか、

私にはほとんど理解できません。実を申し上げますと、奇クにおいて、なぜあなたがローカイであらねばならないのか、なぜ駄ジャレを弄ばさねばならないのか、そのことが私には一番興味があります。

しかし、その疑問に対するお答えは、また後ほどなんらかの機会にお聞きすることにして、「朝顔的耽美論」に関して、二三の私見を述べさせていただきます。

○エロチシズムに関しては、「のおと・あと・らんだむ」の第四回に書きましたので、私の考えは御理解になれたと思いますので、ここでは論じません。おそらくあなたと私の考えには大きな相違はないものと考えます。

○美について、先だって私の述べた文は、すこし美術ということにとらわれ過ぎていたと反省しています。あなたの申される通りの美もたしかに存在するでしょう。しかし、私はそれを△美▽という言葉では表現したくないのです。なぜなら、△美▽という言葉にはとかく、自己を美化する甘えた気分がしのび込みやすいからです。そのような甘えを否定したところで、SMの姿を見つめて見たいと思っっているのです。その姿勢の違いをのぞけば、私とあなたとは、これまた、ほとんど意

見の相違はないのではないかと思います。

最後に、あなたの△美▽が、小説の中に結晶して発表される日を、心より期待しながらこのお答えの結びと致します。

十一 SM小説と小

説の中のSM

梶山氏の小説がSMシーンを小説中に織り込んで好評をばくしていることは、つとに奇ク誌上に紹介されているが、氏の小説を読んだ人は、その評判の割にその描写の密度が薄いことに、半ばいらだたく、半ば裏切られたように感ずるのではなからうか？ これは梶山氏の小説に限らず、普通の小説家の小説に現れるSMシーンに共通したことのようになってしまう。(そうと知りつつも、なおかつ自分の情感を少しでもくすぐる片言隻語や挿画を求めて本屋の店頭を荒らすのは、哀しいマニヤの性であるが――)

問題はその作家がマニヤであるかどうか、である。マニヤの読者は敏感にそれを嗅ぎ分けることができる。たとえそこにどれだけドギつい描写があっても、それがマニヤの筆になるものかどうか、ということは、マニヤの

鋭い嗅覚は本能的に嗅ぎ分けてしまう。小説のツマとしてSMをさしはさむことはできても、SM小説がなかなか現れないのは、マニヤのこの鋭い嗅覚による選別が峻厳だからに外ならない。かつて吉行淳之介氏の「砂の上の植物群」が世間をにぎわした頃、奇ク誌上で、どなたかが「あれはニセものだ」と書いておられたが、これなんか良い例であると思う。あの小説において「縛り」は本質的な意味を持っておらず、主人公もまたマニヤではないのだから、ニセものである事は当然でそれによって作品自体の評価が定まるようなものではないのだが、それにもかかわらず、「ニセものだ」と断定される所が、マニヤのマニヤたるゆえんというべきであろう。

おそらく、マニヤであるか否かを問わず、公認の作家は谷崎潤一郎、江戸川乱歩の両氏であろうが、それに近いものとしては、純文学畑では、佐藤春夫、川端康成、三島由紀夫の諸氏がある。こう並べて見ると、いずれも世に悪魔派とか耽美派とか称される作家諸氏であることがわかる。SMと耽美との関係については、前に△SMにおける美とは何か▽で述べたので繰返さないが、一言だけ付け加えれば、悪魔とか美とかいう観念は、倫理を

超絶した所に存在するというのである。そこにSMと接触する地点がある。耽美がともすれば耽奇に堕しやすいのもそこにある。三島氏については最近大評判になった「憂国」を見てこんなことを言うのだろう、とカンぐる向きもあるかも知れない(ついでながら、氏の短篇小説「憂国」が雑誌に発表された当時、奇クに「これこそSM小説の師表と仰ぐべき小説である」と書いたが、全く反響がなかった)が、氏の処女作「仮面の告白」がすでに耽美的な小説だった。「愛の渇き」「禁色」「金閣寺」みな然りである。

『憂国』はそれらの集大成といってよい。氏自身、「私を知りたい人には『憂国』一篇を読むことをすすめる」と言っている。

大衆作家には、先ず山田風太郎氏がある。氏の作風は推理作家時代から耽美的だったが時代小説において花開いた感が深い。氏が耽美派であることは、柴田錬三郎氏の小説とくらべれば、一目瞭然であろう。

今は全く筆を断ってしまったが、山田氏とほとんど同時に推理小説界に現れた、香山滋氏も、耽美派の中に加えて然るべき作風の人である。「海鰻莊奇譚」「ソロモンの桃」などは私の愛読してやまない作品である。ど

こかの出版社で、氏の全集を企画しないものか、と常に思っている。

同じく忘れ去られようとしている作家に、橘外男氏がある。外国を舞台にした、氏の伝奇(?)小説は全く他の追従をゆるさないものがあつた。やや乱歩の亜流の感はあつたがあのエキゾチズムは独特で、氏の全集も大いに期待したいものの一つである。

時代小説の作家には、いろいろ多いことだろうと思うが、私はあまり読んでないのでここでは省略させていただく。

さて、以上あげた作家の方々は、私が読んで、どこかにピンとくるものがあつた人たちである。そのピンとくるものも、ただ一箇所のみでなく、全篇にみまざるムードが大きくモノを言っている。たんなる物まねの描写ではなしに、マニヤにピンとくるムードを、たとえ直接的な描写がなくとも、全篇にただよわせている作家が、即ちSM作家の類に入れられて然るべき作家なのではないかと思う。この意味から言えば梶山季之氏のSMは、やはり刺身のツマ程度の濃度しか持っていない。

いいない。私の好みはSの方だから、この辺で焦点をしばった方が良く思うのだが、SであれMであれ、これまであげた作家の作品に直接的な描写はあまりない。全くない場合すらある。が、それでもムードだけは感じ取れるのである。(これら諸家が落はくして、奇クに投稿されるような機会でも、やってくれば、きつと読者をわかせるに違いない、と妙な空想を時々することさえあるのだが?)

さて、私がSの方だけれど、こうしているような小説家をあげて行って、我ながら妙に

〔最新版〕 ニューモデル悦虐写真五十集

K組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円

K 1	全裸刺青自慢緊縛 (山原)
K 2	恍惚たる責の境地 (山原)
K 3	苦悶の表情海老責 (大塚)
K 4	海老責にあえぐ女 (大塚)
K 5	全裸のぐるぐる巻 (玉田)

K 6	豊満な臀部を晒す (刑部)
K 7	厳しき縛りに酔う (山原)
K 8	荒縄で仕置される (美木)
K 9	土壇に観念した女 (美木)
K 10	ムチ打たれる女囚 (美木)
K 11	縛り人形を眺める (山原)
K 12	開孔器で鼻を弄ぶ (山原)
K 13	足首と首を連繫す (大塚)
K 14	後手の複雑な縛り (玉田)
K 15	裸縛りに恥らう女 (山原)
K 16	夫にされる鼻責め (増田)
K 17	緊縛にあう若妻姿 (増田)
K 18	猿轡で鼻を虐める (増田)

K 19	開股縛にあう女囚 (美木)
K 20	罪状を訊かれる女 (美木)
K 21	股間縛りの全裸像 (山原)
K 22	荷造り縛りで晒す (玉田)
K 23	革拘束衣で括らる (大塚)
K 24	庭木に立縛りなる (木村)
K 25	柱に晒される裸身 (玉田)
K 26	セーラー服しぼり (大塚)
K 27	高手小手首縄緊縛 (山原)
K 28	黒縄豊満刺青縛り (山原)
K 29	踏みにじられた女 (山原)
K 30	古墳にて吊り準備 (木村)
K 31	拷問にあう裸女賊 (山原)
K 32	ロープブラジャー (山原)
K 33	嚴重な後手縛猿轡 (刑部)
K 34	エビ縛りにあう女 (木村)

K 35	イルリのある風景 (大塚)
K 36	麗しき裸身を晒す (大塚)
K 37	亀甲縛り正面裸像 (刑部)
K 38	豊満乳房縛り上げ (山原)
K 39	全裸を投げだして (山原)
K 40	縛しめに哭く乙女 (木村)
K 41	エビ責め放置十分 (木村)
K 42	豊かな全裸を緊縛 (玉田)
K 43	観念アグラ縛り図 (玉田)
K 44	笑顔を縛る強烈さ (刑部)
K 45	猿轡の下にあえぐ (刑部)
K 46	縛りに典子の素顔 (刑部)
K 47	伸びやかな裸縛り (刑部)
K 48	エビ縛り刺青姐御 (山原)
K 49	立木より逆さ吊り (木村)
K 50	裸身の緊縛と羞恥 (玉田)

思うことは、私のSと、責め或は縛りとが必ずしも、ピッタリ一致しないということである。S即ち責め即ち縛り、という公式めいたものが、奇くには固定化されているということがないだろうか？中でも、緊縛ということ

が責めのほとんど代名詞となっているような感じすらある。(西欧の責めは、それほど緊縛を重視せず、むしろ「鞭打ち」がポイントとなっているように思う。西欧の緊縛は、どちらかというと、「拘束」という言葉がピッタリくるような感じのことが多い)手先が器用で、手先仕事をすぐ芸術視したがる日本人独特の現象が、この責め(或はプレイと言ってもよい)の中にも現れているように見える。勿論、私もそのようなことがきらいなわけでもなく否定するわけでもないが、私のSのムードは、もっと広いということを言いたのである。いや、私のSはムードいかによるといった方が早いのかも知れない。たとえばマニヤにとって責めらしいものもなく、緊縛などは全くない小説でも、全篇にみなぎるサジスティックなムードには、私はまことに弱いのである。その最も良い例に、丹羽文雄氏の作品がある。(舟橋聖一氏の作品も——と言いたいのだが、氏の小説には、SMとの

接点たる猥雑さが無さ過ぎる)

丹羽氏の作品といっても、全部読んだわけではないが、ちよっと、戦後の作品をひろってみて、S的ムードの濃いのに驚いたわけである。読んだ作品は、「魚紋」「飢える魂」「禁猟区」「欲望の河」「鎮花祭」「今なりけり」の六篇で、そのいずれにも大きな興味をおぼえた。丹羽氏は、しいたげられる女性というテーマで多く小説を書くから、S的ムードが濃厚になるのも当然の成りゆきといえるが、主人公が金持ちの老人と若い美貌の女(智的ではあるが女の性としての弱さを共通して持っている)という組み合わせの場合、特にその点が眼立つ。中でも「飢える魂」では縛りまでホンのあと一歩という所にまで責めは達する。老人は金力にものを言わせて、檻の中に閉じこめた妻をネチネチと責め抜く。

(もちろん精神的に)女は家族制度と経済的負い目と性のなせる業の三重の軛の下にあえぎ、のたうちまわる。老人は常に傲岸に構えているが、実はそれは女に愛されていないことを自覚しているが故であり、なんらかの力によって女が自分のもとから逃げ出すのを食い止めようと必死になっているのだ。いわば老人のサジスティックな行動は、劣等感の裏返

でしなのである。

このような男女の欲望のからみあいこそ、責め小説の一つの典型的なパターンではないだろうか？丹羽氏の小説(特に「飢える魂」と「命なりけり」)を読みながら、そのイメージが「花と蛇」にともすればダブリ勝ちになるのをどうしようもなかった。「飢える魂」から「花と蛇」に移るには、ただ一歩の飛躍があればよい。即ち「縛り」を登場させることである。そしてこの一歩を踏み越えるか越えないかが、マニヤにとって、それがS小説であるか否かを判断する基準になっているようである。然し、私はあらためて考えざるを得ない。S小説にとって「縛り」が果して本質的なものだろうか、と。

もちろん各人の好みというものがあるし、私自身にしても、縛りは大好きである。しかし、梶山氏の縛りシーンを讀んだ時より、丹羽氏の小説を讀む時の方が、よりピンとくるものがある。という事実は、責めイコール緊縛或は鞭打ち、という単純な公式を越えたものを本質的に持っていることを示していると思う。まとまりのない文になってしまったが今述べたことを序論として後章でもう少しくわしく考える機会を持ちたいと思っている。

アルバム「美しき縛しめ」第六集

愈々完成！

緊縛美女艶姿百態

頒価一〇〇〇円(送共)

略号「美6」

特アート紙グラビヤ印刷、女体緊縛百ポーズ写真集

新人モデル、ベテラン・モデル緊縛写真オンパレード

「出演モデル」○山原清子○東浦ひかる○木村洋子○鈴木晃子○増田み

ゆき○大塚啓子○玉田美佐子○梨花悠紀子○絹川文代○長野良子○桜井葉子○新井マリ子○刑部典子の十三名

十三名の若々しいピチピチとした若鮎のような新鮮なモデル達の柔肌に厳しく掛った縄目、これすべて緊縛女体のポーズの中で、とっておきのものばかり百態を選びだしました。いずれも未だどんな形式にしる一度も発表したことのないものばかりです。最近の傑作、力作をすべて網羅しました。十三名の美女の緊縛艶姿百態が、この一冊で皆さ

まの物となるのです。何卒一冊を座右にお備え下さい。

アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集、第三集「美3」は残念ながら売切れですが、「美4」「美5」「美6」「美7」「美8」は只今在庫しております。引

◆美しき縛しめ百態、新人ベテランモデル競艶決定版内容◆

亀甲縛り乳房責め (大塚)
猿ぐつわに悶える (山原)
緊縛に微笑む典子 (刑部)
瘦躯をくびる縄目 (木村)
逆さ吊りに泣く新妻 (増田)
痛めつけられる牝豹 (鈴木)
益々肥った肌に縄 (東浦)
鮮明な刺青緊縛 (山原)
長髪は肌になとう (長野)
ゆれる吊られた女体 (梨花)

太股の刺青をはだけ (山原)
荒縄と荒蕪で苛なむ (大塚)
顔をいじめられる (新井)
柱の立しぼり (山原)
赤いオシメカバー (絹川)
荒縄拷問哀愁 (梨花)
全裸の後手吊り (玉田)
案山子縛り (新井)
正面ウエスト縛り (絹川)
可愛い尻えくぼ (長野)
樹間のハダシの囚女 (桜井)

肉体自慢の開股縛り (長野)
火あぶりにあう囚女 (大塚)
汚れた麻縄縛り (絹川)
豊胸を二つに割る (長野)
水着を剥がれて縄 (梨花)
ゴムカバーの艶 (大塚)
真白き肌に樹洩れ日 (絹川)
着衣は無惨に剥がれ (山原)
裸身を晒して悶える (梨花)
縄は胸に息苦しい (大塚)
背中の刺青をさらす (山原)

全裸後手縛り引回し (大塚)
両手吊りに耐えぬく (玉田)
後手吊り麻柱晒し (山原)
ネットをかぶらせる (梨花)
山の木に曝す (絹川)
庭前に見せる艶姿 (山原)
高手小手足首縛り (大塚)
手ぐさり足枷 (絹川)
裸身に光と影の綾 (大塚)
後手は高々と吊り (梨花)
木馬に跨がる乙女 (大塚)
逆さ吊りにあえぐ女 (梨花)
デニムの拘束衣 (大塚)
海老縛りに耐える (東浦)
女囚第六十三号 (梨花)
吐きだした布片 (絹川)
白肌にフンドシ縛り (大塚)
後手の背面さらし (山原)
柔肌に喰い入る麻縄 (大塚)
後手吊りに浮かぶ女 (梨花)
鎖に吊られた両手 (大塚)
黒革製の猿ぐつわ (新井)
スタレの中の晒し (玉田)
巻煙草責め (大塚)
日本髪腰巻しぼり (山原)
後手高手小手しぼり (絹川)
立木縛りムチ打ち (桜井)
エビしぼり苦悶姿態 (梨花)
高島田着物あて姿 (山原)
臀部誇張股間縛り (大塚)
強烈な後手と乳房 (梨花)
脱げかけたズロース (絹川)
柱に後手しぼり (玉田)
強烈な鼻ひねり (大塚)
足挙げ椅子しぼり (東浦)

手摺りに開股責め (梨花)
裸身の開股縛り (大塚)
お茶目ぶり発揮 (長野)
猿ぐつわと荒縄縛り (大塚)
高島田の全裸の縛り (山原)
裸身にハイヒール (大塚)
ブロックの石抱き (木村)
生ゴムの猿ぐつわ (大塚)
緊縛の悦虐表情 (梨花)
後手に縄はきびしく (刑部)
豊満に挑戦する縄 (東浦)
黒紐は白肌に映える (絹川)
裸身を踏まれる (大塚)
破られたシュミーズ (梨花)
六尺褌は白く映える (大塚)
いたぶられる足 (梨花)
蕪の中の緊縛肢体 (大塚)
鼻責めにあう晃子 (鈴木)
責めに酔う恍惚境 (東浦)
逆エビにもだえる (山原)
椅子責め媚態 (大塚)
見事な臍窩を晒す (大塚)
豊満を割る縦縛り (東浦)
足下にもがき苦しむ (新井)
黒革のフンドシ縛り (大塚)
浣腸器の恐怖 (大塚)
美肌は縄に酔う (長野)
吊られ吊られて (木村)
白褌の後手しぼり (大塚)
責めに愉悅する女 (山原)
マゾの境地露呈 (木村)
プレイに疲れはてる (絹川)
乳房は光り輝やく (大塚)
全裸美プラス縄目 (長野)

〔秘蔵版SM資料分譲品〕

光沢印画紙極鮮明焼付

浣腸後介添え排便

大手札六枚一組 略号(かね)

百CCの浣腸溶液注入

大手札六枚一組 略号(かと)

グリセリン溶液注射

大手札六枚一組 略号(かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号(かた)

イルリガートル尿管挿入

大手札六枚一組 略号(かち)

アイヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号(かの)

オシメを着用させる

大手札六枚一組 略号(むし)

ゴム製オシメカバー着用

大手札六枚一組 略号(むに)

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの)

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 略号(なむ)

真紅の腰巻をする

大手札三枚一組 略号(なれ)

膨大な臀部責め

大手札三枚一組 略号(なに)

オシメと女学生

大手札七枚一組 略号(うえ)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号(うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号(うわ)

女奴隷を弄ぶ二女

大手札八枚一組 略号(きあ)

股裂きと逆さ吊り

大手札三枚一組 略号(きう)

口の中の詰物で汚辱する

大手札三枚一組 略号(きお)

猿ぐつわのいたぶり

大手札三枚一組 略号(きさ)

抓ねりと擦ぐり責め

大手札三枚一組 略号(きし)

二女をいじめる啓子

大手札十枚一組 略号(きい)

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす)

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きす)

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ)

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて)

凌辱されるマゾ女

大手札五枚一組 略号(きと)

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな)

刺青姐御の切腹

大手札四枚一組 略号(うた)

柔肌を切り裂く女

大手札五枚一組 略号(きち)

血紅使用介添切腹

大手札五枚一組 略号(きつ)

第一回湖畔女相撲第一組

大手札二十枚一組 略号(すや)

第一回湖畔女相撲第二組

大手札二十枚一組 略号(すゆ)

第一回湖畔女相撲第三組

大手札二十枚一組 略号(すよ)

裸女砂浜での格闘

大手札十二枚一組 略号(すえ)

叢で止めをさす

大手札八枚一組 略号(うま)

大手札十二枚一組 略号(すう)

松林の中での裸女死斗

大手札十二枚一組 略号(すき)

マワシを締めあう

大手札十五枚一組 略号(うみ)

女相撲好取組三番勝負

大手札十枚一組 略号(うむ)

迫力実戦女相撲

大手札十枚一組 略号(うめ)

相撲マワシ姿の三人娘

大手札五枚一組 略号(うや)

女相撲を取組む三人娘

大手札七枚一組 略号(うゆ)

室内女相撲熱戦譜第一組

大手札六枚一組 略号(すも)

室内女相撲熱戦譜第二組

大手札六枚一組 略号(すみ)

室内女相撲熱戦譜第三組

大手札六枚一組 略号(すわ)

二女のなぶりもの

大手札三枚一組 略号(うろ)

二女の馬にされる男

大手札八枚一組 略号(うま)

☆異色文献資料分譲品☆

鼻 いじめ三態

大手札三枚一組 略号(はね) 四〇〇円
山原清子

寝棺の中の裸婦

大手札二枚一組 略号(ねか) 三〇〇円
山原清子

刺青姐御禪一本艶姿脇差

大手札八枚一組 略号(てね) 一五〇〇円
山原清子

刺青姐御禪一本艶姿短刀

大手札十二枚一組 略号(てし) 二〇〇〇円
山原清子

刺青姐御腰巻一丁艶姿短刀

大手札八枚一組 略号(てな) 一五〇〇円
山原清子

刺青姐御腰巻一丁艶姿脇差

大手札十二枚一組 略号(てふ) 二〇〇〇円
山原清子

黒禪 奔放姿態

大手札十枚一組 略号(ろち) 一〇〇〇円
刑部典子

碧玉 裸身緊縛

大手札三枚一組 略号(のん) 三〇〇円
刑部典子

全裸 麻縄強烈縛

大手札十枚一組 略号(いね) 一〇〇〇円
山原清子

白禪 奔放姿態

大手札十枚一組 略号(ろて) 一〇〇〇円
刑部典子

入墨を踏みこじる

大手札八枚一組 略号(いつ) 八〇〇円
山原清子

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 略号(はた) 一〇〇〇円
山原・鈴木

裸女レスリング

大手札四十枚一組 略号(れす) 三三〇〇円
大塚・山原

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号(かる) 五〇〇円
山原清子

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号(かへ) 一〇〇〇円
山原清子

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号(かに) 一〇〇〇円
山原清子

乳房責め五態

大手札五枚一組 略号(てら) 六〇〇円
山原清子

禪美に羞じらう

大手札六枚一組 略号(こん) 八〇〇円
玉田美佐子

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 略号(うの) 一〇〇〇円
山原・大塚

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 略号(うな) 一〇〇〇円
山原・大塚

山原を責める大塚

大手札八枚一組 略号(うね) 一〇〇〇円
大塚・山原

逆さ吊り正面背面

大手札二枚一組 略号(つる) 五〇〇円
増田みゆき

夫婦連縛鼻責

大手札十枚一組 略号(らか) 一二〇〇円
増田夫妻

夫を責める新妻

大手札十枚一組 略号(はや) 一二〇〇円
増田夫妻

牛男をのりこなす新妻

大手札十枚一組 略号(はま) 一二〇〇円
増田夫妻

完全逆さ吊りフォト

大判三枚一組 略号(さつり) 一〇〇〇円
木村洋子

両足首括り逆さ吊り

大判五枚一組 略号(さか) 一〇〇〇円
梨花悠紀子

逆さ吊りの女体折檻

大判五枚一組 略号(させ) 一〇〇〇円
梨花悠紀子

手足逆滑車宙吊り

大判五枚一組 略号(さと) 一〇〇〇円
梨花悠紀子

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にん) 四〇〇円
安原さゆり

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にの) 四〇〇円
安原さゆり

妊娠九カ月の腹部

大手札三枚一組 略号(にみ) 四〇〇円
安原さゆり

八カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にへ) 四〇〇円
安原さゆり

六カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 略号(にそ) 三〇〇円
安原さゆり

血紅切腹連続写真

大手札十二枚一組 略号(のせ) 二〇〇〇円
大塚啓子

血紅使用美しき女の屍体

大手札十二枚一組 略号(のり) 二〇〇〇円
大塚啓子

血紅使用立腹に悶える女体

大手札十枚一組 略号(のさ) 一八〇〇円
大塚啓子

血紅使用切腹した女の死体

大手札十二枚一組 略号(のい) 二〇〇〇円
大塚啓子

血紅使用屠腹される女体

大手札十二枚一組 略号(のる) 二〇〇〇円
大塚啓子

血紅使用絞首された女体

大手札六枚一組 略号(のひ) 一二〇〇円
大塚啓子

血紅使用切腹に苦悶する女

大手札十枚一組 略号(のむ) 一八〇〇円
大塚啓子

檻に入れられた女

大手札二枚一組 略号(もの) 三〇〇円
山原清子

浴室の全裸刺青

大手札五枚一組 略号(よな) 六〇〇円
山原清子

〔代理部新版分譲品一覧〕

腸露出無念腹切腹

大手札十枚一組 略号 八〇〇円
大塚啓子 略号 (せ10)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 四〇〇円
大塚啓子 略号 (ひた)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 四〇〇円
大塚啓子 略号 (ひと)

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
甘木春子 略号 (まに)

女子斗争場面写真

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚、玉田 略号 (のわ)

二女格闘場面写真

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚、玉田 略号 (のか)

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚啓子 略号 (のみ)

切腹に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚啓子 略号 (のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (のけ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
玉田美佐子 略号 (ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
玉田美佐子 略号 (ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
玉田美佐子 略号 (ねと)

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円
大塚啓子 略号 (れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号 一〇〇〇円
大塚啓子 略号 (れみ)

黒いフンドンを誇る

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (くわ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚啓子 略号 (むろ)

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
長野良子 略号 (てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
長野良子 略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
長野良子 略号 (てほ)

六尺禪の変形姿態

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
長野良子 略号 (てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 略号 二〇〇円
長野良子 略号 (てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 略号 二〇〇円
長野良子 略号 (てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
松本アサ子 略号 (まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
松本アサ子 略号 (まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚啓子 略号 (へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚啓子 略号 (へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 略号 四〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆは)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
遠藤百合子 略号 (ゆお)

絞首刑

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
新宮夫人 略号 (るく)

引回しと晒

大手札二枚一組 略号 三〇〇円
新宮夫人 略号 (るに)

磔

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
新宮夫人 略号 (はみ)

晒 (さらし)

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
新宮夫人 略号 (さら)

絞首刑

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
新宮夫人 略号 (こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
新宮夫人 略号 (のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
新宮夫人 略号 (のき)

斬首処刑場面

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
新宮夫人 略号 (くし)

吊り打ち

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
関谷富佐子 略号 (やり)

股間縛法悦境

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
絹川文代 略号 (ぬこ)

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
絹川文代 略号 (りこ)

責め

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
大塚啓子 略号 (せめ)

猪吊り

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
梨花悠紀子 略号 (いの)

足挙開股責

大手札三枚一組 略号 三〇〇円
梨花悠紀子 略号 (あけ)

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 四〇〇円
大塚啓子 略号 (むら)

月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 遠藤百合子 略号 (ゆす)	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ほふ)	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らく)	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 略号 (三〇〇円) 愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ)	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 略号 (七〇〇円) 絹川文代 略号 (らふ)	雲斎の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 東浦ひかる 略号 (ろみ)	凄んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (へに)	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 東浦ひかる 略号 (へみ)	浣腸を施される女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちら)	煙草責めの裸身 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (たく)	淫らな長髪の乱れ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (ろも)	ふり乱す長髪の悶え 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)	
長野良子 略号 (ろめ) 縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほく)	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (ほむ)	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちぬ)	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (ちり)	写真の中に悶える 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (けよ)	写真に埋れた裸女 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (けお)	フンドシ姿の魅力 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 細川アヤ子 略号 (ふの)	フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふへ)	フンドシの前後左右 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふな)	フンドシの変わった姿 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (ふに)	前開き、ゴムオシメカバー 大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円) 大塚啓子 略号 (しま)	前開き布製防水オシメカバー	
大手札十二枚一組 略号 (一〇〇〇円) 大塚啓子 略号 (しな)	全裸の切腹悦楽(1) 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (ひた)	全裸切腹悦楽(2) 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 大塚啓子 略号 (ひと)	乳房しばり 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (うは)	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 大塚啓子 略号 (うい)	木馬責三態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (もく)	椅子責めの果て 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (いす)	哀婉血紅切腹 大手札五枚一組 略号 (五〇〇円) 大塚啓子 略号 (るな)	双胸の強調縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (そう)	動感海老責地獄 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (とう)	色禪の開股縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (いふ)	鼻責めのアップ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 大塚啓子 略号 (はす)	膨満正面縛り
大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 長野良子 略号 (へな)	血紅切腹絶命態 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 絹川文代 略号 (ちの)	血紅美女の切腹 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 絹川文代 略号 (ちた)	オムツ着用フオート 大手札七枚一組 略号 (七〇〇円) 大塚啓子 略号 (むね)	バンド着用開股ポーズ 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 東浦ひかる 略号 (つん)	マニヤ全裸緊縛フオート 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 栗本ミチ 略号 (いな)	強烈エビ縛り 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (もい)	乳房責の苦悶 大手札二枚一組 略号 (二〇〇円) 関谷富佐子 略号 (もろ)	全裸ムチ打ち 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 関谷富佐子 略号 (もた)	強打に泣く裸身 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 関谷富佐子 略号 (むち)	裸身の晒し 大手札三枚一組 略号 (三〇〇円) 関谷富佐子 略号 (わあ)	全裸股間縛 大手札四枚一組 略号 (四〇〇円) 関谷富佐子 略号 (せら)	

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

各組一枚一組 (送料共)

E組百花選

大手札印画紙 (9×13 輝) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しぼり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歓 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ擦り責 (梨花)
E 71	乳首プレイヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しぼり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしろられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上的若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しぼりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ (東浦)

「最新版」女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

G 1	顔面から全身嚴重縛	(東浦)
G 2	アグラで縛られる	(玉田)
G 3	豊臀と足首と後手縛	(玉田)
G 4	一糸まとわぬ晒し者	(玉田)
G 5	敷布に悶える白い肌	(玉田)
G 6	縄に羞らう裸しぱり	(長野)
G 7	煙草責と荒縄緊縛	(大塚)
G 8	全身ガンジガラメ	(大塚)
G 9	手吊り全裸さらし	(玉田)
G 10	恐怖のいたぶり	(新井)
G 11	浣腸器に脅びえる女	(玉田)
G 12	全裸しぱりと浣腸器	(玉田)
G 13	踏みつけられる美貌	(大塚)
G 14	美しき全裸強調縛り	(大塚)
G 15	そりかえる鼻の頭	(大塚)
G 16	黒フンで縛られる女	(玉田)
G 17	責写真に埋れた緊縛	(大塚)
G 18	諦観の後手しぱり	(玉田)
G 19	椅子に縛られた全裸	(玉田)
G 20	足首と後手首と縛り	(玉田)
G 21	二つの乳房アップ	(長野)
G 22	縛られて鼻を任す	(大塚)
G 23	後手縛全裸椅子跨ぎ	(東浦)
G 24	豊胸に黒紐の輝やき	(長野)
G 25	肌につき刺さる荒縄	(大塚)
G 26	机の脚に縛られる女	(新井)
G 27	革の猿轡で責める	(新井)
G 28	白肌は縄にくびれて	(大塚)
G 29	緊縛裸身を誇る足	(長野)
G 30	逆エビと浣腸器	(大塚)
G 31	肥り肉を晒らす女	(東浦)
G 32	踊子の緊縛ポーズ	(絹川)
G 33	足でなぶられる鼻	(大塚)
G 34	典型的な股間しぱり	(大塚)
G 35	美貌と豊胸を誇る女	(長野)
G 36	写真に埋れた全裸姿	(大塚)
G 37	裸を誇りの椅子縛り	(玉田)
G 38	柔肌は縄にくびれて	(玉田)
G 39	全裸の肌は縄まかせ	(玉田)
G 40	女囚哀歎	(宇治)
G 41	女囚の縛られ姿	(宇治)
G 42	オシメカバー縛り	(大塚)
G 43	庭の見える部屋にて	(大塚)
G 44	トイレを前にして	(大塚)
G 45	荒縄と豆絞りの猿轡	(大塚)
G 46	裸身の美を誇る縛り	(長野)
G 47	後手逆エビ強烈鼻責	(大塚)
G 48	股間縛り全裸重量感	(大塚)
G 49	嚴重荷造縛りの全裸	(玉田)
G 50	全裸正面強烈亀甲縛	(木村)
G 51	全裸胸絞め首縄猿轡	(木村)
G 52	後手首縄膝頭一括縛	(木村)
G 53	全裸後手吊り晒し	(玉田)
G 54	後手吊り全裸の美	(玉田)
G 55	椅子に跨がされた女	(新井)
G 56	後手縛りで寝室へ	(絹川)
G 57	色魔に脱がされる	(新井)
G 58	不安定な台上股間縛	(大塚)
G 59	無抵抗の裸いじめ	(大塚)
G 60	両手吊りの猿ぐつわ	(新井)
G 61	可憐ないじめられ様	(大塚)
G 62	責めぬかれた表情美	(大塚)
G 63	強奪されたパンティ	(大塚)
G 64	後手縛全裸の美しさ	(大塚)
G 65	猿ぐつわの婉な表情	(新井)
G 66	手吊り足縛り仰臥	(新井)
G 67	目かくしのハリッケ	(大塚)
G 68	首枷のさらしもの	(大塚)
G 69	木馬責め斜め後姿	(大塚)
G 70	木馬責め斜め前姿	(大塚)
G 71	革全頭マスクと手錠	(大塚)
G 72	火あぶりにあう女	(大塚)
G 73	長髪垂らし全裸縛り	(長野)
G 74	豊満を誇る露出癖	(長野)
G 75	白肌で縄にうそぶく	(長野)
G 76	縄にもだえる美女	(絹川)
G 77	美貌をいためつける	(絹川)
G 78	首吊りの責め	(新井)
G 79	両手開き吊り顔虐め	(新井)
G 80	全裸後手足首連繫縛	(玉田)
G 81	蒲団上に転がった女	(遠藤)
G 82	首縄開股強烈縛り	(木村)
G 83	巨大な臀部全裸後手	(大塚)
G 84	膨隆見事な乳房責め	(長野)
G 85	ヤンチャ娘開股縛り	(長野)
G 86	全裸でしやがむ後手	(玉田)
G 87	豊満裸身を誇る緊縛	(玉田)
G 88	美麗の全裸に嚴重縄	(玉田)
G 89	後手縛り裸立姿晒し	(木村)
G 90	奴隷の裸身を捧げる	(木村)
G 91	白布の猿轡と白肌責	(木村)
G 92	六尺樺巨大臀部虐め	(大塚)
G 93	裸身を晒す両手縛り	(大塚)
G 94	全裸アグラ坐り縛り	(玉田)
G 95	白肌に映える光の縞	(玉田)
G 96	臍乳房強調喰込む縄	(大塚)
G 97	股間縛り全裸の膝立	(大塚)
G 98	台上的緊縛裸身像	(長野)
G 99	反りかえる緊縛裸身	(長野)
G 100	膨大な臀部を眼前に	(大塚)

○臨月腹妊婦資料の部

臨月腹妊婦緊縛

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
田中美佐子

臨月腹開陳

大手札四枚一組 略号(五〇〇円)
田中美佐子

臨月腹開陳

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子

柱縛りの妊婦

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)
田中美佐子

臨月のヌード

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子

妊婦の裸身像

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)
田中美佐子

縛られた妊婦

大手札二枚一組 略号(三〇〇円)
田中美佐子

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子

臨月の裸身像

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
田中美佐子

○刺青女体資料の部

入墨の高手小手

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

縄に悶える入墨

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

足吊り三態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

剥れた腰巻

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

女一匹御意見無用

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

玉取姫が凄む

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

全裸緊縛立像

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

入墨ヌード

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

後手吊りの構図

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

黒細帯の裸身

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

黒禪を誇る

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

入墨 自慢

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

黒ふんどし入墨姿

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

黒ふん媚態の魅力

大手札五枚一組 略号(五〇〇円)
山原清子

黒禪背面模様

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

黒ふん手吊り責め

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

全裸入墨姿態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

晒六尺ふんどし

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

白六尺禪一本の姿

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

白禪後手高手小手

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原清子

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原清子

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原清子

山原清子 略号(いさ)

可憐島田髷全裸縛り

大手札三枚一組 略号(四〇〇円)
山原清子

黒フン高手小手縛り

大手札八枚一組 略号(八〇〇円)
山原清子

入墨女体全裸像

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子

黒禪刺青女体美

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子

六尺禪をするまで

連続二十ポーズ組写真
大手札二十枚一組 略号(二〇〇〇円)
山原清子

白ふんどし脇差切腹

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子

白ふんどし短刀切腹

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子

刺青姐御腹巻脇差

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子

刺青姐御腹巻短刀

大手札十枚一組 略号(一〇〇〇円)
山原清子

入墨女体海老責姿態

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 略号(三〇〇円)
山原清子

限定版グラビア写真集

△美しき縛しめ▽第七集

山原清子
妖艶緊縛

刺青の魅力を探ぐる

写真集

頒価一部一〇〇〇円 略号△美7▽

全部最近撮影の力作！

未公開の秘蔵写真集

刺青の女王——山原清子の魅力の隅から隅までを抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な緊縛フォトの結集版（思わず息をのむ凄いポーズ満載）

このグラビア写真集の写真を撮るために、三カ月に亘って、山原清子嬢を連日のように煩して特写しました。ここに収録したものは、すべて未公開の傑作写真ばかりです。山原清子嬢の若い女性としては前代未聞の素晴らしい刺青の魅力をぎりぎりの線まで徹底的に追究して、その肉体の隅から隅までを鮮鋭なピントのフォトに表現しました。殊に彼女好みの強烈な緊縛によって、単なる刺青フォトの域を脱して、より高度の芸術品を仕上げました。このような稀有の文献資料は他では二度と手には絶対に入らないという自負を持

ております。一般市販はいたしておりませんから直接発行所へお申込み願います。

△内容▽ 全裸の刺青を晒らす後手縛り。股間縛りの刺青の魅力。黒縄緊縛にもだえる刺青女性。後手縛りの刺青媚態六態。絢爛たる逆エビポーズ。乳房責めにうるたえる清子。海老縛り。正面と背面の魅力を抉ぐる。台上にさらす緊縛妖姿。刺青が樹間に見える緊縛全裸姿態。日本髪全裸緊縛。光と影に映える妖しい刺青。刺青芸妓の裸身縛り。海老縛りにうめく清子。股間縛りでもだえる刺青女。清子の身体アップ。

限定版グラビア写真集

△美しき縛しめ▽第八集

大塚啓子
鈴木晃子
山原清子

女斗緊縛競艶写真特集

頒価一部一〇〇〇円 略号（美8）

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動！女性が女性を縛る緊縛プレイフォト化動きのある相互縛り場面の美しい展開

長い間の皆様マニアの御要望に
応えて、女性対女性の女斗美、女斗場面、並に女同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって、ここに集大成いたしました。六尺禪或はパンティを着用した美女の裸身が組んずはぐれつ縦横に画面狭ましと展開し筋肉を躍動させております。いずれも動きのある連続動作によって三女の裸身の美しさが、いきいきと目の中に飛び込んできます。数十枚の女斗美、女斗写真女性相互の緊縛写真が、この一冊にて、皆様のものとなるのです。この新しい企画は、まことに画期的なもので、この機会を逸すると絶対に入手できません。今すぐ、お申込み下さるよう、お待ちいたします。

△内容▽ 啓子の裸身を厳しく括くる清子、あえぐ啓子。緊縛して押さえ込まれる啓子の連続被虐姿態。清子に縛られてゆく過程の連続写真。縛られて身動きできない裸身を清子にいたぶられる啓子。縛られた刺青の裸身をいじめる晃子。晃子が清子に対して猿ぐつわを噛ます連続写真。馬乗りになつて清子をいじめる晃子。清子を逆エビに責める晃子。清子を縛り上げて逆エビに責める啓子。黒禪と白禪の清子と晃子の女斗美、女斗シーン。晃子を寝業で押さえ込む清子、晃子の逆転劇。晃子を縛り責める清子。後手縛りの清子が啓子に翻弄される。その他女性と女性の緊縛プレイシーンの数々。



初めてお便りいたします。僕は子供の頃、中耳炎をわずらい手術をする時に、あまり泣きわめくので、看護婦さん達に口の中にガゼをたたんだのを押し込まれ縛られてしまいました。その時、皆さんでよってたかって、くすぐられたり恥しめられたりした事があります。今でもその時のことを思いだすと妙な気持ちになります。僕の気持ちの中をいつも支配しているの

は、そんな風に女の人達にいじめられるということなのです。奇くを読むようになったのも潜在的に僕の心の奥底に巣喰っているそんな気持ちのしからしむるところでしょう。どなたか、女の方で、その時のように僕を縛り恥しめてくれる方はおられませんでしょうか。僕は今、住込みで、或る商店に勤めております。年令は二十二才です。できたら年長の方がいいのですが、もしおられましたら、よろしくお願いします。浣腸責めでも喜んでお受けします。(千葉市・長谷川孝)

貴誌、五月号拝読致しました。毎月購入して居ませんが、時々、思い出した様に、購入しては、楽しんで居ります。実際に自分もして見たい。されても見たい。と思いい空想をめぐらして居り、それが写真に現れ、又活字に成って見られ、読まれるのですからね。たまりません。実の所、私はMの方に関心を持ち、色々一人で空想にふけり楽しんで居る始末です。いつしか女性のサジスチンに容赦なく羞恥され、責めを加えられ、いつしか甘美な過程へと沈んで行く、何んともいえぬ喜びを感じて見た

いと思って居ますが、然し実際には、その様な事柄は不可能な事かも知れませんね。統計的？にも女性のサジズムは少ないとか聞いて居ますが。私は年令三十四才、会社員、体格は余り良くは有りません。やせ型なタイプです。おまけに結婚して居りますが、責任は充分持つつもりで居ります。S的な女性「本当のサジスチン」に依って、私のもって居るマゾヒズムを開眼させて欲しいものです。そういう様な女性に呼び掛けて頂ければ幸いです。(伊丹・内田弘)

花田沙登子様。奇ク四月号誌上で「誰か私の飼犬になりませんか？」の記事を拝読しました。数ある志願者の内の一人として申込みの権利を保有します。貴女のご希望通り二年前より奇クファン？それなら私も知っている筈です。M七〇生です。少々記事の文で気になる事が有りますので誌上に現われたM男性は空想に許り走り現実の女王様の御恵みに浴した幸福者は少ない様ですね。然り女王様？の恵みに浴さないで奇クの貴重な頁と編集者にご迷惑をかけるのです。幾らS女性が少なくM男性が憧れているからと申しても女

性らしく、やんわりと文を書いて下さい。それでこそ女王様の価値が出るのです。極端な例では、たくさん金を持つて人、飛行機で来る人、費用はお前持ち、ベテランの人は恐らく極く僅かです。残念ながら私なんてスタイル、年令から申し自信なく奇クフォト小説からの通信教育？に依る自称Mであって貴女のいうごとく空想に走っています。私は鼻は完成してありますが、S女性には性格好みも違えます。プレイにしましても鞭で打ち血を見る方、又血は嫌い徐々にやんわり緩急に、又特殊なプレイと三種に分類します。矢張りそれぞれ好みの自己ペースに導き教育(ここでは飼育)をしなくては。プレイで一番大切な事はくくる時の動作、これです。縄さばきが遅くてはMの気分も、手早くあつという間を与えずくる。これが上手になりますと、一応一人前です。私事で恐縮ですが、私の飼育者(S女性)は定年はありません。プレイの内容に依りますが矢張り健康でないと如何なる条件でも私は駄目です。第一花田様の県名も判からず、地理的に別に問題にしません。万一にもお気が向いたら、呼びかけて下さい。文

通の段階に至りましたら、身元と身体詳細表を、お手元へ。文章が下手で済みません。失礼します。

(名古屋・M七〇生)

○

秋島とよ子さん、貴嬢の体験談面白く拝読させて頂きました。然し文章の中で少し合点がゆかない事があり、投稿する気になりました。第一に自縛で手がしびれる位縛れるかどうかです。これは私には経験がないので解りません。第二にしびれた手で縄を解くことが出来るかどうかです。私は縛られた事はありませんが女性を縛ったことは数え切れないほどあります。但し対象になった女性は数人ですが私の緊縛の方法は手首を高くあげ手首や腕だけでなく身体まで変色する位に縛らないと縛った気持ちがしないのです。今までの経験ですと始めはいたがっても馴れると、いくら緊く縛り、また不自然な体位にしてもいたがりませんが、縄を解いた後しびれが元にもどる迄に腕をかかえこんでじっと辛抱しており、もし少しでも触れると飛び上ります。実際永く座って足がしびれた時このしびれが直るまでは何とも云えない気持がするのでもっともだと思いいしびれが直るま

ではそっとしておいてやります。その後で腕の縄のあとの検査を綿密に行います。(但しこれは毎日前に縛った縄跡を検査しておりますが)所が貴嬢はこのしびれた手で縄をとくような事をいってられました。私が私は不可能と思います。もし良ければ、腕等にしびれてもすぐ解けるような縛り方を貴嬢に実験して見たいですね。第三には貴嬢は縛られた経験はあるが何時ももっと緊くと思いいながら相手の縛り方が不服だったようですが、奇クに写真まで記載せられる貴嬢がそんな遠慮するかわるわりました。然し三枚の写真の中真中の分は明らかに自縛でなく他人の手で縛られたものですが、あの程度なら奇クモデル写真位ではないですか。勿論私は奇クの緊縛写真が前から少し物足りなく思いい、緊縛承知のモデルならもっと残酷に扱って欲しいとは思って居りましたが。ところで如何ですが、一度もし希望せられるならもっときつい緊縛を貴嬢にして見たいのですが私は中年男で緊縛にしか興味のないう人間ですから、心配する必要はありません。場所と時間さえ指定されると遠近にかかわらず必ず参りますから貴嬢は縄と責具を準備して下されば結構です。ではお返事を待って居ります。(神戸・夢野徹男)

○

三月号編集後記に、「新年に際しての夢」が描かれていましたが大賛成です。グラフィア、口絵が、復活し増頁も可能なら、読者も増える事だろうと思います。定価は四百円と五百円程度なら、いつも物足りなさをおこっているよりはましだと思います。是非、実現してみてください。SとMに関する特集は随分できるようですが「女性

切腹」の特集は無理なのでしょいか。きっと部数が期待できないので企画できないのだと思うのですが、美7・8程度のものにして頒布二〇〇〇円程度なら希望者は案外多くいるのではないかと思います。「女性切腹」だけで企画するのは無理でしたら、S・Mを除く他のものとの組合せでも結構です。企画なされて希望をつのって見たらどうでしょう。カラーフォトを出しはじめられたようですが女性切腹のカラーフォトもぜひ作ってほしいものです。血潮の紅が

玉取姫の刺青女性、山原清子嬢の仕置図

入墨女賊拷問刑罰集

キヤビネ版印画紙焼付
各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三三〇〇円

女賊仰向け木馬責

三枚一組 略号(よひ)

凄絶海老責め拷問

三枚一組 略号(よす)

全裸入墨女賊折檻

三枚一組 略号(よせ)

全裸四這い木馬責

三枚一組 略号(よも)

入墨笞打白洲糾問

三枚一組 略号(よゆ)

逆さ吊りの仕置

三枚一組 略号(よき)

ハリツケ女賊拷問

三枚一組 略号(よめ)

大の字磔女賊処刑

三枚一組 略号(よさ)

きつとすばらしく美しい事でしょう。以上の三点、是非お願いしたいものです。全国の女性切腹を愛される皆さん（意外に多くおられる筈です）もきつと応援してくださいと信じます。なお、女性切腹のカラーフォトは肌の色があまり黄色くならないように御配慮下さい。肌の色が黄色くなると肌の陰の部分の色がどぎつくなり、血潮の赤の美しさが半減されるだろうと思えるからです。（飯森 潔）

○ 誌友の皆様御元気ですか。私29才の女性でございますが随分とためらいつつも思い切ってペンをとって見ました。と申しますのは生涯にただ一度だけいい思い切りスリルのある経験をしてみたいのです。どんな恥しいことでもかまいません。小さいときからの知合いで私のいところにも相談したところ（すでにいとこは結婚しています）始めて貴誌を昨年教えられすっかりそのとりこになってしまつて居りますの……。私の場合2人以上の男性にか又は同性の方々に私の体の隅々まで愛し責め合い楽しんでみたいのです。よく求められていたM男性の方をいじめてみてもいいのです。ただ経験はござ

いませんで具体的にその御希望は申出て下さらないと困ります。複数がいいんです。刺激の夜と申しましょうかーこんな不逞な考えを起した私も実は平凡な一度結婚に破れた不幸な女性なんです。勿論お互いのことながら個人の秘密は絶対守って頂ける誠実な方で写真・御名刺・身長・体重・プレーのご様子など出来るだけ詳しく私の希望をみさせて頂く御便り心よりおまち申し上げて居ります。御連絡は先ず局止便でお願い致します。時々物しますSM愛好の御夫婦やパートナーの方々でも宜しいのです。本当はそんな方の方が安心感が強いのですが……。私現在パスト91、ウエスト57、ヒップ98のグラマータイプで十人並位の美しさの自信ならあつかましようございますが自信めいたものもございいます。不真面目な方は一切御返事致しません。生涯の冒険と想い出なので慎重に且つロマンチックにも希んで居ります。御恥しいことを申し上げて失礼いたしました。皆様の御多幸を心からお礼りしつつ。（神戸市・蔭山みさお）

○ 私は本年四十才になる男性SMマニアの男です。病気で妻を三十

六才の時になくしてから今日まで両親、兄弟、友人のすすめる縁談をことわりながら今日迄同性SMプレイに楽しい日々を過して参りましたが、今や周囲の薦める縁談をことわるすべを無くし、まったく苦境に立されております。もし本誌愛読の女性の方で小生の性向を承知の上で結婚して下さる女性の方がおられたら是非一度お便りを頂き度いと勇をふるってペンを取りました。相手の女性がどのような性向であろうと、小生としては妻というより共同の悩みの相手として結婚して、小生は小生の性向に楽しみ、妻には妻の性向の楽しみをと考えております。その方が同性愛者であろうと、男に対するSMであろうと結構です。小生の性向を認めて頂く替りに相手の性向をも充分認めてお互いに生活をエンジョイスして行き度いと存じます。小生は別にこれと云って財産はありませんが、小さな家を一軒持っており、月収六万のサラリーマンです。今や周囲の善意の結婚話しにいささかノイローゼ気味です。35才前後の女性の方でこの様な私と結婚してやろうとお思いになられたら何卒御一報下さい。お会いして、色々お話ししてお互

いに自分の性向を満足させながら心おだやかな共同の生活をして見度いと存じます。自己紹介、年令42才、特別管理職で身長一六〇センチ、体重四七キロのいたって貧相な者です。K誌愛読の方で気の進まない結婚問題で悩んでおられる女性の方又は同性愛か男女SM等でお知合いの女性を御存知の方がおられたら是非所紹介頂けたら幸いです。祈るような気持ちでペンを取りました。どうかよろしく御願い致します。（東京・佐治一生）

○ 三月号にてサジスチンからの便りとして掲載された花原電子様の一文を拝して以来いろいろ思い悩みました。思い切ってお便りを差し上げますことをお許し下さいませ。私は三十才、独身、教育関係の仕事に携わっております。身重、体重は普通健康な男子です。私はかつての対女性コンプレックスから、現在の女性崇拜の信念に至る迄には様々な変遷を経ましたが、この気持は今後一層進展するものと思えます。現時点においてもこの感覚で社会生活を続けておりますが、やはり限界があり不本意ながら人間的なつながりに甘んずるほかになく、その中で少しでも

この気持を生かそうと努めている状態でございます。ノーマルなフエミニストであればこれで充分かと思いますが、私の様なM的な性格を土台としての女性崇拜の信者には矛盾に満ちた境遇です。私には尊大に目前に立ちだかる女性を絶対的な女神としてたとえ限られた時間であっても世の俗縁を離れ、心をつかり緊縛されてひたすら礼拝と奉仕を尽すことが私の人生なのでございます。神は私に、女性が高貴にして神聖なものに畏敬するもの、との心を与えて呉れました。しかし、その尊い偶像を拝する機会には至って無関心の御様子。正に迷える小羊、いや下僕です。貴女様のような行動的な

征服感に溢れた優美な女神の足下にひざまづいて、心身をゆだね召使いとしての義務を果たすことが出来ればこんな喜びはありません。たとえどの様な屈辱を受け、非人間的な扱いをなされましようともその苦しみを最高の喜び慈悲として、まごころをこめて奉仕申し上げます。思えば花原様のお便りが奇ク誌上を飾って数カ月。以来幾度繰り返し礼拝し読んだことでしょうか。今では一言一句違えることなく暗誦することが出来、又そのたびに思慕の念に心がふるえ、乱れる有様でございます。すでにその頁は私の祈るくちづけで活字も消えようとしておりますが、当時感激に咽んだこの号の奇クこそ何

物にも替え難い宝物なのです。指導的立場にある人間として誠に恥しい限りですが、私には女性崇拜の思想は与えられた宿命としてあくまで貫き通し、充実した生活の伴侶と致したく存じます。かつて奇ク誌上に登場した女神のお便りを拝するたびに心がうずき、淫らな妄想を画きつつ自虐の世界に我を忘れ遊んだこともあります。しかし昨今の様に女性崇拜思想に傾倒した私には新らたな喜びと感情の波が湧いて参ります。ほとんど抵抗なく単純に女性は女神だノと信じられる自分を幸せだと思えます。ましてや男性を支配する可能性を秘めた女性こそ否SMに魅せられた妖精こそ私には最高の女神

として全てを捧げることが出来ます。そしてその足下に呻吟する私は世界一の幸せ者でしょう。幸いにしてこの願いが女神のお目にとまりましたら何卒お便り下さい。お待ち申し上げております。(大阪市・大塚正文)

○
奇ク愛読者の皆様。初めてお手紙を書きます。私は当年二十二才の男性です。そしてSのファンです。奇クを初め諸誌により色々な責めを知り、又自分で開発し研究しております。又映画等の責場面では胸が高鳴る思いでくい入るように見えています。その後、それにヒントを得て自分はどうしようとか、ああしようとか思っております。

四馬孝妖美画集

女体切腹図絵

△時代物女性切腹▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しせ)

- 一、若き姫君の切腹美態
- 二、介錯を受ける美しき娘
- 三、切腹する娘落城の哀史
- 四、夫の眼前で切腹する若妻

浣腸美媚態

五、愛人の手で介錯される娘

△女体浣腸の極美▽

大中判印画紙極鮮明焼付

三枚一組

略号(のゆ)

- 一、美しい令嬢に対する浣腸
- 二、女事務員の浣腸の場面
- 三、女学生に行う浣腸の私刑

浣腸責め図譜

△強制浣腸場面五態▽

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しき)

- 一、片足吊りで美女に浣腸
- 二、いちぢく浣腸の恐怖
- 三、高圧浣腸に喘ぐ美女
- 四、硝子シリンダーの乱舞
- 五、イルリガートルの浣腸

浣腸責め図譜

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しえ)

- 一、踊子へのイルリ浣腸責

羞恥責め絵巻

大中判印画紙極鮮明焼付

五枚一組

略号(しい)

- 一、渾水による人工妊婦製造
- 二、浴槽の女神を責める
- 三、三角木馬の美女責め
- 四、全裸の美女柱抱き責め
- 五、女体洗滌のあられもなさ

す。しかしながら、ただ自分で思っているだけでは、何もありません。実際にプレイをしてみなければ面白くありません。しかし残念ながら私には適当な相手がありません。地理的な条件もあろうかと思いますが、北海道の奇く愛読者は私一人ではないと思います。道内でしたら、どちらでも結構です。喜んでまいります。もちろん秘密は守ります。写真の方は一式道具がありますので、自分で総て行っております。北海道のSMに御理解のある女性の方、ぜひお便り下さい。よろしくお願い致します。(北海道札幌市・前川克之)

○ 奇く五月号は我々M派にとっても中々満足すべきものがあり編集部の方々にまず感謝のことばをのべたい。その中の二、三の作品について感じたことをのべさせて頂きたい。まず第一は芳野氏の「濡れにぞ濡れし子供の世界」をとりあげたい。芳野氏の作は毎月大きな期待をもって読ませて頂いているが、今月の「H氏の話」というのは特に興味深かった。木から下されたH少年が地面に仰向けに押し倒され女ボス及びその家来たちの「nine」を直接浴びせかけられる

光景は目にみえるよう。ただこの場合、女ボスたちがH少年と同年輩の少女たちであったことに多少の足りなさを感ずる。もしこの場合「nine」を浴びせる女性が大人数だったらもっと実感的だったと思う。大人の女性の放出は少女に比べてずっと勢も烈しいし、量も多い。H少年としても肉体美を誇る大人の女のそれを期待していたのではなからうか。次に田代氏の「続・蚯蚓のたわごと」である。

これは全編を通じて私のM傾向を充分に満足させてくれたが、特に四(結)のファンタジーは何度もくり返して読んだ。②の「愉快な裁判」における「見せしめの刑」は胸をおどらせて読んだ。さんざんいためつけられたX君が、最後に見学のレディたちの顔面騎乗を受ける。始め百三十センチという超巨大なヒップの洗礼を受けたのを皮切りとして次々と大きなお尻の重圧を受けいやおうなしにその強烈な臭気を嗅がされたX君がうらやましい。「見せしめの刑」のあと最後に女保安官のお尻によってとどめがさされることになるが「勇ましい女保安官のお尻がどんなものか。他の女とどこがどのようにちがうか、しっかり覚え込み

なさい」ということばがX君にどのようなにひびいたか。X君果してこの女保安官のお尻の重みを知りその臭気を嗅ぎ分けることができただろうか。文字通りまさに愉快な裁判である。この他三原、河津江川、間宮各氏の作品もたのしく読ませて頂いた。今月とやま氏の作品のなかったことは少々さびしい。どうか毎月のせて下さるようお願い致します。(S・T生)

○ 山梨の野田様。六月号の読者通信を拝見いたしました。私、妊婦腹の安原さゆりです。私の様な女の下着でよろしかったら、差上げたいと思います。厚手のボテボテしたのは嫌いですので、小さなショーツのみ使用して居りますので、それでよろしかったら：(野田様の御氣に召したのを送って戴ければ使用して送りますようか)そして私の下着を可愛がって下さるかしたら、御返事お待ち申し上げます。(安原さゆり)

○ 東京の原由貴子様。オシメカバーの通信、読ませていただきまして。あなたの通信によりますと、あなたのオシメカバーは某国内線の、航空会社が特殊勤務スチュワ

デス用と言うことでしたが、私が最近手入したカバーは病人用のものです。これは男女共用で、サイズも四種ほどあります。私の持っているものは、胴廻り九五センチです。こし大きいですが、もしよかったら、私のカバーとあなたのカバーを交換していただけないでしょうか。まだ一度も使っておりませんので、衛生面では安心です。しかし、あなたの下さるカバーは使用済でもけっこうです。そこで交換方法ですが、郵便ではなんとなく味けないので、お会いして交換していただけたら、うれしいです。日時は休日でしたらいつでもけっこうだと思えます。では原様と、その他のオシメカバーマニアの方の通信を待たせていただきませう。なお私のオシメカバーは東京上野の松坂屋にて購入したものです。(東京・河谷博志)

○ 最近の読者通信ではゴムマニヤの通信が多くなり、大変喜んで居ります。神戸の大西様、一度通信をお願い致します。貴女の文、此の四・五カ月見られず、さびしく思います。さて、東京の原由貴子様貴女のゴムカバー是非入手したく思っておりますが通信不可にて仕

方ありません。キクの方へ出せばよいのですか。福岡の占部様、お答え致します。革製品も私のもつとも好きな品です。私も此の夏、色々な事を考えております。(夏は革屋が閑な時です) 貴男も出来ましたら発表して下さい。電(39)三三四番ミヨシ商店、でたのめば作ってくれます。又は生地を買って自分で作っても良いです。ボンドで、良く着きます。昨年、革、ビキニ、男パンツ良く売れた様に言って居り、今年一度下着を

ニューフェイス美木乃々子嬢の熱演

日本女性拷問刑罰集

キャビネ版印画紙焼付
各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

三角木馬責め
三枚一組 略号(もと)

白洲答打ち折檻
三枚一組 略号(もほ)

石抱き算盤責め
三枚一組 略号(もへ)

非情の開股責め
三枚一組 略号(もぬ)

凄惨女囚海老責め
三枚一組 略号(もに)

土壇で胴斬り仕置
三枚一組 略号(もり)

女囚竹棒羞恥責め
三枚一組 略号(もち)

白洲調べに悶える
三枚一組 略号(もは)

れる道、使用感御発表お願い致します。(神戸三宮・M・S生)

○

木村通男様。小生の拙い一文が
お目に止まり恐縮です。木村様御
夫婦も小生と同じようなスタイル
で既に二十年間もプレイを楽しん
で居られるとのこと、羨ましい限
りです。小生にとって大先輩であ
る貴方から、呼びかけを頂く機会
を与えてくれた奇クに改めて感謝
の意を表します。小生、プレイを
開始してからまだ一年余なので、
SMプレイヤーとしては、まだ、
幼稚園クラスなので、今後とも、
宜しく御教示下さい。最近のこと
を一寸書きますと、十日ほど前に
なりますが、ドレイとしての自覚
を深める意味で、我が胸にマジッ
クインキで、「ドレイ」と書き、
エキサイトするままに左右の尻に
「犬」と大書しプレイしました。
それから奇クの旧号に、しばらく
連載された「宇宙のどこかで」に
ヒントを得てロッカー用チェーン
(金色)で鎖褌を作り、これを股
間にはめ、素知らぬ顔で会社に出
務したこともあります。更に最近
(この手紙のペンを走らせている
現在も尚)ドレイとして、一つの
条件である剃毛を実行しました。

ですから、現在の小生には一本の
雑草も見出せません。最後にいま
これを書いて居る小生の姿を一筆
書きましょう。アパートの四畳半
の一室で、全裸となり足に鎖つき
の足錠をはめ書いています。です
から、是非ともお聞かせ下さい。
お願い致します。静岡県川井昇様
小生は貴方と同じ鎖、錠、革の愛
好者です。現在市販の犬の首輪、
鎖などを手錠、足錠の代用にして
いますが、貴方の持つて居られる
金属製のもの、どのようにして入
手されたのですか。また鉄製の手
枷、足枷など欲しいのですが、な
にか好い考えがありましたら、お
智恵拝借させて下さい。(仙台・
秋田一郎)

○

始めてお便り申し上げます。私
は前にも記したように、素人女性
同志のレスリングの大ファンです
そこで貴誌に一つ、提案させて頂
きたく思います。それは、モデル
志願して来た女性、又、現在活躍
されているモデルの方の対抗レス
リング大会を開催されては如何で
すか。大会の模様をK・K誌上で
毎月発表願ひ、又、私達ファンで
後援会を作って頂ければ、この上
ない幸いです。是非企画して頂き

たく、右要望致します。(Y生)

○ 東浦ひかる様。私の切なる願いを聞いて頂けないでしょうか。私は大の女子レスファンです。(しかし、型にはまった業を展開するプロレスは嫌いで、素人女性同志のレスリング愛好者です) K・K誌分譲品で貴女の大ファンになりました。聞く処によりますと、貴女も同じ大阪にお住いをしていらっしゃる由、つきましては、色々お話を聞き又、教えを乞いたく、一度是非御会いして頂けないでしょうか。日時、場所、時間を指定して下さい、何処へでも参ります。尚、私は二十八才、独身、会社員です。どうか一度、願いを叶えて下さい。では貴女からの御便りを心からお待ちします。(斎藤充)

○ 山形県の野田昇様。六月号読者通信にて貴書拝見致しました。小生も長年の奇巧の愛読者で貴兄と同じく女性の汚れたパンティに強い関心を持っている者です。若く健康な女性に穿かれて体臭をたっぷり吸いこんだパンティ、適度に小水をも吸ったパンティ、全く貴兄と同感です。貴兄は今までに、

いくつ入手されたことがありますか。小生は今まで数人の女性の汚れたパンティに接したことがあります。汚れ具合、匂いは人によっても違いますが、着用の時間によっても違ってきます。われわれにとって一番魅力的なのは、綿メリヤス製で、二、三日穿かれ、ある程度小水を吸ったものです。貴兄も体験があれば、又お知らせ下さい。(同好の友F・T生)

○ 五月号「禪を締めましょう」六月号「禪奥さん」毎号心強く読んで居ります。と同時に、これを書かれた彼女等の未来の御主人、現在の御主人が羨しくなります。私等夫婦は、他には何一つ不足のない、人も羨む夫婦だと自認して居りますが、禪に関してだけは今の処、どうにもなりません。私はクラシック音楽のファンですが、妻は私の好きな曲を努力して自分も好きになる様努めて呉れます。私が自動車の試験を受ければ、一緒になって自分も、免許を取ります。私が禪に異様な関心を持って居る事を知って居る妻は、自分も締めて見ようと努力するのですがこれだけはどうにもならない様です。妻の気持を良く知って居るだ

けに、私には、これ以上の強要は出来ません。さて、失礼をかえり見ず、禪奥さんに申上げたいのですが、貴女の作られた図解の禪と全く同じものを私もかつて妻に作って貰った事が有ります。しかし一度か二度使用しただけでやめました。理由は緩み易い事、緩んだ時、調整がしにくい事等です。他にも色々と工夫をして見ましたが結局は六尺禪に優るものはない事を知りました。但し、男と女では違うかも知れません。六尺禪ですと、前のタレを下げておき、片手で後の結び目を押え、片手で堅ミツを下に引けば胴の廻りの締め加減が自由に出来ます。私はタレの部分の後で締める時、少し面倒でも、先に結んだ他の端をもう一度押える様に締めております。丁度、荷造りの要領ですがこうすれば絶対に緩みませんし、形も良くなります。次に貴女の図を見て感心した事は、巾三十糎では広すぎるのではないかと云う事です。余程お腹の大きな人なら兎も角、私の場合は男ですが二五糎でも広すぎます。広すぎると、布の両側だけを締め、前袋が深くなり気持良く締められません。その結果は、布巾は広くても中央に集り、堅しわだ

けが多くなります。貴女のように浅く締める場合は尚さら、この傾向は強くなる筈です。次に私の体験を簡単に書いて置きましょう。私の禪は木綿の場合は長さ二・三米(鯨尺の六尺は約二米三十糎になります)巾は二二糎か二三糎が手頃の様です。冬は保温を兼ね、腹巻を代用して赤ネルの禪を締めます。この時は生地の関係と、少し深く締める為、長さは十糎位長めにしますが巾は二〇糎です。二〇糎でも堅のしわが少しも出来ないで、狭すぎる事はありません。ネルは切り口を細工しなくても差支えないので簡単です。広巾から丁度三本作れます。生地ではメリンスが良く弾力を保ち、具合が良いのですが、洗濯の度に縮むのと赤でも白でも変色し易いのが欠点です。メリンスの時は縮む事を考慮して、初めに両端を十糎位折返して置きます。以上、御参考になれば幸いです。(栃木・喜多六好)

○ 六月号拝読致しました。芳野様の「濡れにぞ濡れし」花田様、小原様の飲まれた話。三原様の「モッキンバード」イルゼ嬢のを食べさせられる譲、及び二人の女性の排泄物に依って飼育される金森

四馬孝画

秘蔵版

責め画集

分譲

△責められる美女波津子の痴態▽

大判印画紙焼付

五枚一組

一〇〇〇円 略号(しお)

白く輝く肌にどす黒い縄。

一、恐怖の浣腸責め展開す

二、柱抱きアゲラ縛りの責め

三、庭に於けるハダカ責めシーン

四、裸の美女荒縄の股間縛り

五、チェン・ブロックの吊り

△可憐な美少女加奈子の羞恥責め▽

大判印画紙焼付

五枚一組

一〇〇〇円 略号(しる)

捕われの美女加奈子の運命

一、ローソクの火責めにあう

二、ヨチヨチ歩き的美少女

三、逆エビ縛りの柱宙吊り

四、股間縛りで被虐の絶叫

五、鑑賞に供される緊縛美体

『花と蛇』画集

大判五枚一組 一〇〇〇円

略号(えに)

一、京子に芸を仕込む鬼源

二、静子令夫人への汚辱

三、操り責めにあう美津子

四、片足挙げ縛りの桂子

五、粗相を強要される京子

浣腸と排泄画集

大判五枚一組 一〇〇〇円

略号(えい)

一、恐怖の浣腸台の美女

二、浣腸のあとの楽しみ

三、百CCのグリセリン浣腸

四、塩水をヤカンで飲ます

五、排便を耐えぬく美女

女体吊責め特集

大判五枚一組 一〇〇〇円

略号(えは)

一、弓吊りローソク責め

二、エビ縛りの宙吊り

三、股間縛りの責め

四、美女の舌の先縛り

五、股間縛り鼻孔吊り

美貌汚辱と鼻責

大判五枚一組 一〇〇〇円

略号(えは)

一、美しい女の鼻をなぶる

二、一本一本女の鼻毛をぬく

三、美女の口中をほじくる

四、泥絵具にまみれた顔

五、ラーメンを食べさせる

青年の話、まことに夢幻の世界に遊ぶの気持でした。この世には動物ながら真正正銘、母親の下痢で育つものが居るのです。南国オーストラリアの特産でコアラと謂い、子まり熊の別名があります。クマでは無く、顔つきがぬいぐるみのクマに、そっくりなので、この名があり、実際はカンガルーに近い動物で、飼育が大変むづかし、オーストラリア以外では、アメリカのサンザエゴ動物園に見られる丈と云う事です。食物に対しては非常に潔癖で、飢えてもユーカリの葉と芽以外は一切口にせず水もほとんど飲む事がなく、コアラと云うのは、土語で「水を飲まない奴」と云う意味だとか。水なしで生きられるのはユーカリの葉から水分をとるのと、皮膚から殆んど発汗する事がなく、体重六キロ位で、一日一キロから二キロと云う多量のユーカリ樹の葉から水分を摂るためと思われます。水を飲む必要がないため地上にも降りて来る事も少く、彼らをおそう敵のいない樹上で平和な生活を送っています。コアラの飼育のむづかしいのは突然消化不良を起こす事があり、消化不良を起こすと急に水を飲み始め、水を飲み始めると

九分九厘助からないと云う事迄、判って居りながら、多くのコアラ研究家たちは、永い間、手の施し様がありませんでした。云わゆるコアラ毒死と云い、其の道では有名な話です。今になってあきらかになったところでは、ユーカリの多くは、葉の若い時期に多量の青酸を含んでおり、その猛毒は牛や羊を倒す程であり、自然のユーカリ林に生息しているコアラは、だから若葉をさせて、古い葉だけを選んで食べているわけですが、飼育者たちは、なんでも若葉の方がよからうと、むざむざ彼らを死に追いやる努力を続けていたのです。しかし今一つコアラは、わざと下痢をおこす場合があります。それは子づれのメスに限って見られる現象で、詳しく調べて見ると母親の下痢に合せて、其の子が異様なしぐさをするのです。コアラはカンガルーと同じく胎盤の発育が悪いので、三十五日程の月足らずで子どもを産み、子は其の後母親のおなかにある袋つまり育児のうで、数カ月間乳を呑んで育つのですが、半年位経つと、二、三日おきに母親の肛門をなめる様になるのです。下痢はこの期間に起こるもので普通、一カ月間続き

時間も大体午後三時から四時の間と決って居て、子がなめるのは、母親の肛門から出る黄緑色の流動体なのです。この流動体は半消化のユーカリで、母親の体内は殆んど直通ですから、栄養分はそっくり残っています。子は一回これを食べる毎に目立って大きくなると云い、いわばスタミナ一杯の離乳食なのです。コアラの母親は、これを一カ月もの下痢の苦痛に耐えて子に与え続けます。コアラの出産は年に一度、そして子は一腹に一匹、袋の口は子が肛門をなめ易い様にうしろ向きについて居ます。半消化栄養未摂取の状態の食物が最も栄養価値の高い事が当然でありましょう。若し人間に於いても同様な事が云えるならば衰弱甚だしい重病人や、大手術前後の病人等には、若い女性に依って作られたスタミナ食が供給される時期が来るかも知れません。勿論下痢に依る苦痛に耐える報酬は他の職業に数倍する事もあるけれども何よりも、人命を助けると云う事に依り、多くの若い女性の共感を得る事と思います。この次には、何故スタミナ食供給には男性よりも女性の方が適しているかと云う事を検討して見たいと思います。(富

山県・高岡久人)

本誌六月号の栃木県、喜多生様へ。僕は五十才を過ぎて居ります。が貴男様の意見に同意します。色々色色など造ってみますが、赤い色の褌は第一番に気持ち良いばかりではありません。暖かさに於いて他のより暖かく有り、又幸せを身に呼んで呉れる事が大きいのです。又、タオル地の褌を締めて職場に出るのも僕にとっては幸せが一杯です。僕は透明な褌。半透明。アミの褌。ビニールアミの褌、レザーの褌。とそれぞれ締め心地を味っています。特に色々な巾や質により褌にはたしかに身体に及ぼす何かそれぞれ変った性質と個性がそなわって居るとみるべきです。出雲氏にきく迄も無く、そう云った色々の事を感じております。取替えても其の褌の持つ特長は何時も変わらないと思います。プレー用として、其の性質を利用する責め褌や、シュウチに關した様な褌も造ってみました。今では三十糎立方の箱に二つもぎっしりです。特にガーゼの褌はき心地良いのですが、マニヤの方々、試みられては如何ですか。△新潟県三条市・山崎春夫▽

読者M氏受難の巻

◎M組二十五態◎

大手札印画紙焼付(9×13糎)
各組一枚一組(送料共)

一組一枚 三〇〇円
十組十枚 二〇〇〇円
二五組二五枚 四〇〇〇円

MMMMMMM
8 7 6 5 4 3 2 1
足の踵で鼻の頭をつぶす
皮ムチを顔に浴びせられる
犬男になめさせる太股
足の指をすっぽりなめる
顔面騎乗の女御主人さま
臀臭を嗅ぎまいる犬
足の裏なめを強制する女

MMMMMMMMMMMMMMMMMMMM
25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9
女御主人の唾液をのます
玄関でチンチンをする男
私の放屁でも糞くらえ！
足の踵を必死になめる犬男
両股の下に埋れた犬の顔
頭を蹴られた尻尾を振る犬
両股の首絞めに喘ぐ犬男
臀部を革ムチで打ちまくる
ツバの御馳走を飲みあける
足の指先で鼻を摘みあげる
鼻も口も足の裏で蓋される
足のお味はどんな具合？
この犬奴踏み潰してやろう
股に挟まれて幸福な男の顔
さあ口を開けてごらん！
両股の下にある悦楽境

○
その後大変ごぶさた申し上げて居ります。皆様から種々とお便りを頂き本当に嬉しく存じました。一々お便りは出来ませんので、すべて諸者通信を通じてお礼申し上げます。もっと早くお便り致さなければならなかったのですが、外遊致して居りまして失礼致しました。とても全部の方々にお会いすることも、勿論お手紙を差し上げることも出来ません。よくSの女王様などと言われますが、その反

対にMの女王様でもなんでもありません。私が今一番お会いしたく存じて居りますのは、私の性を勇気づけて下さり、私にこの通信を書かせるまでの刺激をお与え下さった花山千鶴子様です。決して私は浮気者と言われる女性ではないと自分では思っています。男性の方々誰方と誰方とお話し、しても、全く不公平なことになりますし、どうぞ私の気持をお察し下さいませ。女性としてどうすることもないことでしょう。それを

承知の上で申し訳ありません。重々お詫び申し上げ、ご了承頂きたく存じます。お便りはどうぞ毎月でもこの欄を通じてでも頂けますれば幸せでございます。花山千鶴子様にはぜひお会いしたいと思つて日夜考えております。種々とお話などしたく存じます。当分横浜のホテル住いです。とにかく花山様、この切ない私の便りにお目がとまられましたら、お便り下さいますようお願い致します。又、他にもMの女性の方々、よろしくこの欄を通じてでもお友達になつて下さいますように、お願い申し上げます。今月はこの辺で又、来月

もお便りさせて頂く心算で居ります。(横浜市・藤村美香)

編集の皆様、この様な雑誌が有るとは今迄知らなかったのですが偶然手に入れて、その一冊ですっかりファンになってしまいました。この雑誌は単なる興味本位の編集ではなく、同人雑誌の感じはしますが、それだけに、センモンの内容でファンの方達も、この種の読者にしては意外にマジメそうなので、楽しく読ませて頂きました。ただ特殊な雑誌だけに手に入りにくい事ですね。或る偶然の機会に奇クを手に入れ、少しM傾向

ベテラン山原清子、大塚啓子二嬢出演……

Mフォト

最新作 M場面決定版

大手札 (各組十二枚一組 二〇〇〇〇円) 印画紙 (八組全部にて 一三〇〇〇〇円)

裸女二人の尻の下

略号 (まふ)

二女の戯むれとM男

略号 (まも)

美女二人から縛られる

略号 (まね)

男馬を乗り潰す二女

略号 (まめ)

痛烈ムチのご馳走

略号 (まれ)

首絞めで刺す止どめ

略号 (まむ)

汚臭と足舐めの強制

略号 (まり)

二女の腎臭に泣く男

略号 (まみ)

の僕は、今まで恥しくて誰にも云えなかった事を、この雑誌だけに誰に気がねなく云えそうです。生れてはじめて、この雑誌を手にする事が出来て、救われた様な気持ちでいっぱいです。それは、この雑誌には、同じ気持の人達が極めて楽しく愉快に通信を交しているのを拝見して、心の大きくなる気持がしました。僕は今までSMプレーは別な世界の出来事で、自分がその世界に入るのは非常に恥しい事だと思っていたのです。といて、僕自身は、いつも強くて大きな女性に自由にされ、その重たいお尻に敷かれて縛られ恥かしめられたいと空想していたのです。ただ僕には、この様なSMプレーは経験がなく、どうすれば良いのか解りません。しかし、如何なる恥かしめにも耐えられたいと思います。貴女の忠実な馬となり、お尻の下になりたいのです。色々な事を教えて下さい。僕は一生懸命奉仕する事を誓います。(東京都・立川勉)

○ 僕のイメージ画集「切腹」(六月号)非常に印象的だった。悪魔的で甘美な幻想、病的で繊細華美な線は、たしかにビースレイ調の

美と夢があり、小生は前々より室井亜砂路氏には注目していたが、六月号の作品は小生の一番好きな作品だった。普通「切腹」というからには、腹部に焦点が合わされるのが当然であるが、今度の作品は、その逆をゆく構図で見事に成功を収めている。小生流に言えば切腹のチャリズムというか、氏の構図的効果が、真十文字に開腹され内臓溢出した女の腹部を眺めるより、小生にはたまらなく刺激的なのである。全裸になって三宝をまたいだバックスタイルのなやましさ。右手は高く長く伸びて短刀が下腹を狙う―実に妖しい空想的なポーズである。それが氏独特の病的で頹廢的、妙にサジスチックな欲望を抱かせる妖しい体をした女なのだ。小生のおさまし欲望は、これを裏返しにした赤裸々に描きつくされた姿態を見たいと思う。この前に三面鏡があってもいけない。室井氏が背景を屏風だけで簡潔にまとめあげた力量は大いに賞讃したい。グラビヤや挿絵の制約下でもアイデア一つで読者を満足させ得ることを、室井氏は身を以て立証したと小生は思う。氏のファンである小生は、氏の豊かな幻想を駆使して我々読者を一

層楽しませてくれる作品を発表されることを心より切望します。又編集部にもお願いしたい。バックスタイルの美しい絹川文代嬢や遠藤百合子嬢、刺青美の山原清子嬢をモデルにして、室井氏と同じポーズで(もっとしどけなく)是非傑作切腹フォトを撮影していただきたい。ああ室井氏の挿絵に絹川文代嬢をあてはめた姿態を想像すると、小生は思わず溜息が出る。とにかく小生は室井氏のこのポーズに魅せられた。そうして同じポーズをした奇クモデル嬢たちを眺めて暮したい。なお昨年十一月号の森英生氏の「娘切腹画」で氏は少々ドギツすぎるかも知れませんが、と述べているが、いくら奇クモデル嬢たちでも氏の挿絵のような行為はできない。セーラー服と和装の美少女。ういういしい可憐なお色気があって悲愴美を一層ひきたてている。実は小生接写してスライドにしたところ、今更のようには作品の魅力が判った。森氏が再び娘ハラキリ物を投稿されるのを楽しみに待っている。(愛知県・麒麟児久)

○

奇ク昭和四十一年六月号、二三頁、東京都原由貴子様、御便り

嬉しく拝見致しました。私も熱心なおむつカバー・マニアの一人です。ゴム製特に女性用の入手困難を感じていたのですが、フラワージュニアを御所持の由、出来ましたら、私にも一枚御譲り頂けないでしょうか。価格等御報らせ下さいれば幸甚に存じます。私もおむつカバーに関し、色々と思案意見もありますので、文通をお許し下さいれば、幸甚に存じます。私は身許確實、秘密厳守致します。誌上連絡乃至、御手紙回送御願ひ致します。(静岡・山本一郎)

○

中島浣二様、お便り有難うございました。さっそく私の考えたお豆腐やトコロテンの浣腸をお試しになったとの事いかがでしたかしら。貴方様のおっしゃる通り液体と違った独特な感じでしょう。今私達(お手伝いの海田アイさん)と行なっているコンニャク責め。これはコンニャクをタテに切り用いるわけです。この場合、浣腸の直後がいいと思います。私達二人の浣腸プレイ、いろいろと経験しましたが、またの機会にお便りします。(東京・紅かおる)

○

六月号の読者通信の森本氏、問

和志氏の御意見に同感。この際で美しき姿態、挿画などを多少なりとも復活掲載願ひたい。他の風俗誌で閉じ込み形式で書店で立見には中が判らぬようにしてある。「痴人の糧」と「花と蛇」は今後も連載を熱望するが「悦子恋縄譚」などの読切も、併せてお願いしたい。「花と蛇」の団氏にお願いしたいことは一部立町老梅氏が公表されているので、もっと前篇同様の表現(紅白まだらの太縄とか、佐渡屋氏のいわれるように色ものの着脱)捨太郎のような白痴男より、ゲイ趣味の男に女役をやらせるとか、文夫に女役をやらせるとか小夜子に、静子の代役をやらせたり、昔奇クに連載された「淫火」(松井頼子作)のように時代劇風な衣裳、かつら、セリフを利用し

果てしない空想と現実の世界に飛躍させてほしいものだ。(東京・阿保田真)

○

奇ク愛読者の皆様、永らく御無沙汰しました。バンドマニヤの安田です。マツチ箱のような家をつくり引越して永らくバタバタして居りました。引越しの整理の折、ボロの中から妻のはき古した月経バンド(前開きゴム内張りのもの)が見つかりましたので、妻に知れぬ様かくしてあります。御希望の方に差し上げますので御連絡下さい。私の場合、人様の奥様のメン程ほしいのです。マニヤの方の気が少し解りますので、あえて公開します。送料も不要です。御遠慮なくお申出下さい。(徳山市・安田隆夫)

○

小生まず橋氏にお詫びしたい。少々筆が滑りすぎたようだ。氏の時評が不必要だというつもりなど毛頭なかったのです。ただもう少し「きびしい」評論が望ましいと言ったにすぎぬ。小生の真意を諒とせられよ。それはそれとして、もう少し憎まれ口をきかせてもらおう。本誌に評論を書かれる人の

ことだが千草、福田氏はホモノ。
 (小生の好みで言うのではない、
 久我氏はどうもアヤシイ。保藤氏
 は意見をさし控える。(好感は持
 てるのだが)夜乃氏は完全なニセ
 モノである。6月号の「朝顔的耽
 美論」何んですか、あの雑文は！
 「ひだりまき」とは氏御自身のこ
 とであろう。狂人を装おうものは
 やはり狂人である。この格言は正
 しく夜乃氏に該当する。内容のひ
 どさもさることながら、文章が全
 然日本語になっておらぬ。まず小
 学校の国語の教科書からやり直さ
 れたらいかかな？、この世の中
 で何がこっけいだといっても、内
 容のないものに物知りぶるほどこ
 っけいなことはない、とはかの毛

沢東大人の言である。(小生共産
 党のシンパではない。念のため)
 温厚な橋行司子に代って一言苦情
 を呈した次第である。(天道公平)

最近が多忙のため御沙汰ばかり
 しています。それに誌面の方も女
 斗美の記事も少く、黒田氏も佐出
 須登氏も一休みとか。さびしい限
 りです。女斗彦氏の通信も孤軍奮
 斗の形。阪神間の方の様ですので
 一度お会いしたいと思っています。小
 生は文才も暇もなく長い文章は書
 けません、どなたか忠直卿行状
 記を題材にとったS小説を書く方
 はおられないでしょうか。松平忠
 直、その愛妾一國女のサジズムな
 ど、色々書けると思っています。週

刊漫画式の絵物語などいかがでし
 ょう。最近、8ミリ及びカラス
 ライドを計画しておりますが実現
 は何時のことやら、分譲品も是非
 着衣の分と動きのある殺陣式のも
 のを切望します。(兵庫県・中屋
 敷真)

奇クを知ってから、すでに数年
 になります。最初は単なる好奇心
 から、変った雑誌があるものだ
 とこの書物を手にしたのですが、
 いつの間にか小生自身奇クの虜に
 なってしまいました。一冊読んで
 満足しておこうと思っても、どう
 しても二冊目が、読みたくなり、
 更に三冊、四冊と続いて買い求め
 るようになり、今では奇クを求め

る心に強いて抗うことなく、意の
 ままに、この良書？を求めています。
 一冊一冊と買い求めた本誌も
 長い間には、その数を増し、今で
 は我ながら驚くべき数に達して居
 ります。一人自分の部屋に居て何
 となく淋しく心がふさがれている
 時は、「エイ、クソ、女を買いに
 行ってやろうか」と思いながら、
 その勇気をまだ持ち合せない不幸
 な心を、秘かに満たしてくれるの
 が、この奇クなのです。小生にと
 って、今や隠された心の一部と化
 してしまった様です。いつか小生
 も実際にプレーするものをして見
 ようと堅く心に誓っています。が、
 残念ながら今の小生には空想の世
 界においてのみ許されるものにす

☆本誌既刊号在庫一覧表

○本誌の既刊雑誌は左記の一覧表
 の通り在庫しております。昭和39
 年1月号以前の号は、全部売切れ
 となり在庫しておりません。
 ○在庫が次第に減少して左記のよ
 うに最近号のみとなってしまいま
 したが、残部僅少のものもありま
 すから、御入用の分は、お早い目
 にお申込み願います。

既刊号在庫案内

昭和39年2月号	(定価二五〇円)
昭和39年3月号	(定価二五〇円)
昭和39年4月号	(定価二五〇円)
昭和39年5月号	(定価二五〇円)
昭和39年6月号	(定価二五〇円)
昭和39年7月号	(定価三〇〇円)
昭和39年8月号	(定価三〇〇円)

昭和39年9月号	(定価三〇〇円)
昭和39年10月号	(定価三〇〇円)
昭和39年11月号	(定価三〇〇円)
昭和39年12月号	(定価三〇〇円)
昭和40年1月号	(定価三〇〇円)
昭和40年2月号	(定価三〇〇円)
昭和40年3月号	(定価三〇〇円)
昭和40年4月号	(定価三〇〇円)
昭和40年5月号	(定価三〇〇円)
昭和40年6月号	(定価三〇〇円)
昭和40年7月号	(定価三〇〇円)

昭和40年8月号	(定価三〇〇円)
昭和40年9月号	(定価三〇〇円)
昭和40年10月号	(定価三〇〇円)
昭和40年11月号	(定価三〇〇円)
昭和40年12月号	(定価三〇〇円)
昭和41年1月号	(定価三〇〇円)
昭和41年2月号	(定価三〇〇円)
昭和41年3月号	(定価三〇〇円)
昭和41年4月号	(定価三〇〇円)
昭和41年5月号	(定価三〇〇円)
昭和41年6月号	(定価三〇〇円)
昭和41年7月号	(定価三〇〇円)

ぎません。つくづく貴社で仕事をされている方が羨ましくなるものです。という冗談はさておき、まずは益々奇巧の健在を祈ってペンをおきます。(岡山県・波多野抄)

○

花田沙登子様。先般貴女様の一文が本誌上に発表されて以来、貴女様を女王として仰ぎ、その御足もとにひれ伏さんと願う多くのM男たちのいるのを知り小生もその一人としてまことに力強く感じました。六月号の読者通信にも多くのM男の文がのせられています。貴女様の御趣向に合うかどうか分りませんが、小生の願いは顔面騎乗によるお仕置と神酒拝受と後始末にあります。貴女様は中々のグラマーでいらっしゃるように拝します。「そこに仰向けにおなり」貴女様の、鋭い至上命令が下ります。蛇にみすえられた蛙のように私はおじけづきただ命令に従う外ありません。そして次の瞬間、私の顔面がまっ暗になったかと思うと、貴女様の巨大なおヒップが重石のように私の顔の上にのしかか

ますます重みを加え、大盤石の重みをもって迫って来ます。このままでは遂に窒息の外ありません。時をみてまことに情深い貴女様は特別のあわれみをもってお尻を少し浮かせて下さいます。重圧から解放された私はやっとの思いで一息吸いこみます。ああその時、私の鼻をつく強烈なお尻の臭気——それは何と強烈な臭気でしょう。私の顔の上で貴女はお尻を前後左右に動かされます。丁度私の鼻の頭をこするような形で、そうすれば臭気は一層匂います。こうして私は貴女様のたくましいお尻の重みに魅了されその強烈な臭気に酔いしべれることでしょう。顔面騎乗の刑に興じられた貴女様は生理的要求を感じになります。「トイレへお行き」再び下る至上命令私は貴女様を、背におのせしてトイレへ這います。貴女様のお家のトイレは奴れいに神酒の洗礼を施すために特別な構造で作られています。便器の形は洋式便器を少し深くしたようなもので、丁度大人の頭がころり中に入るだけの大きさがあ

つとりしていた私の夢をさますように目の前がぱっと明るくなりました。貴女様が、便器からはなれたのです。「ここへおいで」三度目の命令、「顔を洗ってこれで拭きなさい」命令通りにすると「もう一度、そこに仰向けにおなり」次々と命令が下されます。仰向けになった私の顔の上に再び貴女はまたがって来られます。「チリ紙の代りにお前の舌を使ってやろ。上手に拭かないと承知しないわよ」こうして私の舌はチリ紙の代りとして使用されるのでした。これは昨夜みたM男の夢としておみのがし下さい。(京都・殿花舌男)

○

奇巧編集者の皆さんには、お元気の事と、遠地よりお察し申し上げます。三月末、名古屋市、大曽根、鈴蘭通まで行って、奇巧を買

い、早速、通信欄を読みましたが僕の、お頼みした文がのって居らず、失望しましたが、全国から多くのお願いが、殺到しているだろうから、仕方が無いと、思っ

て居ります。小生が、通信欄にお頼みするのは、一般の人や、友達に言えない、僕の心から思っ

て居るところを思存分話し合える、又プレイできる人を探したいからです。決して、金銭を目的とせず、いや、金銭等は、全然論外視しているのです。僕はS五年生れですから三十七才になりましたが、このまま、会社員で過せば味気ない一生になりそうなので、奇巧にめぐり合えたのが、神のお導きだと思っ

て、お頼みしているの御座居ます。僕の気持を、お察し下さいまして、御誌にぜひのせて下さるよう、御願ひします。たとえ、好い伴侶にめぐり合えなかつても、それは仕方が無いと諦めます。前にも書きましたが、年輩の方で、肥満体で、鼻の大きい(高い)の意味ではありません)肉付の豊かな、そして鼻孔の人並以上に大きい人に可愛がられたい、又、責められていたとの欲望は、一生かかっても、無理でしょう。か、街を歩

いていても、又、電車等でも、いつも気を付けて居るのですが、仲々、理想の方には、お目にかかれ

ないものです。でも広い世間には、きっと、居られることと、信じて居ります。もし、その人に、可愛がられるようになったら、どんな事でも命令に服し、又、進んで、僕から身体を投げ出す気で居ります。僕の裸体を思存分縛っ

ていただいて責めて見たいです。僕は今体重十六貫五百位身長一・六五糧位です。今の僕には、相手が居られないので、こんなことを書いて、満足していただければならない身の上です。奇巧の皆さまにこんなことを書いても、素直に取って下さるでしょうから、思うまま書いています。僕のようなマニアは、少ないでしょうか。

(愛知県勝川・高橋次郎)

○ 読者のファンの皆様、お元気ですか。人間誰もが心のうきうきするようなさわやかな季節になりましたね。僕はこの雑誌に出していただくのは、これで二回目で初めは只なんとなく自分の気持ちをありのままに申し上げ二月号か三月号にのせていただきました。僕がこの雑誌のファンになったのは四年も前のことです。ですから僕の一

番楽しかった二十一、二才ごろの時です。特に若い女性の肉体に対しては男である僕にとってたまらない魅力でした。若い女性の肉体の美というのは、やはり羞かしさを人前にさらけだして、相手に

それとありありと見せることが、本人にとっても最高の満足ではないでしょうか。元来女性は受身です。人前で羞しさをさらけ出すといっても、やはりそこに男性の積極性が必要でしょう。女性を責め羞しさをかくしきれない、その女性を僕はゆっくりと眺めたいのです。女性にとっても、それは一つの喜びではないでしょうか。東京は勿論東京附近の若い女性の方、ハッスルして僕と一度プレイしてみませんか。秘密は必ず守ることを誓います。グラマーの方なら一層僕はやり甲斐があります。ではよい便りを次号にのせて下さい。それまで楽しみに待っています。

(東京・大河春夫)

○ 福岡市の占部達人様。あなたのお呼びかけ有難く拝見いたしました。羽二重のゴム引レインコートは私、沢山手持ちがあり、私の方も希望者に無料で進呈いたしたいと考えておりましたところで、出来ればゴム製支那服と交換させて頂けませんか。若し交換して送って下さるのであれば、私

の通勤先である佐賀の多久局留にてお送り下さいませ。私の方もお返しをする必要がありますので次回誌上に送付宛先をお知らせ下さい。先日娯楽読本でゴムパンティ頒布の広告を見て送金しましたところ、綿製のゴム編みの粗末なパンティ(多分百円内外)を送ってきました。インチキ広告だったと分っても後の祭でした。読者の皆さまの中で生ゴムのパンティを買われた方は、その購入先、色、値段をお教え頂けませんでしょうか。お礼にはゴム製オシメカバー羽二重ゴム引レインコートをお送りしたいと思えます。ゴム愛好者の皆様、ゴムを楽しんでまいりましょう。(佐賀・武富加奈子)

○ 久し振りに山原清子さんの刺青姿もりりしい禪一本の姐御姿のものを発表になり感謝しています。特に女斗場面短刀を引抜いて大立回りの由、大いに期待しております。私は若い女性のポリウムのある豊満な裸身に真白い晒の禪を胸高にきつくきりと締め込み、白鞘の短刀を肌身はなさず持つて凄味をきかした威勢のいい姐御姿に全く云いようのない魅力を感じます。昨今の映画は、やくざム

ドが大変受けている現状です。やぐざは何れも男性本意のものですが日活が野川由美子の賭場の牝猫シリーズを出して野川姐御がお色気と凄味で大暴れして男性軍をうならせています。最後の立ち回り場面はとても凄く真に迫っていました。以前、大塚さんの姐御の分譲品を頂きましたが、表情、メーキャップ等申し分ありませんでした。引きしまった口元、ぐっと睨んで目のつけどころ等大変よく出来ており気に入りました。只惜しいことに髪型が悪いためムードをこわしてしまいました。禪一本の素裸になって短刀を引き抜いて暴れ回るといふ凄く姐御ですからパーマネットではムードが出ません。ヘヤーピースをつけて赤い丸玉のムードが出ます。裸ですから髪型は重要なポイントの一つです。今月号で発表になった血まみれ女斗場面に引続いて第二弾として禪一本の姐御同志の立ち回り場面を是非御作成下さい。新趣向により凄味とお色気を出して下さい。特に臀部から股間に禪を喰い込んだ有様を例えば片足挙げるなどして禪美を最高に発揮して下さい。お願いします。(岡山・倉敷二郎)

次号(八月号)は六月二十五日に発売いたします

☆編集後記☆

○鬼六談義「SとMは花ざかり」で団鬼六氏の意気軒昂たるところが見られて、連載小説「花と蛇」も前途の展開が期待される。それにしても映画「花と蛇」が大好評にて続篇企画中とは同慶至極にたえない。

○映画といえば、本誌専属の画家四馬孝氏から連絡あり、Sマニア垂涎の映画を企画中だが片棒を担がないかと。今誠に恰好のM好みのヒロインが待機中なので食指が動くのだがさて詳細打合せすれば、どうなることか。

○「KK文芸時評」で毎月麗筆をふるって下さった橋行司子氏が家庭の御事情で、今月号より執筆中絶になった。まことに残念至極であるが、致し方ない仕儀である。いづれ事情

が許す状態になれば執筆下さることと思う。○今月号は新宮明夫氏夫妻の辻村隆氏宅訪問の記事で誌面を大きく賑わしてもらった。豊富な写真の挿入で、読者の方々の琴線に太いに触れるものがあるだろう。新宮氏御夫妻の御幸福を誌上よりお祈りしておく。

○広く全誌面を読者の皆様に開放しているのにも拘らず、毎月定連と思われる方々の名がずらりと目次に並ぶ状態である。只今、号を追うにつれて売れ行きが向上しているのので今秋あたりには若干の増頁も可能と思われる。そうなれば収容能力も増大する故、せいぜい新人の方々の御寄稿を期待している。投稿件数も多く、又没をかこつ方も少くないのだがせめて手を加えて掲載できる程度のものを、お願いしたいものである。

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

皆さまが自分で直接体験されたことや、自らの性癖や性向について訴えたいこと、或はこれだけは、どうしても人に話したい、書いて残しておきたいといった事柄を、どうか腹藏なくお寄せ下さい。皆さまの真実の叫びや思い出などの寄稿を心からお待ちしております。採用篇には本誌六カ月分以上贈呈いたします。

△創作、小説、物語△

も結構です。皆さまの平常抱かれていた夢を文章に托してお寄せ下さい。形式も敢えて問いません。但しすべて未発表のもの、自作に限りません。若し引用する部分がありますら、必ず出処の明記をお願いします。採用原稿に対しては本誌五カ月分以上贈呈します。

△感想、論評、批判△

本誌に掲載された内容についてでも結構ですし、又関連したもので結構です。とにかく本誌を読まれて感じられたことを忌憚なく皆さまのペンは本誌五カ月分以上を贈呈いたします。

△(映画、雑誌)通信△

映画、雑誌、演劇、新聞、週刊紙、或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出処は出来るだけ詳しく記載下されば幸いです。採用篇には本誌三カ月贈呈致します。

◎尚、以上の採用篇に対する本誌贈呈の代りに、写真を御希望の方には、代理部分護品の中から御指定下されば、贈呈いたします。

◎宛先は天星社編集部宛にて第五種便にて願います。

☆本誌御購読の便☆

一月分(1冊) 三〇〇円△送共△
 三月分(3冊) 九〇〇円△送共△
 半年分(6冊) 一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三〇〇円

七月号

〔第二十卷第七号〕
 〔通刊第二二六号〕

昭和四十一年六月二十日 印刷
 昭和四十一年七月一日 発行

編集人 箕田 京二
 発行人 吉田 稔
 印刷人 北村 俊夫

大阪阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所 天星社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
 (昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
 (国鉄大局特別取扱承認雑誌第一二二二号)

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各条例に指定されないうよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しております関係上、未成年の方には絶対販売下りません。特にくれぐれもお願ひ申し上げます。